
異次元世界大戦 独立艦隊海戦記

山口多聞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異次元世界大戦 独立艦隊海戦記

【Nコード】

N 8 4 2 7 B

【作者名】

山口多聞

【あらすじ】

伊豆を母港とする帝国海軍実験艦隊。捕獲艦や実験艦で編成された2線級艦隊。日蔭者である彼らが、太平洋の戦いへと身を投じていく。

実験艦隊

昭和16年8月、日本は満州事変以来に続いている中国での事変を收拾する解決の糸口さえ掴めぬまま、今度はその中国における利権をめぐって、アメリカやイギリスと新たな戦争に突入しようとしていた。

既に海軍は機動部隊によるハワイ真珠湾襲撃や、台湾からの基地航空隊によるフィリピン空襲を行なう準備に入っており、陸軍もマレー半島をはじめとする南方資源地帯攻略のために、さらなる兵力の動員を行なっていた。

そんな中、この日伊豆の下田にある実験艦隊司令部にも、海軍軍令部（大本営海軍部）から出撃準備命令書が届けられていた。

帝国海軍実験艦隊は伊豆の下田を母港とし、実験空母「天城」を旗艦とする艦艇で編成された部隊である。

元々は第一次大戦中に新開発した兵器や、ドイツから接收した兵器のテストや標的任務を行なうために設置された特務艦隊がその起源であり、その後軍縮期に予算不足のため一時解隊されたものの、主力艦や補助艦に対する排水量制限が課されたワシントン、ロンドン条約での艦艇保有の隠れ蓑として再建された。

具体的には、一部の戦艦や巡洋艦を主砲、装甲版を撤去の上で、実験艦籍や民間にスクラップとして売却し、民間籍として配置しておくための艦隊として整備された。そのため、艦隊母港も東京からそんなに離れてはいないが、人口も大して多くない伊豆の下田に設けられた。

しかし、その後軍縮会議が失効すると、艦隊の存在意義がなくなり再び解隊される予定であった。ところが、日中戦争以後の軍事予算の増額によってなんとか命脈をたもち、現在も主に新兵器のテストベットや、演習の際の標的として活動していた。

艦隊を動かす乗員は主に2線級の兵士から構成されている。具体的に言えば、志願時の検査で乙種や丙種の判を押された者や、前科持ちや前の配置での素行不良等、なんらかの問題を起こした兵士たちである。

士官にしても海軍兵学校を落第寸前で卒業した者や、新人への教育の名目で再召集された退役軍人ばかりである。

また、使用している艦艇や航空機も少数のみ生産された実験品、または捕獲品ばかりであり、その戦力はあまり期待されていなかった。

そんな艦隊を率いるのは、軍縮時に一時退役させられ、現在は現役に復帰した桑名富四郎少将であった。今年満69歳を迎えるこの将軍は、現在連合艦隊司令官を務めている山本五十六大将よりも10歳も年上であった。

実験艦隊の艦隊司令部は、伊豆市郊外に設けられていた。艦隊には素行の悪い人間や、凡そ軍人とは思えない人間が多いから、はっきり言って市民からの実験艦隊に対する評価は低く、ここに近づく市民もほぼ皆無だ。いても出前の兄ちゃんぐらいだ。

そんな実験艦隊であるが、アメリカやイギリスにその詳細は殆ど漏れていなかったから驚きである。

現在まで艦隊の存在が外にあまり漏れてこなかったのは、市内にいる憲兵隊や特高警察による緘口令もあったが、艦隊司令官の桑名が将兵に対して極力市民との融和をするよう協力してきたからであった。

とりわけ、日中戦争開戦後はそれを徹底させており、以前ほど嫌悪ではなくなった。

というのもこれはただ単に、桑名が艦隊の評判を上げるためだけに行なった物ではなかった。実は、実験艦隊は軍縮条約時代から伝統的にその存在を秘匿していて、さらに2線級艦隊であるから割り当てられる予算は最小限である。そのため、食料などで生産可能な物は極力現地での自活が行なわれていた。

そう言う意味で、市民の協力、というか寄付は彼らにとって生命線であった。それを確保するために、桑名は住民との融和を進めたのであった。

閑話休題。

とにかく、そんな実験艦隊司令部に、珍しく東京からやってきた海軍軍令部の中佐が命令書を携えてやってきたのであった。

「こちらが海軍軍令部からの命令書です。ご確認をお願いします。」

佐伯と名乗ったその中佐は、赤い表紙の命令書を桑名に手渡した。その動きに乱れはなく、いかにもエリートと言った感じである。

「確認する。」

桑名は命令書を開き、簡単に中身を確認する。

数分後、とりあえず確認を終え、命令書を閉じる。

「内容は了解した。しかしだ、戦闘準備といわれても我が艦隊は平時から燃料の割りあてが少なく、通常の訓練さえギリギリの線で行なっている。今後、燃料の割り当てが増えるのかな？」

すると、佐伯中佐は顔色一つ変えずに答えた。

「私は命令書を渡して桑名閣下の返事を聞いてこいと言われただけです。質問は後日東京の軍令部か、呉の連合艦隊司令部に向いてしてください。それでは私はこれで。」

そう言って敬礼すると、彼は出て行ってしまった。

「ふん、軍令部の役人めが。」

「それで、どういたしますか？」

傍らに立っていた艦隊参謀長の近江勝彦大佐が聞いてくる。

「どうもせんよ。艦隊上層部の主だった士官に、この命令書の内容を通達するだけだ。もっとも、それでどうこう出来るわけがない。今の燃料事情では訓練の回数を増やす事も出来んしな。」

そう言って腕時計を見ると、彼は立ち上がった。

「さて、そろそろ「天城」行きのランチが出発する。君も行くだろ

う?」

桑名の間に、近江は頷いた。

「もちろんです。」

2人は司令部を出て、棧橋へと向かった。すると桑名が言ったとおり、そこには一隻のランチが艦へ戻る将兵をすし詰めにして出港しようとしていた。

「司令官に敬礼!」

ランチに乗ってくる司令と参謀長を見て、将兵達は一斉に敬礼する。中には2人に席を譲るべく立ち上がる人間もいた。

「いいよ、我々は立って行きたいからね。」

将兵の気遣いを断ると、2人は艇首に立つ。

ランチはそのまま出港し、艦隊旗艦である「天城」へと向かった。

出港して数分もすると、最初は小さくしか見えなかった空母「天城」の姿が大きくなる。

「何時見ても、この姿は異様だな。」

桑名は呟くように言った。

旗艦である空母「天城」は、確かに異様なシルエットをしていた。特に、前部で2段にわかれている甲板に、艦首から僅かしか見えな

いが発艦促進装置、所謂カタパルトの存在は帝国海軍の艦艇とは思えない物であった。

事実、この船はついこの間まで帝国海軍の物でなかったから当たり前である。

実験艦隊（後書き）

前回の反省を踏まえて、世界観や登場人物、さらに登場艦艇を大幅に変えました。

しかしながら、さまざまな架空戦記のパロディというスタンスは変えていません。

空母「天城」

実験艦隊旗艦である空母「天城」が海軍に編入されたのは昭和16年4月である。しかし、この艦を建造した記録は日本にある全ての造船所にはない。

そもそも本来の空母「天城」はワシントン条約によって、空母への改造が決定された巡洋戦艦で、建造中に関東大震災に遭遇して破損、そのまま解体された艦である。

今まさに司令官である桑名が乗り込もうとしている「天城」はそれとは全く別の船で、昭和16年2月に突如として、九十九里浜沖合いで発見された謎の空母というのがその正体である。

その日貨物船が洋上を漂流している「天城」を発見し、その後通報を受けた駆逐艦で派遣された海軍の将兵が艦内をくまなく調査したが、人っ子一人いない状態だった。

その後、取りあえず横須賀まで曳航されてドック入りし、さらなる調査が行なわれた。その結果、わかったのは艦尾の艦名板から艦名が「天城」といい、艦首の三つ葉葵の御紋、さらに艦内に残されていた書類から、この船が徳川幕府の軍艦であるということであった。

この報告に誰もが最初冗談と思ったが、艦橋をはじめとして各部に見られる日本的な造りは明らかにこの艦が日本で造られていたことを示し、かつ今の日本にはない物をたくさん積んでいたのも事実だった。

その後1ヶ月ほど綿密な調査が行なわれ、積みれていた艦載機や電子機器、機関技術は現在の日本の物と比べて明らかに勝っている事がわかった。特に電探やカタパルトは凄まじいまでに高性能だった。

調査終了後はその高性能から連合艦隊への配属も考えられたが、同型艦がないことによる戦隊単位での使用が難しい事、ならびに機密を保つ観点から実験艦隊配備になった。

ちなみに将兵の間に流れた噂では、突然現れて艦内に誰もいなかった幽霊船状態だったことから、7気味悪がられたからとも言われている。

とにかく、この「天城」が現在の実験艦隊旗艦だった。悪い噂があったものの、「天城」は配置以来乗員からの評判が非常に高かった。実はこの艦、居住性が非常に高い。帝国海軍の艦艇では水兵が寝る場所はハンモックが当然であり、またトイレや風呂等の施設も諸外国の水準から見れば非常に低かった。

ところがこの「天城」は水兵の居住区にいたるまで大きなベッドが用意されており、さらに艦内の装飾も華美なほどに付けられていた。漆塗りの装飾や、金箔が押された艦名板がそれである。

それ以外にも、図書室や食堂等の娯楽用の部屋なども整備されていた。一応実験艦隊配置前に一部は撤去されたが、それでも充分すぎるほどに華美で過ごしやすい空間であった。

桑名がこの艦を気に入っているのもそう言う理由からだった。

ランチが「天城」に着くと、桑名を先頭にして将兵たちが甲板へ

と上がる。

「お帰りなさい司令官。」

ラツタルの上で待っていた当直の兵士が敬礼する。もちろん、桑名も答礼をする。

「うむ。御苦労。」

続いて近江参謀長や将兵たちがラツタルに上がってくる。将兵達はそのまま自分の持ち場へと散って行く。一方、桑名と近江の2人は艦橋へと上がった。

艦橋では、艦長の朝倉義巳大佐が戦務担当の士官と打ち合わせをしている所だった。彼は桑名と近江の姿を認めると、打ち合わせを急いで終わらせ、近づいてきた。

「やあ司令官。今日も本艦でお休みになるのですか？」

「ああ。「天城」の司令官室の方が陸の司令部の方よりも居心地が良い物だね。ところで、戦務担当の士官が来ていたが、何かあったのかね？」

「ええ。また乗員同士の喧嘩です。一癖も二癖もある連中ばかりですから仕方ないと言えば仕方ないですが、規則に則って罰を与えなければいけません。」

その言葉に桑名は苦笑する。この艦隊には飲む・打つ・買う三拍子揃ったまたはどれかに当てはまる兵士が多い。そう言うわけで喧嘩も多い。日常茶飯事と言っても良い。

桑名らにとって助かっているのは、下士官兵を監督する士官たちが常に目を光らせてくれていることと、兵士の3分の2は乙種、丙種合格者で占められているおかげで、件数自体はそんなに多くないことだ。

「それは仕方がないな。どんな理由があろうと規則違反は罰しなければいけないからね。ところで、兵達の練度はどうかね？」

「一応きな臭い空気は感じ取っているようですが、訓練不足もあってそこまで高いとは言えませんね。しかし、そんな事を言われるという事は、いよいよですか？」

「ああ。今日軍令部から戦争の準備に入るよう命令が来たよ。ただ今の所はそれ以外に何の指示も来ていないから、取りあえず明日艦隊幹部を集めての会議を行なう。」

そう言つと、彼は窓に近づいて湾内に停泊している艦艇を見回した。

現在実験艦隊に配備されている艦艇は空母「天城」を始めとして、いずれも帝国海軍離れした艦艇ばかりで編成されている。

まず独特な船であるのが高速打撃艦の「背振」級だ。この船は八八艦隊計画の中止で余った40cm砲を有効利用するために建造された。ただし、設計経験を積ませるために設計を民間に委託したのだが、戦艦を設計したことのない民間造船所であつたから普通の設計が出来なかった。

しかも、海軍から提示された予算は軽巡洋艦1隻分しかつけられ

ていなかった。さすがに日中戦争が始まって、廃物利用に潤沢な予算をつけられるほど帝国海軍の懐は温かくはなかった。

そのため、彼らが設計したのは英国のモニター艦をモデルにして8000t級の高速商船の船体に40cm連装砲を1基のみ固定式で載せるという余りにも突飛な設計であった。

もちろん、そんな設計海軍としては許せる物でないし、第一、固定砲塔では対地砲撃能力も限定されてしまう。ましてや艦隊戦など不可能である。

しかしながら、船倉を弾庫として使用することや商船の船体流用は建造費を抑える点でも有効であった。もちろん防御力としては並の戦艦に劣るが、使用用途を空母護衛や対地砲撃のみに限定すれば充分役に立つ。

そこで、排水量を1万6千トンに倍増させ主砲を2基旋回式とし、平時は大型の鉱物運搬船。戦時は改装戦艦として使用する案が出された。

この結果生まれたのが「背振」と「多良」の2隻で、両艦とも今年の6月に改装を終えて配備されている。ただし、主砲こそ戦艦級であるが装甲版は巡洋艦程度の物しか積んでいないため、戦艦とは言い難い一面もある。さらに、機関も換装されているため速力は31ノットと高速である。そこで、高速打撃艦という新艦種となった。

この他の艦艇も個性豊かである。

空母「天城」（後書き）

この作品は市販の架空戦記のパロディです。例えば「天城」は橋本純先生の超次元大戦から、打撃艦「背振」は羅門祐人先生の独立愚連艦隊と独立日本艦隊のパロディです。

御意見・御感想お待ちしております。

艦隊編成

実験艦隊に所属する他の艦艇も、異色な物ばかりだ。

まず駆逐隊をまとめる戦隊旗艦である軽巡洋艦の「明日香」と「佐保」は、巡洋艦に類別されているものの、かなり小さな船である。一応艦橋などに日本の軍艦としての特徴は見られるが、連合艦隊に属するどの軽巡とも似ていない。

それもその筈で、実はこの2隻は中国海軍（中樺民国海軍）が日本の造船所に発注した河川用巡洋艦で、もとの名前は「寧海」と「平海」であった。あくまで河川における任務を考えた艦なので、排水量は2500t、全長は109m。速力も22ノットしか出させず、渡洋能力も低かった。

2隻は中華民国海軍で使われていたが、日中戦争の最中に日本海軍機の爆撃で着底し、その後侵攻してきた日本陸軍によって拿捕されている。

引き揚げ後に日本の造船所に回航され、修理改装の上実験艦隊に配備された。ちなみに、改装の内容は艦体の延長、機関強化、武装強化等多岐に渡っている。何れも外洋での作戦を行えるようにするためのものだ。

その結果、現在の性能は14cm連装砲2基、12.7cm連装対空砲1基、同単装砲2基、53.3cm連装魚雷発射管2基。全長115m、排水量2950t、速力28ノットとなっている。それでも、サイズ的には駆逐艦よりも少し大きいだけである。そのため、多くの兵士から「大型駆逐艦」と呼ばれバカにされていた。

その2隻に指揮される駆逐艦は、全部で3タイプ12隻である。それぞれ、甲乙丙型駆逐艦と呼ばれている。

甲型と乙型は、艦体は共通であるが、武装がそれぞれ違っていた。甲型は「松」級と呼ばれ、1番艦から「赤松」、「黒松」、「唐松」、「榎松」と全て松科の木から艦名が命名されている。

排水量1200t、速力30ノット。武装は戦艦から降ろされた副砲の14cm砲を流用した主砲2門に、零戦にも搭載されている20mm機銃との共通運用が可能な、改良型20mm単装機関砲8基に、やはり航空機用機銃を改修した単装12.7mm機銃6基を搭載している。

一方乙型は「梅」級と呼ばれ、艦名は「白梅」、「紅梅」、「寒梅」、「雪梅」である。対空用機銃は「松」級と同じであるが、驚くべきは主砲を一門も積んでおらず、代わりに3連装魚雷発射管を3基積んでいる。

この両型はまさしく単一用途駆逐艦と呼べる船である。設計したのは民間造船所で、海軍省から戦時の駆逐艦の消耗に対応できる急造艦のテスト艦を造れと言われて建造した艦である。

本来は海軍の艦政本部等がすべき仕事なのであるが、こうした船の設計をやりたがる人間がなく、やむなく民間造船所に設計が委託されたのだ。

8隻も建造できたのは、戦時急造艦のため艦体自体の予算が低価格で抑えられたことと、搭載した兵器が廃物利用か試験段階の兵器であったことによる予算削減が大きかった。しかし、出来上がった

艦を見て海軍の関係者は度肝を抜かれた。「松」級はともかく、「梅」級はともではないが海戦で使える船ではなかったからだ。

砲を1門も積まず、魚雷だけで海戦が出来るとは誰も思わなかったからだ。そのせいか、開戦から半年後には戦訓によって、魚雷発射管を1基降ろして、代わりに両用砲を積み込んでいる。

ただし、武装こそ突飛だったが「松」級も「梅」級も船体や機関の設計は戦時急造艦として十分な能力を持っていた。特に、電気溶接を多用した点は見逃せない。このおかげで、重量の軽減と、建造機関の短縮に大いに役立った。

後に海軍が設計する「桜」級もこの2タイプから設計を大いに参考とすることとなる。

そして最後の丙型は俗に平型と呼ばれる艦で、なんとアメリカの平甲板型駆逐艦である。この型は第一次大戦中に256隻も建造され、その多くが大戦に間に合わなかったために五大湖でモスボールされた。モスボールとは、樹脂などで艦を覆って劣化を防ぐことだ。

そしてその内の4隻がモスボール状態を解除され、中国にスクラップ名目で供与されたが、中国海軍が動かさないうちに、侵攻してきた日本軍に捕獲されてしまった。

日本への回航後の調査の結果、4隻とも状態は良く、修理さえすれば動かせる状態にあったが、アメリカの旧式駆逐艦を使いたがる部隊などなく、しかしながら帝国海軍としては1隻でも使える船は欲しかったので、紆余曲折の末実験艦隊に配置されている。

実験艦隊配置後は、艦隊の対空能力不足に鑑み、対空駆逐艦とし

ての改装を受けている。具体的には雷装を撤廃し、主砲を対空砲へと交換し機銃を増設している。

これら空母1、高速打撃艦2、軽巡2、駆逐艦12の計17隻が実験艦隊主力部隊の全戦力である。

ちなみに、これ以外にも実験艦隊には付属艦として潜水艦の「イ301」と海防艦4隻が付けられている。

「イ301」は高速潜水艦のテストベットとして開発された水中高速試験艦71号の発展拡大型で、後の「イ200」型のモデルとなっている。

水中最高速力は22ノットと高速で、魚雷発射管4門を持ち、航続力なども充分であった。

しかし性能は優秀なのだが、1隻の建造単価が高すぎ、手間が掛かるために同型艦の建造はなく、一通りの試験が終わると実験艦隊に配属されている。

4隻の海防艦は、「松」型を建造した民間造船所に発注されたやはり戦時急造艦艇のテスト艦で、海防艦という名こそ付いているが、中身は海軍の「択捉」級とは全然違う。どちらかというと、英国が大量建造した対潜コルベットやスループに近い艦である。

排水量は650t、速力24ノット、武装は8cm単装砲2基、25mm連装機銃4基、12.7mm単装機銃6基、爆雷80個である。主砲は高角砲で、対空戦闘能力の向上を図っている。

爆雷が多いのは、この船が対潜運用に重きを置かれた設計である

のが良くわかる。ちなみに、この4隻は速力が遅いから主力部隊に付いていけない。そのため、現在は港湾や近海警備、そして機雷の敷設任務のみに使われている。

ちなみにこの海防艦は固有名ではなく、「Z1」Z4」という風に番号制の命名がなされている。Zという英文字が頭文字なのは、ドイツの駆逐艦に名を似せて、敵の混乱を図る意図があるという説明がなされているが、実際は書類のZという感じをZと読み違えたのが真相のようだ。

とにかく、これらが開戦時における実験艦隊の全戦力であった。この他に「天城」が搭載している独特の艦載機もあったが、その説明は次回に持ち越す。

桑名司令官はそれらの艦艇を「天城」の窓から一瞥すると、自室へと向かって艦橋を出て行った。これから彼には、上層部に訓練用燃料と予算を求める仕事が続いていた。

艦隊編成（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

今回の作品の元ネタは軽巡と潜水艦が鷹見一幸先生の大日本帝国第七艦隊、駆逐艦とフリゲート羅門先生の独立愚連艦隊、林譲治先生の興国の楯のパロディです。

実験艦隊航空隊

軍令部から命令が届いた数日後、桑名司令官は実験艦隊に所属する航空隊が展開している海軍児玉飛行場を訪れた。

この飛行場は。埼玉県のド田舎の田んぼの真ん中にある飛行場で、設備面から見れば、お世辞にも一級の飛行場とは言い難かった。それでも、一応2000m級滑走路を備えていた。

実験艦隊航空隊が使う飛行場として、もう一つ伊豆半島の南伊豆飛行場があるが、そちらは1000m級滑走路が一本のみの、どちらかと言うと不時着場に近い代物で、航空隊が使う時のみ兵士が出張して使用されている。そのため普段は放牧場とされているような場所であった。だから本格的に航空隊が利用できる飛行場としては、この児玉基地が唯一であった。

児玉飛行場に着いた桑名は、さっそく飛行隊総指揮官の平賀少佐を呼び出した。

「これはこれは桑名司令、藪から棒にどうしたましたかな？」

突然連絡もなく現れた桑名に驚きつつ、平賀は用件を聞く。

「うむ、今回連絡も入れずに来てしまったことはすまない。だが、隊員たちに無用な緊張を強いなくなかったからな。」

その言葉に、平賀は笑った。

「家の隊員はそんな事じゃ緊張しませんよ。皆一癖も二癖もある奴

ばかりですからな。まあ、中にはそうでない奴もいますが。で、本題は何でしょうか？」

「実は、だ。先日軍令部から対米戦争準備に入れと通達があった。それで、航空隊の現状を聞きに来たわけだが、どうかね？」

すると、平賀は表情を曇らせた。

「練度は、一応向上はしています。しかしながら、連合艦隊の機動部隊とは比べられては困ります。何分割り当てられる燃料も少ないので、訓練時間も制限されています。部隊パイロットの平均飛行時間は650時間です。」

その言葉に、桑名も渋い表情をした。帝国海軍機動部隊では、通常飛行時間1000時間を越えていないパイロットは半人前とされている。つい数年前までは、初陣まで800時間も飛ばしていた。

さすがに中国で起きた戦争への介入でパイロットの戦死、特に陸攻隊員に被害が増えると贅沢も言っていられなくなったが、それでも機動部隊は未だに世界最高レベルの飛行技量を維持していた。

それに比べて、実験艦隊のパイロットの技量は大きく劣っていた。

「そうか・・・」

考え込む桑名。これでは行なえる戦闘は自ずと限定されそうだった。一方、その横の滑走路では、今正に戦闘機が1機飛び上がろうとしていた。

実験艦隊は艦艇も独特なら、航空機も独特だった。今飛び立とう

としているのは、帝国海軍ではめずらしい液冷式の飛行機だった。シルエツト的には、川崎飛行機が開発している戦闘機のキ61に酷似していたが、キ61はようやく試験機が飛び立とうとしている段階であり、ここにあるはずがなかった。

この機体は仮称1式艦上戦闘機11型と呼ばれ、最高速600km以上、武装も12.7mm機銃2基に20mm機銃2基と、あらゆる面で海軍の新鋭戦闘機零戦を上回っていた。

しかし、この機体は日本で開発された物ではない。実は漂流していた「天城」に搭載されていた飛行機だ。本来は、幕府海軍艦上戦闘機「天誅」であるが、その事を知る者はこの世界のどこにもいない。

「天城」とともに、この機体も徹底的に調査されたが、エンジンや機体に搭載されていた無線機を始めとする機器のレベルは帝国の工業レベルを遥かに凌駕しており、研究者たちの溜息を誘った。

また、やはり「天城」に搭載され、現在は実験艦隊で運用される1式艦上爆撃機こと幕府海軍艦上爆撃機「魁傑」との部品の互換性も高く、その点でも帝国の技術者に与えたショックは大きかった。そのせいか、ようやく10月になって帝国工業規格が定められ、これまでバラバラな規格で製造されていた様々な部品が統一の規格で製造される事になり、後の陸海軍の航空機統一へと繋がる事となる。

さらに、前述の機載無線機を参考にしてようやくまともな航空機用無線機が開発され、実戦配備されることとなった。

現在実験艦隊ではこの1式艦戦と、1式艦爆を30機ずつ運用していた。「天城」に搭載されていたのは、それぞれ42機ずつだった。

たが、12機はメーカーや海軍航空廠にサンプルとして引き渡されている。

「天城」の搭載機は80機だから、残り20機分スペースに空きが出た。そこで、その分は艦攻がつかれることとなった。艦攻は97式艦攻であるが、これも連合艦隊が使っている中島飛行機製の3号艦攻ではなく、三菱重工製の2号艦攻である。

97式2号艦攻は3号が引き込み脚であるのとは対照的に、古めかしい固定脚であった。ただし、性能は拮抗する面があったので、およそ150機ほどが生産されている。この内の30機が、艦上運用の評価試験の名目で実験艦隊に配備されていた。

この他に、陸上基地専用機として99式艦爆31型と、96式艦上戦闘機5号が配備されている。

前者は資源不足を補うために、99式艦上爆撃機を全木製にした機体である。日本では木製航空機の研究はあまり進んでいなかったが、探せばいるもので、東北の帝大に独自の木材強化理論を完成させた教授がおり、彼の助けを借りて完成させた機体である。

技術者の話では、「教授の理論がなかったら、確実に400kgは重くなって使い物になりませんでしたよ。」とまで言わしめたほど性能的に優秀であった。速度面においては、本来の99式艦爆を上回る性能を達成していた。ただし、やはり強度に難があり、急降下の確度に制限がついた。それでも、パイロットからはそれなりに好評であった。

一方の、96式艦戦5号は、三菱の若手技術者が独自に開発した機体で、零戦の「栄」エンジンのプロトタイプの10型エンジンに

風防、手動式引き込み脚を新たに装備した機体であった。

最高速度は495 km。大型増槽を抱いての航続距離は2000 kmであった。一時期零戦に不具合が続発した際、代替機として40機のみ生産されたが、結局その後零戦の不具合が改修されたため、実戦配備されずに終わった。

また、艦載水上機も零式や95式でなく、試製1式水上機である川西製の機体である。この機体は愛知製との競合に破れた機体の改良版で、最高速度こそ380 kmと遅いが、主翼に127 mm機銃を搭載し、急降下爆撃可能な優秀機である。

実験艦隊での運用が良ければ、連合艦隊でも採用されるかもしれないので、川西の意気込みは熱い。しかも、納入された14機の内7機は愛国献納機として寄贈された物だ。

これが、今の実験艦隊の手駒であった。

実験艦隊航空隊（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

開戦

11月、日米間の緊張は爆発寸前にまで高まっていた。一時期日米双方が妥協できる内容の条約が纏められそうにもなったが、結局こじれてしまった。

そして、日本にこれまでの中国、東南アジア地域での紛争への介入の一切を無に期させるハル・ノートがワシントンの野村大使に手交されたのはそれから間もなくのことだった。

既に帝国陸海軍は万全とはいい難かったが、当座の対米英蘭戦争の準備を済ませていた。千島列島の択捉島単冠湾からは、空母「赤城」を旗艦とし、南雲中将が指揮する第一航空機動艦隊が密かに出撃していた。

また台湾の海軍基地では、零戦や1式陸攻がフィリピンに対する渡洋爆撃の準備を終わらせていた。陸軍も泰経由でのマレー半島侵攻、フィリピン侵攻の準備を終わらせ、一部の部隊は乗船に入ろうとしていた。

そんな中、伊豆を母港とする実験艦隊にも出撃命令が下った。軍令部より彼らに下された命令は、ミッドウェイ環礁への攻撃であった。

この時点で、ハワイの北に浮かぶミッドウェイ島は、民間旅客機の給油用に用いられていた小規模な飛行場と、やはり小規模な軍の基地があるだけの小さなサンゴ礁の島であった。

はつきり言って、攻撃を行ったところで戦術的、戦略的な価値は

低く、わざわざ実験艦隊全艦を動員してまで叩く必要はなかった。

もちろん、作戦を計画した軍令部はそんな事は百も承知であった。実は、この作戦の真の目的は、開戦の30分後にハワイ・真珠湾米海軍基地を奇襲攻撃する南雲機動部隊に対する陽動であった。

作戦では、実験艦隊航空隊は開戦直後にミッドウェイ島に空襲を掛け、米海軍などに混乱をもたらし、その混乱の隙を突いて南雲部隊がハワイ真珠湾を攻撃する予定であった。

しかし、それぞれの作戦の間に取りられた時間はたった30分であるから、失敗する可能性も高い。おまけに、まるで南雲部隊の攻撃を成功させる図の様な役目である。

桑名司令官は、作戦計画書を読んだ時に「うちの艦隊に回してもらえる任務など、この程度だろう。」と苦笑いしながら言ったが、一部の若手士官からの反発は大きかった。

「このような図の役目など御免被る!!」

「私たちが厳しい訓練をしてきたのは、このような雑用をさせられるためではない!!」

「もつと有意義な作戦に投入して欲しい物である!!」
等など。

しかし、軍令部としてはその他に作戦の立て様がなかった。他に攻撃目標としてアリューシャンやウエーク島が上がったが、悪天候や他艦隊の攻撃目標であったために除外された。

南方侵攻作戦への増援戦力としての派遣も考えられたが、存在が機密に近い空母「天城」を人前に出す事に軍令部は躊躇したようだ。

そこで結局は、ミッドウェイ島攻撃で落ち着いたのであった。しかも、ミッドウェイからなら、真珠湾攻撃を失敗させてしまい、北方に離脱する南雲部隊を救援するような事態が万一起きた場合にも都合が良い。

最終的に、実験艦隊内での不満は桑名や近江参謀長が説得して回って沈静化させ、作戦は決行されることとなった。

11月26日、南雲機動部隊が真珠湾を抜錨したころ、実験艦隊も伊豆基地を出撃、大島沖合で館山や木更津基地を経由して飛んできた艦載機を収容し、一路太平洋を東進した。

出撃5日後の12月1日、ついに対米交渉は決裂し、12月8日をもつての対米宣戦布告が決定された。これを意味する「新高山登レ 1208」の暗号が実験艦隊にも伝えられた。

「開戦は予定通り、実施されることとなったか・・・」

「天城」艦橋の司令官席に座り、軍令部からの電文を通信兵から受け取った桑名は、それを見ると静かにうめいた。

「いよいよですね。」

近江参謀長が隣に立ち言う。

「ああ。実際我が艦隊はどこまで戦えるのかな？将兵には悪いが、

はつきり言つて大いに心配だよ。」

自艦隊の練度に不安を持つ桑名が心配そうに言うが、近江がその意見を笑い飛ばす。

「大丈夫ですよ。確かに我が艦隊の艦艇、ならびに航空隊の練度は他部隊より劣っている面がありますが、最低限の練度は保っています。相手が動かない、しかも小規模な基地相手なら充分に戦えます。」

その近江の自信に満ちた言葉に、多少桑名も気を良くした。

「そうだな。」

しかし、表情には出さないが桑名の心中には口には出せない、言しようのない心配と不安が入り乱れた気持ちが存在していた。

そしてそれは現実となる。

12月8日、アメリカの首都ワシントンでは日本大使館員が本国から送られてきた暗号電報を、手間取りながら解読していた。手間取っているのは、前日大使館員の送別会を行なったために、暗号機に慣れた職員の出勤が遅れていたからだ。

大使である野村は日米間の緊張を肌身に感じていたが、外務省所属の大使館員はかつて外相時代に多くの首切りをした野村との関係が決して良好ではなく、意思疎通が上手く出来ていなかった。それが悲劇を生む事になるのだが、それは別の話だ。

ちょうどその頃、ミッドウェイ西方海域600km地点では、空

母「天城」からミッドウェイ環礁に向けての攻撃隊が発進しようとしていた。

既に整備兵の手で万全な状態に整備され、さらに弾薬・燃料を満載した機体が格納庫から飛行甲板にエレベーターで上げられていく。

飛行兵の待機所では、パイロット達が最後の打ち合わせを行なう。今回飛行隊を指揮するのは、桑名が先日会った平賀少佐ではなく、この艦隊では数少ない中国戦線での実戦経験をもつベランパイロットの秋田大尉だ。

「いいか！相手は所詮動かない基地だ。それに2線級にすぎない。いつもどおり、訓練と思ってやれ！！」

「はい！！」

秋田は軽い物言いで初陣前で緊張しきっている、若い搭乗員たちの士気を鼓舞する。

「ようし、各員搭乗準備！！」

秋田を先頭にして、待機所からパイロットが自分の機体に取り込むため、飛行甲板に出て行く。

間もなく出撃予定時刻だ。既に無線用アンテナは倒され、艦は風上に向かって舵を切っている。そして、搭乗員たちがそれまで機体を調整していた整備員に代わってコックピットに入り込んだ。

その様子を、桑名も艦橋から見守っていた。

（皆、しっかりやってこいよ。）

心中で彼らに応援の言葉を掛ける。その彼の横に立っている近江が腕時計を見て言った。

「司令、発進予定時刻です。」

そして、桑名は静かに言った。

「発艦始め。」

開戦（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

奇襲ミッドウェイ

攻撃隊を発艦させるためには、必要な合成風力を起こさなければいけない。「天城」の艦首が風上に向けられ、機関が最大戦速へと増速される。

「発進！！」

甲板士官が旗を振り、攻撃隊の発進が開始される。天城は2段甲板の空母で、その両方の甲板から航空機が発進される。

カタパルトのない第一甲板からは身軽な零戦が、カタパルト装備の第二甲板からは重い爆弾や魚雷を装備した艦爆、艦攻が発進して行く。

「がんばれ！！」

「しつかりやってこいよ！！」

「戦果を期待しているぞ！！」

手空き乗員が思い思いの言葉を言い、そして帽子を振って攻撃隊を見送る。見送りの言葉の中に、「万歳」という言葉が聞かれないのが、精神教育を偏重していないこの艦隊らしい。

発艦は順調に進み、最終的に1機の事故機もなく、攻撃隊60機全機が無事発進できた。

80機の搭載機の中の60機であるから、これはほぼ全力出撃で

ある。残る20機の内12機が戦闘機で、8機が偵察用の艦攻である。

実験艦隊が使用できる偵察機は、この「天城」の8機と高速打撃艦2隻がそれぞれ3機ずつ積んでいる零式水偵しかない。だから、偵察能力は非常に限られた物になっている。

桑名はその内の半分を既に出撃させて、付近海域の索敵を行わせていた。

そして彼らは知らなかった。自分たちに遅れること30分後にハワイ真珠湾を強襲する南雲部隊が空母を撃ち漏らす事も、その撃ち漏らした空母の1隻である「レキシントン」が、航空機輸送の為にミッドウェイに向かっているのも。

「天城」を発進した攻撃隊は一路、ミッドウェイに向かっていた。隊長機では、秋田が天測を行なって位置を確認し、さらに辺りを見回して攻撃隊から脱落した機や、エンジンなどに不調のある機がないかを調べる。

「俺から見える範囲じゃ、いないな。旭、脱落機はいないか？」

後部の通信士である旭二飛曹に聞く。

「はい機長。脱落機ありません。」

「よし。脱落機なし、コース、ならびに通過時刻も予定通りだ。」

秋田は旭の言葉を聞くと、満足そうに答えた。何分練度の低い部隊であるから、ちゃんと全機飛んでいけるか少し心配な所があった

が、杞憂であつたようだ。

ちなみに時間に拘っているのは、今回の作戦ではタイミングが非常に重要であるため、あらかじめ航法の際は確認することを決めていたからである。

「まもなくミッドウェイ島です。」

操縦士の渡辺一飛曹が伝えてくる。ちなみに、こうした会話は直接では聞こえにくいので、全て伝声管越しに行なわれている。

秋田は双眼鏡を取り出し、機体の前方を眺める。この日の雲量は3、所々に雲が出ているものの、遠くを見るのに苦勞するほどではない。

すぐに、ミッドウェイ島が見えてきた。

「地図を見てわかつてはいましたが、大分小さな島ですね。」

「ああ。ようし、時間通りだ。旭！全機へ打電、ト連送、全軍突撃せよだ！！」

「は！！」

旭が通信機を操作して、モールス信号のトを連続打電する。全軍突撃を命令する暗号の、ト連送だ。

さらに秋田は風防を開け、信号弾を発射した。すると、戦闘機隊が前に出る。敵迎撃機が出て来た場合に備えての動きだ。

ちなみに、戦闘機は攻撃隊の前後方に分かれて飛行している。

「ミッドウェイ基地視認！上空に敵影、ならびに対空砲火なし！」

渡辺が報告してくる。

「よっしゃ！奇襲成功だ！旭、打電。我奇襲に成功せり、トラトラ
トラだ！！」

秋田は喜びながら叫んだ。

「は！！！」

奇襲成功を報せる暗号電文が打たれる。

「突撃！！」

60機の攻撃隊は、ミッドウェイ基地に攻撃を開始した。この時点で、ミッドウェイ基地ではこの攻撃隊の姿を視認していた。ところが、彼らにとっての不幸は、真珠湾と同じ過ちを犯してしまったことだった。

すなわち、敵味方の誤認である。真珠湾では、レーダーに映った日本機を、本土から飛んでくるB17爆撃機と誤認したために侵入を易々と許してしまった。

一方、ミッドウェイ基地にはレーダーこそなかったが、一応日本との緊張もあって、監視兵が空を睨んでいた。しかし、その監視兵は空に現れた黒点を、補充機を持つてくるために近海を航行中の「レキシントン」が飛ばした艦載機と見誤ったのだ。

もちろん、数も違うしこんな早朝に飛んでくる筈がなかったが、どうも監視兵には緊張が足りなかったようだ。

その機影が日本機であると気付いたのは、滑走路に直撃弾を喰らった瞬間であつた。

攻撃に気付いたパイロットたちは慌てて宿舎から出ると、配備されていたF2A「バッファロー」に乗り込もうとした。しかし、その前にバッファローは機銃掃射を受けて全滅していた。もっとも、例え飛び立ったところで、性能で勝る1式艦戦に勝てた可能性は低いのだが。

残る反撃手段の対空砲火も、基地に設置されている数自体が少なく、その内の半分も爆撃や機銃掃射で使用不能に陥った。残る砲が攻撃を開始したが、結局遅きに失し、撃墜できた機体はなかった。

攻撃は戦闘機による機銃掃射、艦爆による急降下爆撃、艦攻による水平爆撃で、おもに戦闘機と急降下爆撃機が対空砲陣地や駐機中の機体、格納庫に加えられた。艦攻の方は、滑走路を集中的に爆撃した。

1本しかない滑走路は穴だらけにされ、保有していたほぼ全ての機体が短時間でスクラップにされてしまった。

もともと攻撃隊の機数自体がそれほど大規模でなかったことと、この攻撃自体が陽動であたために攻撃もそれほど激しく行われなかったために、被害は飛行場周辺に限られた。

ただし飛行場と対空陣地意外では、偵察の主力であつたPB1Y「

カタリナ」飛行艇が配備されていた飛行艇基地も攻撃対象になり、こちらも保有機の全てが破壊されるか使用不能に追い込まれた。

攻撃隊は約20分ほどで、全ての爆弾を投下して去っていった。ミッドウェイ基地が受けた被害は、保有機全滅、ならびに格納庫の半分が全壊、滑走路は最低1週間は使用が出来なくなった。

ミッドウェイ島が攻撃を受けたと電文が発信されたのは、攻撃開始5分後であった。この報告でハワイ真珠湾は大騒ぎになり、全軍の呼集と艦艇に緊急出港のための機関始動が命じられた。

だが、それが悲劇を生んだ。多くの乗員が慌てて乗り込んだところで、南雲機動部隊から発進した攻撃隊が襲い掛かったのである。

こうして、太平洋戦争は始まった。

奇襲ミッドウェイ（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

敵空母見ユ

ミッドウェイ爆撃を終わらせた攻撃隊が「天城」に帰還してきた。桑名が見ていた限りでは、帰還した航空機の数、朝飛び立っていた数とほとんど変わっていないように見えた。

そして間もなく航空参謀が報告を彼の元に持ってきた。

「攻撃隊の被害ですが、未帰還機はありませんでした。被弾機も4機のみで、いずれも軽損傷だそうです。また戦果ですが、ミッドウェイ基地の滑走路に相当数の被弾を与え、駐機中の小型機約10機を撃破、格納庫複数を破壊。その他飛行艇2機の炎上と、複数の対空陣地に火災を発生させたのを確認したそうです。」

「意外と被害も戦果も少ないんだな。」

報告を聞いた近江参謀長が、怪訝な表情をした。

「乗員の話では、敵基地の規模は本当に小規模で、対空砲陣地や格納庫など狙うべき場所があまり無かったそうです。その結果敵の反撃も小さく、被害も少なく済みましたが、戦果も僅少な物となりました。」

「そうか・・・」

近江はもう少し戦果があるものと期待していたらしく、少し落胆していた。

「なあと参謀長。この作戦はあくまで、真珠湾作戦のおまけみたい

な物だ。先ほど真珠湾へ突入した攻撃隊が奇襲を成功させたと報告があったんだ。我々はその使命をすっかり全うしたという事だ。無駄な被害を出さずに済んだだけ、よしとしよう。」

「は。では、艦隊を帰還させますか？」

「そうだな、2次攻撃の必要もなさそうだし。じゃあ、帰るとするか。」

桑名が艦隊に反転命令を出そうとしたその時であった、無線室から連絡が入った。

「報告します。上空直掩中の戦闘機隊より入電、SBD「ドントレス」と思しき敵機1機を撃墜せり、位置艦隊より南西35km地点。なお敵機は北西より飛来したとのことです。」

その報告に桑名が首を傾げた。

「なんだと？南西、ミッドウェイから飛んできた敵機ではないのか？それに、電探は何で見つけられなかったんだ？」

「ミッドウェイから飛んできたとは思えません。位置がおかしすぎます。それと、電探は機影を捉えていたのですが、味方の偵察機と誤認したようです。」

航空参謀が言う。ちなみに、電探は「天城」に元々付いていた物をそのまま1式対空並びに対艦電探として使用していた。

「ふーむ。参謀長、君はどう思う？」

「状況から考えるに、敵空母が近海にいる可能性があります。それに、先日の件もあります。」

近江の言う先日の件とは、ハワイ真珠湾に潜伏していた海軍の工員から空母「エンタープライズ」、「レキシントン」が相次いで出港したという連絡であった。

連絡を受けた時点で、こちらの作戦に気付いての迎撃行動ではないかということが疑われた。しかし、ハワイ近海の味方潜水艦からは空母が遊弋している予兆は見られず、警戒はしつつも、訓練か何かでの出港と判断していた。

その空母が、この近くにいた可能性が出てきた。確かに、ハワイから近いこの海域で訓練する可能性は無きにしも有らずであった。

「やはり敵機動部隊かな？こちらの偵察機はどうした？北西海域には出撃していないのか？」

すると、再び航空参謀が答えた。

「南西海域には「背振」の水偵が出ていますが、今の所発見の報は来ておりません。」

「そうか・・・」

桑名はしばし思案する。ここで彼が執るべき策は3つある。1つは現海域で敵機動部隊の搜索を続けること。しかし、先ほどの米軍機が撃墜前になんらかの報告を送っていたら危ない。2つ目は、一目散に離脱し敵との戦闘を避ける。実験艦隊の艦艇の多くは高速だから敵を撒ける可能性は充分ありえる。しかし、敵が空母で有力な

航空戦力を積んでいるとなると話は別である。さらに、敵を前にして尻に帆を掛けて逃げるのは、帰還した際にまずい。3つ目は、前の2つの折衷案で、離脱しつつも敵艦隊の搜索を続ける。というか、これ以外に選択肢は無かった。

「仕方ない。艦隊は一端南に転進し、ミッドウェイ環礁から離れる。ただし引き続き航空索敵は続行せよ。それと、航空隊は第2次攻撃を対艦装備で準備せよ！」

「了解！」

取りあえず方針は決まり、実験艦隊は南へ向けて動き始めた。ただし、残存燃料の関係から短時間しか行なえない。

一方、甲板下の格納庫内では整備兵が帰ってきた航空機の整備、補給を開始していた。そこへ新たな命令により、新たに第二次攻撃のために対艦装備の準備に入った。

「敵空母がいるのか！？」

「対地攻撃だけじゃなかったのかよ！？魚雷は積むのも調整するのも手間が掛かるんだぜ！？」

「こら！！ばやばや言わずに、手を動かせ！！」

整備兵達は悪態を付きつつも、爆弾庫から対艦攻撃用の徹甲爆弾や魚雷を取り出し、艦載機に装備を始めた。もちろん、それは重労働である。

また、帰ったばかりのパイロット達も用意された握り飯や、いな

り寿司をサイダーで急いで流し込むと、整備兵の手伝いを開始した。

そして、桑名達が待ちに待った報告が入ったのは、第二次攻撃準備の命令が出された40分後であった。

「偵察機より入電。敵空母「レキシントン」とおぼしき物1、重巡3、駆逐艦5見ユ。位置艦隊より西150km。針路東、速力22ノット!!」

その報告に、艦橋にいたスタッフは一瞬言葉を失った。

「艦隊から150kmだと!近すぎるぞ!!」

150kmと言ったら航空機なら、爆装した機でも1時間ほどしか掛からない。また艦艇でも相対速度が70km程なら2時間ちよつとで接敵してしまう。

ただし、敵機がやってこない所を見るとどうやら先ほどの偵察機はこちらを発見できなかったようだ。

「どうします?一端離脱しますか?」

近江が聞いてくるが、これには桑名も迷った。もしこのまま進めば2時間後には敵艦と接触する。砲撃戦となれば総合的に見てこちらが若干有利となる。しかし航空戦では「天城」がやられれば終わりである。空母は飛行甲板が使えなくなれば、それで戦闘不能なのだ。

「いや、敵に突っ込もう!砲撃戦ならこちらに分がある。それに今更逃げて同じだ。とにかく今は一刻も早く艦載機の発進を急がせ

る！！」

一気に艦隊内の動きが慌しくなる。先ほどまで愚痴を言っていた整備兵たちも大車輪で魚雷と爆弾を装備していく。もしこのような状況で、爆撃を受けたら完全にアウトである。整備兵たちは、ひたすら敵機がこないことを祈った。

また、艦上の機銃座には兵達が配置に付き、空を睥む。しかし、肉眼でも、そして電探でも敵機が近づいてくる様子はなかった。

敵空母見ユ（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

第一次ミッドウェイ海戦

整備兵やパイロットたちが汗だくになりながら、整備と補給を完了させた艦載機の群れがようやくエレベーターで甲板に上げられ、並べられていく。

「急いでくれ、こんな時に敵の急降下爆撃機に襲われたら洒落にならないぞ!!」

近江参謀長が甲板を見ながらそう呟いた。

既に敵艦隊との距離は100kmを切っている。つい先ほど電探室から対艦用電探で敵艦影らしき物を捉えたという報告が入ったばかりだった。

桑名は上空直掩の戦闘機に、敵の急降下爆撃機の接近に注意するよう命令し、各艦の見張り要員には、雷撃機の接近に注意するよう命令を出していた。

「攻撃隊、発進準備完了まで後3分です。」

航空参謀が現状を伝える。甲板に並べられた艦載機にパイロットたちが乗り込み、既にプロペラを回して暖機運転に入っている機体もあった。

「ようし、少し早いが艦首を風上へ向けろ！全機揃わなくて良い、出せる機体から発艦させる!!」

航空機を発進させるには充分な揚力を起こさせるための風力を確

保する必要がある。そのため、艦を全速で走らせ、艦首を風上へ向ける必要がある。

「は、取り舵一杯！！機関最大戦速！！」

艦長の朝倉大佐が操舵室に繋がる伝声管に向かって命令を言う。まもなく、操舵室からの復唱が帰って来る。そして、しばらくして艦が左に傾き始めた。

艦首から出る吹流しの水蒸気が、甲板に描かれた線と重なる。艦首が風上へと向いた証拠だ。

「発艦始め！！」

甲板士官が旗を振る。それと同時に戦闘の1式艦戦がスルスルと動き始めた。また、階下のカタパルト付きの第2甲板からは爆弾を抱えた艦爆が出撃していく。

五月雨式での発進という前代未聞の発艦方法であったが、敵の攻撃もなく、なんとか攻撃隊の60機は発艦を完了させた。もちろん、編隊は組んでおらずバラバラだ。

「発艦が完了したな。これより「天城」は艦隊後方に退避。打撃艦を先頭にして敵艦隊へ突撃する。全艦最大戦速へ！！」

航空隊の発艦を終わらせた実験艦隊は、敵艦隊との砲撃戦を求めて突進を開始した。

一方、発進した攻撃隊は敵艦隊との距離がわずか95kmという超至近距離であったから、20分あまりで敵艦隊へと到達した。

この時、米艦隊にとっての不幸は攻撃隊を発進させようと風上へ向かって走っている事であった。実は米艦隊も空母「レキシントン」の艦載機を実験艦隊へ向け発進させようとしていたのだ。

しかし、米艦隊の不幸は実験艦隊に接触した偵察機が電信を発信出来なかったことであった。そのため、彼らが実験艦隊への攻撃準備を開始したのは、実験艦隊の水上機に接触されてからであった。

タッチの差で米艦隊は実験艦隊の先制を許したのであった。しかも、発艦のために艦首を風上へ向けて走らせていたために、回避運動も出来ない。直掩戦闘機も発進していなかった。

この光景に、攻撃隊隊長の秋田は狂喜した。

「やったぞ！敵さん直掩機を上げてないし、回避運動もしていないぞ！ようし、戦闘機隊は敵空母の艦上を機銃掃射して敵の艦載機を破壊しろ、艦爆、艦攻は重巡と駆逐艦を集中攻撃しろ！後は直ぐに艦隊が砲撃戦で片付けてくれる！全機攻撃開始！！」

秋田の命令の下、攻撃隊は一斉に攻撃を開始した。

まず戦闘機隊が「レキシントン」めがけて突っ込む。もちろん、米艦艇も対空戦闘を開始したが、1式戦闘機は零戦やF4Fよりも高速の600km以上のスピードで突っ込んだために、追いきれないという事態が続発した。

また、米艦艇の対空砲火もこの時期はまだ後の針ねずみと言わしめるものとはお話にならないほど貧弱であった。

1式艦戦の群れは、易々と「レキシントン」に銃撃を開始した。甲板に並べられていたF4FやSBD「ドントレス」が次々と炎上した。

「レキシントン」の乗員は爆発する前に、急いで炎上した機を海上に投棄した。しかし、この作業によって攻撃隊の発艦は事実上不可能となってしまった。

戦闘機隊が敵空母の航空機発進能力を奪うと、今度は艦爆隊と艦攻隊が周りの巡洋艦と駆逐艦に猛禽のごとく襲い掛かった。

8隻は対空砲火を打ち上げ、必死に回避運動を行なった。実験艦隊航空隊の技量が劣っていたこともあってか、命中弾はそこまで多くはなかった。しかし、それでも1式艦爆の積んでいた500kg爆弾と97式艦攻の91式航空魚雷は、1発で大きな打撃力を与えるだけの威力を持っていた。

最終的に、駆逐艦2隻と重巡1隻が沈没を避けられないほどの大打撃を受け、さらに3隻が大なり小なりの打撃を受けていた。

そして、この時駆逐艦がかわした魚雷の1本が「レキシントン」に命中した事が、海戦の趨勢^{すうせい}を決定付けた。

この魚雷は「レキシントン」の艦尾に命中し、4軸のスクリューの内2軸を破壊してしまったのだ。これにより、「レキシントン」の速力は全速の半分である15ノットまで落ちた。

最終的に、この戦闘はほんの30分ほどで終了したが、米艦隊は戦闘艦艇の半分以上がなんらかの損傷を負うか失われており、事実上壊滅していた。

一方、攻撃隊の被害は艦戦1、艦爆1、艦攻4であった。艦攻の被害が多いのは、低速であったために対空砲火の被弾率が上がったことが原因であった。

夕立のように突然やってきた攻撃隊は、やはり短時間で引き上げたが、米艦隊の災厄はこれだけではなかった。

攻撃隊が引き上げると、米艦隊は沈没艦の乗員救助と火災の消火を開始した。その40分後であった。付近海上を警戒していた重巡の「チェスター」が水平線上に艦影を発見した。

そして間もなく、「背振」級から発射された40cm砲弾が米艦艇に降り注いだ。慌てて「チェスター」も反撃を開始したが、間もなく40cm砲弾を被弾して戦闘不能に陥った。

この時点で米艦隊で戦闘能力を維持していたのは巡洋艦1隻のみであった。その艦も救助作業中であったために、戦闘は出来なかった。

そして、実験艦隊は反撃も受けないまま易々と、米艦隊を取り囲むように展開した。米艦隊司令官のニュートン少将に取りうる選択肢はもはやなく、彼は全艦に白旗を上げさせざるを得なかった。

その30分後、実験艦隊からランチで桑名司令官が「レキシントン」に乗り移り、正式な協定が結ばれた。

その結果、実験艦隊としても米兵全てを捕虜にしている余裕は無いので、空母「レキシントン」と巡洋艦「ペンサコラ」を除く米艦は乗員込みで解放する事にした。ただし、ニュートン少将を始めと

する高級士官だけは、情報を持っているため捕虜として「天城」で日本へと連行される事となった。

こうして第一次ミッドウェイ海戦と呼ばれる戦いは終わった。

実験艦隊はこの後日本軍に占領されたウエーキ島へ赴き、そこで給油艦から燃料をわけてもらい、12月24日に日本へと帰還している。意外と時間がかかったのは「レキシントン」を曳航したために速力を制限されたからだ。

そして、この戦いでの勝利によって実験艦隊の株は大いに上がる事となる。

第一次ミッドウェイ海戦（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

会談

ミッドウェイ海戦から1カ月後、実験艦隊司令官である桑名は東京の軍令部にいた。彼の身を包む制服の襟章と肩章の桜のマークは1つずつ増え、彼は中将へと昇進していた。

先月開戦と同時に行なわれたハワイ真珠湾、ならびにミッドウェイ奇襲作戦は大成功を収め、米太平洋艦隊を名実共に壊滅に追い込んだ。

さらに、第二航空戦隊司令官の山口多聞少将の強い進言で行なわれた第2次攻撃により、石油タンクと海軍工廠にも空襲が加えられた。この結果、真珠湾は最低半年は使用不能なほどの大打撃を受けた。

米海軍の撃沈艦船は捕獲された物と併せれば、戦艦4、空母1、巡洋艦4に上る。対し、こちらの受けた被害は約40機の航空機と、陸上基地からの爆撃機の攻撃を受け中破した「加賀」のみであった。

これは海戦史上空前絶後のワンサイドゲームで、かの日本海海戦並の快拳である。戦果を知らされた国民は、日頃の統制生活の鬱憤を晴らすかのように、こぞって街頭に繰り出して提灯行列を行なった。

また、喜んだのは何も国民だけでなく、軍上層部や政府もであった。とりわけ、アメリカとの戦争に危惧を抱いていた昭和天皇は今回の戦果にいたく喜ばれ、南雲忠一中将や淵田大佐を直々に皇居へ呼び出して、お話を聞いたほどである。

この時、前述した2人ほど長い時間ではなかったが、桑名も皇居へと呼ばれ、陛下に海戦の様子を語っている。

今回の作戦で、南雲艦隊以上に賞賛を浴びたのが実験艦隊であった。敵に大打撃を与えたのみならず、空母と巡洋艦という今の日本海軍が喉から手が出るほど欲しい艦艇を拿捕してきたのだから当然である。

また新聞での発表では、連合艦隊とは別系統の秘密艦隊であるとされたが、このことが大いに市井の子供たちを喜ばせた。小説に出てくるような秘密艦隊が、米海軍から大型正規空母を拿捕するというのは、まさに冒険小説の様な話であつたからだ。

もつとも海軍の中にはこの戦果を嫉妬する人間も多数折り、「帝国海軍にあるまじき海賊行為だ」と言つて僻む連中もいた。しかしながら、桑名以下実験艦隊でそんなことを気にする人間などいなかった。

そんな開戦時の熱気の余韻がまだ残るこの日、桑名がどうして軍令部に呼び出されたかという、ある人間と会つたためであつた。

「やあ、お待たせしました桑名先輩。」

そう言つて桑名に挨拶したのは、真珠湾奇襲成功以来、一躍時の人となつた山本五十六連合艦隊司令長官その人であつた。

「先輩はよして下さい、今はあなたの方が階級は上だ。」

そう言つて桑名が苦笑した。

「いえいえ、例え階級は上になっても兵学校での先輩を軽んじる事など私には出来ませんよ。」

今度は山本の方が笑いながら言った。

軍縮の煽りを喰らって一時期予備役に編入されていた桑名であるが、山本が兵学校にいた時は2年上の先輩であった。例え階級は上になっても、先輩への矜持をしっかりと持っているのが山本五十六という男だった。

「ははは、変わらないなあなたは。まあ、私情はここまでにして、早速本題へ移りましょう。今日私を、わざわざ伊豆から東京に呼んだ理由はなんですか？ただ昔話をするためではありませんまい。」

「もちろん、その通りです。実は、先日の貴艦隊の働きが上層部で高く評価されましたね。それで軍令部があるプレゼントを、あなた方の艦隊に用意したのです。」

「ほう。先日我が艦隊では私も含めて数人に階級特進の通達が来ましたが、それ以外にもプレゼントをくださるというのですか？」

「はい。実はあなた方が捕まえた2隻、つまり空母「レキシントン」と巡洋艦「ペンサコラ」がそれなのです。この2艦は現在、横須賀と横浜の造船所で調査、ならびに修理と改装を受けていますが、「レキシントン」は3月上旬、「ペンサコラ」は3月下旬にそれぞれ工事が終わります。それと同時に、貴艦隊へと編入される予定です。」

このことは、桑名も予想していたがやはり驚かずにはいられなかった。重巡の「ペンサコラ」ならともかく、大型正規空母の「レキ

シントン」は、今もつとも連合艦隊が欲しがっている艦種のはずだからだ。

「ほう。それは大変嬉しい事です。しかし、「ペンサコラ」は別として、正規大型空母の「レキシントン」は連合艦隊でも欲しがる船ではないですか？本当に我々が貰ってもよろしいのですか？」

すると、山本が苦笑いした。

「実はですね・・・」

山本が言うにはこうである。本来なら今後の建造計画では、新たに正規空母の「大鳳」が建造される予定であった。ところが、昨年連続して2隻（「天城」と「レキシントン」）もの大型正規空母が手に入ってしまった。そこで、空母「大鳳」の建造を中止し、その資材を建造が遅れている「大和」型戦艦4番艦に回せという意見が、軍令部や海軍省内で真剣に話し合われているという。

「そんな馬鹿な、ハワイ沖、ミッドウェイ沖、マレー沖で航空機の戦艦に対する優勢は、分かりきったことなのに。何を考えているのですか!？」

「ええ。しかし、なおも大艦巨砲主義の亡霊にしがみ付いている輩が多くて、我々もほとほと手を焼いているのです。なんとか臨時予算で、予科練の拡大と基地航空隊の大幅増強は決定したのですが、その分空母の増強が圧縮されそうなのです。」

この時点で、日本の空母建造は商船や特務艦改造空母と前述の「大鳳」以外には全く無かった。つまり、もし現在南雲中将指揮の第一航空機動艦隊の空母が失われることとなったら、補充する空母は

ないのである。

正規空母の建造継続は、山本としてはなんとしてもやり遂げねばならなかった。

「そこで、「レキシントン」を実験艦隊に移すことにしたのです。あの艦隊は軍令部直属ですから、一度配属されれば連合艦隊へ引き抜く事などよっぽどのが無い限りありえません。そうすれば、今後連合艦隊用の正規空母建造が認められるはずです。」

なんとなく強引な理屈であるが、現在の日本の縦割り行政ならそれで通ってしまいそうである。

「そういうことですか。」

取りあえず桑名は、自国の内実に情けなさを感じながらも、自分を納得させた。

ところで、軍令部と連合艦隊の役割がわからない人もいるかもしれないので、ここで簡単に説明しておく。

海軍軍令部というのは大本営海軍部のことで、海軍の行政、作戦立案を行なう。一方、連合艦隊はその作戦命令を受けて実際に戦闘を行なうのが仕事である。だから、連合艦隊で作戦を立てても、軍令部が許可しなければ、もしくは軍令部の許可を仰げない非常時以外は、作戦を自らの判断で実施できないのだった。

それに比べて、実験艦隊はかなり作戦面で動きやすかった。なぜなら、そもそも実験艦隊自体が軍令部の一部門の扱いとなっており、軍令部上層部から命令が出てなければ、自分たちで勝手に立案した

作戦を行なう事が許されるのであった。

まあ、実際の所は燃料や弾薬確保のため、難しいのだが。それでも、連合艦隊に比べれば大きなフリーハンドを与えられているのであった。

とにかく、こうして実験艦隊は新たに空母と巡洋艦を艦隊に加えられる事となったのであった。

会談（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

新装備

実験艦隊が拿捕した「レキシントン」と「ペンサコラ」はそれぞれ横須賀と横浜の海軍工廠と民間造船所で調査、修理、改装を受けていた。

調査は主に艦内の儀装や搭載武装に対して行なわれた。特に「レキシントン」は甲板上の飛行機こそ撃破されていたが、格納庫内のF4F「ワイルドキャット」、にSB2C「ドーントレス」、TBD「デバスター」、そしてSB2C「ヴィンディケーター」は無事であった。

これらは日本に着くと早速「レキシントン」から降ろされ、海軍の横須賀基地や陸軍の立川飛行場で試験飛行と性能テストが行なわれた。しかし、これらアメリカ軍機の性能に対して、多くのパイロットは冷ややかな評価をつけた。

この時点において、日本軍の機体の多くは、極限までの重量軽減を行なう事で得られた高い旋回性能を武器にしていた。それに対してアメリカ軍機は防弾版を装備して重量が重くなっていた。それを強力なエンジンで強引に引っ張る仕組みであった。

そのため、アメリカ軍機の多くは重いために翼面荷重が大きく、旋回性能は低かった。もっとも、それは日本機と比較した場合であって、地中海戦線ではF4FもMe109と旋回戦闘を行なっていることを忘れてはいけない。

ようは、日本軍機の旋回性能がずば抜けて高かったのだが、それが日本パイロットにとっては普通であったのだ。

結局、こうした考えを持つ日本パイロットたちの評価によって、日本軍全体が米軍機は軒並み性能が低いというレッテルを貼り付けてしまった。これによって、戦闘前から敵を見下し油断したところを撃墜されるパイロットが増加される事となった。

もつとも、悪い事ばかりではなく日本航空業界には大いに自信を持たせるきっかけとなり、また陸海軍がメーカーに出す性能要求も緩和される切っ掛けとなる。

さらに、飛行性能の劣悪さにはかり着目したパイロットもいたが、儀装能力の高さや整備性の容易さ、頑丈さ、そして詰まれている無線機や機銃の能力の高さをしっかりと見ていたパイロットも少数ながらいいた。彼らの貴重なレポートによって、無線機の改良や新型機関銃の開発も進められる事となる。

ちなみに、これら調査された機体の内SBD「ドントレス」だけは、占領した蘭印の飛行場で陸上機バージンのA24が拿捕されたことと、レキシントン内で無事残っていた機体の中で比較的数量が多かったことから、短期間で調査を終え、実用評価試験の名のもと実験艦隊航空隊に引き渡されて正式装備となっている。

この捕獲「ドントレス」にはS型艦上爆撃機という名前がつけられ、予備部品が尽きる事になる昭和17年末まで運用された。なお、元々が敵機であるから味方の誤射を受ける可能性があった。そのため無線用の支柱の位置や風防の形が変えられるなどの小規模改造を受けている。

一方、「レキシントン」と「ペンサコラ」の2艦では、搭載されていた射撃指揮装置や40mm対空機関砲などが注目を集めた。こ

の2つは日本で開発が遅れている分野の物であつたからだ。

2艦は米国製の武器は予備がある小口径銃を除いて降ろし、全て日本製の兵器に載せ代えている。それと同時に改名された。まさか日本の軍艦として「レキシントン」や「ペンサコラ」という名前で使うわけにはいかなかったからだ。

ちなみに、日本海軍の軍艦の命名は空母、戦艦の場合がまず海軍大臣が2つの候補を決め、それを天皇に上奏し最終的な名を決定するという方法を取っていた。それ以外の船は命名基準に従って海軍大臣が名前を付けていた。

改名後は「レキシントン」が「翠鶴」、「ペンサコラ」が「普賢」となった。

「翠鶴」は基本的に外観などは「レキシントン」時代のままだったが、20cm砲や5インチの対空砲が装備されていた場所には日本製の89式12.7cm連装高角砲が装備された。機銃はボフォーース40mm、日本製の96式25mm、エリコン20mmの混載であつた。

艦載機は以前なら90機あまり詰めたが、アメリカ製の機体と違って日本製の機体は翼の折り畳み幅が小さく、さらに天井から吊り下げる機械にあつていない為に、81機に抑えられた。

一方、「ペンサコラ」こと「普賢」はアメリカ時代が20cm連装、3連装砲2基ずつという主砲配置だったのが、今回の改装で連装4基にされている。これは3連装砲が日本海軍には存在せず、開発している余裕もなかったからだ。その代わりに61cm4連装魚雷発射管が2基装備され、さらに対空用機関銃も増備されている。

2 艦は改装と修理を終えると、数日間の試験運転をしたのち、海軍に引き渡され、即日実験艦隊所属となっている。

この2隻の配属として前後して、実験艦隊の各艦もドッグ入りして補修や簡単な改装を行なっている。特に駆逐艦にはまだ試験段階の物であったが新型の小型電探とソナーが装備されている。

また、拿捕した艦とは別に新たな艦艇も配備されている。それが軽巡洋艦「筑後」である。この艦は新造艦ではなく、購入艦であった。

こんな世界中が戦争中に艦艇を売ってくれる国などがあるのかというと、あったのである。それはフランスであった。

フランスはドイツに降伏後、ヴィシー政権と自由フランス政府にわかれてしまったが、後にベトナムになる仏印はヴィシー政権側についた。

この政権は事実上ナチの傀儡政権であったから、日本はかなり高圧的に仏印総督府に接し、その結果仏印進駐が可能となったのである。それとともに、仏印駐留の極東艦隊も武装解除されてしまった。

そして始まった太平洋戦争で、艦艇不足の日本海軍は繋がれたままになっていたこの巡洋艦に着目した。武装解除されているため、再武装する必要があったが、それでも新造するより安い。

そういうわけで、この巡洋艦「ラモット・ピケ」は日本海軍に安値で買い叩かれ（実際5500t級ほどではないが旧式だった）、日本の呉へと回航された。昭和16年11月の事である。

その後4ヶ月間で改装工事を終え、竣工し「筑後」と名づけられたのであった。ただし、同型艦がないなどの理由で実験艦隊への配属となった。

もちろん、軍艦は人が動かすから新たに大勢の隊員が実験艦隊に加わっている。やはり訳ありの人間が多かったが、今回の場合は素行不良の者は少なく、大半が戦死公報が回った後に生きていると判明した英霊であった。彼らの多くは、戦果を上げて自分たちを蔑んだ人間どもを見返すという意気に燃え上がっていた。

こうして、実験艦隊はよりパワーアップして再び戦場へと向かう事となる。

新装備（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

変革

昭和17年3月。新たに空母「翠鶴」と巡洋艦「普賢」を組み込んだ実験艦隊であったが、同時に2つの大きな変革があった。

1つは、艦隊名の変更である。これまでの実験艦隊という名称から新たに独立機動艦隊という名称に切り替えられた。これは艦隊の任務が、新兵器や実験段階兵器のテストや標的任務などから、実際に戦闘に出る場面が多くなるという、軍令部の予想にたつての物だった。実際、乗員と航空隊の習熟が済み次第、彼らはインド洋での任務に就く予定となっていた。

ちなみに、独立というのは連合艦隊指揮下にはないということを示していた。

そしてもう一つは、かなり大きな変革だった。恐らく大日本帝国海軍史上でかなり画期的なことであった。女子義勇兵の採用である。字のごとく、女子が兵隊として艦に乗り込むことを指す。

この女子兵採用の発端は、日中戦争が始まって1年目の昭和12年に遡る。その歳、日本の大衆向け雑誌に中国戦線で捕虜となった中国の女兵の写真が載った。あくまで中国戦線の様子を載せた戦意高揚用の写真であったが、これが日本国内の軍国少女の心に火をつけた。

「中国の少女が国のために戦っているのだから、私たち日本の大和撫子も御国のために銃を持って戦わなければいけない！」

日本では、明治以降女性 は 家庭内で働く存在という風潮が強かつ

た。職業婦人という言葉があつたが、これは女性が働いているのが珍しいということを象徴している言葉といえた。さらに、「家」制度が強いために女性の地位は低い。

そんな世の中であるから、この声も日本の女子の国に対する忠誠心の高さを示すという宣伝にこそ使われたが、実際に省みられることなどなかった。

その状況が一変したのが、第二次世界大戦が始まった直後だった。ヨーロッパの戦争の状況を伝える雑誌に、男性顔負けで国土防衛の任に就くイギリスの女性士官や、後方で補助任務につくドイツの女性兵士の写真が載ったのである。

これによつて、一度下火になつた女子の軍志願運動が再発した。結局軍もついに折れ、女子義勇兵志願制度が誕生した。この制度では志願した女子は、平時は本土基地での後方任務のみ。戦時でも前線での補助任務にしか就かないことになっていた。加えて、義勇兵という正規兵とは一戦を画す存在という扱いだった。だから、階級には特殊という単語がついていた。

そのため、開設当時の昭和14年当初に養成が開始された兵種は無線、主計、航空機整備等に限られていた。

ところが、当初から志願者が募集人数の十数倍となつた。これは貧しい小作農出身の女子が集中したのが原因だった。昭和恐慌の爪あとから日本が未だ脱出しきっていない証拠だった。

また、日中戦争の長引きと対米緊張のために、日本では陸海軍共に深刻な兵員不足を来たしつゝあつた。そのため、2年目の昭和15年からは兵種が歩兵やパイロットと言つた前線任務の兵士にまで

拡大された。

そして、今回訓練を終えた女子兵第一期生が独立機動艦隊に乗り込むこととなったのである。その内訳は、無線6名、パイロット12名、整備12名、電探担当3名であった。

3月3日。空母「天城」艦上で、司令官の桑名中將が着任した女子義勇兵の前で訓示を行なった。この時入った女子兵の中で最上級なのは、戦闘機パイロットの宇都宮栄子特殊一飛曹だった。

そして彼女らを新たに加えた艦隊は、ボルネオ島のブルネイ泊地へと移動した。これは、燃料事情の悪い日本本土よりも、燃料が豊富な南方で習熟訓練を行なうためであった。

3月21日、艦隊は伊豆軍港を出港し、一路南下した。この時期既にマレー半島、シンガポール、南方資源地帯などは敵の低い士気や、劣悪な装備に助けられて短期間のうちに占領されており、当初日本軍が求めていた南方の戦略資源はほぼ手中に治められていた。

日本軍上層部は当初予定していた戦略が、あっさりと終わってしまっつうという予想外の事態に、次の戦略目標をどうするのか迷っていた。

陸軍はとにかく中国での内戦を早期に終わらせる意味から、唯一残る援蒋ルートビルマルートを潰す事を当座の目標とした。

彼らにしてみれば、中国などの大陸こそ本命の戦線であり、太平洋はオマケに過ぎなかった。しかし、海軍は仮想敵がアメリカであるから、対米戦重視であった。そのため、次なる攻略目標はオーストラリア方面であった。

この戦略目標と仮想敵の不一致が後々大きく影響を及ぼす事となる。

4月2日、艦隊はブルネイ泊地に到着、早速訓練を開始した。伊豆よりも燃料事情が良いので、艦隊も飛行隊も思う存分とまではいかないが、以前より長時間かつ実戦的な訓練を行なえるようになった。

ただし、良いことづくめでなかったことを一応書き記しておく。それは桑名と近江参謀長の間で話し合われた次の会話でわかるだろう。

「いやあ、それにしても熱いですね。」

「本当にそうだよ。南方が熱いとは聞いていたが、甘かった。」

「既に熱中症患者が20人も出ています。いずれも新兵を中心に出ています。それに、最近食事に対する不平不満も大きくなっています。」

「うーむ。訓練は出来るようになったが、まさかそんな問題が発生するとは思わなかったよ。まあワシもビルマ米やタイ米より日本の米を食いたいと言う兵の気持ちはわからんでもないがね。」

こういう具合であった。ただし、彼らはまだ恵まれていた。なぜなら彼らの使用している艦艇の多くは外国製や、比較的余裕を持って造られた民間造船所の船ばかりであったからだ。

こうした艦艇の多くは、兵1人1人にスチール製のベッドが装備

され、便所や浴室の数も日本製の軍艦よりも多かった。さらにアメリカ製の「翠鶴」や「普賢」には食堂にアイスクリーム製造装置が備えられていた。

こうした福利厚生面での設備が忠実にしているおかげで、兵たちの不満は他の艦艇に比べて最低限度で抑えられていた。
ストレス

ブルネイでの訓練はおよそ半月ほど行なわれた。

独立機動艦隊艦隊編成 1942年4月

第一独立航空戦隊 空母「天城」(1式艦戦×30 1式艦爆×27 97式艦攻×24)

空母「翠鶴」(96式艦戦改×30 S式艦爆×30 「明星」×21)

第一独立打撃戦隊 打撃艦「背振」
打撃艦「多良」

第二独立打撃戦隊 巡洋艦「普賢」「筑後」

第一独立水雷戦隊 巡洋艦「佐保」「梅」型駆逐艦×4

第二独立水雷戦隊 巡洋艦「明日香」平型駆逐艦×4

第一独立護衛戦隊 「松」型駆逐艦×4

変革（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

なお、「翠鶴」は橋本純先生の「第七航空艦隊戦記」のパロディです。

訓練に次ぐ訓練

独立艦隊が母港の伊豆からブルネイに移動して2週間が経った。

艦隊は乗員の休養や整備がある日以外は、連日沖合いに出て訓練を行なっていた。特に乗員が艦に不慣れな「翠鶴」や、新米搭乗員が多い「翠鶴」航空隊に対しては厳しい訓練が加えられていた。

もつとも、それは比較の話であって、その他の艦も豊富な燃料が手に入るということで、連日猛訓練していることには変わりなかった。

この日も、空母「天城」上空では、艦載機が初歩的な訓練である発着艦訓練のタッチ・アンド・ゴーや、少しはなれた海上で標的役を務める駆逐艦相手に雷爆撃訓練を行なっていた。

その様子を、艦隊司令の桑名や参謀長の近江が、双眼鏡片手に艦橋の横の張り出しから見守る。南方だけあって2種軍装の2人の顔には汗が浮かんでいる。しかし、2人にはそんなこと気にはならない。

2人が気にしているのは、今まさに着艦針路に入った97式艦攻の動きであった。「天城」航空隊は極力ベテランで固められているが、中には先日のミッドウェイ沖海戦で戦死したパイロットの穴埋めとしてやってきた新米もいた。今こちらに向かってくる艦攻も、その新米パイロットの操る機体であった。

しかし、2週間の猛訓練の成果がはつきりと出ていた。97艦攻は危なげも無く甲板に車輪を付け、少しだけ滑走するとその後エンジンで噴かして上昇していった。

その様子を、2人は満足げに見送った。

「大分上手くなったな。確かあの機体のパイロットは小松少尉だったな。最初の頃は大分フラフラしていたが、今はもうベテランに劣らぬほど綺麗に着艦を行なえるようになったな。」

桑名が笑顔で言うと、近江も続いて笑顔で言う。

「毎日朝から晩まで平均7時間の飛行、それを週六日続けたんです。しかも、教官は中国戦線依頼のベテランですから。嫌でも上手くなりますよ。」

「だな。皆良くやってくれているよ。」

2人はそう言って満足げに頷くが、しばらくすると表情を険しくした。

「だが、せめてもう1ヶ月あれば、十分な訓練を施せるんだがな。」

それは桑名の嘘偽りのない感想だった。猛訓練と言っても、やはり2週間では限度がある。もし後1ヶ月あれば、艦艇と航空隊の兵士は連合艦隊並の練度を発揮できるだろう。しかし、現実 is 厳しい。この訓練も明日には切り上げ、独立艦隊は出撃する予定であった。

「仕方がありません。戦争中ですから。」

近江がたしなめるように言うが、そんなこと桑名は重々承知していた。

「そんな事ぐらい、わかっているよ。」

戦前の日本海軍は、少数精鋭主義のプロ集団という形が強かった。数は少ない物の、練度の高い兵士と個艦能力の高い軍艦で、侵攻して来るアメリカ艦隊を1回の海戦で邀撃して殲滅するという漸減戦術を取っていたからだ。

しかし、中国内戦で陸攻を筆頭に多数のベテラン搭乗員が戦死すると、その少数精鋭主義は消耗戦への脆さを露呈し始めた。帝国海軍では、米国との関係がきな臭くなった去年から予科練や海兵団の定員を増員するなどして戦力不足を補おうとした。しかし、その効果は最低1年は経たないと出ない。

現在のところ、戦力不足は大きく目に見える形では出ていないが、既に第一航空機動艦隊や前線の航空部隊ではパイロットや機材の補給が追いつかないという問題がちらほら見え始めていた。

さらに、内地では相変わらず燃料事情が悪いという状態が続いていた。タンカーの不足から、効率よく南方から石油を運べていなかったからだ。

その点、独立艦隊がブルネイに移動して訓練を行なうというのはかなり先進的な考えだった。これを真似て後に、一部の練習航空隊などは南方へと移動して訓練を行なう事となる。

大きな視点で見ると、そういうことが起きたり起こったりしていたのだが、桑名達にしてみれば今は目の前の現実をしっかりと見極める方が大事だった。

彼らは双眼鏡を500mの感覚を置いて並走している「翠鶴」に

向けた。そのシルエットは「レキシントン」そのままである。ただし、日本艦であることを示すように、煙突や甲板にどでかい日の丸が描かれている。

その上空にも、「天城」と同じく航空機が舞っている。その機影は96式艦戦改の物であった。

96式艦戦改は独立艦隊内の通称で、正式名称は96式艦上戦闘機5号である。もっとも、外見ではあまり96式艦戦とは思えない。どちらかというと、輸入されたヴォートV183戦闘機に似ている。

実はこの機体、以前も少し紹介したが零戦のテストベットとして開発された面が大きい機体で、密会風防に引き込み脚、零戦のエンジンのプロトタイプである栄10型エンジンを積んでいた。言わば零戦と96艦戦の中間機だ。

本当なら5、6機の試作機が作られるだけで終わる予定だったが、中国戦線の広がりのために50機が追加製作された。もっとも、その時には零戦が登場してしまったが。

その機体が、めぐりめぐって今は独立艦隊艦載機として使用されていた。さらに、その戦闘機に乗っているのが女性パイロットであるから、世の中わからない。

先日艦隊に乗り組んできた女子義勇兵達は、全員「翠鶴」配属に成り、そちらで今はもう特訓中であった。

桑名は双眼鏡の倍率を最大にして、今「翠鶴」をタッチ・アンド・ゴーした96艦戦改を見た。その機体には胴体に百合の花があしらわれていた。

「女子義勇兵たちも頑張っているようだな。男顔負けの技量に達しているぞ。」

「いやはや、最初は女に戦争なんか出来るのかと心配していましたが、どうして、見くびってましたよ。」

この近江参謀長の発言は、後の世なら立派なセクハラ発言であるが、この時代はこうした考えが常識としてまかり通っていた。もっとも、その後60年経っても差別というものは中々消えないが。

「もはや、男だの女だのと言っている時代は終わったという事だろう。温故知新という言葉があるが、まったくその通りだ。古きに拘るのもいいが、しっかり新しき物も見なければな。」

「ですね。」

2人はそう言って再び双眼鏡を上空に向けた。そこには、とても戦争をしているとは思えない、南国独特の青空が広がっていた。しかし、戦争は終わる気配を見せず、彼らは再び苛烈な戦場へと飛びこもつとしていた。

96艦戦改性能データ

全長	8 m	全幅	11 m	自重	1250 kg	速力	495 km
航続力	最大2000 km	武装	127 mm機関銃2基	77			
	mm機関銃2基						

発動機 栄10型空冷 900馬力（離昇1000馬力）

訓練に次ぐ訓練（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

インド洋作戦開始

昭和17年4月10日、独立機動艦隊に新たな命令が下された。それはセイロン島方面における残敵掃討だった。

4月5日から4月9日まで行なわれたセイロン島沖海戦で、南雲機動艦隊は空母「ハーミース」、巡洋艦「コンウォール」、「ドンセットシャー」を撃沈した。しかし、主力艦である戦艦や空母「フオーミダブル」、さらにセイロン島軍港機能にはたいした打撃を与えられず、攻撃は徹底を欠いていた。

そこで、独立機動艦隊はこれら残存艦艇ならびにセイロン島基地機能の完全破壊を行なう事となった。

艦隊は4月11日にブルネイを出港し、途中ペナン島で補給を受けた後インド洋へと入った。作戦決行予定日は4月21日であった。

「日本海軍の教師たる英国海軍との勝負ですか、腕がなりますね。」

空母「天城」艦橋で、近江参謀長が司令官席の桑名にそう言った。実際、帝国海軍は黎明期から最近に至るまで、英国海軍から大いに学んでいた。かの東郷平八郎元帥もイギリスに留学した人間である。

「そつだな。しかも、空母戦艦を含む大艦隊だ。前回はこちらの奇襲が成り立ったから良かったが、今回はそもいかなだろう。気を引き締めていかにやらん。」

この時点において、英東洋艦隊は壊滅したも同然と考える者が多かった。前年開戦直後に新鋭戦艦「プリンス・オブ・ウェールズ」、

巡洋戦艦「レパルス」が陸攻隊に撃沈され、空母「インドミダブル」が捕獲されていた。

そして、今回の南雲部隊の空襲でさらに巡洋艦と軽空母を失っているから、そう思えなくもない。しかし、実際には旧式とはいえ戦艦5、正規空母1が残存しており強力な艦隊といえる。

日本軍は南方攻略を一通り終え、今後の作戦の主軸は対米戦となると予測されていた。だから、南方から主戦力が引き上げられることとなる。そうなれば、弱体化したとはいえ砲戦能力では強力な英艦隊がどこかを攻める可能性も捨て切れなかった。

そこで独立機動艦隊を持って完全に英東洋艦隊を封じ込めるのが作戦の主旨であった。しかも、さらにマダガスカル方面への遠征も考慮され、連合艦隊から高速タンカー2隻がつけられている。

このタンカーを守るために、伊豆の基地防衛用に残されていた4隻の海防艦と潜水艦「伊301」も呼び寄せられている。

つまりこの作戦は、独立機動艦隊の総力を上げた作戦であった。

4月20日、順調に進んでいるかに見えた作戦は一気に緊迫の度を高める事となった。この日夕方、英国の飛行艇「シヨート・サンダーランド」が艦隊に接触した。ただし、見つかったのは機動部隊本体ではなく、その後方50kmを走る給油艦隊であった。

（日本艦隊見ユ。位置セイロン島の南東600km地点。仮装巡洋艦2、フリゲート4、速力18ノット。針路北西。）

この時英軍機は2隻のタンカーを仮装巡洋艦と見誤った。この時

期インド洋で日本海軍の仮装巡洋艦戦隊が活動しているという情報
が、乗員に誤った判断をさせたのだ。

ただ、もしこの時タンカーを空母としていたならば、その後の戦
いは大きく変わっていただろう。なぜなら、この報告に英軍司令部
は、インド洋を航行中の商船に警告を発したただけだったからだ。空
襲が行なわれるなど全く予想していなかった。

翌日早朝、セイロン島南東400km地点に達した独立機動艦隊
はセイロン島への攻撃隊を発進させた。戦爆連合の84機である。
さらに30分遅れで、やはり戦爆連合の48機を発艦させている。

手空きの乗員達は万歳や、帽子を振って攻撃隊を見送った。

その30分後、独立艦隊上空に1機の航空機が接近してきた。

「電探室より報告、セイロン島方面より機影1、接近中。速力13
0ノット。艦隊上空まで15分！」

「敵機か！？それとも落伍機かな？」

桑名がつぶやくように言った。攻撃隊の中からエンジン不調など
で落伍機が出るのは、この時代珍しい事ではなかった。

「とにかく、上空の直掩戦闘機隊に確認を取らせましょう。」

近江参謀長の進言は早速受け入れられ、上空の戦闘機隊に無線通
信で連絡が行われた。

「艦隊北西方向より接近する不明機あり。敵機であるならば直ちに

迎撃せよ。」

「了解！」

命令を受けた「翠鶴」戦闘機隊の松坂少尉はさっそく部下の一部を率いて確認に向かう。

「宇都宮、滝口、付いて来い！！」

「了解！！」

帰ってきたのは、高い声だった。彼が今回率いているのは、いずれも初陣の女子飛行兵たちだった。彼女らは松坂の動きにしっかり付いて来た。

「いいぞ。訓練の成果がしっかり出ているな。」

松坂は2週間の猛訓練で、練度が大いに上達した彼女らに満足しながら不明機を探す。この日の雲量は約4。晴れてはいるが、そこまで快晴というわけではない。

彼は目を凝らして辺りを探すが、中々見つからない。

「どこにいる？」

すると、滝口正美特殊三飛曹が声を上げた。

「いました！11時下方です！！」

松坂は直ぐにその方向に視線を向けた。すると、双発機が1機自

分たちより500m程下方を飛行しているのが見えた。

「敵機だ！！英軍の「ブレニム」だ！！」

「プリストル・ブレニム。」かつては米軍のB10やドイツのHe111とともに戦闘機より早い高速爆撃機として一世を風靡した機体であった。現在は流石に旧式化していたが、侮れる相手ではなかった。

「単機だと偵察だな。ようし、撃墜する！2人とも機銃の装填を確認しろ！訓練どおりの順番で攻撃しろ！それと敵機との距離に注意しろ！」

「了解！！」

「よし、突撃だ！！」

3機は一齐に「ブレニム」へ向けて突撃を開始した。

最初敵機は直線飛行を続けていたが、松坂が距離200m程まで接近した所で、気づいた。上部にある銃座から発砲がなされ、一気に急旋回した。

「くそ！気付かれた。」

松坂は悪態を付くと、機銃を発射した。7.7mmと、12.7mm機銃の曳光弾が空中に弾道を鮮やかに残す。

この攻撃は1発も当らなかった。しかし、ブレニムは攻撃に驚いて動きを乱した。そこへすかさず2番機の宇都宮特殊一飛曹が攻撃

をくわえてた。この攻撃でエンジンに被弾した「プレミアム」は急激に速度を落とした。

それでも落ちない。

「滝口、留めを指せ！いいか、接近して撃て！！」

「了解！！」

松坂は戦果を部下に譲ることにした。ちなみに接近しろといったのは、間合いを詰めないと命中を得にくいからだ。

ダダダ・・・

滝口機が10秒ほど攻撃を行うと、残っていたエンジンも発火した。そして、ついに耐え切れなくなったらしく、乗員が脱出した。撃墜である。

「ようし、1機撃墜だ。よくやったぞ2人とも！！」

これが女子義勇兵の初戦果であった。しかし、残念ながら「プレミアム」は撃墜前に無電を発進していた。

インド洋作戦開始（後書き）

御意見・御感想・要望等お待ちしております。

コロンボ壊滅

松坂達が撃墜した「ブレニム」爆撃機は、撃墜される寸前セイロン島のコロンボ基地に向けて無電を発信していた。

（我、日本の艦載機らしき航空機の攻撃を受けつつあり。）

この無電を打ったところで、「ブレニム」は撃墜された。場所や敵の規模についても詳細情報がない簡単な報告であつたが、セイロン島にある英軍基地は緊迫した空気に包まれた。

南雲機動部隊の空襲を受けて損害を受けたのはつい先日のことなのだ。その時の空襲では港などの施設に対する損害が軽かった。それに対する追加攻撃は大いに有り得ることだった。だから。

「南雲機動部隊が第二次攻撃を仕掛けてきた！」

彼らがそう考えるのも無理はなかった。

ただちに各地の飛行場から、迎撃のために「ハリケーン」や「フルマー」と言った戦闘機が飛び上がっていく。前回零戦との空襲でそれなりの数を消耗したものの、その後インド各地の基地から増援を受け、なんとか戦闘を出来るレベルまで戦力は回復していた。

そして、独立機動艦隊から発進した攻撃隊が向かうコロンボ上空には、60機ほどの「ハリケーン」と「フルマー」が舞っていた。そこへ、攻撃隊は突入した。

今回第一波攻撃隊の指揮官は空母「翠鶴」飛行隊の小淵沢圭介大

尉だった。彼は目標上空に敵戦闘機発見の報告を受け取ると、直ちに攻撃隊の全機へ向けて命令を発した。

「総隊長機より全機へ、敵戦闘機は戦闘機隊へ任せ、構わず目標へ突入せよ。全機突撃！」

彼は敵戦闘機の壁を強引に突破する方法を選んだ。この時攻撃隊に随伴する戦闘機は30機であった。性能的に英軍機に劣ると思えなかったが、必ずその壁を敵機は越えてくる。だったら、一刻も早く爆弾を投下して避退するのが良い。彼はそう判断した。

命令を受けた1式艦爆、「明星」、S式艦爆、97艦攻がフルスロットルで突撃を開始する。

一方、護衛の戦闘機は直ちに英軍機と空戦に入った。今回攻撃隊の護衛戦闘機はいずれも「天城」搭載の1式艦戦であった。この機体は強力な水冷エンジンによって、600kmを越す最高速度を誇り、なおかつ運動性能も良い。その機体を第一次ミッドウェイ海戦を潜り抜けたベテランたちが操っている。

対する英軍の「ハリケーン」は、有名な「スピットファイア」の1世代前の戦闘機である。さらに「フルマー」に至っては、武装こそ強力だが、その他は戦闘機と呼ぶのが疑わしい性能しか持たない艦爆との兼用を兼ねた多座機であった。おまけと来て、それらを操るパイロットも多くはインドから派遣された実戦経験のないパイロットばかりであった。

数的には2対1であったが、3分後には1、5対1、5分後には英軍機が次々と遁走する事態に陥った。彼らは急降下で爆撃機や雷撃機に一気に詰め寄れた所を、戦闘機との戦いをムキになって挑戦

し、その結果大損害を被ったのであった。

この空戦での被害は、日本側が戦闘機の防衛網を掻い潜った敵機によって攻撃された不運な艦爆と艦攻が1機ずつであったのに対し、英軍は「ハリケーン」13機、「フルマー」に至っては22機全滅という最悪の被害であった。

その一方的な空戦のさなか、攻撃隊各機は指定された目標に次々と爆弾の雨を降らせた。ドッグ、クレイン、停泊中の輸送船、燃料タンクなどが次々と破壊され、結局20分の空襲でコロンボ港はほぼその基地機能を紛失した。

さらに、30分遅れで突入した第二次攻撃隊が近郊に所在する飛行場を襲撃し、残存していた機体と滑走路、格納庫を破壊した。

こうして、コロンボ港と近郊の飛行場はその機能を完膚なきまでに潰れてしまった。そして何より英軍にとって痛かったのは、機動艦隊攻撃へ向かおうとしていた爆撃隊の「ブレニム」や「ボーファイター」が地上破壊されてしまったことだった。

偵察の「ブレニム」が命がけで報せた報告も、結局間に合わなかった。

コロンボの軍施設が壊滅した頃、セイロン島にあるもう一つの軍港トリンコモリからは、攻撃隊が発進していた。海上の長距離飛行であるため戦闘機は付かず、爆雷装した「ブレニム」だけの23機の編隊だった。

ちなみに、この攻撃隊は日本軍機ほど幸運には恵まれていなかった。艦隊手前80km地点でレーダーに捉えられ、無線誘導された

戦闘機隊によって攻撃を受けた。

これがもし無線機も電探もない南雲機動部隊だったら奇襲できたであろうが、生憎と独立機動艦隊は実験段階とはいえそれらを保有していた。

「ブレニム」隊は23機中17機が艦隊手前で戦闘機によって撃ち落され、直掩戦闘機隊のスコアを稼がせるだけに終わった。

残る6機は戦闘機隊の壁を突き破って艦隊に突入した。各艦は保有する高角砲、機関銃を用いて全力で反撃した。

敵機は空母への接近が不可能に近いと知るやいなや、目標を陣形外の巡洋艦「佐保」に向けた。投弾前に3機を撃墜したが、残る3機は「佐保」に投弾した。結果、500ポンド爆弾3発が直撃した。

河川用の、駆逐艦に毛の生えたような小型巡洋艦にこの打撃は痛かった。幸い轟沈はしなかったものの、集中して艦後部に被弾したために航行不能となり、やむなく味方駆逐艦の魚雷で自沈処分された。独立機動艦隊初の損失艦であった。

一方、殊勲の「ブレニム」もその後対空砲火と怒りに燃えて攻撃してきた戦闘機隊によって全機撃墜されてしまった。せつかくの戦果も、全滅してしまっただけの意味もない。

「敵機全機撃墜しました。巡洋艦「佐保」は残念ながら機関室への被害が大きく、先ほど退艦命令が出ました。」

参謀が、桑名司令官の元に被害状況を報告してきた。

「そうか。駆逐艦には1人でも多く「佐保」の乗員を救い上げるよう厳命しろ。それと艦長の平塚中佐には自決は許さんと付け加えておいてくれ。我が艦隊は経験ある軍人を死なせる余裕はないものでね。」

「わかりました。」

参謀は敬礼をすると、すぐに通信所に向かうため艦橋を出て行った。

「敵も中々やりますね。」

近江参謀長が横から言う。

「当たり前だ。一方的に出来る戦争などそうそうないよ。大本営は無敵皇軍などほざいておるが、慢心は何よりも敵だ。先日東京が空襲を受けた事を忘れてはいかん。」

「わかっております。しかし、攻撃隊からも偵察機からも敵艦隊発見の報告が入りませんね。どこにいるんでしょうね？」

「前回南雲さんが空襲した時もいなかったから、もしかしたらインドかマダガスカル方面へ後退したかもしれない。それか、案外近くのどこかに潜んでいるかもしれない。とにかく、偵察機の報告を待とう。それと、攻撃隊の収容の用意だ。」

「了解です。」

2人はまだみぬ敵艦隊も気になるが、目の前の事を片付ける事が今するべきことであった。ちなみに、この時英東洋艦隊はセイロン

島から少し離れたアツズ環礁にいたのである。

コロナが壊滅（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

英東洋艦隊出撃

実のところ桑名司令官は、昨日の南雲機動部隊の空襲の際の英艦隊の動きから、その主力がアズ環礁方面に逃げ込んでいるのではないかという予測を立てていた。そのため、その偵察任務に、独立艦隊唯一の潜水艦、「伊301」を向かわせていた。

「伊301」は艦隊に先立つ事3日、ブルネイを出港してアズ環礁へ向かったのであった。そして航空隊がコロンボ攻撃を終了した1時間後、環礁内から出撃してくる英艦隊を捉えた。

「来た！間違いない、東洋艦隊主力だ」

潜望鏡を覗きながら、艦長の大月大尉は小躍りしたい気持ちになった。敵を一番に見つけられたからだ。もっとも、今回は偵察任務の方が重要と考えて攻撃は見送った。

「戦艦5、空母1、巡洋艦3、駆逐艦6、7。針路は東、速力は15ノットぐらいだな。ようし、潜望鏡降ろせ。敵艦隊通過確認と同時にケーブルアンテナ射出！」

ケーブルアンテナは潜航中でも電信が発信できるよう開発された新兵器で、艦内の電信機と直結したケーブルの先端に、浮遊するアンテナが取り付けられていて、そのアンテナから電波を発信する仕組みだ。

電波発信後は、アンテナ部分は爆破される。現在のところ海水につかるアンテナからの送信出力に不安が残るなどの問題があるため、本格採用には至っていないかった。しかし、今回はちゃんと電波を発

信することが出来た。これを理由に、この新型アンテナは2式水中通信機という名で正式採用される事となるのだが、それは別の話だ。

「そうか、見つけたか。」

「伊301」からの報告に桑名は安堵した。敵を見つけて安堵するというのも変だが、いるかいらないかわからない状況がもっとも怖いから、この場合は妥当といえよう。

「空母が1隻だけならほとんど問題になりませんね。英東洋艦隊の戦艦はR級4隻に、「クイン・エリザベス」級の「ウォースパイト」ですから。」

近江参謀長が言う事はもっともだった。機動部隊にとっての最大の敵は敵機動部隊、とりわけ空母艦載機だ。しかし、この時点で英東洋艦隊に残る空母は「フォーミダブル」1隻のみだ。その搭載機

は36機である。150機以上搭載の独立艦隊とはお話にならない。

また、戦艦が持つ強力な砲戦力は独立艦隊の持つ砲戦能力の数倍の物ではあるが速力がいずれの戦艦も22ノット以下しか出ない艦ばかりであるから、独立艦隊には追いつきようもない。

「アズ環礁を出たばかりなら、航空機の攻撃圏内に入るまで時間があるな。・・・よし、まずはトリンコマリーをやるう。間もなく帰ってくる第1次攻撃隊と残存機から第2次攻撃隊を急ぎ編成して、同港を攻撃しよう。異論はあるかな？」

桑名は参謀たちを見回して言った。質問も反論もなかった。

「よし、では早速開始してくれ。」

独立艦隊のスタッフは再び動き始めた。この少しあと、コロンボ攻撃を成功させた攻撃隊が帰還した。損しつきは戦闘機1、艦爆2、艦攻2であった。その他に損傷機15機が出たが、廃棄する程損傷した機はなかった。やはり、先日南雲部隊が基地機能のある程度破壊していたのが利いた。

収容された機体は直ちに修理と補給に入り、搭乗員達は食事に入る。搭乗員待機室には主計化の兵士が作った海苔巻や稲荷寿司が並び、それらを搭乗員たちはお茶やサイダーで流し込む。

これが最後の食事になるかもしれないが、戦場においてゆつくり食べている余裕はない。いつどこから敵がやってくるかわからない戦場から、完全に撤退するまで、気を抜く事は出来ないのだ。

素早く食事を終わらせた搭乗員達は、再び愛機に戻って整備員と共に、補給と整備を行う。こうした将兵たちの努力によって、艦隊は動いていた。

その後、敵航空機や潜水艦による襲撃もなく、帰還から2時間半後、第2次攻撃隊はトリンコマリへ向けて出撃していった。

既に奇襲は通用しない。攻撃隊の搭乗員、そしてそれを送り出した艦隊の誰もが、第1次攻撃隊以上の激戦が起これと予想した。

しかし、この攻撃は第1次攻撃隊に比べて張り合いのない物となった。英軍はコロンボでの戦いを考慮して、日本軍機に勝てないと見るや、戦闘機や爆撃機を全て空中へ退避させるか、インド方面へと避難させていた。軍港の方も港外へと避難してしまったために船舶はほとんどなく、僅かにドック内で修理をおこなっている貨物船やタグボートの類がいるだけだった。

拍子抜けした攻撃隊の搭乗員たちであったが、とにかく目の前の敵を叩くだけであった。攻撃隊各機は目に付く目標を手当たり次第に攻撃すると帰還の途についた。ここまで来ると戦闘と言って良いのか疑問符がつくが、戦果は戦果である。

最終的に、この攻撃とコロンボの分を併せての戦果は航空機40機撃墜、地上破壊30機、軍港のドック、クレーンなどの施設70%以上を破壊し、在泊中の貨物船など10隻ほどを撃破した。

事実上この攻撃でセイロン島の2大軍港はその軍港機能を失ったのであった。独立艦隊の作戦目的はこの時点で完遂する事となった。

夕方、1機の損失もないまま帰ってきた第2次攻撃隊は全機無事、

空母「天城」と「翠鶴」に収容された。

この後「天城」の会議室では艦隊幕僚が集まって今後の方針が話された。作戦目的は完遂したのであるから、このまま撤退するのかそれともインド洋の制海権を確実な物にするため、残存英東洋艦隊を攻撃すべきか。

案の定幕僚たちの意見は真つ二つに割れた。作戦目的を完遂したのだから、このまま傷を広げないうちに撤退するべきだという意見が出る。その一方で、敵航空機の脅威がもはやないのだから、「佐保」の敵を討つためにも敵東洋艦隊を攻撃するべきだという意見が出た。

どちらもそれぞれ見るべき所があり、会議は紛糾した。しかし、既に基地からの攻撃の可能性はほとんどない。加えて敵艦隊の艦載機はタカが知れている数しか存在しない。確かに独立艦隊に新造艦の配備計画は今の所なく、艦を失うリスクを避けるべきなのも一理ある。しかし、やはり叩ける時に叩くべきという意見が大きく変わった。燃料弾薬も後方の補給船団に十分な量がまだあった。

ちなみに、この時までに独立艦隊は5隻の連合軍貨物船と接触し、内3隻は拿捕に成功したために、補給船団に組み込んでいた。

話を元に戻す。会議での結論は最終的に、翌朝から敵艦隊攻撃とその他の偵察を行なう事となった。こうして、独立機動艦隊は英東洋艦隊との決戦を目指して動き始めた。

英東洋艦隊出撃（後書き）

今回のケーブルアンテナは、荒巻先生の紺碧の艦隊のパロディです。

御意見・御感想お待ちしております。

東洋艦隊の誤算

翌日、独立艦隊は早朝から1式水偵と97艦攻による索敵を開始した。昨年の第一次ミッドウェイ海戦時は偵察機不足に苦勞させられたが、今回は新たに空母1隻と、巡洋艦2隻が加わっているため、1回の偵察に投入できる機体が4機から6機へと増えている。

偵察機各機は艦隊乗員の機体を背負って、黎明のインド洋へと出撃していった。

対する英艦隊はどうしていたかというと、実はこの時マダガスカル方面へ向けて遁走を図っていた。戦わずして敵に背を向けるなど、言語道断と言いたい所ではあるが、航空戦力に大きな隔たりがある以上、無茶な行動は出来ない。

もっとも、当初は彼らもセイロン島救援のため東に針路を取っていた。ところが、セイロン島の基地機能が予想以上に早く壊滅してしまい、陸上基地からの支援が見込めなくなった。そのため、東洋艦隊司令官のサマービル提督は上のような決断を下したのである。

しかし、艦隊速力は20ノットが精一杯であり、かつ日本の艦載偵察機のスピードが彼らの予想より大きく勝っていた。大西洋や地中海では空母を保有していない独伊海軍に対して終始優位に立っていた英海軍であったが、その空母運用戦術や艦載航空機に対する考えは、日米に比べて大きく時代遅れな物となっていた。

英東洋艦隊首脳部は、大西洋やマレー沖海戦の戦訓から航空機の脅威については一応認識していた。しかし、そのスピードや集中運用戦術を完全に理解しているとは言い難かった。

そして偵察機発進から2時間後、ついに英艦隊が発見された。

「敵艦隊見ユ、空母1、戦艦3以上見ユ。速力18ノット、針路西、艦隊よりの距離450km。」

450kmなら航空機の行動半径に入っている距離だ。

「ようし、攻撃隊を全機発進させる！！」

桑名司令官は間髪を入れず攻撃隊に発進命令を出した。既に格納庫と飛行甲板には爆雷装を済ませた攻撃機が並んでいた。搭乗員たちも、飛行機内で待機しいつでも発進できる態勢に入っていた。

発進命令が出ると、直ちに各機のエンジンが発動され、艦は合成風力を起こすために風上へと走り出す。今回発進する攻撃隊は全部で135機だ。故障機、偵察機と直掩用の12機を残しての全力出撃だ。

「発進！！」

甲板士官が旗を振ると同時に、先頭の1式艦戦が走り始める。その姿を、司令の桑名から1等兵に至るまで、手空きの乗員が手を振って、または万歳三唱をして見送る。

攻撃隊は15分掛けて発進を終えると、上空で大編隊を組んで一路西へと向かった。

その姿を、艦隊直掩の戦闘機隊は嬉しさ半分、悔しさ半分の表情で見送った。

「私たちも行きたかったな。」

そうボヤクのは、女子義勇兵の宇都宮特殊一飛曹だ。今回の攻撃隊編成に彼女らは1人も含まれていなかった。やはり女子をより厳しい戦闘に投入するには艦隊司令部は躊躇してしまったらしい。

「そう言うな。お前達はまだ初陣なんだ。それに司令官たちも始めての女性兵士の扱いに四苦八苦しているらしいな。」

小隊長の松阪少尉が無線を通してたしなめる。

「それが嫌なんです。私たちだって男と同じように戦える所を示したかったのに。」

「次があるさ、次が。今は命令されたことをするだけさ。それに、もしかしたら敵機が現れるかもしれん。警戒を怠るな！」

「了解!!」

だが結局、この後艦隊上空に敵機が現れることはなかった。

独立艦隊を発進した攻撃隊は、1時間半後に英艦隊を視認した。攻撃隊隊長の秋田少佐は、まず目標を空母「フォーミダブル」に定めた。敵の航空戦力を先に叩き潰す事にしたのだ。

一方、「フォーミダブル」からはアメリカより購入したF4F「ワイルドキャット」である「マートレット」戦闘機18機と「フルマー」6機が発進して、攻撃隊の護衛戦闘機と戦闘に入った。

この戦闘は数でも性能でも勝る日本側の圧勝で終わった。日本側が96式艦戦改1機の損失であったのに対し、英軍側は20機を失うというセイロン島上空での空戦と同じく一方的な戦闘で終わった。

戦闘機の妨害を受けることなく、攻撃隊は英東洋艦隊に襲い掛かった。この時英東洋艦隊主力である戦艦部隊は、周りに数少ない巡洋艦と駆逐艦を配して単縦陣で進んでおり、目標となった「フォーミダブル」はその最後尾に位置していた。しかも戦艦からは若干距離を離れていた。

ここでもソマーヴィル提督の誤算があった。彼は1列に並んだ戦艦の対空砲火で日本軍攻撃隊に打撃を与えようと考えていた。そのため、戦艦に比べ防御力が低い「フォーミダブル」を最後尾に下げていたのだ。これが仇となってしまった。

彼自身は目標になるのは戦艦であると信じていた。しかし日本軍の攻撃隊は予想を裏切って最初に「フォーミダブル」に集中攻撃を加えた。

この時「フォーミダブル」に護衛としてついていたのは2隻の駆逐艦のみで、しかもその2隻とも対空砲火が貧弱なタイプであった。そのため、日本機の攻撃を止めることなど出来なかった。

少し離れた戦艦部隊も対空砲や主砲の榴弾を撃って、なんとか支援しようとしたが、最終的にこれも有効な支援とはならなかった。

結局、爆弾5発、魚雷4本を喰らった。爆弾の内「明星」の250kg爆弾3発はその分厚い装甲でなんとか止められたが、1式艦爆の500kg爆弾2発のうち1発は装甲を貫いて格納庫で爆発して、「フォーミダブル」に大打撃を与えた。さらに、魚雷も片舷に集中的に3本受けことが沈没を早めてしまった。

駆逐艦の1隻が魚雷に体当たりしてなんとか「フォーミダブル」を守ろうとしたが、結局それも徒労となってしまった。

片舷への魚雷の集中攻撃によって、「フォーミダブル」は攻撃開始40分後に浸水過多で横転、沈没した。こうして、英東洋艦隊最後の航空母艦は失われ、これが地中海戦線へ与えた影響は計り知れない物となるのである。

そしてまだ爆弾、魚雷を投下していなかった機体の矛先は戦艦と巡洋艦に向けられた。この時点で残弾を有していた攻撃機は約40機であった。戦艦を沈めるには心もとなない数であったが、打撃を与えるだけなら充分であった。

「全機へ、目標変更。一番先頭を進んでいる「クイーン・エリザベス」級戦艦へ攻撃を集中しろ！沈めようとは思うな、とにかく行き足を少しでも下げるんだ。」

秋田隊長機が選んだ目標は、先頭に行く東洋艦隊旗艦の「ウォースパイト」だった。

東洋艦隊の誤算（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

伊301の快挙

空母「フォーミダブル」の次に攻撃隊の目標となった戦艦「ウォースパイト」には、右舷側に巡洋艦「デリー」が随伴していた。

巡洋艦「デリー」は旧式軽巡改造の対空巡洋艦で、複数の高角砲を主砲として搭載していた。日本でいえば、後に防空巡洋艦となった「五十鈴」が当てはまる。

その「デリー」は「ウォースパイト」に敵機を近寄らせんとばかりに、高角砲と高射機関銃を空中の攻撃隊へ向けて乱射した。たちまち2機の艦攻が血祭りに上げられてしまった。

これには隊長の秋田大尉も苦虫を潰したような表情をした。明らかに旧式の軽巡にしてやられたのであるから当然と言えば当然だ。

「全機へ、作戦変更だ。まずあの巡洋艦を攻撃して黙らせるー！」

無線を通じて伝えられた命令は、さっそく実行に移され、それまで「ウォースパイト」に向かおうとしていた各機は、「デリー」への攻撃を開始した。

さすがに防空巡洋艦と言えど、同時複数攻撃はこたえた。数機に被弾させるまでは出来たが、20機全てを葬り去るなどいくらなんでも出来る筈がなかった。しかも、攻撃隊の搭乗員は撃墜された仲間の仇を討たんと燃えていたのだからなおさらだ。

対空砲火を潜り抜けた艦爆、艦攻が次々と魚雷と爆弾を放つ。

「デリー」は必死にかわそうと舵を切ったが、偶然にもこの時雷爆同時攻撃になってしまったことが、「デリー」にとつての不幸となつてしまった。魚雷はなんとか全てかわせたが、最終的に爆弾5発を受けた。その内2発が500kg爆弾であつた。

旧式巡洋艦にとつて、この打撃は痛かつた。あつというまに主砲の半分が使用不能となり、さらに速度も半減してしまった。そして主砲塔弾薬庫がまもなく誘爆し、たちまち同艦は炎に包まれた。

退艦命令が出されたのがそれから10分後、沈没したのはそれから40分後であつた。

だが「デリー」の犠牲は決して無駄ではなかつた。この攻撃のために、残弾を有していた40機中30機が爆弾と魚雷を撃ち尽くしてしまつたのである。そのため、「ウォースパイト」に攻撃できる機体はたつたの10機となつてしまった。

厚い防御装甲で覆われた戦艦に対して、たつた10機では撃沈はおろか、打撃を与えられるかさえ疑わしい。それでも搭乗員たちは果敢に攻撃を行った。

だが、相手は腐つても歴戦の戦艦である。投下した爆弾は全て回避されてしまつた。魚雷も命中はたつたの1本だけ。これでは撃沈などとても無理だ。せいぜい小破である。

最終的にその光景を見届けた秋田は、艦隊へ向けて戦果報告電を打つた。

「敵東洋艦隊に与えたる打撃、空母「イラストリアス」級1、軽巡洋艦1、駆逐艦1撃沈確実。戦艦「ウォースパイト」に魚雷命中1。

敵戦闘機約20機撃墜。」

こうして攻撃開始後40分で、攻撃隊は引き上げた。彼らは「フォーミダブル」を沈めた高揚感と、「ウォースパイト」に致命傷を与えられなかった悔しさを胸に同居させながら帰還した。

しかし、この時彼らは知らなかったが、「ウォースパイト」には深刻な事態が発生していた。それも、先ほどのたった1本の魚雷が起因となった物だった。

実はこの魚雷、命中箇所が艦尾近くであったのだ。そして4軸のスクリュー軸の内、魚雷の命中した側の2軸が衝撃で湾曲してしまい、使用不能になった。加えて、スクリューを止めるまでの間に曲がった軸が隔壁や機関室を傷つけてしまった。

艦尾への魚雷の命中は、即命取りとなる。これまでの戦訓が如実に示していた。ライン演習作戦で沈没した独逸戦艦「ビスマルク」、そしてマレー沖海戦で沈んだ「プリンス・オブ・ウェールズ」も、それぞれ艦尾に命中した魚雷によって、その後沈められる事となった。

それを覚えていたサマービル提督は迷った。「ウォースパイト」の受けた被害は右舷側機関室の完全使用不能、さらに破壊された隔壁とスクリュー軸の間からの浸水であった。このため、出せる速度は14ノットまで落ちてしまった。これではR級戦艦の21ノットよりも遅い。日本艦隊から逃げ切る事はほぼ絶望的であった。

ここで艦を自沈処分する事も考慮しなければならなかった。だが、空母「フォーミダブル」を失った上、さらに戦艦1隻を失う事は許されざることだ。

そこで、結局彼は旗艦を戦艦「リベンジ」に移し、「ウォースパイト」に駆逐艦と軽巡を1隻ずつつけて、別コースでマダガスカル島へ向かうよう命令した。

しかし、これが「ウォースパイト」にとってはマイナスに働いた。実はこの光景を見ている者が海底にいたのだ。それは英東洋艦隊の追跡を行っていた「伊301」潜であった。

艦長の大月大尉は、その様子を確認すると、ただちにケーブルアンテナを使って、空母「天城」に報告電を打った。

「敵東洋艦隊分離す。我、損傷落伍た戦艦「ウォースパイト」を中心とする小部隊を追跡中。」

その後位置に関してや、艦隊の陣容、針路を報告をしたが、その地点は空襲を行なった場所から西へ50km程しか移動していなかった。

そこで桑名司令官は、第二次攻撃を考えた。しかし、第一次攻撃隊の機体の損耗が思ったより激しかった事。さらに搭乗員の疲労も蓄積も大きくなりつつあった事から、この攻撃は中止された。

そこで、彼は4隻のR級戦艦が艦隊から分離したことから、艦隊決戦を挑む事にした。

こちらに戦艦はないが、主砲だけなら「長門」と同等の打撃艦「背振」級が2隻おり、さらに巡洋艦や駆逐艦の数では圧倒していた。負けるはずがなかった。

桑名は空母2隻を艦隊の後方に下げると、打撃艦を先頭にして艦隊を進撃させた。向こうのスピードはジグザグ運動を行ないながらの14ノット、対しこちらは対潜哨戒を航空機に任せておけるので直線コースでの22ノットが可能だった。これならなんとか追いつけるはずだった。

そして、独立艦隊と英東洋艦隊の第2ラウンドが始まった。それは「伊301」の魚雷攻撃によって幕を開けた。

同艦が狙ったのは、「ウォースパイト」の護衛を行なっていた軽巡洋艦「エンタープライズ」であった。大月大尉はまだ視界が聞く夕方、同艦に向けて4本の魚雷を発射した。

相手はジグザグ航行を行なっていたが、速度は14ノットと低速であった。そして使用魚雷が酸素魚雷であったために、回避運動が遅れた。

「エンタープライズ」に命中した魚雷は2本であったが、旧式軽巡にはそれで充分だった。同艦はあつと言う間に傾斜して沈没してしまった。

魚雷を発射した「伊301」は駆逐艦の反撃を恐れて全速で逃げたが、当の駆逐艦は「エンタープライズ」の救助のために、「伊301」を追跡できなかった。

こうして「伊301」は、敵巡洋艦撃沈と言う今海戦2回目の大手柄を上げたのであった。

伊301の快挙（後書き）

御意見・御感想・要望などお待ちしております。

夜戦

海戦二日目、4月21日夜半。日付が間もなく変わろうとしている頃、先頭を進む打撃艦「背振」の対艦用電探が、2隻の艦影を捉えた。時刻、位置、艦数から見て英東洋艦隊の戦艦「ウォースパイト」と、護衛の駆逐艦としか考えられなかった。

「総員、戦闘配置！！」

艦内にブザーが鳴り響き、待機していた乗員たちがそれぞれの持ち場へ向けて走り出す。と、同時に照明弾を投下する役目を仰せつけられた水上機が、一斉に射出された。

2基4門の40cm主砲には対艦戦闘用の徹甲弾が装填され、いつでも発射できる準備が整えられる。2隻併せて4基8門、「長門」級戦艦とほぼ同等の戦力だ。もともと、この艦でまともな砲撃戦を行なおうとは考えていけない。

「背振」級は主砲こそ「長門」級に準じた40cm砲45口径砲であるが、船体自体は商船の設計を流用した貧弱な物しか持ち合わせていない。一応機関と共に強化されているが、それでも巡洋艦を圧倒できる程度の物で、戦艦と戦うには力不足だ。

今回の相手は、護衛艦1隻のみで損傷しているとはいえその戦艦だった。「背振」乗員の誰もが、先日のミッドウェイ海戦のように敵が白旗を掲げてくれればと考えていた。

「距離2万5千。まもなく、照明弾投下予定時刻！」

「背振」艦橋では、艦長の大内賢治大佐がじつと真つ暗な水平線を見つめていた。伝令からの報告にも全く動じる様子がない。

すると、真つ暗であつた海上に、突然パツパとまばゆい光が現れた。水偵が投下した照明弾のマグネシウムが燃えることで発生する灯りである。そしてその光の下に、ほんの小さくではあるが、艦影らしき物が浮かび上がった。

「敵艦発見！左舷17度、距離2万4千！間違いありません。電探の情報と一致しています！」

報告を受けて、大内は命令を下した。

「主砲砲撃戦はじめ！砲撃戦開始と動じに無線封止解除、英軍の通信周波数で打電。貴艦に勝ち目なし、降伏せよだ。」

「了解！！」

すかさず、前部甲板に集中配備されている2基の40cm砲が咆えた。闇夜に砲撃発射特有のマズル・フラッシュが生み出され、さまざまの轟音が艦橋全面の防弾ガラスを震わせる。

音速近くで飛ぶ砲弾といえど、20km近い現在の距離では、着弾までしばらく時間が掛かる。

1分ほどして、ようやく着弾が確認された。

「弾着確認！いずれも遠弾！」

遠弾の場合は、こちらから見て砲弾が敵艦を飛び越えてしまった

ことを意味する。逆に手前に落ちた場合は近弾となる。

「弾着修正急げ！」

今の弾着のデータが主砲射撃指揮所で、計算機に打ち込まれ、次の発射時の最適な主砲の旋回角と仰角が弾きだされる。

「敵艦からの応答は？」

大内艦長が側にいる副長に聞く。

「今打ったばかりなので、返電はまだありません。」

そうした会話を行なっている間に、「背振」と「多良」は第2斉射を行なった。この時も先ほどと同じく、命中弾は得られなかった。もともと、砲撃戦で初弾から命中する事などよっぽこだ。命中弾を得ようと思ったら、数回斉射を行なう必要がある。

ただし、今回は水上機による照明弾投下と弾着観測、さらに直接指揮することは出来ないが、電探による支援もある。そのため、これまでには比べれば、かなり高い精度の砲撃戦を行なっていた。

一方、撃たれている側の「ウォースパイト」も反撃に移ろうとしていた。しかし、圧倒的に彼らが不利であった。この時「ウォースパイト」は機関室の半分が水に浸かっているため、発電機の使用も制限されていた。だから主砲などに供給される電力が通常より低く、装填や主砲の旋回スピードも遅くなっていた。

さらに、「ウォースパイト」も護衛の駆逐艦も搭載していたレーダーが、昼間の海戦時に戦闘機の機銃掃射を受けて使用不能に追い

込まれていた。

彼らは日本艦隊に比べて、かなり粗い精度の砲撃しか出来なかった。そのため、初弾を発砲したものの、遙か彼方に着弾してしまった。

そして先に命中弾を出したのは日本艦隊であった。「ウォースパイト」の3番砲塔に、「多良」から発射された40cm砲弾が直撃したのである。結果、その砲塔は使用不能となった。幸いだったのは、砲弾が上げられる前であつたので、誘爆が起こらなかったことだ。

さらに、戦闘開始20分後には、駆逐艦や巡洋艦も戦闘に加わつた。既にこの時日本艦隊は最高戦速で英艦隊に接近していたのである。

英艦隊は出しえる速力14ノットであるため、逃げ切れる筈がない。たった1隻の護衛艦である駆逐艦は「ウォースパイト」を守ろうと、反転し突撃したが、多勢に無勢、巡洋艦と駆逐艦が発射した無数の中小口径砲弾を喰らい蜂の巣にされて撃沈された。

「艦長、もう無理です！降伏しましょう！」

「ウォースパイト」の艦橋では、副長が艦長にそう進言していた。

「バカを言うな！今降伏したら敵にこの艦を渡す事になるんだぞ！そんなことできるか！」

「しかし、もはや我が部隊は本艦のみです。とても勝ち目はありません。これ以上の戦いはこちらの犠牲を増やすだけです。だったら、

白旗を揚げた方が良いのでは！？無益な戦いで部下を殺したくはありません！」

「むうう・・・」

艦長としてはその事はもちろん承知の事である。しかし、ただでさえ日本軍に空母「インドミダブル」を拿捕されているのである。これ以上大英帝国の軍艦を敵に与えることなど論外である。

しかし、敵は強大で戦った所でこちらの犠牲者が一方的に増えるだけだろう。

艦長の心境が板ばさみ状態となっていたその時、突然艦を大きな振動が揺さぶった。

「左舷前部に魚雷1本命中です！浸水により、速力さらに下がります。」

「傾斜が始まっています！現在左舷側に1度です！」

時間が進むごとに、状況が悪化していく。敵の駆逐艦や巡洋艦は相当に距離を詰めている。いずれ集中魚雷攻撃が来る。そうなったら「ウォースパイト」が撃沈されるのは、もはや時間の問題だった。

「日本艦隊から再び無線と発光信号で連絡です。これ以上の戦闘は無意味である。抵抗を止めて降伏せよ！です。」

「艦長！！」

副長が悲鳴に近い声を上げた。

「左舷傾斜3度に達します。速力10ノットまで低下！ああ！左舷に駆逐艦が近寄ってきています。」

見張り兵の声も、死を覚悟したのか悲壮さを帯びていた。それを聞いて、艦長は決断せざるを得なかった。

「やむえん、白旗を揚げてくれ！！機関も停止しろ！それと発光信号で降伏すると打電しろ！」

「イエス・サー！！」

間もなくマストにスルスルと白旗が揚がり、機関が止められたために艦が止まった。約1時間に渡って行なわれた夜戦は、この瞬間終わりを告げた。それはまた、戦艦「ウォースパイト」が英国海軍軍艦としての生涯を閉じた瞬間でもあった。

20分後、近寄ってきた巡洋艦「普賢」から拿捕要員が移乗し、正式に「ウォースパイト」の拿捕が通告された。

これが第二次インド洋海戦と呼ばれるようになる海戦の、実質的な締めくくりであった。

夜戦（後書き）

御意見・御感想・要望などお待ちしております。

しばしの休暇

昭和17年5月。補修と乗員の休養も兼ねて、独立機動艦隊は母港である伊豆に帰港した。乗員達はしばらくの間温泉地などでの休養を与えられる事となり、意気揚揚と艦を降りていった。

艦隊の中には、先日の第二次インド洋海戦で損傷を負っている艦もあり、そうした艦は横浜か鹿島にある海南造船所へと入り、そこで修理を受けることとなっている。

この海南造船所は退役軍人が営んでいる会社で、その分軍とのパイプが太い、とりわけ、独立艦隊にとっては鹵獲艦の改装や、「梅」級駆逐艦、「背振」級打撃艦の建造を行なった場所であり、言わば行きつけの店みたいな物だった。

今回の海戦で拿捕された英戦艦「ウォースパイト」もこの海南造船所に入ることとなった。ただし、「ウォースパイト」は艦齡が既に30年以上の老朽艦で、速力も20ノットちよつとしか出せない戦艦だった。この低性能では、とても機動部隊の戦艦としては使えない。もちろん、艦首の延長や、機関の換装などの改装工事を行なえばいくらか速力は上げられるが、そのためには工期を最低半年と見積もらねばならない。

さらに、主砲も日本海軍では使用していない15インチ、つまり38cm砲だった。だから補給がきかない。結局こうした理由から、改装しての使用は中止され、新型艦への材料提供として解体されることとなった。

これを聞いて、桑名司令官は心底悔しがった。戦艦の戦力化は砲

戦力が低い独立艦隊にとって相当大きなメリットが見込まれたからだ。

しかし海南造船所からの提案で、「ウォースパイト」に積み重ねた3基の38cm連装砲は再利用される事となった。

海南造船所の出したプラントは、以前建造した高速打撃艦「背振」の設計を流用した打撃艦の建造だった。これは3基ある38cm砲の内、予備を除く2基を「背振」と同じく、商船型の船体に載せて作る案だった。

当初この案に、海軍当局は慎重な姿勢を見せた。新たな建造予算や建造期間をかけてまでそんな艦を造る必要があるのかわからなかったからだ。

そこで海南造船所は、電気溶接とブロック工法を用いれば戦艦の4分の1の予算で、半年もあれば造れると保障した。これは商船規格の船体を流用すればこそ可能な事だった。

また、今回インド洋洋上で独立機動艦隊が拿捕してきた商船やタンカーを民間会社に売却することによって、予算確保が可能となったので、この案は認可される事となった。こうして、新造打撃艦の建造が「ウォースパイト」の解体と平行して行なわれる事となった。

そんな中で、艦隊司令官桑名中将は帰港後2日目、横浜港へと赴いていた。今回の作戦で拿捕した商船の積荷を確認するためだった。

今回拿捕した船舶は最終的に9隻で、内2隻が重油を満載したタンカーで、残る7隻が大小の貨物船だった。その内の比較的大型であった3隻に、大変興味深い物が積載されていた。

「よつと！」

「それ、開くぞ！」

「慎重に開ける！中身を傷つけるな！」

「はい！！」

横浜港にある、埠頭の側に建てられた倉庫街。その中の1つに、男たちの威勢の良い声が響き渡る。

今桑名司令官の目の前で、1つの大型の木箱が港湾労働者の手によつて開けられようとしていた。

ベキベキという木製の蓋が外れる音がそこかしこで響き渡る。

「よし、開いた！」

箱が空くと動じに、桑名は中を確認する。するとそこには、真新しい液冷の航空機用エンジンが、しっかり包装されて納められていた。

「これは米国の「アリソン」エンジンですね。間違いありません。」

今回空技廠から調査のために派遣されてきた技術将校が、桑名の隣から箱の中を覗き込み言った。

「では、やっぱり中国のフライング・タイガース用の補充品か？」

桑名が顔を向けて確認を取る。

「多分そうです。別の箱には明らかに飛行機の翼と思われる物がありましたから。恐らく援蒋ルートで運ばれていた物でしょう。ここにあるだけで、恐らく40機分はあります。これだけあれば、戦闘機隊が作れますよ。」

「40機か・・・もし中国に運び込まれていたらそれなりに由々しいことになっていたな。」

「そうですね。しかもこれはエンジンと武装を強化した最新型のEタイプです。以前のC型などの機体に比べて、それなりに性能が上がっているとされていますから・・・いや、それにしてもその最新鋭機が都合30機、しかもスペアパーツ付きで手に入ったのは僥倖でしたね。」

「そうだな。」

今回拿捕した商船の積荷であったのは、なんと分解梱包された中国援助用のP40戦闘機であった。しかも、その貨物船には機銃弾や各種予備部品も積まれていた。だから、技術将校の言う、戦闘機隊が作れるという言葉も誇張ではない。

さらに、手に入ったのはこれだけではない。桑名達はP40を見終わると、今度は隣の倉庫へと移動し、別の船に積まれていた物を確認した。

こちらでも、同様に木箱が開けられていた。ただし、P40の時と違ってこちらは箱の大きさがやや大きく、その数も少なかった。

桑名が倉庫に入ると、別の技術将校が近寄ってきた。

「こっちの箱の中身の確認は出来たかね？」

「ええ。間違いありません、こちらの船に積まれていたのはB25爆撃機でした。」

「むづ。」

B25爆撃機は日本本土初空襲を行なった機体として有名であるが、米国では大量に生産されたメジャーな中型爆撃機であった。そしてこの機体も輸出用として、中国向けの援助物資となったらしい。

「飛べるのかね？」

「はい。エンジン、機体、武装、いずれもしつかり18機分が揃っていました。組み立てや整備用の取り扱い説明書もついていましたから、命令さえ貰えればすぐにでも組み立てられます。」

「それは結構だ。」

そう言いつつ、桑名は目の前の箱に入っている空冷のR2600エンジンを眺めながらあることを考えていた。

（戦闘機40機に爆撃機18機か・・・補充部品が続かないから1、2回の作戦実施が限界だろうが、それでも我が艦隊が固有の陸上基地航空隊を持つメリットが計り知れんぞ。）

なんとこれら拿捕航空機での部隊編成を画策していた。もっとも、こうした拿捕航空機を自軍の戦列を組み入れる事は、多いとまでは

言わないが、決して少ない事ではない。

もちろん、実際に使おうと思ったらパイロットや整備兵、燃料、そして使用基地の問題などが山積みとなるが、それをさっぴいても使う価値はあった。

「それに、これだけではないからな。」

桑名は口に出してそう言った。

しばしの休暇（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

特試航空隊

インド洋から帰還して3週間後、桑名司令官の姿は南伊豆の飛行場にあった。

ついこの間まで牧草地同然の小さな飛行場であったこの飛行場も、今は簡単ながら滑走路が整備され、格納庫や搭乗員待機所、さらに指揮所なども建設されていた。

飛行場がこうして整備された理由は、もちろん独立機動艦隊の艦載機の離着陸場としての機能拡充もあったが、より大きな目的として新たに編成された特試航空隊の基地として使うためであった。

特試航空隊とは、先日桑名が横浜港で確認していた拿捕機材で正式に編成された陸海軍合同航空隊で、正式名を特別試験航空隊という。名目だけだと新型機の試験などを行なう部隊に思えるが、れっきとした実戦用部隊である。

この日その特試航空隊が正式に南伊豆基地に配備され、独立艦隊の指揮下に入る予定であった。桑名は各地で組み立てと整備、簡単な乗員の慣熟飛行を終えてやってくる彼らを出迎えるためにやって来ていた。

朝から受け入れる側の基地要員達は忙しく動き回っていたが、部外者の桑名は空がよく見える位置で、じっと待っていた。そして正午前、東の空から爆音が近づいてきた。

「予定通りの到着だな。」

桑名が腕時計を見て言う。

「ですね。」

桑名の隣で言うのは、特試飛行隊の司令官に就任した岩倉義弘中佐だった。彼は今年43歳。陸攻のパイロット出身である。中国戦線で目を負傷し、実戦を離れて後方の練習飛行隊で働いていたが、今回この部隊の司令官として引つ張られてきた。

グオーン！！

盛大に爆音を立てて、彼らの目の前にある滑走路へ、次々と到着した機体が着陸していく。日本機特有の濃緑色に塗られ、胴体と主翼には白淵付きの日の丸が描かれている。しかし、そのシルエットは明らかに欧米の機体特有の物だった。

この日到着したのは計60機の航空機である。その内訳はP40戦闘機36機、B25爆撃機14機、そしてA20「ハボック」爆撃機10機であった。

この内、P40とB25は先日桑名が横浜港で確認した機体であるが、A20はというと、こちらもやはり中国援助物資であったのを先日の第二次インド洋海戦で貨物船ごと拿捕した物だ。

各機種は鹵獲した総合計より少ないが、これは部品ストック用として解体された機体があるからだ。

60機という数は、前回桑名が考えたように必ずしも多い数ではない。戦場で使うことを考えれば、撃墜されたり被弾するなどして数回の出撃で消耗してしまう可能性もある。

しかし、1、2回の作戦を行なうだけなら充分である。それに、特試爆撃隊は海軍や陸軍の航空隊のように常に戦場へ出るわけではないからこれで充分だった。

ちなみに、これらの機体は多少なりと手が加えられている。例えばP40戦闘機の場合は、主翼の機銃が12.7mm6基から、20mm2基、12.7mm2基へと交換されている。これは12.7mm機銃の弾薬と銃自体の消耗を抑えるための処置だった。

また、本来P40戦闘機は航続距離の短い機体であった。そのため、特設の増槽取り付け機構が付与されていた。これで航続距離は往復2000km程度まで延びている。

B25爆撃機の場合も、銃座の機銃の一部を日本製と交換し、また爆弾倉の金具を日本軍規格の爆弾が吊るせるよう交換している。A20も同様だった。

こうした改修は、海軍の横須賀航空基地と陸軍の立川基地で行なわれた。何故陸軍も参加したかというと、これは陸海軍の融和政策の一環であった。

創設以来、帝国陸海軍はその中が悪い事で知られてきた。しかし、それが大きな損失これまでに幾度も生み出してきた。特に、数年前のベンツ社からの航空機用エンジンの使用許可を陸海軍別々に買い取り、その結果独逸に必要な分の2倍の金を支払う事となった。

また中国内戦では、お互いの意思疎通が出来ずバラバラに戦っており、非効率なことこの上なかった。そこで、陸海軍では航空機などの統一化を目指し始めた。その手始めが、両軍兵士が1つの航空

隊で戦う事であった。

しかし、やはりプライドという物の存在は大きかった。作ったほうが良いのは理性でわかってても、感情がお互い許さなかったのだ。機材はどちらの物を使うか、人材はどうするか、指揮権はどちらが持つかなど、問題が噴出した。その機会を捉えたのが桑名であった。

「我が艦隊が捕獲した機材を使つてはどうでしょうか？これなら外国製なので、陸海軍どちらかの物ではありません。人材に付いては、折半すればよいでしょう。指揮権に付いては大本営陸海軍の双方が平等にもつてはいかがでしょうか？」

結局、その後紆余曲折あったものの、隊の編成は短期間で行なわれ、特試爆撃隊は大本営の直接管理下にある部隊という位置付けとなった。だから大本営陸海軍部双方の意見が一致しないと出撃できない事となった。

ただし、桑名は部隊を使いやすいようある項目を部隊規定の中に加えさせた。それは特試爆撃隊の側から作戦を上申しても大本営陸海軍部が許可を出せば動けることも出来ることだった。

桑名はこの制度を有効に使う気であった。実際大本営は、この部隊が敵機を中心に編成されていることと、あくまで実験用の小規模部隊であった事から、積極的に使おうとはせず、部隊からの上申に許可を出すか出さないか決めるだけであった。

そしてこの部隊のパイロットや整備兵は、独立艦隊同様癖の強い人材で占められた。過去に前科のある素行不良者や、それ以外にも何らかの問題を抱えている者。例えば同和地区や朝鮮や台湾と言った植民地からの志願兵である。これらに加えて、女子義勇兵もいた。

まさに厄介払いされた人材の、ゴミ溜めとでも言わんばかりの状況であった。しかし、桑名からしてみれば、問題があるうとなかろうと、飛行機を飛ばせて敵を攻撃でき、ちゃんと帰ってこられればそれで良かった。

「全機着陸しました。明日から訓練に入る予定です。」

「実戦に出せるまでにどれくらい掛かる？」

「1ヶ月あればなんとか出来ると思います。」

「そうか、頼むぞ。一日でも早く彼らを育ててくれ。」

そういう桑名の願いは切実な物だった。先日、珊瑚海で行なわれた海戦で、海軍は初の黒星を決していた。戦術的には勝利であったが、戦略的に敗北を決したのである。

開戦以来の破竹の進撃にも、陰りが見え始めていた。米国が反攻を開始する前に一刻でも早く、戦力を拡充する必要があった。

「頼むぞ。」

桑名は整列する搭乗員を見て、そう呟いた。

特試航空隊（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

第二次ミッドウェイ海戦

昭和17年5月時点で、日本は予定していた南方資源地帯の確保に成功。さらにインド洋の英東洋艦隊に壊滅的打撃を与え、マダガスカルまで後退させていた。ウエーク島攻略作戦や、小規模な海戦でこそ敗北したが、それ以外は連戦連勝。連日大本営は景気の良いニュースを流していた。2月にシンガポールが陥落した時は、記念として民間に対して臨時の砂糖や石油などのこの時期手に入らない物資の特別配給が行なわれた。

国民や、また戦局全体を理解できる立場にない軍人達は、戦争は早期に終わると思い始めていた。しかし、それはあまりにも楽観的な予測だった。

この時点で、アメリカ太平洋艦隊は主力戦艦群と空母「レキシントン」、「ヨークタウン」、「ワスプ」を失っていた。空母の後者2隻は先日行なわれた珊瑚海海戦で失われた艦である。一方、日本側は戦艦の損失はなく、空母にしても軽空母「祥鳳」を失ったのみだった。

これだけ見れば、日本側が大いに有利に見えるが、国力の差を考えれば5分5分だった。この時点で米軍は戦艦8隻、正規空母33隻を建造中であり、その内の何隻かは竣工を前倒しして今年の末にはお目見えする予定だった。

対する日本は正規空母は拿捕した英空母の「インドミダブル」と「剛龍」の改装と装甲空母「大鳳」の建造が進められているのみで、あとは軽空母ばかりだった。戦艦にしても竣工直前の「武蔵」と、資材の目処がついた「信濃」、「飛驒」の3隻のみであった。

もし長期戦と成れば、日本に勝ち目はいい所1分^ぶしかなかった。
だからこそ、山本連合艦隊司令長官は早期終戦を提唱していた。

しかし、勝ちに勝ち続けてきた日本軍内部で停戦を口にするこ
は弱腰として御法度であつた。最低でも、アメリカから講和を言
い出させなければとてもそれは望めなかつた。

そこで山本長官は、早期終戦を目指すためにも年内を目処に米機
動艦隊の壊滅とハワイ方面への再攻撃の必要性を考えていた。彼が
立案したミッドウェイにおける敵機動部隊の撃滅作戦もその1つだ
つた。

しかし、大本営海軍部や海軍省、陸軍それぞれが全く違う戦略を
描いていたために、この計画は承認されにくい物だつた。

大本営海軍部や海軍省は、ソロモン・サモア方面での侵攻による
米豪遮断作戦を提唱していた。一方、陸軍はニューギニアを確保す
る事での米豪遮断作戦を行ないつつ、太平洋戦線を切り上げ、イン
ド・ビルマ方面での攻勢を強めたい考えだつた。

これら作戦はいずれも長期戦を念頭に入れていたもので、山本の
考えと相反する物だつた。しかしながら、前線部隊の長である山本
の指揮権には自ずと制限があつた。

そして軍令部の要請で行なわれたポート・モレスビー攻略作戦は
敵機動部隊を壊滅させたが、日本艦隊も航空部隊に大打撃を被つた
ために後退し失敗した。

これは連合艦隊にとっての初黒星であつた。

そんな中、米軍による本土への空襲が行なわれ、敵機動部隊の壊滅と北太平洋方面における制海権を確固たる物にする必要が出てきた。

ミッドウェイ攻略はこの意図を持つ作戦であり、強行される事となった。ただし、山本の思い描いていた（実際は黒島作戦参謀の立案）通りにはならなかった。

まず燃料のストックの関係から、当初予定していた連合艦隊全艦での作戦実施が不可能となってしまった。そのため、開戦以来百戦錬磨を誇る南雲機動部隊以外に参加するのは、主力戦艦部隊の半分となってしまった。

さらに第二機動艦隊によるアリウシャン列島への陽動攻撃計画も、効果が薄いという理由から却下された。そのため、第二機動艦隊は改編が行なわれ、主力艦隊と共に行動した。

そして行なわれたミッドウェイ海戦は、日本海軍に高くついた作戦となった。米海軍は暗号を解読し待ち伏せを行っていた。日本本土空襲より帰還した「ホーネット」、「エンタープライズ」、そして潜水艦の雷撃を受けドック入りしていたのを突貫で直した「サラトガ」であった。

島と機動部隊の2つを相手にしなければならなかった日本側は動きに大きな制限を受けて、その隙を米軍側に付け込まれてしまった。

結果、空母「赤城」、「加賀」沈没、「蒼龍」大破という開戦以来始めての大打撃を被った。特に「赤城」は艦橋に被弾したため南雲中将が戦死している。もし主力部隊と行動を共にしていた第二機

動部隊の軽空母2隻の艦載機が支援に駆けつけていなかったら、残る2隻も危なかった。

対し米軍は航空攻撃と潜水艦による攻撃で空母「サラトガ」、
「ホーネット」を失い、「エンタープライズ」も3ヶ月のドック入りとなった。これによって太平洋方面の稼動空母が一時的にゼロになるといふ、米軍にとっては有り得ない状況となった。幸運だったのは、日本軍も相応の打撃を被り、しばらく行動不能になったことであつた。

ミッドウェイ島攻略こそ成功させた日本軍であつたが、空母2隻の損失と1隻の長期戦線離脱は、しばらくの間攻勢に出ることが出来ない事を意味していた。ここに、山本長官の描く早期講和は潰えてしまった。

連合艦隊の戦略が破綻したために、逆に脚光を浴びたのが大本営海軍部と陸軍の戦略であつた。早期終戦が不可能である以上、長期戦に向けての足場を組む必要があつた。

そこで大本営海軍部こと軍令部は直属の独立艦隊ヘトラック島への進出を命じると共に、ソロモン、サモア方面での攻勢計画であるFS作戦の準備に取り掛かつた。

軍令部の発案した作戦では、7月下旬をもってエスピリットサン
ト島への攻撃を連合艦隊より抽出した第二機動艦隊とともに実施し、
同島を早期占領。そのまま一気にサモアへ向けての進撃を行なう予定であつた。加えて、同時に停滞していた海路よりのポート・モレスビーへの攻略作戦を行なう予定であつた。

日本にとって、オーストラリア、ニュージーランドとの停戦だけ

でも大いなる価値があつた。

ところが、これに異を唱えたのが独立艦隊司令官の桑名であつた。

「現状ではエスピリットサント方面の敵情が不明である。そこで潜水艦ならびに長距離偵察機による偵察を入念に実施したい。」

結局、軍令部はこの意見に折れ、偵察期間とするして2週間作戦を延期した。ところが、これが日本側にとって僥倖となつた。

その報告は作戦実施予定の数日前、ソロモン東方を哨戒中の伊号潜よりもたらされた。8月5日早朝の事だつた。

「敵空母、輸送艦、巡洋艦を多数含む有力なる艦隊。ソロモン海を西進中。」

第二次ミッドウェイ海戦（後書き）

御意見・御感想・批判などなんでも良いのでお待ちしています。
読者の皆様の意見は作者が一番気になることなので。

ガダルカナル島

米大船団発見の報告に、大本営、ならびに連合艦隊司令部は上へ下への大騒ぎとなった。まさかそんな所に米艦隊が現れるとは予想していなかったのである。

その後の報告で、艦隊には戦艦、空母も随伴していることが判明したために、この艦隊がソロモン諸島のどこかに敵前上陸を敢行するのは確実だった。問題はその場所だったが、すぐに予測はついた。ガダルカナル島である。

ガダルカナル島は、5月に占領したばかりのツラギの目の前にある島で、飛行場に適する平地があったことから、日本軍は飛行場の建設を行っていた。既にその工事は終わり、後は航空隊の到着を待つだけの状態で、8月21日を目処に零戦2個中隊が派遣される予定となっていた。

それまで同島にいるのはわずかな警備隊と非武装の設営隊のみ。つまり占領するには打ってつけの状態であった。

この状況が判明したのは8月6日になってからだった。そして、大本営と連合艦隊は再び大騒ぎとなった。もし今ガダルカナル島が占領されれば、豪州封鎖作戦の要であるサモア方面の侵攻が大幅に遅れる、もしくは挫折する事となる。さらに飛行場を占領されて航空隊を展開される事は、ソロモン海の制海権と制空権を日本側が失う可能性もあった。

ただちにこの米艦隊の再発見と、艦隊ならびに航空隊による攻撃が下令された。しかし、この時点で米艦隊が現れてもそれを迎撃出

来る部隊は限られていた。一番近い艦隊はラバウルに停泊中の第8艦隊であったが、その実体は合同訓練も行なった事のない巡洋艦と駆逐艦の寄せ集め艦隊であった。

また航空隊も、ラバウル基地の零戦と陸攻がその主力となったが、零戦はポートモレスビーに攻撃に備えてラエなどの前進基地にその多くが進出しており、ラバウルに残る零戦も3分の1が航続力の低い32型だった。

一番良いのは直ちにガ島飛行場へと航空隊を前進させることであったが、飛行場にはまだ燃料弾薬が届いていなかったために、航空機の運用は不可能だった。

それでも、ラバウルの南東方面艦隊司令部は輸送機と飛行艇からの落下傘での荷物輸送を命令し、最低限の航空機の派遣を命令した。これにより、零戦32型9機と99艦爆6機、そしてそれら航空機の出撃2回分の燃料弾薬が緊急輸送された。

翌8月6日夕方、ツラギ基地所属の水偵がついに米輸送船団を捕捉した。その針路は間違いなくガダルカナル島であった。

この報に、ラバウルを始めとする各基地では緊急出撃できる態勢が整えられた。また、第8艦隊にも出撃命令が下された。そして、トラックにいた独立機動艦隊も、ラバウルへ前進するよう大本営命令が出されて慌しく出港していった。

運命の8月7日。太平洋戦争始まって以来の米軍の大規模上陸作戦が始まった。目標は勿論ガダルカナル島である。23隻の輸送船で運ばれてきた海兵隊の精鋭1万2千名が、機動部隊艦載機と艦砲射撃の掩護の下で上陸を始めた。

もちろん、日本側もただちに反撃を開始した。臨戦態勢にあったラバウル、ツラギ、ガダルカナルの各基地から航空隊が出撃した。そして最初に戦闘の矢面に立ったのは、ツラギの水上戦闘機隊と、ガダルカナルの零戦隊であった。

この時両基地を飛び立ったあわせて約20機の戦闘機は、6倍に達する米戦闘機と交戦した。しかしベランゾりいではあったが、3分の2が性能で劣る水上機で、しかも6倍の相手では多勢に無勢で、米軍機22機を撃墜したが、日本側も零戦2機、水戦11機を失ってしまった。

幸いといえたのは、ツラギとガダルカナルにいたその他の航空機はなんとか空中退避して無事だった事だろう。この内99艦爆は爆装した状態であったので輸送船団に攻撃を仕掛け、1隻を撃破したが戦果はそれだけで、敵の上陸を挫かせるには程遠かった。

結局この最初に行なわれた米軍の空襲と艦砲射撃でツラギとガダルカナルの基地機能はほぼ失われた。

その数時間後、今度はラバウルからやってきた零戦と陸攻が攻撃を開始した。しかしこちらは数こそ充分だったが、長距離飛行のため行動が制限され、敵機に対してこそ43機撃墜という戦果を上げたが、艦艇に対しては駆逐艦「ラルフ・タルボット」と輸送船3隻を撃沈し、巡洋艦「オーストラリア」に打撃を与えたのみで、徹底さを欠いた。せめてもの慰めは、輸送船に積まれていた弾薬と食料を燃やしたことだろう。

しかし、ガダルカナル上空での空戦と併せて65機の機体損失は米機動艦隊司令官フレッチャー中将に恐怖心を抱かせ、米機動部隊

は一端戦線から離脱した。

そしてその隙を突くように、三川中将率いる第8艦隊が夜襲を行った。1回目の泊地突入で同艦隊は輸送船団を守る巡洋艦主体の連合軍護衛艦隊と交戦し、重巡4撃沈、駆逐艦1中破に対して味方の損害は巡洋艦1小破という歴史的なワンサイドゲームを行なった。

その後、敵機動部隊からの攻撃を恐れる三川中将を旗艦「鳥海」艦長の早川大佐が説き伏せて、2回目の突入が行なわれることとなった。しかし、ここで思いもしない伏兵が彼らに襲い掛かった。

それは今回上陸支援に派遣されていた戦艦「メリーランド」だった。同艦はこの時ガ島東方で待機していたのであるが、日本艦隊出現の報を聞きつけてやってきたのであった。

第8艦隊は同艦出現のために2回目の突入を中止して、戦闘に入った。この時第8艦隊にとって幸いな事に、「メリーランド」には2隻の駆逐艦の護衛しかついていなかった。

結果、帝国海軍の誇る酸素魚雷を駆使し、第8艦隊はなんとか「メリーランド」と護衛の駆逐艦「ブルー」を屠った。しかし日本側も重巡「加古」を失い、「青葉」と「衣笠」に大被害を受けた。また輸送船団攻撃にも失敗した。

こうして、ガダルカナル島を巡る戦闘は初日から苛烈な物となった。

一方、陸上においては警備隊と設営隊が航空機用の物資とともに運ばれた小銃や軽機関銃といった武器を駆使して、上陸してきた米海兵隊に対して反撃を行なった。だが、相手は戦車等も保有し、さ

らに数でも5倍であった。おまけに、設営隊は武器の扱いに不慣れだった。そのため、米軍の侵攻がもたついていた1日目はなんとか飛行場を維持したが、2日目に行われた総攻撃の前にあえなく敗退し、もてるだけの食料を持ってジャングルへと退避した。

こうして上陸2日目、米軍は飛行場を占領し「ヘンダーソン飛行場」と名付けた。

もつとも米軍とて楽な状況ではなかった。断続的に行なわれた日本軍の空襲で輸送船を沈められたために弾薬は1会戦分、食料は1週間分しかない状況に陥った。

太平洋戦争最大の焦点と言われることとなるガダルカナル攻防戦は、日米両軍にとって非常に苦しい状態でスタートしたのであった。その戦いへと、独立機動艦隊は足を踏み入れたのであった。

ガダルカナル島（後書き）

御意見・御感想などなんでも良いのでお待ちしています。

前線へ

ガダルカナル島を巡る戦いが始まったから2日後の8月9日、独立機動艦隊はラバウル港に入港した。湾内には現在少数の小艦艇と輸送船がいるのみで、閑散としていた。ここを母港にしている第8艦隊は、現在損傷艦をトラック島にむけ出港させ、残存艦もショートランド泊地に進出しているためいなかった。

独立機動艦隊は、やはりラバウルに基地をおく第11航空艦隊に現在のガ島の状況に関する資料を送ってもらうよう打診した。

その求めに応じて、数時間後旗艦「天城」に資料が届いたが、それを見た首脳陣は大いに落胆する事となった。

提供されたのは少数の不鮮明な写真と、わずかな資料のみだったからだ。現地に米艦艇がどれほど展開しているのか、現在ルンガ飛行場（ガ島飛行場の日本名）がどのような状況になっているのか具体的な情報はなく、その多くが推定値だった。

「これでは現在ガ島周辺がどうなっているのか、まったくわかりません。」

資料を見せられた参謀の1人がそう言って嘆いた。

「うーん、せめて空母が何隻いるかがわかるだけでも助かるんだがな・・・」

さすがに桑名司令もこれには頭を抱えてしまった。

「こうなると、我々は独力で情報把握に努めねばなりませんね。」

近江参謀長の言葉に、複数の参謀が頷いた。

「そうだな。しかしそうなると、「阿蘇」の竣工が間に合わなかったのが悔やまれるな。」

「阿蘇」とは捕獲戦艦「ウォースパイト」の主砲などを再利用して建造されている打撃艦である。5月の中旬から建造に着手しているが、竣工予定は11月の初めであった。同艦には水上偵察機4機が搭載される予定だったから、それが使えれば艦隊の偵察能力が大幅にアップしていたことは間違いないかった。

「まあない物ねだりしてもしょうがないか・・・通信参謀、特試航空隊はどうした？」

桑名は通信参謀に問い掛けた。

「特試航空隊は先ほどトラック島まで進出したという報告がありました。天候の不順などがなければ明後日にはラバウルに前進できるでしょう。」

先日編成されたばかりの特試航空隊は、一応大本営直轄の飛行隊である。しかし、独立艦隊同様、その細かい方針は大本営の作戦方針にさえ従えば、あとは現地指揮官の裁量に任されていた。そこで今回のガ島支援任務では、独立艦隊との共同作戦を行なうために、一時的に独立艦隊司令官の桑名が命令権を持っていた。

その特試航空隊は、編成後さらに陸軍や海軍が以前に捕獲していた航空機を複数編入し、現在はP40戦闘機36機、F2A「バツ

「ファロー」12機、A20「ハボック」16機、B25「ミッチェル」12機となっている。

P40と「バッファロー」はそれぞれフィリピンや蘭印、マレー方面でも多数の機体が捕獲されていたので、用意に数を揃える事が出来た、また両機種ともそれぞれ落下増槽の懸架装置を増設し、変わりに重量軽減のために一部の武装や装甲板を撤去している。

この2機種とも緒戦で一方的に撃破されたために日本軍内からはやられ役の2線級機というイメージが強い。確かに2機種とも旋回性能や航続力では日本機に大きく劣るが、その代わりに頑丈で取り回しが非常に楽という欧米機共通の特徴があった。また、使い方次第では充分な戦力となりえた。現実に「バッファロー」のフィンランドにおける奮戦は有名であるし、P40もしばしばビルマにおいて陸軍の「隼」戦闘機を翻弄していた。

特試飛行隊司令の岩倉大佐（先日進級）は、これら欧米機の特徴を最大限に生かすために、機体の運用に付いては徹底的な編隊空戦と急降下一撃離脱戦法に徹するようパイロットたちを教育した。

最初はこの方針を嫌がった者も多かったが、機体を操るうちにその機体を持つ特徴からそうした戦法が理に叶っている事を理解し、身に付けていった。

今や特試飛行隊は帝国内でもっとも上手く敵機を操れる飛行隊となっていた。その特試飛行隊の全戦力約80機が戦列に加われれば、独立艦隊の艦載機約150機と共に敵を圧倒できるはずだった。だから、桑名としては彼らの到着を待つて攻撃をかけたかった。

特試爆撃隊に刺激されたわけではないが、今回の作戦で用いられ

る独立艦隊の艦載機は前海戦の時とは違う。インド洋海戦で多数の被弾機を出した1式艦戦と1式艦爆はそれぞれ補充機の不足から降ろされてしまった。また木製99艦爆「明星」も急降下爆撃能力の欠如は致命的な弱点とされて、やはり降ろされてしまった。

その代わり今回搭載されたのは新鋭の試製零戦33型と、試製「彗星」22型だった。

試製零戦33型は、零戦の改良型である32型の機体に出力1500馬力の「金星」62型エンジンを搭載し、さらにカタパルト発艦に備えて機体強度を強化した機体である。試験段階では最高速度592kmを記録している。これは21型よりも60km近くも優速である。

もともと、試製であるとおり改善点を多く残しているのも事実だった。例えば32型に若干の強度強化を施したのみであったので、風防などの改良可能な場所はそのままにされている。また急降下速度の上昇も20ノットのみだった。そのため、後に同機を改良して量産された53型では風防や武装配置、さらに機体強度の大幅見直しが行なわれ、最後の零戦として大活躍する。

一方試製「彗星」22型は現在開発が進められ、部分配備が始まっている。「彗星」11型の改修型である。「彗星」のエンジンは独逸のベンツ社開発のDB601エンジンを参考にした「熱田」発動機であるが、独逸製エンジンの特徴であるデリケートな仕組みは、日本の技術力では手に余った。「熱田」エンジンは故障を頻発した。

これを開発段階から危惧した横須賀の航空技術廠内では、早期から空冷エンジン搭載機体の開発を平行させて進めた。その結果、零戦33型にも積まれた「金星」エンジン搭載機として製作されたの

がこの22型だった。

性能面では11型に比べて最高速度などで劣る事が確認されていた。そのため、11型と22型の先行量産期50機ずつを機動部隊である第三艦隊と独立艦隊でそれぞれ運用し、性能比較がなされる事となった。

今回はこの「彗星」22型と、以前捕獲したアメリカ軍のSBD艦爆であるS式艦爆の混成部隊が艦爆隊の主力であった。ちなみに艦攻隊は今までどおりに97式2号艦攻であった。

これら新鋭機と捕獲機、さらに在来機を駆使して独立艦隊は戦闘に挑もうとしていた。

前線へ（後書き）

御意見・御感想・要望などなんでも良いのでお待ちしています。

ガ島攻防戦 出撃編

独立機動艦隊がラバウルに進出した2日後、遅れて特試航空隊もラバウル北飛行場に進出してきた。この飛行場は現在台南空をはじめとする主力戦闘機隊が進出している東飛行場からは離れた位置にある予備飛行場で、実験部隊ですぐに移動してしまう可能性がある特試航空隊に今回あてがわれたのだった。

その特試航空隊が出撃準備を完了させしだい、独立機動艦隊はガ島方面の米機動部隊撃滅と現地米軍基地設備破壊のために出撃する予定だった。

ラバウルに停泊している間に、情報が断片的に入ってきた。それらは主にラバウル基地航空隊所属の新鋭偵察機「暁雲」によってもたらされた。「暁雲」は陸軍の100式司偵の海軍用機で、使用機器に若干の違いがある以外はほぼ同一の機体であった。そのため現段階で帝国海軍最速の時速600km強で飛行する事が出来た。

その「暁雲」が集めてきた情報に寄れば、敵艦隊の内輸送船団は早々と退避し、現在ガ島近海にいる艦隊は確認されていなかった。目指す敵機動艦隊も航空機の補充を行なっているためか、戦線を離れていた。しかし、陸上基地の方には動きが見られた。

ガ島を占領した米軍は、その機械力に物を言わせて、空襲と艦砲射撃で破壊したルンガ飛行場を短期間で修理し、ヘンダーソン飛行場と名付けた上で使用可能にしていた。ちなみにヘンダーソンとはミッドウェイ海戦で戦死したパイロットの名前だ。

当初米軍のガダルカナル島への航空機の派遣は、8月20日に第

一陣31機を護衛空母「ロングアイランド」で送り込む予定だった。

しかし、ラバウルに停泊中の日本機動艦隊（独立機動艦隊）が確認されると、一端撤退する機動艦隊から戦闘機と艦爆の一部を抽出して送り込んだ。その戦力はF4F戦闘機24機にSBD艦爆12機だった。さらにその翌日にはPBYPカタリナ飛行艇も複数派遣されていた。また数日後には長距離のフェリー飛行が可能なB17やB25といった機体も配置されている。

そして米軍の凄い所はこれら航空機が運用するのに必要な燃料弾薬を時間の掛かる船ではなく、飛行機を使って全て運び込んだことであった。米軍がいかにガダルカナル島を重視していたかがわかる。

そして米軍としてはこの日本機動艦隊に出てこれると、ガダルカナル島を電撃奪回されかねないので、なんとしても撃滅しておきたい所であった。しかし、生憎と対抗できる米機動艦隊は補給のため、一時的にエスピリット・サントまで後退しており、少なくとも1週間は前線へ戻ることは不可能だった。

ラバウル軍港停泊中であるから陸軍機による空襲も行われたが、まだスキップボミングを採用していなかったために、高高度爆撃が低高度奇襲攻撃しか行えなかった。これが輸送船団か駆逐艦隊なら損害を与えられたかもしれないが、機動部隊では話が違った。

高高度爆撃は打撃艦と巡洋艦が試験的に積み込んだ3式弾による電探連動射撃を受けたために搭乗員が及び腰となったために明後日の場所を爆撃しただけに終わり、低高度爆撃は独立機動艦隊が24時間の警戒態勢に入っていたために、猛烈な対空砲火の反撃をうけてこちらも成功しなかった。また、電探情報を受け取ったラバウル航空隊が早めに邀撃機を上げられたのも攻撃不成功の一因となった。

そうした米軍の爆撃は艦隊の将兵に若干のストレスこそ与えたが、出撃を挫くには至らなかった。そして独立機動艦隊は特試航空隊の出撃準備が整った8月13日にラバウルを出撃した。

艦隊は一路南下しガダルカナル島を目指した。今回独立機動艦隊の作戦目的はガ島敵飛行場への徹底的な反復攻撃による基地機能の破壊だった。

空爆だけならラバウル航空隊もいたが、護衛戦闘機の航続距離ギリギリであるために搭乗員の負担が重く、さらにポートモレスビーへの空襲も行なう必要があるために、ガダルカナルへの有効な爆撃を続けるのは不可能だった。

当初は作戦目的に米機動艦隊の撃滅も目標であったが、その米艦隊は存在しないために、今回は基地のみを狙う事となった。

もっとも、敵機動部隊が絶対に出てこないという保証はないが。

出港直後、旗艦である空母「天城」の艦橋では、桑名司令官と近江参謀長が話し合っていた。

「今回の作戦は随分と場当たり的ですが、大丈夫でしょうかね？」

自分たちの置かれた状況に不安を感じる独立機動艦隊の近江参謀長が、司令官席に座る桑名艦隊司令官に聞く。

「大丈夫という確証があつたら誰も戦争する必要などないよ。まあ米軍の隙をつけるのなら、第8艦隊の時みたいに上手く行くだろうが、生憎と我々は既に米軍に姿を見られている。しかもだ。」

桑名がそう言い終えた時、電探室から繋がったスピーカーに電探要員の声が入る。

『敵航空機らしき反応あり。艦隊の前方20海里！』

「上空直掩の戦闘機隊にただちに知らせよ！！」

航空参謀が無線室との電話回線を開き、命令を発する。無線室では上空の戦闘機に無線で報せが行っているはずだ。

「出港した途端監視付きだしな。まあ空母2隻の機動部隊相手なら米軍がピリピリする理由もわかるが・・・とにかく、今は臨機応変に対応するのみだ。参謀長、対空対潜警戒を厳重にせよ！敵と戦う前にやられては話にならんぞ。」

「了解です！通信参謀、各艦に伝達！」

「了解！！」

キビキビと動く将兵たちを見て、桑名中将は満足げな表情をした。
（実戦を経験したおかげで、将兵の練度は確実に向上している。この将兵の一人たりとも無駄に死なせないものだな。）

心の中でそんな事を考えながら、桑名は窓の外に広がるソロモンの海へと視線を向けた。

ラバウルを出港した独立機動艦隊は、出港早々にカタリナ飛行艇の接触を受けたが、その後数回に渡って潜水艦や航空機の接触を受

け続けた。

もつとも航空機については、独立機動艦隊の電探で早々と探知され、撃墜される機体が続出した、最終的にカタリナ飛行艇3機、ハドソン爆撃機2機が撃墜され、戦闘機隊の撃墜スコアを稼がせることとなった。

また潜水艦も昼間は「天城」と「翠鶴」から発進した対潜哨戒機が飛んでいるために近づけず、夜になると今度は闇のために雷撃を行なえなかった。逆に近づきすぎて、駆逐艦に積まれた試製2式水中探信義によつて探知された「S44」が撃沈されてしまった。

捕獲艦や実験艦ばかりのゲテモノ艦隊の独立機動艦隊であつたが、試験段階で積み込んだ様々な電子兵器や新兵器がここで役に立った。

こうして独立機動艦隊は、敵に動きこそつかまれていたが何の被害を受けぬまま、ガダルカナル島へと接近した。

カ島攻防戦 出撃編（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ガ島攻防戦 接敵編

ラバウルを出港した独立艦隊に対する空襲は、出港2日目に始まった。この時点ではまだガ島に進出していたSBD「ドントレス」の航続圏外であつたために、やってきたのはB17やB25といった足の長い双発、4発機の合計20機であつた。

もつとも、まだこの時点では反跳爆撃は開発されていなかったために、攻撃自体は水平爆撃のみとなつた。しかも、輸送船団とは段違いの対空火力を持つ艦隊と上空に飛び回る戦闘機の攻撃を受けながらの爆撃であつたから、命中弾はえられず、逆に6機を撃ち落されて撃退された。

現在独立機動艦隊は、一端ソロモン海から太平洋側に迂回してガダルカナル島を目指していた。これは島が乱立し、レーダーが利き難く、魚雷艇や駆逐艦などの夜襲を受けやすい航路を通るのを航海参謀が嫌つたからだ。

もし連合艦隊の参謀だったら、最短距離での移動を具申したかもしれない。しかし独立艦隊はレーダーを帝国海軍内で一番有効に扱っている艦隊であつた。また士官たちも出せコースから爪弾きされた者であり、柔軟な発想が出来る者たちが多かつたのでこのような考えが出来るのであつた。また、桑名はそうした意見を受け入れるだけの度量の広さを持ち合わせていた。

彼は航海参謀の意見を受け入れて、時間は掛かるが安全な迂回針路を採らせたのであつた。

そして独立艦隊がガダルカナル飛行場を攻撃圏内に捉えたのは、

出港2日目の正午過ぎだった。桑名は稼動全機を持つての出撃を命じた。

艦戦47機、艦爆35機、艦攻24機、そして戦果確認の水偵2機の計108機であった。これは故障、偵察、対潜哨戒、艦隊上空直掩用の機体を除く全力出撃であった。ちなみに戦果確認の水偵は爆装はせず、代わりに高性能カメラを搭載している特別バージョンだ。

2隻の空母の艦上に並べられた攻撃隊は、艦が風上へのダッシュを始めると同時に、手空き乗員の見送りを受けると、カタパルトを使って次々と発進していった。

その光景を艦橋から見送りつつ、桑名は通信士に命令を下した。

「ようし無線封鎖解除、ラバウルの特試航空隊に出撃命令を出せ！」

「了解！！」

命令と共に、ラバウル北飛行場に駐留する特試航空隊にも出撃命令が下された。そして数分後にはラバウル北飛行場に、特試航空隊司令官である岩倉大佐の声が響き渡った。

「出撃命令が出たぞ！！出撃予定機はただちに出撃せよ！！」

既に各機では出撃のための整備や爆装等と言った全ての準備が終わり、乗員たちも翼の下で待機していた。南方特有のスコールやポートモレスビーから来る米軍の爆撃もなく、出撃するにはもってこの状況だった。出撃命令が出されると、それまで寝台で横になっていた搭乗員達は飛び上がるように起き、飛行帽を被り機内へと滑

り込んだ。

「コンタックー!!」

日本海軍独特のエンジン始動合図がそこかしこでなされ、機体のエンジンが始動する。捕獲された機体のアメリカ製エンジンは部品の質が良く、エンストなどを起こすことは滅多にない。出撃予定機の全機が無事エンジンを動かせた。

今回出撃するのは28機の爆撃機のみである。P40や「バツフアロー」と言った戦闘機は、日本で増槽をぶらさげられるよう改造してきたが、それでもラバウルからガダルカナル島間を往復するのは無理だった。

せめてブイン飛行場が使えれば良いのだが、いまだ整備中で航空機を取り扱うには後1週間ほど必要だった。

そういうわけで、攻撃隊は護衛無しの丸裸だった。だからこそ独立機動艦隊の攻撃隊が先生攻撃をすることとなっていた。

28機の爆撃機は、隊幹部、居残りとなった戦闘機隊パイロット、整備兵などの見送りを受けて、重々しい高馬力エンジンの音を立てながら、南西の空へと消えていった。

こうして矢は放たれた。

艦隊を発艦してから1時間半後、攻撃隊はガダルカナル島まで30分の距離に近づいていた。攻撃隊隊長である新任の若井大尉は、各機に「警戒を厳重にせよ！」の信号を送る。

もし敵がレーダーを持っていたら既にこちらは見つかっているかもしれない。敵の待ち伏せ攻撃を受けることを彼は非常に警戒していた。

彼は以前第二次ミッドウェイ海戦で沈没した空母「加賀」の爆撃隊パイロットであった。ミッドウェイ攻撃で彼の小隊は待ち伏せていた敵戦闘機の攻撃を受け、1機を撃墜され、彼自身負傷する苦い経験を持っていた。だからこそ警戒していたのだ。

「ガ島まで後30分だ。気を引き締めていけ!!」

「了解!」

彼は操縦手の水野一飛曹にも警戒を促した。

そして15分後、戦闘を進む戦闘機隊から無線連絡が入った。

「敵機前方に確認!数約30!」

若井は報告を受けて前の方を見るが、前方座席が邪魔な事と、距

離が離れているせいか発見できなかった。ただし戦闘機隊が増槽を落としたのだけははっきりと確認できた。

「各機へ、前方の敵機は囷の可能性がある、太陽、ならびに下方からの奇襲に注意！」

すると、部下の機体から予想通りの報告が入った。

「敵機太陽の中にいます。数は不明！」

「全機密集編隊のまま迎撃せよ！」

戦闘機隊の半分が慌てて上昇していくが、恐らく間に合わない。何機かは必ず攻撃してくる。彼の命令はそれに対しての処置だった。

今回独立艦隊の爆撃機、攻撃機にはそれぞれ新兵器が搭載されていた。試製2式12.7mm機銃である。その実は米軍のブローニングM2重機関銃の模倣品だった。

前年12月から行なわれている陸海軍兵器統一製作で最初に行なわれたのがそれまでバラバラに開発していた機銃の一本化だった。これまで陸海軍は別個に機銃を開発していた。そのため、同じヴィッカーズ系統の7.7mm機銃でも弾薬を共用できないと言う笑うに笑えない事態が起きていた。

それがようやく改善される事となった。この2式12.7mm機銃がその陸海軍共同開発によって作られた最初の銃であった。ちなみに20mm機関砲は陸軍の開発中だった物が廃棄され、海軍のエリコン銃の発展型を共用することとなっている。

閑話休題。

攻撃隊各機では後部座席の乗員が格納されていた銃を引き出し、発射準備をする。もちろん隊長の若井も同様だった。

「来やがれカトンボども！」

若井がこれから現れるであろう敵機に吐き付けた。

そして数秒後、太陽の中から甲高い音を発しながら数機の敵機が現れ、攻撃隊目掛け突っ込んできた。同時に、各機の12.7mm機銃が火を噴いた。こうして戦闘が始まった。

カ島攻防戦 接敵編（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ガ島空襲大作戦

護衛戦闘機隊の防衛網をすり抜け、爆撃隊と雷撃隊に襲い掛かったのは5機のF4F「ワイルドキャット」であった。頑丈なのが取り柄のこの機体は、セオリー通りに急降下一撃離脱を狙ってきた。同機に積まれている6基の12.7mm機関銃の攻撃を喰らったら、防御力の弱い日本の機体は大きな打撃を負う。

「ワイルドキャット」のパイロット達は楽勝と思って襲い掛かった。しかし、彼らの目の前に現れたのは、凄まじいまでの光のシャワーだった。

「な！なんだ！」

「ワイルドキャット」のパイロットの多くは実戦経験の少ないパイロットであった。そのため、「彗星」や97艦攻の後部機関銃から撃ち出された盛大な曳光弾に幻惑されてしまった。

実はこれを狙って、独立艦隊のパイロット達は後部機関銃の弾を通常より曳光弾が多いように細工していたのだ。狙いは図にあたり、5機中4機が射点を外してしまった。

「バカ野郎！！」

曳光弾に幻惑されなかったベテランの「ワイルドキャット」隊隊長は不甲斐ない部下に悪態をつきつつ、自信は一機の艦爆に狙いをつけた。そして、12.7mm機関銃を一連射した。

ダダダ……

銃弾が空中を走っていき、その「彗星」に吸い込まれた。「彗星」艦爆は99艦爆より防御力は高いが、それでもアメリカ軍の機体よりは低い。結果銃弾を受けた「彗星」はまもなくどす黒い煙を引き始め、しばらくするとそれは炎に変わり、積んでいた爆弾を投棄すると急降下していった。

「やった！」

だが、その報復はすぐに行なわれた。仲間の機体が仇とばかりに機銃弾を撃ち込んで来た。回避運動が遅れた「ワイルドキャット」は多数の銃弾を受け、間もなく燃料タンクからガソリンが漏れ始めて発火、「彗星」の後を追うように撃墜された。

また残った「ワイルドキャット」は降下後に再攻撃を試みたが、その時には零戦隊が他の戦闘機との空戦を片付けて戻ってきたため、逃げる以外に手はなかった。

こうして「彗星」隊はなんとか1機の損失だけで、敵戦闘機との戦闘を切り抜けることが出来た。また少し離れた場所を飛んでいた天山隊も損失なしであった。

そして攻撃隊各機はヘンダーソン飛行場への爆撃コースに入った。出撃前に陸上基地の「暁雲」偵察機が行なった数回に渡る偵察で、駐機場や燃料タンクといった飛行場の凡その配置は判明していた。

「攻撃開始！！」

全機突撃せよを意味するト連送が若井隊長機から発進される。それと同時に攻撃隊各機は当初予定されていた目標への爆撃を仕掛け

る。

飛行場の周りに配置された対空砲や対空機関銃が攻撃隊へ向けて攻撃を開始し、空に黒いシミのような砲弾の炸裂の跡が出来る。

その間をすり抜けて、「彗星」は滑走路を急降下爆撃で、97艦攻は水平爆撃で駐機場や対空砲陣地、燃料タンクなどに爆弾を投下していく。

急降下爆撃を受けた滑走路には次々とクレーターが出来上がり、また隠蔽が間に合わず、網を乗せられて簡単にカモフラージュされていただけの爆撃機や輸送機は、水平爆撃によってやはり次々と焼き払われた。

今回97艦攻が搭載したのは、対空用砲弾を改造して造った試製3式対地焼夷弾である。中に詰め込まれた弾子が空中で飛び散ると半径150mに渡って火の雨を降らす事が出来たこの新型爆弾によって、地上の機体や車両、人員に大きな被害を与えた。

また爆撃を終えた機体の内、機首に7.7mm機関銃をもつ「彗星」はそのまま地上への機銃掃射を行なった。これによって数基の対空砲や対空機関銃が破壊された。

独立艦隊攻撃隊による爆撃は20分ほどで終わり、攻撃隊各機は五月雨式に帰還して行った。だが米軍にとっての災厄はここからであった。それと入れ替わるように、真打が登場したからだ。

独立艦隊の航空隊がヘンダーソン飛行場上空から消えた5分後、日本軍機がいなくなったことを確認した米兵達は、退避していた塹壕や防空壕の中から這い出し、早速瓦礫や残骸の片付けと、滑走路

の修復に取り掛かった。上空に残っている迎撃戦闘機隊を降ろすためである。

米軍の場合、こうした修復作業はブルドーザー等機械力を用いるために日本軍に比べて遥かに早く、その労力も少なく済む物であった。さらに鉄板を敷いて応急の滑走路を作り上げるようなこともした。

しかしそうした作業を始めた所で、ラバウルから飛んできた特試航空隊の爆撃機が襲い掛かった。

特試航空隊は日本機だと判断されにくいよう巧妙に迂回飛行をしてヘンダ・ソン飛行場上空に到達した。使用機種はいずれもB25「ミツチエル」やA20「ハボック」である。米軍からすれば味方機である。そのため、警報を出すのが遅れてしまった。

見張りの兵士が胴体と主翼に描かれた日の丸に気付いた時には、滑走路に爆弾が投下され始めていた。

敵襲に気付いた兵士達は、我先に滑走路から逃げ始めた。そこへ次々と爆弾が投下されていく。滑走路の穴埋めのために引き出されたブルドーザーや、応急修理用の鉄板が次々と爆砕されていた。

「畜生！卑怯なジャップめ！！」

「俺たちの飛行機に勝手に日の丸描いて飛ばしやがって！！」

兵士達は口々に上空の爆撃隊に恨みの声を吐きつけるが、それで爆撃機が落ちるはずもなく、逆に虚しく響き渡るだけだった。

この時上空には、まだ迎撃戦闘機隊が飛んでいたが、やはり味方機と思い込んでしまったために攻撃が遅れてしまった。そして気付いた時にはヘンダ・ソン飛行場に次々と爆弾が炸裂していた。

そのまま急降下して追跡しようとした戦闘機もいたが、統制を欠いていたため1機ずつでのバラバラな攻撃となってしまった。おまけに先の戦闘で弾薬や燃料を消費していたために、効果的な攻撃が出来なかった。

特試航空隊はそれこそ通り魔のようにヘンダ・ソン飛行場を攻撃すると、ラバウルへ向かって引き上げていった。その跡に残されたのは、修理用機材のほとんどを破壊され呆然と立ち尽くす基地の兵士たちと、一機も撃墜出来ず歯噛みする戦闘機隊パイロットたちであつた。

最終的に艦載機と基地航空隊の連携プレーで行なわれたこの爆撃によって、ヘンダ・ソン飛行場は最低3日間の使用不能となり、ジヤングルの奥や完成していた掩体壕へと避難していた機体を除く50機近い爆撃機が地上撃破され、飛び立った戦闘機も零戦等との空戦で27機を失い、残った機体も穴ぼこだらけの滑走路に着陸せざるえず、穴に足を引っ掛けてさらに半分を失った。

こうしてヘンダ・ソン飛行場はその基地機能を失った。

一方、攻撃をかけた独立艦隊の艦載機は艦戦4機、艦爆2機、艦攻4機の11機を損失した。米軍に比べれば少ないが、それでも出撃機数の1割というのは手痛い被害であつた。特試航空隊の方は、追跡してきた敵戦闘機との交戦で3機が被弾したが、いずれも致命傷とはならず、無事ラバウルに帰還することが出来た。

第一ラウンドは日本側の勝利で終わった。

カ島空襲大作戦（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

米機動部隊出撃

ヘンダーソン飛行場壊滅の報は、米軍に大きなショックを与えた。同島の航空機が使用不能になったとあれば、いつでも日本軍による上陸を許したも同然となったからだ。

もつとも、この時点で日本側が用意していた上陸兵力はラバウルに集結中の一木支隊第一梯団916名のみで、その装備は数門の歩兵砲などの小型砲と機関銃、そして通常の歩兵用装備のみに限られていた。

この部隊は6月のミッドウェイ攻略作戦ではミッドウェイ島へ上陸する予定だった。だが結局同島攻略が中止されたために、グアムで待機していた部隊だ。

対するガダルカナル島を占領する米海兵隊は総兵力1万2千と12倍以上である。その装備も戦車を含み、一木支隊を圧倒していた。ただし海兵隊側にも弾薬や食料が心細いという事情はあった。

これはラバウル航空隊のしつこい空襲で揚陸がままならない日が続いたからだ。また輸送船団を守る護衛艦艇の不足という事情もそれに追い打ちをかけていた。

米軍としては一刻も早くガダルカナルへ増援を送る必要に迫られていた。そこで取りあえず3隻あった空母の中で、航空機の損害が少なかった2隻を選んで出撃させ、日本機動艦隊を追い払う事にした。

こうして臨時編成されて出撃したのが、ハルゼー中将率いる第1

7任務部隊であつた。編成は損失した航空機の穴埋めの機体と執り合えず一回分の出撃に必要な物資を積み込んだ空母「エンタープライズ」、「ワスプ」に重巡2、軽巡1、駆逐艦6という貧弱な物だつた。それでも、この時期宝石よりも貴重と例えられた空母を2隻も出す事は大判振る舞いだつた。

アフリカ方面では、英国海軍の空母不足の隙をついてアフリカ軍団への補給を行なつた独逸軍が最反攻に転じ、エジプトの英軍は窮地に追い込まれていた。そのため英国のチャーチル首相は空母「ワスプ」、「レンジャー」の太平洋への引抜きを渋つた。

アメリカのルーズベルト大統領としても、欧州戦線が第一で、太平洋方面は第二であつたが、予想以上の日本軍の強さにその考えを改めねばならなかつた。

第二次ミッドウェイ海戦で日本軍の侵攻を一時的に頓挫させはしたが、それでも日本軍の進撃が止まつたわけではなく、さらに米太平洋艦隊と日本連合艦隊の戦力差はあと1年は埋まりそうになかつた。

だから、大西洋からはどうしても戦力を引き抜く必要があつた。特に海軍力は最もたる物であつた。

結局、英国本土へ派遣している第8航空軍の戦力増強、ならびに貸与武器の割増を条件に、「ワスプ」と「レンジャー」をパナマ運河経由で太平洋へと派遣した。

その貴重な空母までも投入して行なつたガダルカナル反攻作戦は、日本側の素早い反撃によって、暗雲が垂れ込めつつあつた。

その状況を打破すべく出撃した第17任務部隊も日本側に比べて戦力が圧倒的に劣っていた。だが艦隊司令長官のハルゼー中将は強気だった。

ハルゼー中将は日本側の山口多聞中将とよく比較される猛将である。「キルジャップ！キルジャップ！キルモアジャップ！」「日本人を殺せ！日本人を殺せ！もっと殺せ！」という言葉で将兵を鼓舞したのは歴史上でも有名な事である。

前回日米の空母が激突して行なわれた第二次ミッドウェイ海戦では原因不明の皮膚病を患って出撃できず、代わりにスプルアーンス中将が機動部隊の指揮を執っている。

だから今回がハルゼー中将にとっての初めての本格的な海戦だった。

さて、緊急出撃した米機動艦隊に対して、ガダルカナル空襲を成功させた独立艦隊は砲戦部隊と航空戦隊を分離した。これは多島海であるソロモン諸島では、動きが制限されて空母を有効利用出来ない上に、魚雷艇や駆逐艦などの奇襲を受けやすいためにに対する処置であった。

砲戦部隊は2隻の打撃艦に巡洋艦「普賢」、そして「松」型駆逐艦であった。航空戦隊はその他の艦艇である。砲戦部隊の指揮はインド洋海戦で英戦艦「ウォースパイト」の拿捕という戦功を上げた打撃艦「背振」の艦長である大内大佐が執る。

同戦隊はガダルカナル島近海まで接近し、上陸部隊の上陸支援としてその戦艦級の主砲で残存する基地施設を粉砕する予定であった。一方分離した航空戦隊は、追いついてきた補給艦から航空機用の燃

料と弾薬を受け取って再攻撃に供えることとなった。

「近海に米艦隊の存在は確認できたかね？」

航空隊が戻り、砲戦部隊を分離した後の会議で桑名司令官が幕僚たちに聞く。

「現在の所、ツラギ方面に若干の小艦艇の存在が確認されている以外ありません。連合艦隊の潜水艦、ラバウルを始めとする基地航空隊からも通報はありません。」

通信参謀が持っている紙情報を読み上げる。

「米機動部隊がエスピリット・サント島へ撤退したのは確認されています。それ以後の動きは不明です。ラバウルの零戦隊が多数の撃墜を報告していますから、恐らく航空機の補充を行っているものと思われる。ただし、だからと言って出撃していないという確証はありません。」

第二次ミッドウェイ海戦では米機動部隊が出てこないという先入観が大きな被害を受ける要因の一つとなった。そのため、桑名はあらかじめ「思い込みで判断せぬように。」という言葉徹底させていた。

その成果がここで現れていた。

「万が一出てきた場合、米機動部隊の空母の数は多くて3、少なくとも2と思われます。」

航空参謀が言う。

「その根拠は？」

「最大数はガダルカナル島近海で目撃された空母数と、現在太平洋方面に回航されている米空母の数から推定しています。最低数は敵がこちらの艦隊構成を把握しているという前提から判断しました。」

「良い判断だ。」

そう言つて桑名は時計を確認した。間もなく日が沈む時間である。この日は第一次攻撃の戦果確認で追加攻撃の要なしと判断されて、偵察隊以外の航空隊は出撃していない。

「まもなく日暮れた。敵機動部隊が出てきているにしても、今日の勝負はありえない。だから脅威となるのは潜水艦と水上艦艇だ。対潜、対水上警戒を厳にして明日の攻撃に備えよ！」

「は!!！」

幕僚たちが一斉に敬礼した。

独立機動艦隊はとりあえずガダルカナル北洋上で待機しつつ、翌日の攻撃に備えた。ちなみに敵機動艦隊が出てこない場合は、ツラギ方面に残存する敵基地施設や艦艇を空爆する予定になっていた。

一方ハルゼー中将率いる第17任務部隊は日本機動部隊を求めて、30ノット近い高速でガダルカナルへ一路向かっていた。

2つの機動部隊が、今まさに南太平洋で激突しようとしていた。

米機動部隊出撃（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

決戦前夜

翌日未明、ガダルカナル島沖合いに到達した砲戦部隊は、ヘンダソン飛行場ならびに周辺にある陸上部隊の基地へ向けて砲撃を開始した。

「撃ち方始め!!」

砲戦部隊旗艦である「背振」の艦橋内に、艦長である大内大佐の号令が響く。それと同時に2基の主砲が砲撃を開始した。

ドドン!!

「長門」級が降ろした40cm45口径砲が闇夜に鮮やかな発砲炎と、凄まじい轟音を出現させる。それに数秒遅れる形で同型艦の「多良」も砲撃を開始した。

2隻に積まれた40cm砲は合計4基8門。いずれも「長門」級戦艦が改装時に降ろしたものや、八八艦隊計画の戦艦用に準備されたものなので、現在「長門」級が使用しているものよりワンランク性能は低い。それでも相手が陸上基地なら、悪魔的な威力を発揮する。しかも今回使われているのは三式改対地砲弾である。

艦艇の主砲用に開発された3式弾は、砲弾内に多数の弾子が詰められている構造で、空中で弾子が飛び散って、目標とする敵航空機に大きな被害を与えるという原理であった。これまで使われてきた榴弾よりも発火性の高いこの砲弾は対空攻撃に効果を発揮する物と思われていた。

一方で、広範囲の敵を攻撃できることから、これまで効果が疑問視されていた対地攻撃でも大きな効果を発揮する物と予想され、そのため信管を調整した対地用砲弾としての開発も進められていた。

その対地用3式弾が今回2隻の打撃艦に先行試験の目的で搭載されていた。

発射された砲弾は、射出された水偵が投下した照明弾に照らされた飛行場やその周りの基地陣地に降り注いだ。それによる打撃は米軍陣地に大きな被害を与えた。なにせ陣地の多くは天蓋や屋根のない吹きさらし状態である。そこに燃える弾子が降って来るのだからたまらない。

機銃陣地や、砲座、駐車されていた車両が次々と燃え上がった。さらに走り回る兵士の中にも、弾子が直撃する不運な者が出た。アクション映画のように燃え上がる兵士が地面に突っ伏してのた打ち回るのを、他の兵士たちが消火器を持って消しに掛かる。

まるであらゆる者を焼き尽くすように降り注ぐ砲弾に対して、兵士達はただ塹壕に籠って砲撃が終わるのを待つしかなかった。

砲撃は30分ほどで終了し、砲戦部隊は引き上げた。本来ならもう少し続けて徹底的な攻撃を加えたいところであった。しかしガダルカナル島には艦艇に対して攻撃できる武器など全く無かったが、ルンガ泊地やツラギには魚雷艇や駆逐艦が停泊しているのが確認されているので、対地砲撃ばかりも行なっていられなかった。現にツラギからは複数の魚雷艇が出現している。幸い発射された魚雷は命中しなかったが、狭いソロモン海では小型艦艇の脅威は大きい。

大内大佐は水偵の報告から砲撃は充分と判断した。実際ガ島米軍

基地は陣地の多くに打撃を受けていた。人員の被害こそ最小限で済んだが、やはり吹きさらし状態だった砲や機銃陣地の被害が甚大だった。

こうしてガダルカナル島の米軍基地は昼間の空襲と併せて相当な打撃を被ったのであった。

砲撃を終えた砲戦部隊は全速でガ島近海を離脱し、航空戦隊との合流を急いだ。

砲戦部隊によってガダルカナルの米軍基地が大打撃を被った事は、日本軍のみならず、すぐにやられた側の身内である米軍機動部隊にも届いた。

「やってくれたなジャップ!!」

空母「エンタープライズ」の艦橋で、米17任務部隊司令官のハルゼー中将は電文を見るなりそう吐き捨てた。

昼間の空襲に引き続いて味方は一方的にやられっ放しで、戦いの流れは完全に日本側の物となっていた。彼にとっては歯がゆい事この上ない。

「ツラギから出撃した魚雷艇部隊からの報告では、この部隊に空母は確認されなかったとのことですよ。」

参謀長であるブローニング大佐が情報を付け加える。

「大方戦艦とは分離しているんだろう。昨日からの索敵報告では、空襲した日本艦隊以外に敵を確認した報告はない。それに空母を動きが制限される狭いソロモン海にいれるのは常識的に見ても不適合だ。」

後先考えず猪突猛進するとよく思われるハルゼー中将だが、さすがに開戦前から空母に乗っているので、それなりに空母の扱い方をわかっていた。

ちなみに、ハルゼー中将が戦艦と言ったのは、米軍は打撃艦の存在を知らないためであった。

「おそらく連中は夜明け前後に合流して艦隊を組みなおす筈だ。その時が攻撃するには好都合だが、内の搭乗員の腕では夜間に敵を発見する事は出来まい。」

レーダー技術では日本の一歩先を行っていると自負している米海軍にしても、この時点ではまだ優秀な機上レーダーは発明されていなかった。目だけでは夜間灯火管制して進む海上の目標を見つけるのは難しい。

「となるとどちらが先に敵を見つけるかにかかっているな。ブローニング、偵察機の数を増やして、発進も少し早めてくれ！」

ブローニングはピシッと敬礼して答えた。

「わかっております。」

米機動部隊は独立艦隊への牙を研ぎつつあった。

一方米機動部隊が出港している事を確認していないものの、独立艦隊は常に敵の動きに警戒していた。

「砲戦部隊は予定通り砲撃を終えたな。合流も予定通り出来そうか？」

桑名司令官が近江参謀長に尋ねる。

「不測の事態さえなければ、日の出30分前には合流できるはずだ。」

「そうか。合流中に敵の攻撃を受けるようなことになったら大事おおごとだからな。」

既にガダルカナル島の基地は壊滅しているので、攻撃してくるとすれば潜水艦か敵機動部隊である。そして最大の脅威が敵機動部隊だった。

「もし敵機動部隊との戦いになったら時間の勝負になる。杞憂でなから良いが、万が一本当に居たら先日さきひの第二次ミッドウェイ海戦の二の舞となってしまう。早くその存在を確かめたいのだがな。」

敵機動部隊が基地としているエスピリット・サント島は日本の偵察機の偵察圏外だった。そのため、敵機動部隊の出撃に関する情報は潜水艦と艦隊の偵察機のみが頼りだった。

「搭乗員たちには悪いが、偵察機の出撃は出来うるだけ早くに始めてくれ。一分でも1秒でも良い。」

「わかりました。ところで、司令官も朝からずっと艦橋に詰めっぱなしです。少しお休みになつては如何です？」

参謀長が気遣いの言葉を掛けて来た。

「そうか。では悪いが仮眠を取らせてもらつ。」

「は！」

桑名は他のスタッフにその場を任せて、仮眠を取るため司令官室へと向かった。戦いは目前に迫っていたが、体調を整えるのも軍人の仕事だった。

決戦前夜（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。というか、何でも良いので下さい。お願いします。

攻撃！米機動艦隊

翌朝、独立機動艦隊と米第17機動部隊は、双方共に通常よりも早い時間から偵察機を発艦させて索敵にあたらせていた。そして両軍共にほぼ同時刻に敵機動部隊発見の方がもたらされた。

「攻撃隊発進！！」

この命令が桑名中将とハルゼー中将より下されたのもほぼ同時刻だった。独立艦隊からは艦戦42機、艦爆35機、艦攻29機が出撃した。一方の米機動部隊からは艦戦40機、艦爆48機、艦攻20機が出撃した。

両軍の攻撃隊の数はほぼ拮抗していた。そしてやはり両軍とも1回の攻撃に稼動する全機を発進させた全力出撃だった。

両軍攻撃隊は一路それぞれの敵を目指して飛んだ。

そして先に攻撃を開始したのは日本軍攻撃隊だった。発艦時刻はほぼ同じだったが、巡航速度が若干勝る日本軍攻撃隊が先に到達したのであった。

「全軍突撃せよ！！」

昨日に引き続いて攻撃隊を率いる若井大尉機から、突撃を意味するト連送が発進される。前方には海面上に航跡を残して疾駆する艦艇の姿が既に見えていた。

その突撃する攻撃隊を止めんと、米軍のF4F「ワイルドキャット

ト」が立ちふさがった。しかし攻撃隊の護衛に戦闘機を割いていたため、「ワイルドキャット」の数は22機と少なかった。旧式となりつつある零戦21型にさえ単機同士の性能では勝てないというのに、出力を1.5倍に強化した零戦33型、それも2倍の数の機体に勝てる道理などなかった。

零戦隊と「ワイルドキャット」の戦いは短時間で終わり、「ワイルドキャット」の被撃墜数が17機、それに対して零戦の被撃墜数は2機であった。

結局「ワイルドキャット」隊は日本攻撃隊を止められるぬまま壊滅した。

そして邪魔者が消えた敵艦隊上空へと艦爆と艦攻が殺到した。それに対抗して、米艦艇から一斉に対空砲火が始まった。米17任務部隊の護衛艦の数が少ないのは既に記したが、それでも彼らの対空火力は強力だった。

この時の米艦艇はこれまでの戦訓を踏まえて、多数の5インチ両用砲や40mm機関砲を積み込んでいた。さらに護衛艦の中には5インチ両用砲を主砲として8基搭載した「アトランタ」級軽巡の「ジューノー」もいた。

これら艦艇から撃ち上げられる砲弾によって、空には無数の爆発煙が発生した。

しかし日本海軍攻撃隊は思わぬ行動に出た。それまで整然と組んでいた編隊を分離し、各機バラバラで突っ込んできたのである。

実はこれは独立艦隊のパイロット達が前回のインド洋海戦の戦訓

を基に開発した戦法だった。インド洋海戦では旧式巡洋艦改造の対空巡洋艦によって味方機多数が撃墜されるか損傷を負っている。

この攻撃失敗の理由を、パイロット達は編隊を組んだために狙い撃ちにされたと判断した。そこで今回は各機がバラバラに散って四方八方から攻撃する戦法を試みた。これなら敵も照準を付けるまでに時間がかかり、攻撃隊の損害を減らせると判断した。

しかし米軍の電子技術恐るべし、彼らは日本軍より優れた対空射撃指揮装置を備えていた。それと連動した両用砲の威力は凄まじく、短時間で3機の艦攻を撃墜している。

バラバラでの突入が必ずしも有効とはいえないことを早速露呈してしまった。もつとも、必ずしも無駄ではなく、人が人力で動かす機銃座の照準を惑わすにはかなり有効であった。また、今回は敵戦闘機を早いうちに撃滅できたために、戦闘機が敵艦艇に機銃掃射をして攻撃隊の突入を支援している。さらに、米軍は艦爆隊が「彗星」に更新されていることを知らなかったために、一部の砲や銃座はそのスピードについていけなかった。

護衛艦の対空砲火を突破した艦爆と艦攻はとにかく敵空母に的を絞った。この2隻を沈められれば、ミッドウェイ以降悪化し始めている戦況を再び日本側に取り返せられるからだ。

もつとも、2隻の空母だって沈められたくないから必死に操舵を繰り返す。特にハルゼー中将の旗艦であり、開戦以来のベテラン空母である「エンタープライズ」は艦長の的確な操艦もあって、最終的な被弾は前甲板に爆弾2発を喰らい中破したのみで、その後の応急修理によって短時間で航空機の離着艦が可能になっている。

一方不運だったのはもう1隻の空母であつた「レンジャー」である。「レンジャー」は条約期間中に建造された中型空母で、後の「ヨークタウン」級空母の建造に際し数々のデータを提供した、いわばその後の米空母の礎的存在だった。

しかし、防御が弱く、さらに速度が若干遅いという弱点を今回の作戦で完全に突かれてしまった。まず急降下した「彗星」の500kg爆弾が甲板を貫通して航空機用燃料庫で爆発し大火災と大爆発を引き起こした。

さらにその火災によって減じた対空砲火の穴を雷撃機によって攻撃され、左舷側中央部に集中的に3発の魚雷を被雷してしまった。

2万tもない中型空母にこの打撃は重すぎ、結局「レンジャー」は被雷から40分後に船体が2つに割れて沈没してしまった。

第17任務部隊の損害はその他に駆逐艦1隻が戦闘機の機銃掃射で小規模な爆発を起こし、そこに魚雷1本を喰らって航行不能となつたために自沈処分された。

また強力な対空砲火を浴びせた「ジューノー」も爆弾1発が命中し、後部砲塔群が全滅するという大被害を負っている。そして「ジューノー」は海戦終了後、エスピリット・サントへの帰還途中に日本海軍潜水艦「伊26」の雷撃を受けて大爆発、轟沈する事となる。

「やってくるじゃないかジャップー！」

レンジャーが真っ二つになって沈むさまを眺めながら、ハルゼーは「エンタープライズ」艦橋でそう吐き捨てるように言った。

「だがこの借りは百倍にして返してやるからな！！ブローニング！こちらの攻撃隊はどうした！？報告電はまだ入ってこないのか！？」

ハルゼーはただそれだけが気になった。たとえ「レンジャー」を失っていても、敵空母2隻の打撃を与えられたのなら帳消しに出来る。

しかしそれに対するブローニングの表情はあまりさえなかった。

「申し訳ありません。敵戦闘機の機銃掃射で通信用アンテナが損傷し、送信は出来ませんが受信が出来ない状態となっています。現在修理中です。」

「だったら他艦に急いで問い合わせろ！」

「了解！」

ブローニングは急いで発光信号によるリレーで無線受信可能な艦に情報を問い合わせた。

そして間もなく攻撃隊から戦果報告が入ってきた。

「敵艦種不明大型艦1撃沈、空母1、巡洋艦1大破。その他数隻に損傷を負わす。」

その報告はハルゼーを落胆させるのに十分な物だった。さらに帰還してきた攻撃隊の数も出撃時の3分の2にまで減っていた。

その姿を見て、流石のブル・ハルゼーも撤退と言わざる得なかった。

攻撃！米機動艦隊（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

戦いの終焉

独立機動艦隊の攻撃隊が米機動部隊に攻撃を始めた数分後、独立機動艦隊にも米機動部隊を発進した攻撃隊が襲い掛かった。

戦闘はまず直掩の零戦隊と攻撃隊の護衛戦闘機であるF4F「ワイルドキャット」の空中戦から始まった。この時米戦闘機隊は戦訓から2対1、いわゆるサッチ・ウィーブ戦法で零戦に挑んできた。しかし、零戦とF4Fの数の差が30対40であり、さらに零戦自体も馬力をアップした33型であったため、結局この空戦の結果は3対12と零戦の圧倒的勝利となった。

しかし敵戦闘機には圧勝できたが、艦爆と艦攻の阻止には失敗した。

続いて米攻撃隊に牙を向いたのは打撃艦と巡洋艦の主砲だった。これらの艦艇には今回対空用の3式弾も積まれていた。40cm砲8門、20cm砲4門、15、5cm砲4門から打ち出された計16発の3式弾は、米軍が密集体系を解かなかったという幸運に助けられ、艦爆4機、艦攻3機を血祭りに上げた。

しかしやはり巨大な主砲では限界があり、一斉射撃できたのはその一回だけで、仲間の仇討ちとばかりに米攻撃隊は猛然と突撃してきた。

そして彼らは輪陣形内の艦艇でひときわ目立つ2隻の空母の内の1隻を見て仰天した。

「こいつは「レキシントン」だ!!」

旧米空母「レキシントン」こと帝国海軍空母「翠鶴」はこれまでも戦闘には参加したが、米軍相手にその姿を見せたのはこれが初めてであった。

「この泥棒野郎が!!」

米攻撃隊のパイロットは激高し、艦爆隊は「翠鶴」目掛けて一斉に急降下した。また艦攻隊も「翠鶴」を狙わんと海面スレスレに舞い降りた。

もちろんそれに対して何も行なわれないはずがない。輪陣形を形成する各艦から一斉に対空砲撃が開始された。日本海軍の対空射撃指揮装置は米軍の物に比べて時代遅れで、さらに近接防御火器や大口径機関砲に恵まれていなかった。そのため相対的に対空攻撃能力は下がっているのだが、独立機動艦隊は一味違った。

独立機動艦隊は新兵器の実験などもその任務の一環となっている。だから電子機器なども実戦試験の名でプロトタイプが配備されている。そしてこの時2隻の打撃艦と巡洋艦には試製2式滞空射撃指揮装置が搭載されていた。

2式対空指揮装置は、昨年竣工した新鋭の「綾瀬」級防空軽巡洋艦に搭載されている99式対空指揮装置の簡略版として設計しなおされた物で、原型の99式や米軍の射撃指揮装置よりは劣る物の、これまでの98式対空射撃指揮装置が速度350km程度の航空機を捕らえるのが限度であったのに対し、一気に450kmまであげている。

さすがに戦闘機を追うのは無理だが、雷撃機なら十分な性能であ

った。

また高射機関砲自体もようやく量産が始まった試製2式40mm機関砲を各艦が積んでいた。これによって独立機動艦隊は日本海軍の中でもかなり対空攻撃のレベルが高い艦隊となっていた。

この猛烈な対空砲火によって、3機の艦爆と2機の艦攻が突入前に撃墜された。また、米搭乗員を最も驚かせたのは、彼らが狙った「翠鶴」ともう1隻の空母である「天城」に搭載されていた新兵器であった。

「両舷噴進砲発射用意！！」

新設された砲座の射撃指揮所で指揮官が叫ぶ。

「目標直上の急降下爆撃機！！撃てー！！」

6機の艦爆が同時に急降下を掛けた瞬間、艦首よりに設けられたスポンソンの砲座から、凄まじい砲煙を残して、多数の噴進弾が発射された。

噴進弾とはいわばロケット弾である。もちろんミサイルのような誘導を持たない無誘導弾だ。同じような兵器としてはソ連のカチューシャロケットが有名である。

独立艦隊が搭載していた噴進砲は1弾の口径が12cmで、これを28連装としたものだった。この多数のロケットで面での敵航空機撃墜を図ったのだ。

実際かなりの効果があった。一斉に尾を引きながら飛んでくる物

体に米搭乗員は仰天し、恐怖のあまり狙いも付けずに爆弾を投下した。結果「翠鶴」には1発も被弾しなかった。

もつとも、良い事ばかりではなかった。噴進砲は発射時に凄まじい爆煙を残したために他の高角砲や機関銃の発射がしばらく中断となった。また敵に与えた恐怖は大きかったが、撃墜に至ったのは1機のみで、さらに噴進弾の1発あたりの重さがあり、再装填に時間が掛かった。

ただし米軍のパイロットたちは2隻に搭載された新兵器を恐れてか、それ以後積極的な攻撃を控えてしまった。代わりに目標とされたのが2隻の打撃艦だった。

この2隻は昨夜ガダルカナル島を砲撃し、つい数時間前艦隊に合流したばかりであった。艦隊内では比較的大きく、巨大な砲塔が目立ってしまった。

もちろん2隻とも必死の操艦を行い爆弾と魚雷をかわしていった。しかし、ネームシップの「背振」に対して、2番艦の「多良」は運から見放されてしまった。

米軍機の目標となって10分後、ついに除けられず、後部甲板に1000ポンド爆弾1発を被弾してしまった。

「背振」級は主砲こそ40cm砲を積んでいるが、基の船体は8000t級大型貨物船の設計を流用している。そのため船体強度は一応強化していたものの重巡程度の物しかない。その船体にこの打撃は痛かった。これがもし500ポンド爆弾であったか、命中が前甲板の砲塔だったらなどうかになったかもしれない。

後部甲板での爆発により対空火器の4割が使用不能となり、さらに煙突にも被害を受けたために速力が一気に半減した。

米軍機のパイロット達がこのチャンスを見逃すはずがなかった。残弾を有する機体が一斉に「多良」に殺到した。速力が半減し、対空砲火も減った同艦に逃れる術は無く、最終的に魚雷2本、爆弾3発を受けた。

商船が元となっている艦がこれほどの打撃に耐えられるはずがなく、まもなく艦首から沈み始め、30分後には沈没した。

打撃艦「多良」の沈没と前後して米軍機は引き上げ、米軍の最終的な戦果は「多良」撃沈のみだった。他にも複数の戦果を上げたと報告したが、いずれも誤報であった。

こうして独立艦隊は貴重な艦船を1隻失ってしまったが、空母1隻を撃沈した上、米機動部隊は撤退したので、戦略的には勝利であった。

この後独立艦隊はしばらくガダルカナル近海に留まったが、間もなく空母「隼鷹」と「飛鷹」を主軸とする第2機動艦隊が同海域に進出したため、トラック島に帰還した。

打撃艦「背振」型性能データ

全長180m 排水量1万6千t 速力31ノット

武装40cm連装砲2基4門

10cm連装高角砲4基8門（98式のプロトタイプ）

40mm連装機関砲4基8門

25mm連装機銃8基16挺

水偵3機（格納庫に搭載）

八八艦隊計画用に製造された40cm砲塔、「長門」級戦艦の改装後に降ろされた砲塔の有効利用と、短期間で量産可能を目的とした打撃艦として設計された。建造費を浮かすために船体は大型高速貨物船の設計図を流用。イギリスのモニター艦に比べて航用性能がアップしたが、戦艦との砲撃戦は自殺行為。主に対地攻撃と空母護衛、巡洋艦以下の艦艇への攻撃を主任務とする。元ネタは羅門佑人先生のコスミック刊「独立愚連艦隊」の高速打撃艦「背振」級と経済界刊「独立日本艦隊」の戦艦「坂本」級。

戦いの終焉（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

軍令部総長

ガダルカナル島をめぐる戦いは唐突に終わりを告げた。独立機動艦隊によつて空母「レンジャー」が撃沈され、さらにその2週間後に修理と航空機の補充が完了し、稼動するようになった「ワスプ」が潜水艦「伊19」によつて撃沈されたのだ。これによつて米軍の稼動空母が太平洋上から消滅してしまった。さらに、その後トラック島から出撃した小沢中将指揮の第一機動艦隊によつて、ガダルカナル島へと航空機を補充する目的でやってきた護衛空母の「ロングアイランド」が撃沈されるにおよび、米軍はガダルカナル島から撤退せざるえなかった。

制空権を日本側に取られてしまつては、物資の補給すら事欠く状況へと追い込まれてしまつたからだ。

この時日本側は米軍の撤退を増援と一時勘違いし、大いに慌てたが、翌日以降の航空偵察によつて誤報であつたと判明し、安堵するといふような場面もあつた。

9月1日。撤退した米軍の代わりに日本軍はようやく上陸準備が完了した一木支隊他の上陸部隊約4000名を上陸させ、ガダルカナル島を再占領した。それと同時にヘンダーソン飛行場には再び海軍の設営隊が前進した。

日本名ルンガ飛行場、米軍名ヘンダーソン飛行場は米軍の手で完全に破壊されてしまつていたが、代わりに密林から修理中に放棄されたと思われるブルドーザーが発見された。これを修理した海軍設営隊は約1週間で飛行場を修理し、ガダルカナル戦で戦死した笹井海軍少佐の名を取つて笹井飛行場と名付けた。

また、ラバウル側の島のいくつかにも設営隊が前進し、不時着用の飛行場を開設している。これによって、再びガ島に米軍が上陸しても円滑な支援が可能となった。

一方で、米軍のガダルカナルへの上陸と、それにとまなう大規模兵力の動員から、大本営や連合艦隊はガダルカナル以西の連合軍の兵力が強大な物であると判断し、サモア方面へ進撃するFS作戦を一時的に凍結させた。その代わりに、やはり凍結していたポート・モレスビー攻略作戦が実施される事となった。

ポート・モレスビーはニューギニア島にある都市の名で、そこにあるセブンマイルズ飛行場は、ラバウルやニューギニア西岸の日本軍占領地域を爆撃圏内に納めていた。また、逆にオーストラリアを爆撃するには好都合な立地であった。

4月にここを攻略するMO作戦が発動されたものの、空母機動部隊同士の戦いが痛み分けに終わり、日本側は攻略作戦を中止していた。その後、スタンレー山脈を越えての歩兵による攻撃も検討されたが、重火器の運搬が困難であることから見送られた。

ポート・モレスビーの再攻略作戦は昭和17年12月を目処に実施される予定であった。

一方、日本へ帰還した独立艦隊は、乗員の休養と艦艇の整備に入った。打撃艦「多良」の損失は痛かったが、その損害を補って余りある報告が桑名にもたらされた。

母港である伊豆に寄港してすぐ、大本営から呼び出しを受けた彼は、ただちに軍令部総長のもとへと向かった。

現在軍令部総長になったのは山本五十六海軍大将である。緒戦でハワイを潰し、南方各地の攻略を達成した彼は連合艦隊司令長官就任から3年経っていたこともあり、後任を古賀峰一大将に譲り、ミッドウェイ戦後の7月に現職へ就任した。

「お待ちしておりました桑名中将。」

桑名が総長室へと入るなり、山本は笑顔で彼を出迎えた。

「総長、階級が下の者へそのような態度を取るのはおやめください。誰かが見ていたら問題です。」

「ハハハ・・・大丈夫ですよ。今日からそのような必要もなくなりますから。」

その言葉の意味を、桑名は直ぐに読み取った。

「と言いますと、まさか私に大将昇進の事例が回ってきたと言うのですか？」

「その通りです。今日付けを持ってあなたは大将へと昇進です。それとともに、大本営直轄軍総司令官に親補されることとなっています。」

これには桑名も驚いた。

「なんと！？しかし私は中將からそんなに日が経っていないはずで
す。いきなり大將への昇進などして良い物でしょうか！？」

日本軍では階級の昇進までに、一定の期間をおくことが義務付け
られていた。桑名は中將へ昇進してから大して日が経っていないか
ら、大將へ昇進するなどありえない筈である。

「一応戦時特例という形となります。他の人間に適任者がおりませ
んの。どうかよろしく願います。」

山本は桑名に向かって頭を下げた。

「頭を上げてください山本総長。わかりました、帝国のために全力
を上げて職を務めさせてもらいます。」

「ありがとうございます。」

「しかし、大本営直轄軍という構想は以前から聞いておりましたが、
まさか実現するとは思いませんでした。」

すると、山本が笑った。

「私事です。」

大本営直轄軍は、その名の通り大本営の命令によって直接動く部
隊で、既に艦隊は独立機動艦隊が存在している。しかし艦隊だけで
はもろろん軍など編成できない。それが今回設立される運びとなっ
た理由は、まず桑名が創設した特試航空隊の実戦配備によって固有
の陸上航空兵力を持ったことが第一に上げられる。

そして第二の理由としては、先日ガダルカナル戦の前に米軍が行なったタラワへの潜入作戦によって、日本軍が特殊部隊の存在意義に気付いた事であった。この日本版特殊部隊については、ノウハウが全く無いため、とりあえず陸海軍から選抜した合同部隊として設立され、大本営直属部隊となった。これによって、大本営は直属の陸上兵力を持つに至った。

陸海空の3兵力が揃った事により、大本営直轄軍構想は具体化し、ついに10月1日付けで正式に編成される事となった。

「しかし、私が総司令官となると、艦隊の司令長官はどうなるのです?」

「それについては近江参謀長を昇進の上で親補する予定です。」

「なら安心です。」

桑名は満足そうな表情で言った。

「それとです。実は桑名さんにはもう一つお伝えしたい事があるんです。」

山本がニコニコした表情で言う。

「ほう、一体なんですか?」

「2ヶ月前に独逸軍がスエズ運河を奪取したのは知っていますね?」

それなら桑名も耳に挟んでいた。それまで一進一退の膠着戦が続いていた北アフリカ戦線であったが、日本軍がインド洋で英空母を

相当した事により、地中海での英軍の活動が不活発となった。その隙に補給を済ませたロンメル將軍はついにエルアラメインを突破、エジプトから英軍をたたき出した。

その後さらに独逸はペタンフランス政府を誑かしてマダガスカル島攻略作戦を展開し、これを占領した。後にヒトラーはこの島を、処分に困ったユダヤ人の流刑地としたのであるが、それはまた別の話である。

とにかく、スエズ運河とマダガスカル島の占領によって、日独航路は地中海経由で復活し、これを通して多数の物資が行き交うようになった。そんな中で、ヒトラー総統から日本へと思わぬプレゼントがなされた。

軍令部総長（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

独逸からのプレゼント

「ヒトラー総統のプレゼントとは一体何ですか？」

桑名が山本に問い掛ける。

「戦艦ですよ。」

その言葉に、桑名は一瞬言葉を失った。それよりも信じられなかった。

「今戦艦と言われましたが、一体どういうことでしょうか？独逸海軍の水上艦隊は弱体なはず。我が国にとっても戦艦を譲ってくれる余裕など無いはずでは？」

桑名の疑問はおそらく少しでも独逸海軍の事情を知っている者なら思い浮かべられる物だ。ドイツ海軍は第一次大戦当時から敵対国である英国に対して、水上艦隊の戦力では全く太刀打ちできなかった。そのために戦略を転換してUボートを大量建造し、英国の息の根を止める通称破壊戦を行なっている。それは今大戦でも同様だった。

独逸海軍はナチス党が政権を手に入れて以降、一応海軍力の増強を図ってきた。28cm3連装砲を持つ高速巡洋戦艦「シャルホルスト」級、英国を震撼させた「ビスマルク」級、先日竣工したという情報が入った空母「グラーフ・ツェッペリン」など。いずれも性能的にはそれなりだったが、如何せん数がいかに少ない。

昨年行なわれたライン演習作戦では英国の誇る「フッド」を撃沈

したもの、独逸海軍は虎の子の「ビスマルク」を失っている。現在残っている戦艦は宝石よりも貴重なはずだ。それを日本に譲る事などあり得なかった。

すると、山本も苦笑しながら言った。

「実はですね、確かにその戦艦を譲渡してくれるのはヒトラー総統です。しかしその戦艦は独逸の物ではないんです。」

「それは一体どういうことですか？・・・まさか？」

独逸がくれるが独逸の物ではない。それから導き出せる答えは限られていた。

「そのまさかです。ヒトラー総統が我が国にプレゼントしてくれた戦艦は、実はフランス製なんです。」

第二次世界大戦では早々に降伏してしまったために影がやたら薄いが、フランス海軍は英米日につらなる世界でも有数の海軍保有国である。それらの艦艇の多くは、独逸軍とマトモに戦うことなく本国が降伏してしまい、港に繋がれたままとなっていた。

独逸軍としてはこれらの艦艇を有効に使いたかったようだが、親独政権であるヴィシー政権が発足したために、これらの艦艇はいずれもフランス国籍であり続けた。そして昨年のアフリカ戦線においては、反英派の兵たちで編成されたフランス義勇艦隊がロンメル軍を掩護している。

しかし兵の一部が自由フランス軍に逃亡するなどしてしまい、運用できない艦艇も発生した。また独逸軍側も乗員の不足（独逸軍と

してはUボートと自国製艦艇の乗員確保を優先した）のためにこれら艦艇を使いこなせなかった。

そこで独逸としてはこれらを自分たちの利益になるよう、同盟軍への譲渡（形式上は売却）を考えたが戦意に乏しく、取りあえず戦艦の数に困っていないイタリア軍に渡す気にはなれず、他の国では海軍自体が弱体であった。

そんな時にスエズ運河が陥落し、日本との連絡が可能となった。そこで、独逸首脳部は持て余していた戦艦を日本に譲渡する事にしたのである。

ちなみに、裏の話としてこれら措置は親独感情が低いとされる日本海軍へのご機嫌取りの意味もあつたらしい。独逸にとつて、東洋から届く戦略物資は必要不可欠であつた。また日本海軍の実力もわかつていた。ヒトラーはマレー沖海戦で2隻の英戦艦を撃沈したことを賞賛している。しかし現在東洋の支配者となっているその日本のことをヒトラーは著書「我が闘争」で二等民族とこき下ろしている。

実際、ドイツ語の原書を読んで憤慨した海軍軍人というのかもしれない。

「とにかく、そういうわけで独逸はフランス製の最新鋭戦艦を気前良く譲渡してくれるそうです。それも駆逐艦4隻のオマケ付きで。これは我が軍には非常に魅力的な提案でした。そのため、申し出が行なわれたその日にはOKの打診をしました。」

「なんとまあ・・・それで、その戦艦というのは一体？もしかして噂に聞く「リシュリユー」級ですか？」

その桑名の問いに、山本はコクンと頷いた。

「その通りです。フランス海軍（ヴィシー政権軍）の戦艦で新鋭と呼べるのは、現在フランス義勇艦隊が使用している「ダンケルク」級を除けば、「リシユリユー級」のみです。その1番艦「リシユリユー」を譲渡してくれるとのことですよ。」

フランス海軍の「リシユリユー」級は「ダンケルク」級以来の4連装砲塔を前部甲板に集中配置している方式を採っている。その主砲口径は38cm。門数だけなら独逸の「ビスマルク」級、日本の「長門」級に匹敵する。

「それは何とも豪気ですな。しかし、フランスの感情を悪くするのでは？」

フランスの誇る最新鋭戦艦、しかもそのネームシップを奪ったとなれば、フランスの感情をかなり傷つけそうである。

「ああ、それなら心配無用と独逸側が言ってきました。なにせもとフランス人が手を余していた船ですし、さらに駐在武官からの報告では、3番艦の「クレマンソー」がまもなく竣工するとかで、戦艦の数は足りているらしいですよ。」

「そうですね。それで話の流れから見て、その戦艦をうちの艦隊に配備してくれるわけですか？」

「ええ。既に陛下による命名も終わり、軍籍にも登録されています。明日には独逸の回航要員の手によって呉軍港に入るはずですよ。」

山本の言う陛下による命名というのは、天皇による戦艦の命名のことだ。日本海軍では戦艦や空母と言った主力艦の命名は、まず海軍大臣が2つの候補を決め、最終的に天皇がその内の片方を決めるという方式を採っていた。

「艦名はなんと決まったのですか？」

「新戦艦の艦名は「土佐」に決まりました。かつての八八艦隊の戦艦の名を継ぐというわけです。」

実際の「土佐」は、空母に転用された「加賀」級戦艦の2番艦で、ワシントン条約で廃棄が決定し、各種実験を行なった後豊後水道で自沈処分されている。

「既に乗員も新兵やこれまでの沈没艦の生き残りが揃えられ、引渡しされ次第訓練を開始してもらうこととなっています。そして一刻も早く戦力に加えていただきたい。米国の海軍力は来年から一挙に増強されるでしょう、それまでに我々も少しでも多くの艦艇を揃えなければなりません。」

開戦前、山本は近衛首相に1年から1年半なら暴れられると答えた。その1年までもう時間が無かった。それを過ぎれば、アメリカは無尽蔵の工業力で多数の艦艇を揃え日本海軍に挑戦してくるだろう。山本の恐れが現実となる。

「わかりました。艦隊にはそう命令しておきましょう。」

「よろしく願います。それとです、実はあなた方にもう一つのプレゼントがありました。実は最近独逸との交易が活発化したのですが、我が国から飛行艇や水上機、酸素魚雷に航空機用魚雷を譲渡

した見返りとして、独逸軍は航空機の一部を我が軍に譲渡してくれるとのことだ。」

独逸からのプレゼント（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

出撃へ向けて

昭和17年11月、あらたに独逸から譲渡された戦艦「土佐」と竣工したばかりの打撃艦「阿蘇」を加えた独立機動艦隊は、再び燃料が豊富な南方資源地帯のブルネイに移動し、訓練を行っていた。

独立機動艦隊は次なる作戦であるポート・モレスビー攻略作戦に駆り出される可能性が高かった。開戦以来百戦錬磨と言えるこの艦隊は、何時の間にか帝国海軍の中でも非常に高い練度を持った艦隊へと変貌していた。特に艦隊の要である航空隊は第一次ミッドウェイ沖、インド洋、そしてガダルカナル島の戦いでも最低限の消耗率で済んでいた。そのため、第一機動艦隊に次ぐ有力な機動部隊となっていた。

もっとも、艦艇については前記した新規艦の配備に加えて、10月に行なわれた艦隊再編によって大きく入れ替わっている部隊もあった。この再編は新たに創設された海上護衛総隊への艦艇移動が原因だった。

開戦以前、日本海軍は対潜技術の研究と対潜部隊の創設をほとんど行っていなかった。これは日本海軍が日露戦争以来の艦隊決戦主義に凝り固まっていたのがその大元の原因である。海軍軍人の仕事は敵艦隊主力との決戦であって、それ以外は片手間仕事にすぎないというものである。

さらにアメリカ人は狭い場所が苦手であるから潜水艦を扱う事など出来ないという根も葉もない噂が、アメリカ潜水艦は恐れるに足らずという風潮を蔓延させていった。そしてこれが大きく間違っていたということを、開戦数ヶ月の内に特型駆逐艦が相次いで米潜水艦

に撃沈されたことでようやく海軍は悟る事となった。

そして今年中盤からオーストラリアを基地として出撃したと思われる米潜水艦の活動が活発になってきた。これら潜水艦は日本の生命線である輸送航路に度々出没し攻撃を行った。しかも魚雷の性能が不十分な物であったために、大胆にも浮上後砲撃する潜水艦が後を絶たなかった。

これには海軍も大いに頭を悩ませた。なにせ商船の会社や船長には散々無敵帝国海軍と宣伝して来たのに、よりにもよって帝国の内海とも言える地域で敵潜水艦の跳梁を許してしまったのである。

結局帝国海軍はしかたなく英国に倣って船団護衛部隊を新設した。それが海上護衛総隊である。この部隊は戦艦や大型空母を持たず、小型の護衛艦や基地航空隊、そしてカタパルトの設置でようやく使えるようになった商船改造空母を中心に編成された。

独立艦隊には試験的に建造された4隻の「Z」級コルベットが存在したが、今回護衛総隊に転属している。また、「梅」級駆逐艦も全艦海上護衛総隊に回されている。

「梅」級が抜けて駆逐艦が減ってしまったために、その穴埋めとして配置されたのが「雪嵐」型駆逐艦である。この艦は「土佐」とともに独逸から譲渡されたフランス製の「モガドル」型駆逐艦である。排水量は3000t近くあり、速力は39ノットを叩き出す高速駆逐艦だ。ただし日本海軍編入時に航続力を上げるために燃料タンクを増設したために、若干速力を落としている。それでも36ノットは出るが。

また独立機動艦隊本隊とは関係ないが、新たに潜水艦も増備され

ている。それが「伊606」である。この船も日本で建造された物ではなく、外国製である。

帝国海軍では、一応自国製潜水艦の番号は400までで充分とされ、それ以上の番号は外国製の艦に付けられる事となった。500番代が独逸から購入されたUボートに付与され、600番代以降は拿捕した潜水艦につけられる事となった。「伊606」も元はトラツク島近海で、航空機の攻撃を受けて戦闘不能になり降伏した「ガトー」級潜水艦の1隻だ。

ちなみに、それ以前の0から5までの6隻は、いずれも拿捕し番号を付与したものの、結局損傷が酷かったために再利用が出来なかった艦だ、

こうして艦隊の方が新しい艦艇を迎えている一方で、独立艦隊の基地航空隊とも言うべき特試航空隊も最近になって強化されている。先日行なわれたガダルカナル戦で大活躍した彼らであったが、さすがに機体のいくらかは損耗している。その穴を埋めるべく、新たに独逸から供与された機体が配置されている。

そのドイツ製の機体とはJu88双発爆撃機であった。決して最新型ではないが、日本の爆撃機に比べれば小ぶりでありながら爆弾搭載量が大きい使いやすい機体であった。本来はフィンランド空軍に売却される予定であったが、当のフィンランドがパイロット不足を理由に購入を中止したため、急遽日本に売却した機体であった。

スエズ運河を奪取し、マダガスカル島をも手中に治めたナチス・独逸はこの時期それまで枯渇していたアジア産の資源を手に入れんと、様々な方法を用いていた。戦艦「土佐」の譲渡や、航空機の売却もそうだった。

ちなみにこの手段はその他の国にも行なわれている。例えばタイにはフランスで捕獲した「モホーク」戦闘機や「ドヴァティ・ヌ」戦闘機を格安で売却し、イタリアに発注していた巡洋艦「タクシン」級の回航に協力している。

またチャンドラ・ボース率いるインド国民軍には、北アフリカ戦線で捕獲した英国製装備を、中華民国南京政府には中古ながら3号戦車やMe109戦闘機をやはり格安値で売却している。

こうした独逸の施策によって、アジア各国の兵器や科学技術は大幅に進歩しつつあった。しかしそれはいずれ語るべき別の話である。

とにかくそういうわけで特試航空隊も戦力を回復し、やはり南方へと進出して訓練中であつた。特試航空隊は独立艦隊系の組織の中では新兵の率が高く、この時期は月月火水木金金の毎日であつた。

新たに独立艦隊司令官となつた近江中将は、各部隊を連日視察し、その練度を確認していた。この日も彼の姿はブルネイ郊外の飛行場にあつた。

「うーん、爆撃隊の腕も大分上達したね。」

今正に上昇していくJu88、日本名「天狼」を眺めながら、彼は隣に立つ副官に言った。

「はい。ほぼ毎日にわたる飛行訓練の賜物です。」

「そうか、大いに結構。だが、搭乗員にしっかり休みも取らせなければいけないな。本番で疲労困憊で飛べないとなったら末代までの恥さらしだからな。」

「わかっております。」

「陛下からお預かりし、桑名大将から託された我が艦隊の将兵一兵たりとも無駄に死なせるわけにはいかんからね。これまでは勝利してこれたが、明日も勝てるという保障はどこにもない。万全の準備を持って次の作戦に望み、我々は勝利する。それが我々に課せられた義務だ。」

「仰る通りであります。」

副官も頷いた。その後2人とも無言で滑走路から飛び立つ飛行機を見ていたが、最後の機体が離陸するのを見て、近江はボソッと呟いた。

「将兵たちが頑張っている以上、俺たちもしっかりしなきゃな。」

独立艦隊新装備 「雪嵐」級駆逐艦

全長	137	/	5	m	排水量	2900	t	速力	36	ノット
武装	12	/	7	cm	両用砲連装	4	基			

40mm連装機関砲2基

25mm連装機銃4基

61cm4連装魚雷発射管2基

爆雷投射機、対潜砲他

独逸から譲渡されたフランス製の「モガドル」型駆逐艦。兵装は全て日本式に改められた。原型時代は39ノットの高速駆逐艦であったが、改装で燃料タンクが追加されたために速力は減じている。排水量は「天龍」級軽巡に匹敵する。主砲である12.7cm両用砲はアメリカ製の砲を元にコピーされた新型砲。

同型艦「春嵐」「晴嵐」「秋嵐」

出撃へ向けて（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

「雪嵐」級の元ネタは吉田親司作、実業之日本社発行の「零艦隊血風録」からです。

第二次MO作戦へ

第二次MO作戦、ポートモレスビー攻略作戦実施予定は12月初旬であった。それまで帝国陸海軍では戦力の回復を急ぐこととなった。幸いこの世界ではガダルカナルを巡る消耗戦は起きていない。そのため艦艇数にはまだ余裕があった。

一方陸軍も戦力はそれなりに揃えられていた。新型の空母型強襲上陸艦「あきつ丸」、「にぎつ丸」が実戦配備され、さらに新型の2式小銃も最優先で配備されつつあった。

陸軍が戦力や装備に余裕があるのも、中国戦線での泥沼を回避できていたからだ。

1937年7月7日に起こった盧溝橋事件は、翌日日本陸軍と中国国民党軍の共同声明で「犯人は共産党軍である。」と発表されて解決した。

この後、中国では国民党軍と共産党軍の内戦が激化した。当初は近代装備を持ち、支配領域も広い蒋介石率いる国民党軍が勝利すると思われたが、政治腐敗を大きく抱えていた国民党政府は質量ともに劣る共産党軍に連戦連敗した。特に、ソ連がモンゴル経由で戦車や飛行機を本格的に送り込み始めるとそれは確定的となった。

そのため、昭和14年2月に国民党は分裂。汪兆銘を主席とする北京政府が樹立され、日本は蒋介石の支援を中止し、この北京政府を正統な中華民国政府とした。

この後、蒋介石率いる中華民国南京政府は蒋介石の妻である宋美

齡のつてによつて米国からの支援を取り付けたが、内部腐敗という根本的な問題を解決しないことにはどうにもならず、結局敗退と撤退を繰り返す事となり、昭和16年初頭には、蒋介石軍は海南島とビルマ国境を結ぶ線にまで追い込まれた。

一方、日本の支援を受けた中華民国北京政府は満州国と日本を後ろ盾に、蒋介石軍撤退後に共産党軍が占領した地域を次々と占領し、最終的に石家荘、洛陽、武漢、アモイを結ぶ線までを支配領域に置いたが、それ以上の進撃は国力の上で無理であつた。汪兆銘国家主席は国力の増強を図るために、荒廃したインフラや工業の再建を急ぐ事となつた。

結局、昭和17年現在中国は3つ（満州を含めれば4つ）に分裂したまま膠着していた。日本は中国大陸では租界警備と北京政府を支援するための4個師団を送り込んだ以外は、武器その他の輸出のみに留めた。このお陰で日本は旧式兵器の在庫整理を完了させ、さらに中国への輸出品特需で経済の建て直しに成功した。

また英国も得意の二重舌外交を展開し、日本との開戦までは2つの国民党政府と貿易を続けた。特に北京政府へは工業用機械や陳腐化していた武器を多数輸出し、その見返りとしてバーダー取引で多量の農産物を輸入している。

そして1人大損をしたのはアメリカで、多額の借款や軍需援助をしたにも関わらず、蒋介石軍は再起不能なところまで追い込まれてしまい、その見返りを回収することは事実上不可能になってしまった。

これが対日参戦の一つの理由になつたとも言われている。とにかく、そう言うわけで日本の国力と予備兵力は史実よりかなり余裕が

あった。

一方で、帝国海軍はこの時期新設したインド方面艦隊を使って、オーストラリアからインドを結ぶ航路を攻撃していた。蒋介石軍の敗北は明らかだったものの、米国としては日本が敗北し北京政府が瓦解すれば逆転のチャンスはあるとして、支援を続けていた。

その俗に援蒋ルートと呼ばれる輸送路を日本海軍は攻撃していた。インド洋方面艦隊は旧式軽巡と旧式駆逐艦のいわば寄せ集め艦隊であつたが、わずかな護衛をつけただけの輸送船団を狩るだけならこれで充分だつた。

インド洋方面艦隊は昭和17年10月に設立されたが、その2ヵ月後には駆逐艦2隻沈没という被害で、撃沈輸送船11、艦艇5、撃破輸送船7、艦艇3、捕獲輸送船10、艦艇1という大戦果を上げたのであつた。しかも艦艇や輸送船は全てアメリカとオーストラリア籍だつた。これは両国政府と海運業界に大ショックを与え、結局この援蒋輸送はしばらく中止されることとなる。

そのため蒋介石軍はさらに困窮する事となつたが、幸いにも共産党軍も北京政府軍も積極的な進撃を控えていたため蒋介石軍が明日にも滅びるというような事態は避けられた。

ちなみに、本来インド洋の制海権を守るはずの英海軍は、マダガスカルを占領し、中東へと向かう枢軸軍との戦い、さらにセイロン島の防衛に忙しく、とても手を回せなかつた。

こうした情勢下、日本はポート・モレスビーへの攻撃を行わんとしていた。

昭和17年11月20日。訓練中だった独立艦隊と特試航空隊に出撃準備命令が発動されたため、訓練は急遽中止され、物資の積載が始められた。燃料・弾薬・食料・飲料水の積載が開始された。

そしてそれら作業が終了した11月22日、艦隊はブルネイを出港してトラック島へと向かった。

今回発動される第二次MO作戦では、第一機動艦隊と基地航空隊、そして独立艦隊が戦力として充当される予定になっていた。一方それに対する米艦隊は正規空母が「エンタープライズ」のみで、後は竣工を繰り上げた軽空母の「プリンストン」と「インディペンデンス」のみというお寒い状況だった。いかに国力が日本の30倍でも、戦時体制への移行はそう簡単ではないのだ。

そうになると、敵は主に基地航空隊となるだろう。そのため、日本陸海軍も基地航空隊を大幅に拡充していた。海軍はラバウルを中心に戦闘機200、陸攻100機をかき集めていた。また陸軍も各種戦闘機150、爆撃機120機を終結させていた。この600機近い空中戦力を一箇所に集中投入するのは、日本のポート・モレスビー占領への意気込みを象徴するものだった。

そして昭和17年12月4日、第一機動艦隊出撃に遅れること丸1日、補給を済ませた独立艦隊はトラック島を出撃し、一路珊瑚海を目指した。一方、米艦隊もエスピリット・サントを出撃し、これを邀撃せんとしていた。そして、ポート・モレスビーの陸上航空隊も、日本基地航空隊との激闘に備えつつ、日本艦隊への攻撃の機会も窺っていた。

今、珊瑚海に鉄の暴風雨が吹き荒れようとしていた。

第二次MO作戦へ（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

盧溝橋事件については、横山信義作 中央公論新社の「樺太沖海戦」が元ネタです。

第二次MO作戦 上

第二次MO作戦は1942年12月5日に発動された。最初の対決は、先発した連合艦隊指揮下の小沢中将率いる第一機動艦隊（一部第二機動艦隊を含む）とラバウルを始めとする陸海軍基地航空隊によるポート・モレスビー飛行場への空襲から始まった。

両部隊合わせて攻撃隊の総数は約600機。この内空母艦載機は最新鋭の零戦54型、「彗星」、「天山」であった。一方、ポート・モレスビー配置の米豪戦闘機は各種機体合わせて計300機であった。

この双方あわせて900機による大空中戦によって、日本軍は約70機、米軍機は150機がそれぞれ撃墜された。両軍合わせて220機が起こした火災の煙により、ポート・モレスビーの空は黒く染まった。

空中戦を潜り抜けた攻撃機は、対空砲火をもとめせず、ポート・モレスビーに建設されていた3箇所の飛行場に爆弾の雨を降らせ、その全てを使用不能に追い込んだ。これによってポート・モレスビーの制空権は日本側の物となった。

しかし、米豪軍は空襲を見越して爆撃機を既に密林の奥に作った掩蔽壕に隠すか、オーストラリアやソロモン海に浮かぶウッドラーク島の飛行場へと退避させるかしており、航空戦力の殲滅と言う点では不十分な戦果であった。

そして米軍側による反撃も直ぐに始まった。日本軍がポート・モレスビーを空襲している最中、ウッドラーク島から来襲した米軍機

に襲われた。この時来襲した米軍機は約100機で、その内訳は60機がP38戦闘機で、40機がB25爆撃機だった。

日本側は第二次ミッドウェイ海戦の戦訓から、直掩戦闘機を多く上げていたが、それでも総計40機で、米軍攻撃隊を止められる数ではなかった。

爆撃機40機はほとんど無傷で戦闘機隊の防衛網を突破した。しかし、すぐに次の反撃が行なわれた。この時第一機動艦隊には戦艦「比叡」、「霧島」、重巡「利根」、「筑摩」、「熊野」、「三隈」が随伴していた。その6艦の主砲が米爆撃機へ向けて轟然と火を噴いた。

この時、日本側は先日ガダルカナル奪回作戦で独立艦隊が試験的に行なった三式弾の射撃データを元に砲撃を行なった。しかし米爆撃機隊の乗員で、日本海軍が主砲用の対空弾を開発したと知る者はいなかった。

結果、三式弾の射撃によって17機のB25が撃ち落された。これは恐らく戦艦等が航空機を始めて大量撃墜した瞬間であった。

しかし、主砲の再装填には時間が掛かる、さらに残存する米爆撃機は被害拡大を防ぐ為に編隊を解いてバラバラに突っ込んで来たために、結局三式弾の斉射は一度きりだった。

だが日本側の対空戦闘の切り札はまだまだあった。今回の作戦には、日本が誇る98式10cm高角砲を主砲とする最新鋭の「秋月」型対空駆逐艦3隻も編成に加わっていた。

独立艦隊の実戦試験を元に開発された最新鋭の2式高射装置を搭

載した3隻の対空攻撃能力はこれまでの日本艦に比べて遥かに高いレベルで、この時も3隻合わせて8機を撃墜している。

また、その他の艦艇も増強した対空火器を空に向けて一斉に放ち、4機を撃墜している。しかしここまでであった。残る11機は次々と艦艇に向けて投弾した。

この時米軍のB25が行なったのは水切り遊びの原理を応用した反跳爆撃だった。これは今回、米軍でも始めての試みで、また日本側も初めて味わった爆撃方法だった。

投弾された爆弾の内、半分は信管や波の影響を受けて不発や海中に突っ込んでしまった。やはり初めての方法だけに不慣れな部分が出てしまったのだ。

しかしキツチリと命中した弾もあった。まず2発が戦艦「霧島」に命中したが、これは舷側装甲に食い止められ、最小限の被害で済んだ。さらに1発が重巡「三隈」に命中し、後部砲塔群に被害を与えたために、「三隈」は戦線離脱となった。そして何より痛かったのは空母「飛鷹」の被弾だった。

空母は舷側のスポンソンという張り出し部分に多数の対空火器を備えているが、海面から高さがあり、この時は超低空で飛んで来たB25を阻止する事が出来なかった。

結果、「飛鷹」は左舷後部に500ポンド（約224kg）爆弾1発を被弾してしまった。これが正規空母だったら被害も小さく済んだかもしれないが、「飛鷹」は正規空母に性能は準じているとは言え、客船改造空母である。船体強度はそこまで強くない。そのため爆弾は舷を突き破って艦内で炸裂し、機関室と格納庫に被害を与

えた。これにより、「飛鷹」は最高速力が16ノットまで減じ、さらに航空機の着艦が不可能となったために、戦線離脱となった。

こうして日本機動艦隊は、米軍攻撃隊の半分近くを撃ち落したものの、空母1隻と巡洋艦1隻の戦線離脱という代償を支払われた。

そしてこの時、独立艦隊は連合艦隊機動艦隊の後方約300kmまで進出していた。

新しい旗艦となった戦艦「土佐」の艦橋にも米軍機による第一機動艦隊空襲を受けるの報が届いた。

「米軍機の攻撃で「飛鷹」が中破、戦線離脱が・・・あまり幸先の良いスタートではないな。」

新司令長官である近江中将が通信室から届いた報告を一瞥して呟いた。

「しかしポート・モレスビーの飛行場は潰しましたから作戦は成功へ向かいつつあるのでは？」

今回参謀長として就任した長谷川雷太大佐が意見する。彼はごく最近まで大本営勤務の人間であった。そのため、どこか戦場の緊張感をわかっていないように近江中将には感じられた。

「参謀長、ただポート・モレスビーの飛行場を撃破しただけではないんだよ。報告によれば、機動艦隊を襲った米軍機はポート・モレスビーとは逆の方向から来たそうじゃないか？となると、ソロ

モン海に浮かぶ島のどこかに米軍が基地を築いている可能性が高い。つまり、我々は背後の見えない敵に怯えなければいけないわけだ。」

今回の作戦では、機動部隊の攻撃隊はソロモン海から発進し、スタンレー山脈を越えてからポート・モレスビーを攻撃する方法を採っている。これはオーストラリア本土から来る米攻撃隊を警戒しての処置だった。ところが、それにもかかわらず米軍機の襲撃を受けてしまったのは、連合艦隊の偵察と情報不足だった。

「では我々は偵察を厳にするのに加えて、それら島々の飛行場を潰すべきなのでしょうか？」

その言葉に、近江は首を振った。

「我々の艦載機だけでは力不足だ。それに加えて敵機動部隊が出撃したと言う情報もある。基地攻撃中に艦載機の爆撃を受けたら話しにならん。だからまず偵察を重点的に行なう。それで敵機動部隊が攻撃可能圏内にいなければ基地攻撃を行う。もしどちらとも発見できなければ、このまま予定通り第一機動艦隊の後を追う。」

「わかりました。」

長谷川が敬礼して行動に移った。こうして独立艦隊も動き始めた。

第二次MO作戦 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

第二次MO作戦 中

一方、エスピリット・サントを出撃した米機動部隊にも、陸軍航空隊が日本の機動部隊に打撃を与えたという情報が入ってきた。

「日本の空母1隻、大破確実か。反跳爆撃など子供だましと考えていたが、中々やるようだな。そう思うだろう？参謀長。」

空母「エンタープライズ」の艦橋で、司令官席に座ったレイモンド・A・スプルーアンス中将が報告電を読みながら、参謀長に向かって言う。

「確かに。あんな子供の遊びみたいな方法で空母を撃破してしまうとは、我々の出番がなくなってしまうです。」

少しばかり残念そうに言う参謀長に、スプルーアンスは言う。

「安心しろ参謀長。敵にはまだ空母が5隻もいる。獲物には苦労しないはずだ。もっとも、こちらは大いに不利な状況ではあるがな。」

この時スプルーアンスが指揮する新設の機動部隊は第18任務部隊である。「エンタープライズ」を旗艦とし、軽空母2、戦艦1、重巡3、軽巡2、駆逐艦11からなる。

「せめて「エセックス」が間に合えばよかったのだが。それに護衛艦の数も心許ない。航空機も雷撃機以外は相変わらずだ。それに対して情報によれば、敵は艦載機も新鋭機を揃えているようではないか。」

スプルーアンスの言う「エセックス」級ネームシップの「エセックス」は、予定を繰り上げて10月下旬に竣工したものの、乗員とパイロットの習熟が間に合わず、いまだカリブ海で訓練中である。護衛艦も最近独逸軍がフランス海軍を抱きこんで水上戦力を増強させたために、大西洋へと一部が引き抜かれてしまった。さらに艦載機も新鋭のF6F「ヘルキャット」の装備を急がせたが、結局間に合わなかった。

「ですがこちらには陸軍航空隊の支援もつきません。一方的に劣勢と言っわけではないかと思いますが？」

参謀長が悲観的な意見を言うスプルーアンスに向かって、窘めるように言う。だがスプルーアンスは慎重な姿勢を崩しはしない。

「それを言ったら敵も同じだ。特に日本海軍にはマレー沖海戦で使われた魚雷装備可能な中型攻撃機がある。以前は防弾装備がなかったそうだが、最近は強化しているとも報告されている。油断は出来ない。」

日本の1式陸攻は、ラバウル占領直後に起きた米機動部隊への爆撃作戦で大損害を負ってから、武装や防弾の増強が行なわれ、現在もつとも新しい32型は、若干の航続距離減を代償にして、自動消火装置と防弾ゴム、簡易銃塔の装備を行なっている。

「それにだ。例の艦隊も気になる。」

「例の艦隊？報告にあった独立艦隊ですか？」

開戦直後から、米海軍は未知の空母や、アメリカから拿捕したと思われる艦艇で編成された謎の機動部隊に辛酸を舐めさせられてき

た。ガダルカナル沖海戦を通し、その艦隊に対する情報収集が活発化し、ようやく最近になって、それが大本営直属の独立艦隊であるのがわかった。

「そうだ。彼らが出撃しているのならば、戦力バランスはさらに大きく日本側に傾いてしまう。そうになると、我々に残された手段は一刻も早く日本軍に一撃を与え、それが終わったら一目散にオーストラリアに逃げ込むしかない。」

第18任務部隊の艦載機は3隻の空母あわせても180機しかない。彼らが採れる手段は自ずと限られてくる。

「とにかく、偵察と艦隊周囲の警戒を厳重にしてくれ。」

「アイアイ。」

この時点で第18任務部隊は、発見されている日本機動艦隊を攻撃圏内に捉えておらず、攻撃隊の出撃は明日になると思われた。

一方、スプルーアンスと同じく、偵察を強化するよう命令された独立艦隊からも多数の偵察機が発進し、出撃したであろう米機動部隊を探していた。

そして両軍の偵察機はほぼ同じ時刻にお互いを発見した。そして両方とも戦闘機によって撃墜された。

この時、時刻は既に午後4時を回ろうとしていた。そのため、近江もスプルーアンスも迷った。今出撃させれば、攻撃時刻はともか

く、帰還時刻は確実に夜間となってしまう。そうすると、事故機が続出する可能性があった。しかも、夜間飛行能力がない戦闘機は随伴できない事になる。

決断はスプルーアンスの方が早かった。

「ここは一端日本艦隊とは距離を取る。」

彼は艦隊針路を変更させ、一端遁走に移った。これは万が一敵攻撃隊が飛んできても振り切れる可能性を高くするためと、砲撃戦力でも負けている状況では、不用意に距離をつめるのは得策ではないと彼は判断したからだ。

一方、近江の方も若干送れて決断した。

「攻撃隊発進は明日早朝とする。今から発進させて貴重な搭乗員を傷つけるわけにはいかない。」

彼もスプルーアンスと同じく攻撃隊の発進は見合わせた。代わりに、偵察機を常に敵機動部隊に張り付けておくよう指示した。敵の位置を常に把握するためだ。

こうして両艦隊は海戦1日目の夜を迎えた。

ところでこのお互いの発見電は、もちろん周囲の味方にも伝わっていた。大半の部隊は、薄暮攻撃になるのを嫌って動かなかったが、行動に移った部隊もあった。

まず日本側では、ニューギニア東側の基地に展開していた少数の陸攻が、航空魚雷を抱いて困難な夜間攻撃に出撃した。また米軍側

でも、ソロモン海の諸島群に設けられた秘密飛行場からB24やB26といった機体が少数出撃している。そしてこの攻撃隊は、それぞれ大失態をしでかしてしまった。

まず日本の陸攻隊は、機位を誤ってモレスビー攻略部隊を攻撃してしまったのだ。幸い艦艇の方に被害は出なかったが、同士討ちで陸攻2機が撃墜されてしまった。また米軍攻撃隊は同様に味方の第18任務部隊を誤爆し、駆逐艦1隻を至近弾で小破させている。

この夜はお互いに混乱の連続だった。陸攻隊の誤爆が終わった直後、攻略部隊の護衛を行っていた軽巡の「由良」が突然爆発した。誤爆の騒動に気付いて近づいてきた米潜水艦の魚雷攻撃だった。これによって攻略部隊は現場に2時間も足止めされた。

一方の米軍もこの数時間後大きな混乱を来した。オーストラリアのクックタウンが日本艦隊による艦砲射撃を受けたという報告を受けたからだ。

「一体何がどうなっているのだ？」

就寝中を誤爆騒ぎによって叩き起こされ、さらにオーストラリアから届いた電文を見たスプルーアンスが首を捻った。

この艦砲射撃は、独立艦隊所属の2隻の潜水艦が行なった陽動目的の小規模な砲撃であった。潜水艦に積まれた砲での射撃であったから、その戦果はもちろん小さい物であったが、敵の攻撃をはじめて直接受けたのだから、オーストラリア軍と市民達はパニックに陥り、かなり過大な報告をしてしまった。

「どういうことだ？別の日本艦隊がいるというのか？」

もしそうならば、第18任務部隊は挟撃される可能性があった。
常に背後の见えない敵に怯えなければいけない。

第18任務部隊はそのような状況で、独立艦隊との戦いに望まなければならなかった。

第二次MO作戦 中（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

クックタウン砲撃は、林譲治作 学研刊の「興国の楯」が元ネタです。

第二次MO作戦 下

大混乱の一夜が明けた。スプルーアンス中將は一時、オーストラリアのクックタウンを砲撃したという敵艦隊の影に怯えかけたが、3時間ほどして、ようやくそれが潜水艦による小規模な物であったことを知らされ、胸をなでおろす事が出来た。

「後方の安全は確保された。さあ我々も仕事に取り掛かろう。」

「サー・イエスサー！」

米機動部隊はソロモン海から珊瑚海に入り、ポートモレスビーを攻撃している日本艦隊に鉄槌を落とさんとしていた。

既に夜明け前、3隻の空母からは偵察のSBD「ドントレス」とTBF「アベンジャー」計30機が発進し、日本機動艦隊を探していた。

一方、独立艦隊からもほぼ同時刻に多数の水偵と偵察機が発艦した。こちらもソロモン海から珊瑚海へ入った。

前回の海戦で打撃艦「多良」を失ったものの、あらたに戦艦「土佐」と打撃艦「阿蘇」が戦列に加わっているために、水偵の数は増えていた。「土佐」と「阿蘇」はそれぞれ後部甲板が水上機格納庫になっているからだ。

発進した水上機は2式水上偵察機「海雲」である。この機体は独

立艦隊のみで使用されている空技廠製の新鋭機である。もっともその実態は、零式水上偵察機のエンジン強化版である。

この時点で海軍が航空機メーカーに発注している水上機は、川西の「紫雲」と愛知の「瑞雲」があった。しかしどちらとも実戦への投入は遅れていた。これは「紫雲」の場合様々な新技術を盛り込んだため。「瑞雲」の場合は急降下爆撃性能を持たせるためにそれぞれ設計に戸惑ったからだ。

「海雲」は傑作機と名高い零式水上偵察機を原型に、発動機を1500馬力の「金星」62型へと換装し、主翼への機銃装備、後部機銃の増強、機体防御力の強化等の改良が行なわれている。ただし、「紫雲」や「瑞雲」のように新技術や特殊性能を盛り込んでおらず、どちらかというところ機種採用までの繋ぎの機体という色が強い。

その「海雲」が計12機、それに加えて空母搭載の「彗星」艦爆12機が索敵のために発艦していった。

偵察機発進から2時間後先に獲物を発見したのは米軍であった。ただし、それは独立艦隊でも第一機動艦隊でもなく、昨夜のごたごたで進撃が大幅に遅延していた上陸部隊輸送中の攻略部隊であった。この時「攻略部隊」には軽空母「瑞鳳」と「祥鳳」が護衛としてついていたが、米軍機の大規模な襲来を受けたら大打撃を受けること間違い無しだった。

この報告に、スプルーアンス中將は迷った。

「ここで敵上陸部隊に大打撃を与えられれば、日本軍は撤退せざる

を得ないだろう。だが、その間に敵機動部隊の袋叩きなる恐れもある。」

航空戦力が大幅に隔絶している状況で、敵機動部隊の撃破なしに別目標を攻撃するのは大きな危険が伴う。しかし、もし輸送船団を壊滅させられればアメリカ軍の戦略的勝利となる。

「長官、私としましては取り敢えず敵機動部隊の発見と攻撃を優先するべきと考えます。上陸船団などは、陸軍や海兵隊に任せておけばなんとかかなると思います。」

参謀長は敵機動部隊攻撃を具申した。しかし、その他の参謀は機動部隊壊攻撃と輸送船団攻撃派にわかれてしまった。

スプルーアンスは双方の意見を聞き、最終的に決断した。

「ここは敵輸送船団攻撃を優先する。我々の任務はモレスビーの救援だ。だったら直接の脅威である上陸部隊を優先目標にしよう。」

結局この決断によって、攻撃準備を整え待機していた航空隊は日本の輸送船団を攻撃する事となった。攻撃隊の総数はほぼ全力出撃の120機だった。

「なんだよ、敵は輸送船かよ。」

「歯ごたえ無い相手だな。」

敵機動部隊との戦闘を思い描いていた若いパイロット達はそう愚痴を言い合う。それを上官が叱責する。

「バカ野郎！輸送船だろうとジャップなんだ！そういうことは敵を沈めてから言え！！」

こうして多くのパイロットたちが釈然としないまま、攻撃隊は一路日本輸送船団へと飛んでいった。

一方、第１８任務部隊の偵察機が攻略部隊と接触してから３０分送れて、独立艦隊の「海雲」偵察機も第１８任務部隊を捉えた。ちようどこの時、米空母からは攻撃隊が発進し始めたところだった。偵察機はそのこともちゃんと打電した。

この電文を見て、近江中将は悔しかった。

「くそ、先手を許したか！？こちらは偵察機の接触を受けていないから、そいつらの目標は恐らく第一機動艦隊だ。無線封止解除。ただちに警告電を発進せよ。」

近江は、この米攻撃隊が第一機動艦隊へ向かったものと思い込んでしまった。しかも、無線封止を解除したために、第１８任務部隊はもとより、陸上基地の敵にもその存在が知られてしまった。これは彼にとっての一種の賭けであった。

そして数分後、独立艦隊からも総計１２０機の攻撃隊が米艦隊目掛けて発進した。

「敵無線傍受。恐らく別働中の敵機動部隊。推定位置、本艦隊より

北。距離は不明なれど至近だと思われます。」

近江が博打同然で打った電文は米機動部隊に捉えられ、それから20分ほどして発信位置を割り出された。

「何だと!!」

スプルーアンスは驚きを隠せなかった。いつのまにか、独立機動艦隊との距離は指呼の差までに詰まっていたのである。既に日本の偵察機に発見されているから、攻撃隊が襲来するのも時間の問題だった。実際、独立艦隊との距離は250kmしか離れていなかった。

「対空戦闘準備だ!!」

彼がそう叫んでからまもなくして、レーダーが敵機の大編隊を捉えた。

「見つけたぞ! 敵機動部隊だ。全軍突撃せよ!! ならびに敵対空砲火に厳重注意せよ!!」

総隊長機から突撃を命令するト連送が発進され、攻撃隊各機は突撃に移った。米艦隊上空にはF4F戦闘機30機が守りをかためていたが、数でも性能でも劣る彼らが独立艦隊の零戦32型に勝てるはずもなく、攻撃隊はその防衛網を易々と突破した。

「最優先目標は中央の空母3隻だ! そして防空巡洋艦や戦艦の対空砲火も潰せ!! 沈める必要はない、戦闘不能に追い込めば良い!!」

これまでの戦訓を学んだ独立艦隊攻撃隊は、相手を沈めるよりも、最初の1撃で如何に多くの艦艇を戦闘不能に陥れるかを優先していた。

命令によって、攻撃隊各機は輪陣形中央の「エンタープライズ」、
「インディペンデンス」、
「プリンストン」に殺到した。それに対して、艦艇も一斉に対空砲撃を開始した。

こうして後に第二次珊瑚海海戦と呼ばれる日米機動部隊による対決は、その火蓋が本格的に切られたのであった。

第二次MO作戦 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

上陸部隊壊滅！？

「なんたる無様な戦いだ。」

スプルーアンス中將は、傾斜し沈みつつある「エンタープライズ」の艦橋で、そう自身に対する悪態をついた。今彼の目の前で繰り広げられている光景は悪夢以外の何物でもなかった。

既に軽空母の「プリンストン」は艦体の半分近くを水没させていた。また「インディペンデンス」も艦全体が炎に包まれ、小規模な爆発を繰り返している。そして彼が座上する「エンタープライズ」も、もってあと20分もあれば良いところだった。

「提督、退艦準備完了しました。救助用のランチへ移動してください。」

参謀長が後ろから声を掛けて来た。

「ああ、わかった。」

スプルーアンスは傾いている足元に注意しながら歩き始めた。

「空母以外の被害がどうなっているかわかるかね？それとこちらの攻撃隊の戦果はどうなった？報告はまだ来ていないのか？」

すると参謀長は諭すように言った。

「残念ですが、本艦の無線室は既に機能しておりません。ご確認は「ポートランド」に移乗してからお願いします。」

その言葉を聞いて、スプルーアンスは目を閉じて小さく頷いた。

「わかった。そうしよう。」

スプルーアンスは再び歩き始めた。

この22分後、開戦以来戦闘を続けてきた最後の正規空母である「エンタープライズ」は、珊瑚海深く沈んでいった。

独立艦隊の攻撃隊は、わずかな数の直掩戦闘機隊を突破すると、とにかく空母にその戦力を集中し、攻撃してきた。米艦隊は一斉に対空砲火を撃ち上げ、これに対抗した。

これまでの戦訓から、米軍の対空火力は大きく強化されていた。駆逐艦の主砲にさえなった5インチ両用砲。日本など各国がコピーし、その性能の優秀さを知られた40mmボフォース機関砲。零戦に積まれたのと同系統の20mmエリコン機関砲。それら対空火器の数が開戦時とは比べられないほどに増強されていた。

如何に独立艦隊攻撃隊の機種が最新鋭の「彗星」や「天山」だったとはいえ、これだけの対空火力を向けられては全く無傷とは行かず、「彗星」7機、「天山」8機が撃墜されている。他に、戦闘機との戦闘を終えて、味方攻撃機の突入を助けるために敵艦を機銃掃射した零戦2機も撃墜されている。

もつとも、日本側の損害はむしろ少ないほうとも言えた。なぜなら、このとき軽空母「インディペンデンス」と「プリンストン」はいずれも竣工したばかりで、乗員の練度が他艦より大きく劣っていたからだ。

とにかく、海戦の結果は米軍の三空母が全滅したというものであった。この他に、戦艦「ワシントン」が魚雷一本（これは空母を狙って外れた物が当たった。）を喰らって速力を減じた。

この瞬間、太平洋から一時的に米空母は消滅したのであった。しかし、彼らが放った攻撃隊は、それに見合う戦果を残していた。

独立艦隊が米空母を撃滅したのに少し遅れて、米軍側の攻撃隊が輸送船団に襲い掛かった。この攻撃は、まさに日本側の予想を裏切る物であった。日本海軍の誰もが、米軍攻撃隊の目標は第一機動部隊という連絡に疑いを持たなかったし、持とうともしなかった。機動部隊の攻撃は機動部隊に対して行われるという固定観念を持ってしまったがために起きた悲劇だった。

もちろん、輸送船団側とてただ座して死ぬようなマネはしない。電探で敵編隊を捉えると、まず護衛していた空母「瑞鳳」と「祥鳳」から、先に上空哨戒していた部隊への増援の零戦が飛び立ち、さらに護衛艦艇の対空砲火が火を噴いた。

しかし、零戦隊はほぼ同数のF4F戦闘機との戦闘に手一杯で、とても艦爆や艦攻を攻撃している余裕はなく、船団への接近を許してしまった。また船団や護衛艦の対空砲火も、装備が古かったり、数が少なかったために、有効な反撃を採れなかった。

その結果は日本側にとって悪夢だった。兵員と物資・弾薬を輸送していた高速商船6隻中4隻が撃沈され、乗り込んでいた6000名の兵隊が投げ出され、内3000名が戦死するという、大惨事の

上の大損害を被ってしまった。さらに2週間分の食料と弾薬が海のことへと消えた。この他に、駆逐艦3隻が撃沈され、軽空母「祥鳳」も爆弾2発を喰らって航空機の運用が不可能となった。

上陸部隊の数は一気に半分まで落ちこんでしまった。幸運だったのは、戦車や車両、そして残り半分の兵員を運んでいた一等輸送艦と二等輸送艦計6隻が全艦無事であった事だ。

一等、二等輸送艦はともに敵地への強行上陸や、有力な港湾を持たない味方の諸島群への効率の良い物資輸送が出来るよう設計開発された物で、一等輸送艦は現在海上護衛総隊用に建造が進められている「桜」型護衛駆逐艦との共通艦体であり、電気溶接を多用したために建造期間はわずか5ヶ月で済み、1番艦から4番艦の全てが海外の造船所に発注されている。

二等輸送艦も同様であるが、船体は大きく違い、浜辺にのし上げる揚陸艦のスタイルを採っていた。

ちなみにこの2艦種は、「桜」型駆逐艦と同じく戦時急造艦としては非常に出来が良く、使い勝手も優れていたので、満州国や中華民國北京政府、自由インド軍、さらには独逸軍にも譲渡されている。

話を元に戻す。米軍攻撃隊の予想外の攻撃で、日本側は攻略作戦を中止するかいなかの瀬戸際に立たされてしまった。しかし、ここで中止すれば帝国陸海軍は二度とモレスビー攻略の機会を得られない可能性もあった。

上陸部隊司令官の五藤中将は散々迷ったものの、こちらは未だ味方機動部隊の支援が受けられる状況であり、さらに敵機動部隊は壊滅したという報告を受けたために、これ以上の攻撃を受けることは

ないと判断して、進撃を続行させた。

一方、輸送船団に大打撃という報告を受け取った第一機動部隊の小沢中将は地団駄を踏み、また誤判断を下してしまった近江中将は、一瞬間を蒼くしたものの、すぐに米艦隊へ向けての突進を開始した。

「ここで米艦隊を撃滅せねば、末代までの恥さらしだ!!」

近江中将の命令の元、独立艦隊は米艦隊へ突撃すると共に、再度の航空攻撃の準備に入った。

この時、米機動艦隊との距離は180kmにまで迫っていた。そして米艦隊は速力を20ノットまで減じた戦艦「ワシントン」を引き連れているために、徐々に独立艦隊との距離を詰められていった。

そして正午過ぎ、第二次攻撃隊が独立艦隊より発進した。内訳は艦戦16、艦爆28、艦攻22の計66機。既に米空母を全滅させているため、そして陸上基地からの空襲に対処するため、艦戦の数は減らされ、また爆装を行なっていた。

この攻撃隊が発進した時には、既に米艦隊との距離は120kmにまで迫っていた。

発進後わずか20分で攻撃隊は米艦隊への攻撃を開始した。すでに艦戦はいないため、彼らの攻撃を阻むものはいなかった。

結果は損傷していた「ワシントン」に引導を渡し、さらに軽巡「セント・ルイス」を中破させ、駆逐艦2隻を撃沈した。

そして決着は夜に持ち越された。

上陸部隊壊滅！？（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

スプルー・アンス提督の博打

独立艦隊による航空攻撃が終わると、米艦隊は手早く沈没艦の乗員救助を開始したが、これは独立艦隊に距離を詰めるための時間を与える事となった。また帰還した攻撃機を海上に不時着させ、その乗員救助も必要だった。さらに、予想もしていなかった相手の攻撃を受けることとなった。

それは沈没艦の乗員救助を始めて間もなくの事であった。

「レーダーに反応。機数約40機。方位は300度、速力200ノット！！接触まで10分！！」

「バカな！！」

重巡「ポートランド」に移乗したスプルー・アンス中将は吐き捨てるようにいった。既にラバウルの基地航空隊の攻撃圈内からは離脱したはずである。独立艦隊も攻撃隊の機数と空母の数から考えて再出撃できる余力など無いはずだ。だから第18任務部隊を捉えられる敵航空機などないはずなのである。

だが10分後、北西の空に現れたのはまぎれもなく、日本の雷撃機であった。

「どこから飛んできたんだ？」

スプルー・アンスを混乱させたこの攻撃隊の正体は、第一機動艦隊より発艦した「天山」雷撃機の群むれであった。

第一機動艦隊司令長官の小沢中将は、モレスビーへの対地支援を基地航空隊に任せて一端引き上げ、全力で第18任務部隊を追跡した。しかし距離が離れていた上、日没までの時間も限られていた。そこで彼は、独立艦隊からの「敵空母全滅。敵直掩機ナシ。」という電文を読み、一番航続距離の長い「天山」のみで攻撃隊を編成して発艦させたのである。その数48機。隊長は真珠湾以来のベテランであり、雷撃の神様という異名を持つ村田重治少佐だ。

「くそ、戦艦は独立艦隊に取られてしまったか・・・全機へ、攻撃目標は重巡と軽巡を最優先とする。かかれ!!」

これまで空母や戦艦に雷撃する訓練を積んできた彼らにとって、軽巡や重巡と言った相手は獲物として小物ではあるが、敵であることに代わりはない。彼らは猛禽のごとく襲い掛かった。

米艦艇乗員達は、疲れた体に鞭打ってこの日3度目の対空戦闘に臨んだ。この時、米艦隊にとって幸運だったのは、日本側の攻撃隊に急降下爆撃隊がいなかったために、雷撃機のみに対しての回避運動をすればよく、さらに乗員もひたすら海面を撃つだけで良かった。だから精神的にもわずかばかりであるが余裕が持てた。

結果、48機もの雷撃機を投入しての戦果は2本を命中させた駆逐艦1隻にとどまり、その他に軽巡「ホノルル」に1発を命中させて速力を落としたのみだった。

48本中の3本、命中率にしてわずか6%はいくらなんでも低すぎた。

村田雷撃隊は1機未帰還のみという被害だったが、物足りない戦果に齒軋りしつつ帰還した。だが、彼らの足止めは充分役に立った。

雷撃隊が帰還してからほどなくして、今度は水上レーダーが艦影を捉えた。

「日本艦隊が追いついてきたか・・・損傷艦を抱えている状況では逃げられる物ではない。対艦戦闘準備だ！！」

「イエス・サー」

スプルーアンスは日本艦隊との砲撃戦に挑むことにした。ただし、この時のスプルーアンスは本気で戦う気は毛頭無く、敵艦との砲撃戦を行ないつつ、夜陰にまぎれて脱出する気であった。

しかし、この時スプルーアンスが独立艦隊に38cm砲8門を持つ戦艦と、防御力には劣るものの、40cm砲を持つ打撃艦がいることを知っていたら、違う行動を採っていただろう。

敵艦隊との距離が徐々に近づくなか、最初にやってきたのは複数機の水偵だった。

「あれは弾着観測機ですね。」

参謀長が艦隊上空を飛び回る水上機を眺めながら言う。鬱陶しい敵であるが、既に空母のない米艦隊には追い払う手立てはない。

「日本人は夜間でも水上機を上手く使っているようだな。だが、それも時代遅れになりつつある。詳しい原理についてはわからんが、これからはレーダーの性能差が海戦の趨勢を決めるはずだ・・・レーダー室。敵艦との距離は？」

スプルーアンスが艦内用電話でレーダー室に問う。

「現在およそ18海里です。敵艦隊速力28ノット。」

現在第18任務部隊は、日本艦隊と反抗する形で、20ノットの速力で進んでいた。駆逐艦と巡洋艦の集まりとしては遅いが、これは損傷艦を抱えているから致し方ない。

「射程に入り次第とにかく撃ちまくれ、相手を沈める必要はない。攪乱してとにかく逃げるチャンスを作れ。」

敵に背を向けるのは武人としては如何な物であるが、敵との戦力差が開いており、まともな戦いが出来ないのだから仕方がない。

もつとも、米艦隊も戦力が極端に低いわけではない。現在魚雷を1本ずつ受けて速力こそ下がっているものの、軽巡「セント・ルイス」と「ホノルル」の2隻はそれぞれ15.2cm砲を3連装5基15門搭載している。しかも、その砲は発射能力が毎分10発以上と非常に高性能である。この砲をもつてすれば、数隻の敵艦相手にも戦える可能性があり、攪乱するだけなら充分という考えがスプルーアンスたちにはあった。

だが、その見通しが成り立たない事は、程なくしてわかった。

「敵艦隊に発砲炎!!」

前方海上を凝視していた兵が叫んだ。

「なんだと?しかし敵艦隊とはまだ17海里はあるのではないのか?遠雷か何かを見間違えたのではないかね?」

「いえ、確かに発砲炎にしか見えませんでしたか・・・」

スプルーアンスたちにまさかという疑念が走る。そして1分ほどして、突然艦から少しはなれた場所に水柱が現れた。

「何!？」

スプルーアンスが声を上げた。

「砲撃です!!」

参謀の1人が叫ぶように言った。

「そんなのは見ればわかる!何ということだ・・・敵艦隊には戦艦がいたのか。」

スプルーアンスは思わぬ誤算に齒噛みした。その間にも、敵艦隊との距離は近づいていく。本来なら、ほぼ同時刻に両艦隊が砲撃を開始するとスプルーアンスは予想していた。しかし、今の状況はこちらが射程に入るまで一方的に撃たれ続けることとなる。先ほどの砲弾は大きく外れたが、弾着観測機を飛ばしているいじょう、精度は高くなっていくだろう。

その時、「ポートランド」上空で、照明弾が光った。日本機が投下した物である。

「こうなったらやむを得ないか・・・全艦に信号。艦隊陣形を解除。今後は個艦にて行動し、オーストラリアを目指すべし。」

スプルーアンスは前代未聞の命令を下した。艦隊をバラかして個艦で動かすなど正気の沙汰ではない。しかし、夜間であるから敵を振り切れる可能性もないことはない。このまま砲撃戦を続けさせるより、1隻でも多く逃がすことを考えた上でのスプルーアンスの奇策であつた。

この直後、米艦隊はそれまで作っていた単縦陣を解除し、それぞれ衝突に注意しつつ転舵し、バラバラな方向へと舳先を向けた。そして、最大船速で日本艦隊からの遁走を開始した。

スプルーアンス提督の大博打の始まりであつた。

スプル・アンス提督の博打（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

次なる戦いへ

一方、バラバラに米艦隊が逃走する様子は独立艦隊のほうでも、レーダーと観測機からの連絡で確認された。

「陣形を崩しただと!!」

近江司令官は相手の司令官が気でも狂ったのではないかと思った。陣形をいきなりくずせば、それこそ多重衝突を起こしかねない。ましてや今は視界が制限される夜である。いくらレーダーを持っても危険すぎる。

しかし、これこそがスプルーアンス中将の目論見であつた。この混乱によって、日本艦隊からの砲撃は一時的に止んだ。その隙に、米艦隊は全速力へとスピードを上げた。幸いな事に、彼らは危ない場面こそあつたが衝突は免れていた。

「敵艦隊、バラバラの方向に逃走しています。目標はどうしますか？」

狙いをつけるのに困つた砲術長が艦橋にお伺いを立ててきた。

近江はあまりにも常軌を逸した行動を取つた敵艦隊に向かって齒噛みした。

「一杯食わされたな。・・・しょうがない、一番近い場所にいる敵艦を攻撃するんだ。」

結局、全速力で逃げ去つた敵艦の追尾は不可能と判断し、近江は

確実な戦果を期すことにした。そしてその目標にされたのが、魚雷を受けて速力が20ノットしか出なくなっていた軽巡「セント・ルイス」と「ホノルル」だった。また「リヴァモア」級駆逐艦1隻が独立艦隊の針路を逃走中だった。

「ようし、では落ち武者狩りの開始だ。駆逐戦隊と巡洋艦戦隊に突撃命令を出せ、戦艦と打撃艦は砲撃で敵艦の前進を妨害しろ！」

「了解！」

独立艦隊は開戦以来、敵艦の拿捕を繰り返して行なってきた。海賊行為のようで他の軍人からは忌み嫌われる行為であるが、新造艦の配備予定がない彼らにとって、敵艦を拿捕して自艦隊に組み込むことは、撃沈よりも有意義な事であるのだ。

早速重巡「普賢」、軽巡「筑後」、「明日香」に4隻の「雪嵐」級駆逐艦と同数の「松」級駆逐艦が突撃を開始した。

上空の観測機も、逃げる敵艦は放っておき、目標となった3艦上空へ照明弾を連続投下して掩護する。

「撃ち方はじめー！」

艦長の命令の下、砲撃を中止していた戦艦「土佐」と打撃艦2隻が砲撃を開始した。敵艦に当てない、かつ針路を妨害する砲撃である。夜間であるとはいえ、目標に当てない分だけ気が楽な砲撃と言えた。

一方不運にも目標とされた3艦は、目の前の現れた大口径砲弾による水柱に肝を潰されつつも、何とか逃げ延びようと全速で走る。

しかし、20ノットしか出ないのではどうしようもない。さらに、砲撃による針路妨害によってさらに速力を落とさざる得なくなった。

そこへまず重巡「普賢」による20cm砲による砲撃は加えられた。こちらは針路妨害ではなく、命中を狙った弾である。もちろん初弾であるため命中弾はなかった。

この時、2隻の軽巡には3隻の巡洋艦と4隻の「雪嵐」級駆逐艦が向かい、1隻のみの駆逐艦には4隻の「松」級がそれぞれ制圧へ向かっていった。

そして、「普賢」の発砲から間もなくして2隻の米軽巡は逃走をやめ、砲門を開いた。もはや逃げるのは不可能と判断し、敵に一糸でも報おうとしたのである。

御自慢の15門の15.2cm砲が火を吹き、そのマズルフラッシュが煌々と海面を照らし出した。さらに残存する両用砲や機関砲まで使って反撃を試みた。

だが結局、彼らの反撃が身を結ぶ事は無かった。損傷している両艦は砲撃こそ可能だったが、浸水による傾斜や電力の半減によって速射が不可能となっており、本来の機能を生かすことが出来なかった。

一方の独立艦隊側の艦艇には損傷がなく、100%の戦闘力が発揮可能であると共に数の上でも勝っていた。「普賢」につづいて「筑後」に「明日香」、さらに4隻の「雪嵐」級駆逐艦からの集中射撃が加えられた。

この状況下で、米艦隊が勝てない事ぐらい子供でもわかる道理だ

った。そして現実はそのようになった。砲撃戦開始後10分の内に、「セント・ルイス」は多数の20cm砲弾を始めとする命中弾によって砲の半分が使用不可能となり、速力も8ノットまで下がってしまった。また「ホノルル」も艦中央部に多数被弾し、航行不能へと陥った。

それに対して独立艦隊側は軽巡の「筑後」が1発喰らって水上機カタパルトが損壊しただけであった。

またただ1隻となった駆逐艦の方も、「松」級による集中砲火を浴びて、上部構造物が穴だらけにされてしまった。

ここまでこれば後は魚雷で留めをさすだけでよいのだが、独立艦隊各艦艇は敵からの反撃がほとんどなくなったところで、無線と発光信号で降伏を勧告した。

もはや米艦隊に選択肢はなかった。もちろん、艦を敵に渡さぬようにキングストン弁を開けようとした艦もあったが、その時には独立艦隊各艦から捕獲のための要員が乗り移り、結局成功させられなかった。

3隻の艦長はこれ以上の抵抗は不可能と判断し、しぶしぶ敵に艦を引き渡さねばならなかった。

こうして小規模な海戦が終わった頃には、既に夜が明けようとしていた。

拿捕した3隻はそれぞれ曳航されて日本へ回航されることとなった。近江は2隻の打撃艦と軽巡「筑後」、さらに駆逐艦4隻をその任務に分離して残る艦艇で近海の諸島群にある飛行場攻撃を続行す

る事となった。

この後独立艦隊は2ヶ所の飛行場を発見、攻撃して使用不能へと陥れている。

そしてこの日の夕方、ポート・モレスビーに上陸部隊が無事上陸を行なったという報告が入った。

ポート・モレスビー上陸作戦は、味方上陸軍の半数が上陸前に失われるという大損害を出しながらも強行された。大本営はその穴埋めとして、飛行場制圧に落下傘部隊までも投入し、1週間後にポート・モレスビーは陥落した。

こうして日本海軍は豪州封鎖作戦を大きく前進させることに成功した。もともと、その代償も小さくなく、空襲で大破した「飛鷹」が回航中に米潜水艦の雷撃で撃沈された。また、上陸部隊も海没した人員も含めて戦死傷者約4000を出してしまった。これは決して無視できない損害であった。

このため、日本軍は再び数ヶ月に渡って積極的な構成を控えなければならなかった。

米海軍も空母全滅という手痛い損害を被ったが、既に本土では「エセックス」級と「インディペンデンス」級軽空母が続々と竣工しており、着々と反撃準備を整えつつあった。

日本は早期に豪州を連合国から分離し、なおかつ米軍の反攻に備える必要に迫られていた。

日本が陸海軍の総力を上げて豪州封鎖作戦を成功させ、オースト

ラリアを連合国より脱退させるのに成功するのは、この2ヵ月後のことであつた。しかしさらにその2ヵ月後、日本側がセイロン島攻略作戦を行なっている最中、米軍による第二次ガダルカナル上陸作戦が敢行される事となる。

戦火はますます激しい物となりつつあつた。

次なる戦いへ（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

総解説 1

世界情勢

日本・・・この世界で日本は中国との本格的な戦争は避け、国民党と共産党の内戦に対して若干の陸軍部隊を派兵したにとどまり、その後国民党が汪兆銘率いる北京政府と蒋介石率いる重慶政府に分離すると北京政府を正式な国家として承認している。そのため、重慶政府を支援する英米と対立し、対抗する形で独伊との三国同盟を行ない、さらに仏印進駐を行なったため対米英開戦に至る

開戦後は南方資源地帯への進出、米国との早期講和を目指して動くも各部の戦略不一致から齟齬を来たし、結果ミッドウェイ海戦で空母2隻を失うという手痛い損害を被った。その後は戦略の調整が図られ、オーストラリアの連合国からの脱落を意図しての豪州封鎖作戦と、独逸軍のスエズ占領にあわせてインド洋方面作戦を本格化させている。

独逸・・・史実どおりナチスが支配権を握り、第二次世界大戦を引き起こした。ただしこちらのヒトラー総統は多少聡明なようで、まずバトル・オブ・ブリテン敗退の責任を取らせて空軍の癌とも言われるゲーリングを失脚させている。また人種主義政策も余裕がないため一時棚上げし、ユダヤ人は占領したマダガスカル島へ送り込んでいる。また史実では冷遇したロシア解放軍のウラソフ中将へは積極的な支援を行なっている。

軍事面でも空軍の組織改編が行なわれたため、既に本土防空部隊ではHe280戦闘機が採用され、4発爆撃機He277の開発が進行している。海軍でも空母「グラフ・ツェッペリン」が竣工している。

米国・・・満州事変以降中国へ積極的な政策を行なう日本と対立し、日本が北京政府への支援を開始すると経済制裁を発動。さらに日本軍が対抗処置として仏印へ進駐すると英蘭と図って石油の全面輸出禁止を行い日本と戦端を開く。しかし予想以上の枢軸国の実力に当初の戦略構想は大きく崩れつつある。

1943年に入りようやく戦時体制も整い、戦力を増強させつつあるが独逸海軍が海軍戦力を増強させつつあるために二方面作戦を強いられつつある。

英国・・・バトル・オブ・ブリテンはなんとか凌ぎきったものの、北アフリカで独逸軍に完敗しスエズを含むエジプトの支配権を失うにいたり、地中海艦隊は壊滅状態。さらにマダガスカル島も陥落したためにインドとセイロン島も風前の灯火状態。1943年1月現在には残存する戦力をセイロン島と中東油田地帯の防衛、さらにマダガスカル島奪回へ振り向ける構え。

ソ連・・・歴史どおり独逸軍の侵攻を受け各地で完敗する。さらに予想以上の日本と独逸の侵攻で米英両国からのレンドリースの量が減っているため深刻な戦力不足に陥り、1943年1月現在、レーニングレードは既に陥落。モスクワもいつ陥落するかわからない状態。ただしウラル方面へ疎開した軍需工場と新型戦車の投入、さらに例年より早い冬将軍のおかげでなんとか戦線は維持している。

日本海軍の軍備増強計画について

日本海軍では開戦直後のハワイとフィリピンへの空襲とマレー沖海戦、さらにはウェーク島攻略作戦の結果から、1月に戦時臨時戦力増強計画、マル特計画を策定し、既存艦艇の対空火力増強（特に駆逐艦と軽巡）と航空部隊の増設と飛行学校の増設を決定。

続く3月には改マル特計画を策定し、秋月型駆逐艦の6番艦以降

の設計変更と大和型4番艦以降の戦艦の建造中止が正式に決定される。空母は予定されていた改「大鳳」型の建造余裕がないと予想されたため、改「飛龍」型空母6隻を建造することとする。

また、メキシコなどの中立国よりもたらされた米軍の空母増強に対抗するため、甲標的と水上機の戦略価値が減じたため水上機母艦「千代田」、「千歳」、「瑞穂」、「日進」の空母への改装が決定された。

ミッドウェイ開戦後のマル5計画では、改「飛龍」型空母がさらに2隻が発注された。

この他に海上護衛総隊の設置が行なわれる。これは本土近海で駆逐艦や漁船への潜水艦による襲撃が相次いだために行なわれた。ただし本格的に稼動したのは米軍が潜水艦攻撃に本腰を入れた昭和17年後半以降。

航空機に関しては、開戦後しばらくしてラバウル沖で起きた海戦で陸攻隊が敵戦闘機の攻撃によって短時間で全滅したために、武装と防弾の強化が図られた。また戦訓から次期主力戦闘機の格闘性能値が若干緩和され、速度と急降下性能の上昇が条件に入れられた。このため、次期戦闘機は中島と満州飛行機合作のキ106「疾風」が採用された。

これ以外にも、戦前の軍備計画は史実とは違い「金剛」級戦艦代艦として「筑波」級巡洋戦艦と、対空巡洋艦「綾瀬」級が建造されている。

日本陸軍の軍備増強計画について

日本陸軍では昭和14年に行なわれたノモンハン事件で強力な武装を持つ高速戦闘機、高速爆撃機、大口径砲を持った戦車の重要性に気付き、次期戦闘機は当初中島のキ43を予定していたが三菱の零式艦上戦闘機に変更した。ただし、海軍機と違い航続距離は減らされ代わりに防弾板と被覆燃料タンクが採用された、加えて20m

m機銃が12.7mm機銃に変更された。

戦車は新型戦車の製造に時間を喰うため、97式戦車の改良版である1式中戦車（史実の3式中戦車）と99式砲戦車（史実の1式砲戦車）を採用した。これら車両はマレー戦線で少数ではあるが英軍のマチルダ戦車と交戦し、その有効性を見せ付けた。

またこれまでは別々であつた弾薬を一部海軍と共用に変更した。歩兵の装備については、旧式な38式歩兵銃と96式軽機関銃を早期に廃し、より威力の強い99式小銃と1式軽機関銃に変更している。衣服も南方戦用の夏衣が開発中である。

独逸陸軍の軍備増強計画について

独逸陸軍の軍備増強計画は基本的に史実と同じであるが、戦車については「タイガー戦車」が前線での運用評価が低いため、史実とは違って生産数が抑え込まれていて、代わりに「パンター」戦車の量産が急がれている。

独逸海軍の軍備増強計画について

独逸海軍は相変わらずUボート中心であるが、空母「グラーフ・ツェッペリン」の竣工とフランス海軍の抱き込み成功により、史実よりかなり忠実した水上戦力を保有している。また故障続出の駆逐艦の砲も日本からの技術供与で改善されつつある。

独逸空軍の軍備増強計画について

日本との技術交流が可能となったため、これまで更新が遅れていたJu87とHe111を日本から輸入した「彗星」、「銀河」を改良した自国製機体を使用開始予定。またHe277爆撃機も1943年7月を目処に配備予定。

帝国陸軍1式戦闘機「隼」

全長9.2m 全幅1.2m 自重1800kg 速度520km
航続力1950km（増槽なし） 武装12.7mm機関砲2基、
7.7mm機銃2基 発動機「栄」12型950馬力

海軍の零戦21型の小規模改造機。翼端の折り畳み機構廃止、防弾装備による重量増加で速度と航続力が若干減じた。パイロットたちからは「武装が大幅に増強され敵機を撃墜しやすくなった。」と「格闘性能が格段に落ちた。」という意見のどちらかを指摘されるが多かった。

総解説 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

総解説 2

中国・・・現在は華北地域と沿岸部の香港以北を統治する中国国民党北京政府（汪兆銘政権）、重慶を中心に華南地域を統治する中国国民党重慶政府（蒋介石政権）、成都を中心にモンゴルとの国境までの地域を統治する中国共産党（毛沢東政権）が満州国を除く中国全土を3分割する状態で占領している。この内日本が支援しているのは史実と同じく汪兆銘政権。ただし、重慶政府との戦いに日本は軍事顧問団を出す以外の介入はしていない。

それぞれの政府については、まず北京政府は1942年時点で日本と満州国からの支援で軍備、工業を整備しつつある。この内海軍と空軍戦力に関しては3政府の中で最も忠実しており、青島を拠点とする主力艦隊は軽巡3、駆逐艦8、海防艦6からなり、日本、タイについて有力な艦隊を持つ。また日本政府の支援で沿岸部の造船施設の整備が進んでいるため、小型艦艇なら自国での量産が可能となっている。空軍も第1線機を200機近く保有し、最近では自力での生産を始めている。

重慶政府はビルマ、ヒマラヤルートで英米から支援を受けているが、日本軍によるインド洋での通商破壊戦、さらに連合軍の思わぬ苦戦で補給が滞りジリ貧状態。これまで支援された武器でやりくりしているものの、政府及び軍部内の腐敗が激しく脱走者が相次いでいるのが現状。3政府の中で最も弱体と評価されている。

共産党もソ連がドイツに対して苦戦していることから武器供与が滞っているため、現在は積極的な行動を避けて持久戦に入っている。ただし、北京政府も重慶政府も攻撃する余力はないため事実上こう着状態。しかし士気は高い。

満州国・・・史実より関東軍の規模が小さく、国軍の規模が拡充さ

れている。特に陸空軍。陸軍は旧式だが日本より十数両規模で供されている。また独伊から旧式化した戦車を輸入する動きがある。空軍は満州飛行機を中心に日本製の機体のライセンス生産機を使用。こちらドイツからの輸入計画がある。海軍（海辺警察）は数隻の小艦艇が増えている以外史実と同じ。

タイ・・・大まかな流れは史実とほとんど代わりなし。ただし日本からの武器供与量は多く、海軍は戦艦2隻、軽巡2隻、駆逐艦6隻を中心とする戦力を保有している。戦艦は日本海軍を退役した「金剛」級。これら艦艇は緒戦で日本海軍に協力してマレー作戦を支援した。

インド国民軍・・・チャンドラ・ボース首班のインド国民軍は史実同様日本側に援助を求めて結成されている。ただしスエズ運河が陥落したため結成時期が若干早い。また日本海軍とドイツ海軍がインド洋とアラビア海で実施した通商破壊戦で英軍装備が捕獲され、それを融通された事により幾分規模が大きくなっている。特に相次ぐ英軍からの離反者を取り込んだため、空軍と海軍が整備されつつある。

その他の国々（ベトナム・インドネシア、フィリピンなど）・・・独立運動家らを中心に現在は国家の基盤作りに専念中。小規模な陸軍は整備しつつある。またフィリピンではもとフィリピン軍将兵を中心に日本からの供与機で空軍を整備しつつある。

ヨーロッパ

イタリア・・・燃料不足や兵器の開発の遅れから英軍に負け続けたが、独逸軍の介入でようやく戦力を回復できる見込みが立ちつつある。ただし、軍の士気は相変わらず低いため日独ともに戦力としての期待度は低い。

フランス・・・ドイツへの積極的協力を条件に、今もヴィシー政権は存続中。また独逸軍占領地域もドイツ軍の駐屯見返りに行政権などは全て返還されている。現在はロンドンに拠点を置く自由フランス政府と分裂状態。ただし空海軍力では雲泥の差がある。特に海軍は自由フランス軍が最大で巡洋艦しか保有しないのに対して、ヴィシー政府軍は地中海艦隊が復活し、戦艦「ジャン・バール」を旗艦に活動中。

フィンランド・・・レニングラード陥落とともに積極的な戦闘を中止している。これは同国の対ソ参戦目的が、冬戦争で失った領土回復であったため。しかしドイツからの新兵器購入は継続中。ドイツ軍が冬季戦においてもっとも頼りにしている軍隊。

ルーマニア・・・独軍と共闘してソ連と戦闘中。ドイツ軍が未だ戦力を維持しているため、こちらはまだ戦線を保っている。なお旧式化したIAR80、81戦闘機をアジア諸国に売却する計画が持ち上がっている。

トルコ・・・未だ中立状態。

スペイン・・・未だ中立状態。ただし若干の空陸軍を義勇軍として東部戦線へ派遣。

中国の軍備増強計画に付いて。

北京政府・・・3軍（陸海空軍）ともに、日本と満州からの支援で出来上がった工業地帯を中心に自国製兵器の生産を進めている。また海軍と空軍は特に増強中。海軍は日本海軍の護衛駆逐艦「桜」級と設計が同じの「海陽」級を始めとして中小型艦艇を整備しつつある。空軍は日本の「隼」（零戦）をライセンスした「炎龍」戦闘機を生産、配備中。ただし生産が追いついていないため、やはり欧州から兵器を輸入する動きがある。

重慶政府・・・主に英米より供与された兵器を使用しているが、小銃や機関銃の弾薬以外生産できないのが現状。空軍は以前供与された機体を使いまわしているが、補給がないためその数は減りつつある。海軍は以前英米から少数の艦艇が売却されたが、有効に活用せぬまま北京政府軍に全て拿捕された。そのため現在では少数の河川用砲艦以外存在しない。

共産党・・・主にソ連軍からの供与兵器や、捕獲兵器を使用している。ただし戦車等はほとんど所有していない。空軍もソ連からの支援がないため、機体装備ともに無きに等しい。統治地域が内陸のため海軍は現在のところ存在すらない。

満州国の軍備増強計画について

満州国は現在仮想敵のソ連や共産党がそれぞれ戦争中であり脅威が減っている。しかし代わりに対米参戦しているため空軍と陸軍の大幅な近代化を進めている。空軍はこれまでの関東軍の下請けから、一挙に本土全域の防空が可能な戦力への増強を計画している。ただし、国内の航空産業が脆弱なため、海外からの輸入を計画している。現在のところドイツからMe 410戦闘機やJu 88爆撃機の購入計画が進んでいる。

陸軍も日本製戦車や装甲車の供給が間に合わないため、ドイツやイタリアから戦車や自走砲の購入計画が持ち上がっている。

帝国海軍駆逐艦「桜」級（中国海軍「海陽」級と姉妹艦）

全長108m 排水量1300t 速力30ノット

武装10cm単装砲3門（単装1基、連装1基）

61cm3連装魚雷発射管1基

40mm連装機関砲3基

25mm単装機関砲12基

爆雷80個（又は機雷80個）

独立艦隊で使用していた「梅」級の発展型。生産性がより向上している。なお10cm砲は秋月型の98式と砲弾は共用できるが、装填機構は簡易化され生産性を向上させている。また中国艦は主砲が88mm砲となっている。

来る者と去りゆく者

珊瑚海における海戦を終え、軽巡2隻と駆逐艦1隻をまたしても拿捕した独立艦隊は昭和18年1月中旬、母港の伊豆に帰還してきた。

艦艇は交代でドックに入るか修理工場の岸壁に繋がれて、補修整備される。また乗員達は艦の維持に必要な一部を除いて退艦し、故郷に帰るか温泉へ行くなどして英気を養い、次の戦いへと備える。

そんな中で、拿捕した艦艇の護衛および監視任務を担わされた艦は一端横須賀まで行き、そこで拿捕艦艇を、横須賀海軍工廠に引き渡す。

その任務を行なった内の1隻である軽巡「明日香」は、そのまま伊豆に帰ることなく横須賀で修理と装備の交換を行なって、海上護衛総隊に編入される事となっていた。

「明日香」は中国内戦時に、当時北京政府に組みして戦っていた海軍航空隊が大破着底させた南京政府海軍の軽巡「寧海」が前身である。一時期は北京政府に譲渡する予定であったが、同海軍が日本からの供与艦艇の運用で精一杯であったため、そのまま帝国海軍に引き取られて独立艦隊配備となっていた。

しかし艦隊が小型のために使い勝手が悪い面があり、さらに戦隊を組んでいた同型艦の「佐保」が第二次セイロン島沖海戦で戦没したため、それに拍車が掛かっていた。

そこで今回の措置になったわけである。

「独立艦隊としての仕事もこれで終わりですね。」

軽巡「明日香」艦橋で、航海長兼副長の渡貫圭介大尉が艦長の前橋陽一中佐に語りかけた。彼らは今回の仕事が終わったら、艦ごと海上護衛総隊に転属する予定だった。

「そうだな。最初はとんでもない所に配属されたと思っていたが、4年間もいると色々と愛着が湧くな。それに開戦以来、何度も大海戦に加わったしな。」

前橋は寂しさで一杯だった。海上護衛総隊に配属となれば、これまでのような華やかな海戦に参加することは望めない。毎日地味な船団護衛を行なう事となる。

前橋は船団任務を決して見下してはいない。しかし、何度も激しい戦闘の中に身を投じてきたので、どうしても物足りなさを感じてしまうのだ。

「海上護衛総隊に配属になったら、一体どこへ行かされるのでしょうかね？」

渡貫が前橋に問い掛けた。

「わからん。恐らくは南方航路の護衛任務だと思う。しかし、南洋諸島との航路にも最近敵潜水艦が出没していると聞くと、逆にもしかたら北方航路の可能性もある。あっちも最近潜水艦が何隻か出てきたらしい。」

この時期、米潜水艦の跳梁は激しくなりつつあった。特に米海軍

基地のあるハワイに近い航路の日本 南洋諸島間には多数の敵潜水艦が出没し、船舶への被害が増えていた。

海軍は前年の5月に海上護衛総隊を創設したが、当初は艦艇数の不足に泣かされた。その後護衛駆逐艦と海防艦が中国や満州国の造船所にも発注されて、ようやくその数を揃えつつあった。

また空母「天城」に搭載されていた蒸気カタパルトを参考にして開発された新型カタパルトが中小型空母に設置されて、これまでは困難だった航空機の運用が容易になった。この内数隻はすでに海上護衛総隊に配属されて船団護衛にその威力を発揮していた。

とにかく、帝国海軍は海戦から半年間の相次ぐ潜水艦による艦艇の被害で、ようやく米潜水艦が侮り難い敵であることを認めて、船団護衛に力をいれるようになったのだった。

「艦長、間もなく入港です！タグボートの接近を確認。」

「よし！速力微速まで減速、そして米軽巡に信号。機関を停止し、タグボートの支持に従えだ。」

「ようそろっ！」

「明日香」は横須賀の港が肉眼ではつきり確認できる位置にまで到達した。護衛してきた米艦艇はここでタグボートに引き渡され、そのままドッグまで引っ張っていかれる。「明日香」はタグボートには引かれず、自力で岸壁に接岸する。

前橋は艦橋の窓に寄り添って横須賀軍港を見渡す。

帝国海軍横須賀鎮守府。呉と並ぶ帝国海軍の拠点である。多数のドックや修理工場をようし、さらに近郊の追浜には飛行場もあり、横須賀海軍航空隊が展開している。

海上には多くの艦艇が在泊し、その間を、物資を補給したり乗員が陸地まで移動に使う小型船がせわしなく動いている。

この時期多くの艦艇が稼動しているため、在泊している艦艇は、「桜」型の護衛駆逐艦や海防艦、掃海艇と言った中小型艦が多かった。そんな中で、竣工して間もない40、6cm主砲6門を持つ巡洋戦艦「筑波」、10cm対空砲12門を持つ対空軽巡「揖斐」が一際目立って見えた。

また彼には確認できなかったが、工廠内では「大和」級の3番艦である戦艦「信濃」の建造が急ピッチで行なわれていた。

「明日香」はその間を縫うように航行して、指定された海域に投錨する。

「機関停止！投錨！！」

「明日香」が停止し、錨が下ろされる。前橋はその間に艦橋の張り出しに出た。

「ようやく着いたな。」

そう言って、前橋は懷からタバコとマッチを出して吸った。

「艦長、各部異常ありません。」

渡貫が各部からもたらされた情報を伝えてくる。

「おう。すぐに鎮守府からなんらかの指示があるはずだ。多分乗員には休養が出されることになるはずだが、とりあえず今は待機させておけ。」

乗員達は早く陸に上がりたいだろうが、しばし我慢してもらわねばならなかった。

「わかりました。」

渡貫は再び命令を伝えるために艦橋内に入っていた。

しばらく前橋は港をながめてタバコを吸っていたが、岸壁からこちらに向かってくるランチの姿を見て、タバコを海に投げ捨てて艦橋内に戻った。

「明日香」が補給と修理、乗員の休養を終えて船団護衛総隊の命令に従い任務につくのはこの2週間後のこと。そして「明日香」は1年近く船団護衛艦の指揮艦として活躍したが、米潜水艦と1対1の対決で相撃ちとなり、戦没した。

太平洋戦争が始まるまでは、独立艦隊に配備された艦艇はそのまま永久配属となっていた。しかし、戦争が始まって拿捕艦や紛失艦が発生した事により、軽巡や駆逐艦を中心とした艦艇の配置換えが激しくなった。

「明日香」のように独立艦隊から離れる艦もあれば、新しくやってくる艦艇もあった。今回拿捕された米艦艇も、横須賀海軍工廠の技術者によって1週間ほどの調査が行なわれた後、修理と改装が行な

われた。駆逐艦は海上護衛総隊に取られてしまったが、2隻の軽巡は3ヵ月後、軽巡「小笠原」、「硫黄島」として竣工している。

艦名が通常軽巡につけられる河の名前ではなく、島の名前になったのは敵に無線で動きを知られないようにする、一種の妨害工作を試験的に導入したためだ。ただし、この工作はこの2艦以降導入されることはなかった。

ちなみにこの「セント・ルイス」級軽巡の主砲には技術者たちも驚愕したらしく、帝国海軍は慌てて速射可能な15cm、20cm砲の開発に着手したという。だが結局終戦までに完成する事は無かった。

来る者と去りゆく者（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

日豪講和

昭和18年2月。ガダルカナル島奪回、ポート・モレスビー陥落によって一段と厳しくなった帝国陸海軍の豪州封鎖作戦に、ついにオーストラリアは根を上げた。

2月10日。オーストラリア政府は日本政府との単独和平交渉に入る事を世界に向けて公表し、帝国陸海軍との戦闘を中止した。

これと前後して、アメリカとイギリスは必死に連合国陣営に留まるよう説得したが、クックタウンやケアンズと言った国内都市への爆撃がポート・モレスビーから始まり、加えて英国と米国からの援助も途絶えがちになっていたため、これ以上の戦闘継続は不可能という結論に至ったのであった。

オーストラリアには、米国からP39戦闘機やP40戦闘機が援助されていたが、日本軍がガダルカナル島を中心に潜水艦と航空機による通商破壊戦を始めると、援助物資を積んだ輸送船団は次々と沈められていった。

オーストラリアもブーメラン戦闘機やセンチネル戦車等、兵器の国産は行なってはいたが、その性能は日本製の兵器に比べて劣っている物が多かった。また数も全土を防衛するには不足だった。だから援助物資は必要不可欠だったのだ。

米海軍には商船を守り、潜水艦を駆る護衛空母や護衛駆逐艦が多数存在していたが、それらは大西洋海域に配備されていたため、太平洋の輸送船団を守る艦艇の数は不足気味だった。その結果がこれだった。

米太平洋艦隊司令官であるニミッツ大將は、「もし4隻の護衛空母と20隻の駆逐艦があれば、オーストラリアの離反を防げた。」と語った。

もつとも、これは無理な相談だった。この時期ドイツ海軍はフランス海軍と図って積極的に動いており、太平洋へ回す戦力の余裕はなかった。もつとも、これはワシントンの日本とドイツに対する戦力分析の失敗であった。そのせいか、珊瑚海、ソロモン海での敗北とオーストラリアの脱落という失態にも関わらず、ニミッツは解任されずに済んでいる。

もつとも、オーストラリアを失った連合国からしてみれば、アメリカ太平洋艦隊司令官の首が繋がったことなど大した問題ではない。

結局日本代表団との交渉の末、2月28日にオーストラリアは日本と正式な講和条約を結んだ。この条約では、オーストラリアの中立化と日本との貿易即時再開が盛り込まれていた。ちなみに、中立化は枢軸国全てに対してであった。そのため、ヨーロッパや中東でドイツ軍と戦っている部隊も即刻戦闘中止をしなければいけなかった。またオーストラリア国内で反攻の機会を窺っていたマッカーサー元帥率いる陸軍部隊と、同国内に展開していた航空部隊や海軍艦艇も即時撤収をせねばならなかった。

このオーストラリア国内にいた米軍の撤退はオーストラリア軍とアメリカ軍が全力で行なったため、4月までには終了している。また航続距離の不足などで飛行が不可能だった航空機については、全てオーストラリアへ譲渡されている。

これによって、オーストラリアはこの後英国本土やその他の連邦構成国から、裏切り者として盛大なバッシングを受けることとなり、それがオーストラリアが大英帝国連邦から脱退することへと繋がる。

一方、日本もこの講和条約では譲歩してポート・モレスビーの即時返還を行なっている。また、ラエをはじめとするニューギニア東岸地域からの撤退も同時に行なわれた。

オーストラリアとの講和は日本にとって無視できないプラスの効果をもたらした。特に高温多湿で伝染病の危険性が高いニューギニア戦線から兵力を下げられたことと、オーストラリアとの貿易再開で、多量の小麦を輸入できるメリットは大きかった。

対する米国は、東南アジアへの反攻ルートの拠点を失い、前線をエスピリットサント島へと下げている。また援蒋ルートは完全に分断され、これ以後蒋介石はより苦しい立場に追い込まれることとなる。

そして何より革新的だったのは枢軸国を除く白人国で、オーストラリアは最初にアジアの各独立国を承認した事であった。これは後々のアジア各国の独立承認に、優位に働く事となる。

さて、そんな状況下で日本が次に取り掛かったのはセイロン島攻略作戦であった。

これまで太平洋、ソロモン地域での作戦を重視してきた日本軍が、いきなりインド洋方面へ戦力を傾注したのは、政治による物だった。

この前年、独逸軍はスエズを抜いて紅海を一気に南下、フランス領であったマダガスカル島をイタリア軍、ヴィシーフランス政府軍

と協力して奪取している。

その後、ドイツは中東の油田地帯を目指して進撃していたが、この頃にはさすがに欧州、アフリカ、ロシアという3面作戦を行なった余波で、戦力の余裕はなくなっており、しかも中東の英軍はケープタウンからインドへノーストップで走る航路を使うことで、物資を陸揚げしていった。

またインドの南に浮かぶセイロン島も、インドや中東への物資輸送路の中継点になっていた。

日本海軍はセイロン島からインド東部の港を結ぶ輸送路の輸送船団こそ攻撃していたが、セイロンから西側の攻撃はほとんど行っていなかった。

ドイツとしては、なんとしてもインド西部への輸送路を分断したかった。そうすれば中東の英軍は根を上げるであろうし、カスピ海方面から渡っているソ連への援助物資も止まると見積もっていた。

そのためには最低でもセイロン島を占領し、そこに航空部隊や仮装巡洋艦を配備させる必要があった。

しかし、ドイツ軍には先ほども述べたように戦力の余力は無く、またイタリア軍やフランス海軍もインド洋へ派遣した戦力は、中東との輸送路や占領地を確保するギリギリの戦力しかなかった。

そこで、日本軍に協力を求めてきたのである。

オーストラリア・ソロモン方面での戦いが一段落し、ようやく息をつけると思っていた日本陸海軍にとって、セイロン島攻略は気の

進まない作戦であつた。しかし大事な同盟国からのお願いであるし、これまでに、兵器や技術の供与や、マダガスカルに強制移住させられたユダヤ人の中から、優秀な技術者や医者、日本への渡航を斡旋されるなど、様々な恩を受けてきたのだ。とても断れる物ではない。さらにドイツは音響追尾魚雷などの技術さえも譲渡してよいと言ってきた。

そういうわけで、結局日本陸海軍は急遽、4月を目処にセイロン島攻略作戦を行なう事となつた。ただし、この頃にはインド洋に敵有力艦隊はなく、空軍力も相次ぐ引き抜きで弱体化していたので、作戦に充当されたのは空母「隼鷹」、「龍嬢」、「龍鳳」、「瑞鳳」、「祥鳳」からなる第二航空艦隊であつた。（これに攻略部隊護衛として、商船改造空母3隻と陸軍空母1隻が随伴。）

そのため、独立艦隊その他の艦隊はセイロン島攻略を彼らに任せて、本土での改装や修理、南方での訓練に勤しむこととなつた。

セイロン島攻略作戦が始まるまでの4ヶ月間、独立艦隊には拿捕した軽巡2隻の配備やそれに伴う艦艇の異動など、若干の動きがあつたが、より大きな動きがあつたのは、その地上基地航空隊である特試航空隊の方であつた。

日豪講和（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

異国の翼

日本の航空機開発技術は、太平洋戦争開戦前に全金属製単葉の96式艦戦、97艦攻、99艦爆、96陸攻の採用によって大きく前進し、一気に欧米と肩を並べるまでになった。これら機体やその後継機が緒戦で連合国の機体を相次いで撃破したことは、欧米列強諸国に大きな衝撃を与えたことで有名である。

実際には無線や方位探知器といった電装品、さらにプロペラやエンジンの接合部のパッキンなど細かい部品や補助的な部品の精度が低いなどの問題を抱えていたが、それでも飛行性能についていえばともかくにも日本は欧米に追いついたのだ。

しかし、それは主に単発機や双発機という分野に限った話だった。その重防御や爆弾等裁量から日本軍やドイツ軍を悩ましたB17やB24、アプロ・ランカスターといった英米のような4発爆撃機の開発は、日本においてはほとんど進んでいなかった。

日本で造られた4発機は飛行艇を除くと、陸軍の92式重爆撃機と海軍の「深山」爆撃機くらいしかなかった。

前者は92という数字から見てもわかるように、採用年度が昭和7年と古く、太平洋戦争時にはとても前線で使えるような機体ではなかった。しかも独逸のユンカース旅客機の改造機だった。後者もアメリカ製の失敗旅客機を改設計したに過ぎず、国産と呼べる機体ではなかった。おまけに性能が低く、やむなく輸送機として使っている始末だった。

そもそも貧乏国日本では多発機というのは資材を多量に使うので

嫌われるようだ。それが原因かは定かではないが、1式陸攻の設計段階で設計者側が、海軍の提示した無謀ともいえる要求値を見て機体の4発化を提案した時、当時の航空本部長だった和田少将が激怒して双発に戻させたという逸話がある。

もつとも4発機の開発が進まなかった背景には、日本の陸海軍の航空機使用に戦略爆撃を理解している人間がいなかったということもあった。日本では海軍の爆撃機は敵艦攻撃に使えることが前提であつたし、陸軍も戦術爆撃の使用しか頭になかった。そんな状況で4発機が造れる筈がない。

しかし広大な太平洋での戦争が始まると、どうしても距離の離れた敵基地攻撃が可能な航続距離の長い、しかも落されにくい機体の開発が急務となった。

だが早々にそれらが出来るわけではない。4発機の開発にはノウハウと設備が必要だった。ノウハウは中島飛行機や川西が「深山」、飛行艇の設計で蓄えているからまだ良い。しかし生産設備を整えるのには時間がかかる。何せ日本国内の工場で造られた多くの飛行機は、大きくても双発機だったのだ。それよりも一回り大きな機体を造ろうとするなら、どうしても施設の改良が必要だった。

そんなわけで、日本で初の実用的4発爆撃機となる「連山」が目見えするのは、昭和19年1月まで待たなければならなかった。

ところが、3月初旬のこの日海軍高雄基地に現れたのは、まぎれもなく日の丸を描いた4発爆撃機だった。

「あれが特試航空隊の「米山」か！！さすがにB17だけあつてでかいな！！」

着陸してくる4発爆撃機を見て、1人の整備兵が感嘆の声を上げた。

「本当だ。さすがにアメリカだけあるな。あんなでつけえ機体を造っちゃうんだからな。」

側にいた整備兵も頷きながらそう言った。

「けど、それに日の丸つけてアメリカ軍に爆弾を落とすっていうのは、なんか変な話だな。」

「バカ！捕獲兵器を使用することは万国共通だ。こないだの新聞にも、イギリスのマチルダ戦車で戦うアフリカのドイツ軍の記事が載ったじゃないか。」

「そうだな。」

2人の整備兵はお喋りしながら、自分たちの仕事をするために歩いていった。

その間に、本土からはるばる飛来した4発爆撃機は18機全機が着陸を終え、エプロンまで滑走してきた。

この18機の爆撃こそ、特試航空隊へ新たに配備された3式陸爆「米山」だった。そして先ほどの整備兵たちの会話どおり、その正体はアメリカ製のB17爆撃機だった。

先日行なわれたポート・モレスビー攻略作戦の際、日本軍は飛行場を無傷で奪取するべく空挺部隊の投入を行なった。その結果、飛行場と共に多くの機体や機材が日本側の手に落ちた。その中には24機のB17や30機のB24の姿もあった。

B24の捕獲は初めてであったが、B17は既に前年のフィリピン攻略作戦において4機ほど捕獲していた。そのため研究資料用の1機以外は全て実戦使用されることが決定した。ちなみにB24は陸海軍で折半している。

ところが、前述したとおり日本では4発爆撃機を製造したことがない。だから使った部隊もない。つまり日本側には陸海軍共に4発爆撃機を使える部隊はなかった。そこでお鉢が回ってきたのが、拿捕したアメリカ製航空機を使いこなしている海軍の特試航空隊だった。

特試航空隊は4発機の運用こそしたことはなかったが、B25「ミッチェル」やA20「ハボック」といったアメリカ製爆撃機を使用していた。

そこで日本へのフェリー飛行を完了した2月中旬から、陸軍の立川飛行場を借りて搭乗員の慣熟飛行を行っていた。最初こそ4発エンジンジンの出力調整や、巨体に戸惑っていた搭乗員たちであったが、2週間もすると大分慣れた。

そして塗装を日本式の濃い緑色に塗りなおされ、3式陸上爆撃機「米山」と命名されると、さらなる訓練を行なうために、燃料が潤沢な南方へと向かったのであった。

ちなみに特試航空隊に配備された機体はこれだけではなかった。

ポート・モレスビーで捕獲した機体はその他にも沢山あった。そうした機体も数多く配備された。

数十機単位で捕獲されたB25やA20と言った機体は特試航空隊で以前から使用している機体であったが、これまでの戦闘や訓練で失われた機体も多く、稼働機は減少していた。それが今回の配備で払拭された。

現在B25爆撃機は予備機含めて24機、A20爆撃機は予備機含めて30機が配備されていた。

また戦闘機についてもこれまではフィリピンやマレー半島で捕獲したF2A「バッファロー」やP40「ウォーホーク」しかなく、これらはもはや性能的には2線級機であった。

そこへ捕獲された60機のP38「ライトニング」の内の30機あまりが配備され、こちらで一気に戦力を増加させることが出来た。

P38には3式陸上戦闘機「剣風」、P40には2式陸上戦闘機「雷風」、B25には2式陸攻「豪山」、A20には2式陸爆「双山」という愛称が付けられた。F2Aは退役して練習戦闘機となったために愛称はつけられなかった。

ところで、これは戦後数十年経って公にされることになるのだが、これら機体の中にはポート・モレスビーで捕獲された機体だけではなく、なんとオーストラリアに駐留していた米軍が使っていた機体もあった。

米軍がオーストラリアを撤退する際、修理の終わっていない機体や航続距離の関係で後方に撤退できない機体はそのままオーストラリ

アに譲渡された。しかしオーストラリア軍としては使い道に困った機体もあった。それらはそのままスクラップ扱いされ、そして第三国経由で日本へと持ち込まれたのだ。

もつとも、搭乗員たちにはそんなことは一切関係ないことであつた。彼らは命令されたままに、高雄飛行場で簡単な整備と補給を済ませると、再び目的地であるブルネイ目指して飛んでいった。

異国の翼（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

米軍再反攻開始！！

昭和18年4月18日。日本軍は1日より始まったセイロン島攻略作戦を順調に遂行しつつあった。度重なるアフリカや中東への兵力引き抜きで、セイロン島守備隊の数、質ともに大幅に落ちており、上陸した日本陸軍の敵ではなかった。

空海軍力も同様で、積極的な攻撃は出来ず、専らゲリラ的な攻撃に終始せざるを得なかった。そのためはや日本軍の大兵力の前に出来る事はなく、セイロン島陥落は時間の問題であった。

そんな中、ある一通の報が連合艦隊司令部、海軍軍令部に衝撃を与えた。

2ヶ月前の日豪講和のさい、日本軍はパプワ・ニューギニアからは撤退したが、ソロモン諸島は終戦まで軍の駐屯を行なう事となった。日本軍としては、ニューカレドニアやエスピリット・サントといった米軍の最前線基地を見張る上で、またサモア方面へ攻撃をかける上で、ソロモン諸島は重要な戦略拠点であると考えていた。そしてその最前線基地は、昨年激戦が行なわれたガダルカナル島に置かれていた。

そのガダルカナル島所属の2式大艇が、敵機動部隊発見の報を打って消息を絶ったのである。ただちに1式陸上偵察機が発進し、大艇が消息を絶った海域を調査した。

その結果、同島の南東約600kmに正規空母3隻を基幹とする機動部隊、さらにその後方に輸送船団が発見された。そしてその針路は間違いなくガダルカナル島だった。

この時点において、ガダルカナル島には2つの飛行場が完成し、ニューギニアから転戦してきた機体も併せて100機近い戦闘機と、ほぼ同数の各種機体が終結していた。また後方のブインやラバウルにも航空隊が展開していた。

日本軍はこれら機体をもつてただちに反撃するとともに、このトラック島に展開中だった第一機動部隊の一部に出撃命令を与えた。航空部隊による反撃はただちに始まり、まず第一波として零戦53型36機と1式陸攻18機、「天山」雷撃機20機により行われた。

しかし、この攻撃は失敗に終わった。この時米艦隊は最新鋭の「エセックス」級空母3隻に、「インディペンデンス」級空母2隻からなっていた。その搭載機は約400機である。そしてその内半数が戦闘機で、しかも最新鋭のF6F「ヘルキャット」であった。

この時米機動艦隊上空にいた「ヘルキャット」は54機。さらに日本機の接近を受けて発進した24機が合流したため、総数は78機になっていた。日本側の護衛戦闘機の2倍近い数である。

それだけの戦闘機に襲い掛かれては、ベテランの多い日本側といえど分が悪かった。零戦隊の攻撃や、攻撃機自身の必死の反撃も虚しく、零戦10機、1式陸攻11機、「天山」9機が撃墜されてしまった。対する米戦闘機の損害は撃墜8の不時着水7であり、日本側の敗北であった。

それでも残存機は攻撃を続行し、輪陣形外縁を走っていた駆逐艦1隻に雷撃を敢行してこれを撃沈している。

しかし戦果はそれだけで、米艦隊の対空砲火によりさらに3機の陸攻と2機の「天山」を失っている。

総計すると1式陸攻は18機中の14機、「天山」は20機中の11機を失った。損耗率は前者が8割近い数字で、後者も6割近い数字という、大損耗になってしまった。

この数字を見て、ガダルカナル島基地司令官も顔を蒼くし、以後ブインとラバウルからの増援が到着するまで積極的な攻撃を控えるよう命令した。

そしてこの翌日、今度は米軍による攻撃が始まった。機動部隊より発進した第一波150機、第二派120機がガダルカナル島に來襲したのである。

日本軍も全力を上げて迎撃した。陸海軍、さらにラバウルやブインより応援にかけつけた機体、併せて100機の戦闘機が米攻撃隊を迎え撃った。

この迎撃戦の結果は、日本側が死に物狂いで戦ったこともあり、米軍にそれなりの出血をさせている。米軍側の未帰還機は戦闘機41機、爆撃機17機、雷撃機10機の合計68機であった。この他に着艦後の廃棄機が15機ほど出たので、それも併せると80機近い機体が失われた。

一方の日本側は迎撃に上がった各種戦闘機のうち32機が未帰還となった。ただし基地上空の迎撃戦であったため、パラシュート降下したパイロットも多く、戦死率は低かった。この他に地上に置かれていた機体10機と、数箇所の対空陣地が破壊された。

この損害は飛来した機体の数からすると少ない方で、日本側が奮戦した証しと言えた。

だが、まもなく陽が落ちようとしていたころ、約60機からなる第三派攻撃隊が来襲した。この攻撃は完全に日本軍の裏を搔く形となり、日本軍に大損害を与えた。

地上に置かれていた50機の機体が完全破壊され、その他20機も損傷を受けた。対空陣地も7割が使用不能に追い込まれた。戦死者もこの日の攻撃で最多となった。

対する米軍の被害はわずか4機。昨日の敵機動艦隊攻撃に続いて、日本軍が辛酸を舐めさせられた瞬間であった。

こうしてガダルカナル島の基地航空隊戦力は当初の4割にまで落ち込んでしまった。

日本側もこの日ラバウルとブインより発進した戦爆連合が米機動部隊へ攻撃を仕掛けたが、戦果は約40機の機体を消耗して、戦闘機20機撃墜、防空巡洋艦1隻撃沈、軽空母「ラングレー」大破というもので、米軍の侵攻を止めるには至らなかった。

このままではガダルカナル島が危ない。米軍は明日にも上陸するかもしれない。既に度重なる航空偵察や、潜水艦による索敵で、敵機動部隊の後方にいる輸送船団が戦艦、護衛空母をようする大部隊であるのが確認されていた。

この危機に対して、救援のために出撃した第一機動部隊分遣艦隊は速力を上げて南下、米機動部隊壊滅を目指した。この時分遣艦隊

は空母「瑞鶴」、「翔鶴」、そして昨年シンガポールで捕獲した英空母「インドミダブル」改装の「剛龍」の計3隻の空母と、それを護衛する巡洋戦艦2隻からなっていた。

その搭載機は合計200機と、米機動部隊の総計からするとおよそ半分であったが、米軍が度重なる空襲で機体を損耗している事を考えると、決して少ないということにはなかった。

もつとも、米軍には長距離爆撃機の使用という手もあった。だから機動部隊を壊滅させても上陸作戦を強行する可能性があった。そのため連合艦隊と軍令部はさらなる戦力の増強を決定し、連合艦隊はトラック島の潜水艦艦隊にガダルカナル方面への進出を命じた。そして軍令部は、間に合うか疑問であったが、ブルネイで訓練中だった独立艦隊へのラバウル進出を命令した。

命令を受けて、早速独立艦隊は訓練を中止して東進を開始した。それにあわせる形で、基地航空隊の特試航空隊もラバウルへ向けて発進していった。

第二次ガダルカナル島攻防戦は、ますますその激しさを増しつつあった。

米軍再反攻開始！！（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

復仇の翼

太平洋を挟んで戦火を交える大日本帝国とアメリカ合衆国。この両国の差は人口でほぼ1対2、工業力で1対30というほど開きがあった。日本側が満州や中華民国北京政府を取り込んで工業力を上げて、1対20にするのが精一杯であった。つまり日本は様々な面でアメリカよりも節約をする必要に強いられた。それは人材面でも同様だった。

日露、第一次大戦において、日本は先進国たる欧州の目を常に気にしていた。そのため、捕虜に関する扱いも非常に高い物だった。これはその後も有名な話である。

しかし昭和に入るとその色は薄れ、逆に捕虜を蔑視する傾向が生まれた。

この傾向は年を追うごとに大きくなっていったが、ある事件を境にして大きな見直しを迫られることとなる。

ことの発端は日本が盧溝橋事件のしばらくの後、中国南京政府を支援して派遣した海軍陸攻隊が、共産党軍の拠点である成都を爆撃した時の事である。

この時出撃した陸攻12機が全機未帰還になるという事態が起きた。原因は護衛戦闘機なしでの爆撃を強行したためであった。96陸攻は共産党空軍の保有すイ15、ならびにイ16戦闘機の迎撃を受けて全滅したのであった。世に言う「成都陸攻全滅事件」である。

本来日本はこの戦争とは無関係であった。それなのに、1回の攻

撃で手塩を掛けて育てた飛行兵80名以上を失ってしまったのである。これでは、中国に対する派遣軍の総撤退という意見が出かねない。しかし日本軍上層部としては、新兵器のテスト地としての中国からの撤退はしたくなかった。

そこで日本軍上層部は、未帰還機の乗員84名全員を戦死認定の上、全軍に異国のために散った有志として喧伝し、逆に戦意高揚を図った。

84人が勇敢に戦って死んだという美談は、新聞やラジオなどの情報メディアによって日本全国津々浦々にまで浸透した。

ところが、全滅から2ヶ月たつて。1機の乗員7名全員が中国軍によって保護されるという、それまたショッキングな事件が起きた。

その後の取調べで判明したのは、この7名は他の機体が全機空中で撃墜される中で、敵機の攻撃を受けて飛行不能となったものの不時着し、全員捕虜となった。しかし収容所の警備がザルで、隙を突いて脱出したのであった。

海軍はこの7名の扱いに迷った。戦死として全軍に布告したのを、今さら取り消すのも考えものである。さらに彼らは短期間とはいえ捕虜となり、しかも敵軍に自軍の情報を渡していたことが判明したのである。

捕虜になった上に、敵への利敵行為をしたのであるから大問題である。一時期秘密裏に7名を処分するという案まで出たほどであった。

しかしさらに問題をややこしくしたのは、中国軍が敵中を突破し

味方前線に辿り着いたこの7名を褒め称える声明を発表した事であった。これによって7名の存在が公になってしまった。

戦死したと思っていた7名が生きていた。しかも捕虜になって。この事態に国民は驚愕し、日本全国で議論を巻き起こした。

「なぜ潔く自決しなかったのか？」

「敵中脱出を誉めるべきではないのか？」

「敵軍に我が軍の情報を渡したとはどういうことか？」

賛否両論の意見が飛び交った。その中でも知識人たちが話題にしたのが、どうして敵軍に情報を渡してしまったのかということであった。

通常、捕虜には黙秘権が与えられている。そのため、自分の官姓名以外は喋る必要はない。これは国際的な常識でありルールであった。

この疑問に対し、捕虜になり敵に情報を流してしまった7名の答えは簡潔であった。ちなみにこの時点で、7名は原隊に復帰し、取材に来る新聞記者の質問にも答えられる状況にあった。そのほとんどは上からの命令か質問を無視したが、ついに1人が高額報酬につられ、匿名で質問に答えたのであった。

「そのような物があるのを知らなかった。」

この1人の飛行兵が話した言葉によって、日本軍における捕虜になった場合の対処法が全く教育されていない事実が判明したのであ

る。

さらに、中国政府が彼らを英雄として発表したことも議論の対象となった。

「捕虜になるのは卑怯なのに、なぜ中国政府は彼らを英雄視するのか？」

「そもそも捕虜になるとは法的にどういうことなのだ？」

ここに至って、ようやく日本人は万策尽きて捕虜になるのは断じて卑怯な行為ではなく、国際的にも認められた正しい行為であると言っことを再認識することとなったのである。そしてまた、捕虜になるのは卑怯ということが、全く法的にも根拠がなく、日本独特の概念であるのも知ることとなった。

さらにこの問題に対して、外国の一部新聞社が「狂った概念」と評した事も、捕虜蔑視論を見直す要因となった。

そして昭和14年にこの事件を受けて発行された、軍人の戦場におけるマニュアルと言すべき「戦陣訓（初版）」には、捕虜になった場合の対処法や、敵の捕虜に対する扱いなどが明記される事となった。

この「戦陣訓」の発行は、対外的な視線を意識したという意見があり、事実そうであった。

「戦陣訓」の発行以後日本軍内部では、それまで強まっていた捕虜蔑視論は急速に弱まり、逆に例え捕虜になっても戦線への復帰を目指すように努力し続けるべしという風潮が高まった。

そして、「成都陸攻事件」を生き抜き日本の捕虜に関する概念を変えた7人の男達は、その後厄介者扱いされ、全員が独立艦隊配属となった。

「いいねえ、この「米山」は。96陸攻とはえらい違いだよ。」

ラバウル飛行場へ向かって飛ぶ「米山」重爆の中で、機長の竹下大尉が満足げに言う。彼こそが、あのたった1機不時着した陸攻の機長だった人間である。

「米山」ことB17の乗員は約10名であるが、この内7名はあの時の搭乗員たちで固められている。

「ええ。この機ならあの時みたいに敵戦闘機に滅多打ちにされて、名誉の戦死にならなくても済みそうです。」

竹下の隣で操縦桿を握る副操縦士の吉田少尉が頷きながら言った。

あの時の記憶は、彼らにとって忌々しい物でしかなかった。目の前で仲間は全滅し、捕虜になりながらも復仇の念を抱いて収容所を脱出して、命からがら味方に戻ってみれば、卑怯者というバッシングの嵐であった。

（敵に一系報いたいと思って命を掛けて帰ったのに、この扱いは何だ！！）

彼らは、日本に広がっていた捕虜になるのはマズイことであると

いう意識が、如何に危険な物であつたか認識したのであつた。

「まあ今度は捕虜になつても、卑怯者なんて言われることはないだろうがな。」

「自分は嫌ですよ。戦果を上げて、俺たちが生きていたおかげで大戦果を上げる事が出来たということを、上層部のアホどもに見せてやりたいです。」

「確かに・・・そうだな・・・」

竹下はどこか寂しげな表情でそう言った。

「そうになると、今回の新兵器がちゃんと働いてくれるのを祈るだけだな・・・」

その小さな呟きを聞いた者は誰もいなかった。

この数時間後、他の独立艦隊将兵たちよりも数日早く、彼らはラバウルの土を踏むのであつた。そしてそこで、彼らは予想通り、新兵器による敵艦隊攻撃を命じられるのであつた。

復仇の翼（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

新兵器投入

第二次世界大戦は、後の世に言うハイテク兵器が登場した戦争でもあった。特にドイツはその先進国と言える存在であり、ジェット機、音響追尾魚雷、熱探知式の地对空ミサイル、無線誘導による滑空爆弾を開発し、実戦配備している。

一方、日本の陸海軍でもこうした兵器を全く開発してないということはなかった。例えば音源探知による誘導兵器の開発は開戦前後から始まっていたし、また航空機を落とす殺人光線も本気で研究されていた。しかしながら、その規模はドイツなどから比べれば劣っていた事は咎めない。電探さえ、開発当初は制式化を危ぶまれていたのだ。幸い電探は、独立艦隊で行なわれた試験で、霧中や多島海での航行など戦闘時以外における使用にも有用であるとして、開発を続けることが出来た。

しかし、その他のジェット機や誘導兵器などの研究は進んでいるとは言えなかった。一応陸軍ではロケットは開発されていたが、それは主に対地攻撃用の撃ちっぱなし方式であり、ハイテク兵器には程遠かった。

そんな中で、ドイツ軍が1942年8月にスエズ運河を攻略し、さらに日本海軍がインド洋の制海権を握ると、大きく状況が変わった。それまで潜水艦、もしくは長距離輸送可能な飛行機で細々と人材や、わずかな資料を交換するしかなかった両軍は、大量の物資交換が可能となったのである。

日本からはドイツで不足している生ゴム等の戦略物資、さらに「火星エンジン」や試作段階の「誉」エンジン、酸素魚雷、航空魚雷、

擲弾筒、零式水上観測機や二式飛行艇などが輸出された。また日本では生産中止となった液冷式三式戦闘機「飛燕」や同じく液冷式艦上爆撃機「彗星」も輸出されている。

零式水上観測機や二式飛行艇は、当時日本の航空機技術の中で特に抜きん出ていた水上機、飛行艇分野を象徴する機体であった。この2機種はエンジンや武装に改良が加えられた後、ドイツやイタリアでライセンス生産されている。

「飛燕」はもともとメッサーシュミット戦闘機と同じエンジンを積んだ戦闘機だったが、その大きさは一回り大きく、さらに航続力も長かった。そのため、この機体を見たメッサーシュミット博士は、「全く別物であり、エンジンさえ動けばMe109を凌駕する」と言わしめた。そして後のMe109戦闘機K型の改良に役立てられたとされている。

「彗星」は、日本ではエンジンの不調に泣かされ、早々に空冷エンジンに代えられてしまったが、ドイツでは自国製エンジンに改修した上で、フィーゼラー社とハインケル社でライセンスされ、旧式化したJu87「スツーカー」の代替機として戦場に投入されている。

一方、ドイツからは20mmマウザー機関砲やパンツァーファウストといった即実戦投入可能な兵器類に加えて、He280ジェット機や音響魚雷の実物、さらにミサイルの誘導装置の図面に加えてその実物も輸入された。

これらを調査した日本軍技術陣は、ドイツの高い技術力と、それを生産し実戦配備できる工業力に舌打ちしたとされている。

日本軍はこれらの中で、特に有用で開発が短時間で終わらせられ

ると見込まれた対戦車ロケット弾、音響魚雷と無線誘導の滑空爆弾の開発を優先して行なうこととした。これらは日本でも研究が行われた物の延長上の物であったが、早期の開発が見込まれた。

この内、対戦車ロケット弾は昭和18年2月に完成している。また音響魚雷は誘導装置の開発に苦しんだが、昭和19年2月に実戦投入された。残る無線誘導滑空弾は、誘導装置自体は戦前から研究されていたから開発は順調に進んだ。ただし、日本の物は工業レベルの遅れからか、ドイツより一回り大きくなった。

この新型誘導滑空爆弾は、三式対艦誘導弾と名付けられ、早速実戦投入されることとなった。ただし、前記したとおり大きな爆弾になったため、搭載できる航空機が限られた。この時点では一式陸攻のみであったが、一式陸攻に積むと爆弾倉からはみだし、大幅な速度低下を招いた。そこでこの爆弾を、開発中の「連山」が実戦配備されるまで搭載することになったのは、ペイロードに余裕があり、なおかつ大型の爆弾倉を持つ鹵獲したB17となった。

特試航空隊が最前線であるラバウルへと次々と進出したが、その中のB17はその大きさも去ることながら、機首に付いている突起が人々の目を引いた。

「本当にあの爆弾を今回の作戦で使うのかい？」

その突起を2人の男が見ていた、1人は大尉の階級章を付けた飛行服の男で、もう1人は3種軍装を着た技術大尉であった。

「もちろんです。三式誘導弾の有効性が確認されれば、今後の戦争が大きく変わります。」

なんとなく嫌そうに言った飛行服の大尉、「米山」重爆隊隊長兼
1番機機長の竹下大尉の言葉に対し、三式誘導弾の開発に携わった
1人である技術将校の河野技術大尉は自信に満ち溢れた表情で言っ
た。

「そうは言うけどよ、演習じゃ随分と外れたじゃないか。俺はこん
な信頼の置けない兵器を前線に出すのは危険だと思うがな・・・」

竹下大尉は、今回使うことになった新兵器にあまり信用を置いて
いなかった。

三式誘導弾をこれまでに演習でも何回か投下してきたが、どうも
開発されたばかりの誘導装置に無理があったのか、まず母機から発
せられる無線の電波を拾ってちゃんと誘導される爆弾が50パーセ
ントも出た。さらに電波を拾って誘導されても、搭乗員がまだ扱い
なれていないために、その内命中するのは20パーセントだった。

そのため、1回飛行場近くの標的に対して投下した誘導弾が、あ
るうことか女子飛行兵の宿舎に突っ込むという事故が発生した。幸
い飛行兵は訓練で外に出ていたため、死傷者は奇跡的に1人も出な
かった。しかし、宿舎は滅茶苦茶になってしまい、それ以来「米山」
搭乗員の女子兵からの評価は地を這うレベルだった。

「大丈夫ですよ。これまでの失敗から誘導装置には何回も改修を加
えています。現に最後の演習じゃ大分良くなっていたでしょ？」

河野はそう言うが、それで竹下の心配を払拭する事は出来ない。

「そうは言うがな、やっぱり信頼できないよ。こいつを使うくらい

なら、やりなれた水平爆撃をした方がマシだよ。」

「そうは言いますが、水平爆撃を対艦爆撃に使っても命中率が極端に低いのは大尉も良く承知でしょ？確かに三式誘導弾の信頼性はまだ低いかもしれませんが、こいつがしっかりと誘導されれば、その命中率は水平爆撃とは比較にならないくらい高まります。」

「だからその、しっかりと誘導されるかが心配なんだよ！」

現場で戦う兵士にとって、使う武器の信頼性が即運命を決める可能性が高いのだ。それなのに、今回はその信頼性が低い兵器を使うのだ。竹下が憂鬱になるのも道理であった。

「御安心を・・・我々が徹夜で整備します。必ず8割の誘導弾がちゃんと誘導されるようにします。」

自信を持ち、強い意志を込めてそういう若い技術大尉に、竹下は冷やかな視線を浴びせつつ、一言こう言った。

「とにかく頼むよ。」

新兵器投入（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

今回登場した三式誘導弾の元ネタはドイツ軍のフリッツXという
実在兵器です。

それと「米山」をはじめとする機体の名称は、羅門祐人先生著の
「独立愚連艦隊」を参考にしています。

攻撃隊出撃！！ 上

ガダルカナル島奪回を目指す米軍機動部隊に対して、日本側はガ島をはじめとする各地の航空基地から米機動部隊と米輸送船団に攻撃をかけた。しかし、米艦隊の対空火力は大きく増強されており、損害に対して戦果は大きくなかった。

そんな中で、ラバウル北飛行場に展開する特試航空隊の「米山」爆撃隊は出撃準備に掛かっていた。この時のため、整備兵たちが和訳されたマニュアルを元に、各機体は徹底的に整備されていた。

本来、こうした多発機の整備は難しい。エンジンの出力を併せるのに苦労するからだ。だが、整備兵達は良くこの問題乗り越えた。

18機のB17こと「米山」爆撃機が発するエンジン音で、ラバウル北飛行場は満たされていた。さらにP38こと「剣風」、B25こと「豪山」、A20こと「双山」も発動機を回して出撃準備に掛かっていた。

戦闘機30機、中型爆撃機47機、大型爆撃機18機の計95機からなる攻撃隊は、米機動艦隊をその目標にしていた。

「早朝の偵察の結果では、米機動部隊はガダルカナル島東南300km海上を遊弋中である。その後方150kmには輸送船団の存在も確認されているが、我々とはとにかく制空権確保のために、米機動部隊を叩く。」

隊長の竹下大尉が、集合した搭乗員たちの前で訓示を述べる。

「これまでに攻撃した攻撃隊の損害から考えて、米機動艦隊の対空火力はそうとう強力だと考えられる。我々自身も大損害を覚悟しなければならぬだろう。だが俺は敢えて言おう、生きて帰ってこい。例え撃墜されても脱出して救助を待て。飛行機の代わりは用意できても、お前らの代わりは用意できないからな。以上だ。」

「敬礼！！」

搭乗員たちが一斉に敬礼をする。用意された壇上で演説していた竹下も答礼する。

「解散！！全員搭乗せよ！！」

命令を受けた搭乗員たちが一斉に愛機に向かって走り始める。竹下も壇上から降りて、自分の「米山」に向かって歩く。

彼の「米山」は既に暖機運転も済ませて、いつでも発進できる態勢が整っていた。

「隊長、エンジンの機体共に異常なし。いつでも発信できます！」

つなぎを油で真っ黒に汚した整備班長が、竹下に敬礼しながら言った。

「ありがとう。」

整備班長に笑顔で敬礼すると、彼機体前部のハッチから乗り込んだ。そして操縦席に上がる。

「隊長、エンジンの機体共に異常なし。他の機体も異常なさそうで

す。」

機長席に座る竹下に、副操縦士の吉田少尉が声を掛ける。

「おう。」

「出撃予定時刻まで後5分です。」

吉田の声を聞き流しながら、竹下は機内通話装置のスイッチを入れた。

「こちら機長だ。各部状況報せ？」

すぐに返答がなされた。

「こちら爆撃手、異常なし。」

「上部銃座異常なし。」

「側面一番銃座異常なし。」

「側面2番銃座異常なし。」

「下部銃座異常なし。」

「尾部銃座、異常なし。」

「ようし……全て異常なしだな。」

あとは指揮所に発進開始を示す旗が上がるのを待つだけである。

そして3分後、それは掲揚された。

旗が上がるのを確認すると、まず滑走距離が短くて済む護衛役の「剣風」戦闘機が離陸を開始した。つづいて中型爆撃機である「豪山」と「双山」が離陸を行なう。それら先行機は、事故を起こす事もなく、無事全機空中に浮かび上がった。

その光景を見届けた所で、竹下は機体を前進させた。次は彼らの番である。

「ようし、行くぞ!!」

「はい!!」

滑走路の端に着くと、彼はスロットルを全開にした。4発のライトサイクロンエンジンの出力が最大にまで上昇し、「米山」の機体は加速していく。だが重い誘導弾を腹の中に抱えた機体は、双発爆撃機のように浮かび上がらない。

滑走路の7割を過ぎたところで、ようやく揚力を得て機体が浮かび上がり始める。竹下と吉田はその瞬間を逃さず、操縦桿を引いた。

間もなく、機体が浮かび上がった。失速しないように注意しつつ、2人は機体を上昇させていく。

「米山」の機体は安定し、速度を上げ上昇していく。

竹下は操縦を一端吉田に任せて、機内通話装置で尾部銃座の隊員に問うた。

「よし！こちら機長だ。尾部銃座、後続機の状況を報告せよ！」

「こちら尾部銃座、現在3番機が滑走中・・・今離陸しました。異常なしです。」

「了解。」

18機の「米山」が発進するまでには少しばかり時間が掛かる。そのため、先行機はしばらくの間空中で待機する。

「米山」の最後尾機が発進し終わったのは、それからおよそ20分後であった。18機の「米山」は空中に集合すると、3機ずつの小隊を組み、先に飛び立った「剣風」、「豪山」、「双山」とともに進撃を開始した。彼らはこの後、ブーゲンビル島から発進してくる攻撃隊と合流する予定であった。

ブーゲンビル島、ブイン基地から発進してくる予定の機体は零戦28機、1式陸攻10機、99艦爆8機であった。

数時間後、ガダルカナル島沖に遊弋する米機動部隊のレーダーが多数の機影を捉えた。

「敵機か？」

レーダー室からの報告を受けた、機動部隊司令官ミツチャ 中將は参謀長に聞いた。

「方位からしてそれ以外に考えられません。」

「わかった。ならすぐに迎撃戦闘機隊を向かわせる！それと各艦は対空戦闘準備だ！！」

「イエッサー！！」

日本機接近の報を受けて、米機動艦隊の動きは活発となる。対空砲や対空機関砲に兵士達が取り付き、現れるであろう日本機を迎え撃つ。また空母の艦上では待機していたF6F「ヘルキャット」戦闘機が次々とエンジンを始動させて、発艦にかかる。

「日本機は機数およそ150！速力200ノットで接近中！」

レーダー室から、スピーカーを通してさらなる情報がもたらされる。

「150か・・・今まで最大規模だな。」

ミツチャ　が呟いた。

「おそらくこの方面の機体を掻き集めたのでしょう。」

「迎撃の戦闘機は何機上がっている？」

「既に48機が上空に下ります。また、各空母に待機していた36機もまもなく発艦します。状況によってはさらなる増援も行ないます。」

「合計84機か・・・少し不安だ。残った機体も急いで上げさせろ！」

150機全てが戦闘機でないとはいえ、半分の数の戦闘機では相当機数が潜り抜けてくるかもしれない。ミツチャは万全を期すことにした。

「了解!!」

それから間もなく、格納庫内に残されていた「ヘルキャット」全てに出撃命令が下された。最終的に米機動艦隊が出撃させた「ヘルキャット」は97機であった。

20分後、米戦闘機隊は日本の攻撃隊を確認した。

「タリホー・ターゲット!!（敵機発見!!）」

敵機発見を合図に、「ヘルキャット」は次々と機体下部に付けていた増槽を投棄した。そして突撃を開始した。

「ゴー・アタック!!（突撃!!）」

こうして激しい空戦は始まった。

攻撃隊出撃！！ 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

攻撃隊出撃！！中

戦いはまず、米戦闘機隊と日本戦闘機隊との戦闘から始まった。上昇してくるF6F「ヘルキャット」に対して、双胴の「剣風」戦闘機がその重馬力と頑丈な機体に物を言わせて急降下した。

最初米戦闘機隊のパイロットたちは、その機影を見て日本軍の新型戦闘機と考えた。しかしお互いにすれ違ったところで、ようやくその機体が紛れもないP38戦闘機であるのがわかった。

この反航戦では、お互いが高速ですれ違ったために被弾機こそ出たが撃墜された機体は皆無だった。だが、編隊を組んで上昇していたF6F戦闘機のかんりの数が編隊を崩してしまった。

「ガツデム！！卑怯なジャップめ！！」

「俺たちの国の飛行機を使いやがって！！」

氣勢を制されたアメリカのパイロットたちは、すれ違ったP38に向かって悪態をついた。

この時、97機いたF6Fの内の凡そ3分の1が急降下していたP38戦闘機の追跡に回り、残る機体は体制を立て直して上昇を再開した。

そこへ今度は上から零戦隊が襲い掛かった。ただし零戦隊はF6Fに向かつての急降下を途中で止めて、旋回をし始めた。この行動に米軍パイロットは首を捻ったが、まもなくその答えが彼らの目の前で炸裂した。

突然空中で数十の爆発が発生し、まるでタコの足の様な火の線がF6Fに襲い掛かった。

「うおー!!」

「なんだー!!」

米戦闘機隊のパイロットは、またもや日本軍が行なった予想外の攻撃に大きく取り乱した。再び編隊を崩したり、上昇をやめてしまう機体が続出した。

この時零戦隊が使ったのは、日本海軍独自の兵器である空対空爆弾の3号爆弾であった。この爆弾は、いわば航空機用三式弾と言える爆弾で、敵機の頭上で炸裂した爆弾の内部に仕込まれたリンを含む弾子が網のように敵機を包み、撃墜または撃破する兵器である。

弾子は飛び出ると四方八方に煙を引きながら飛び散るので、搭乗員達は別名タコ足爆弾と呼んだ。

ただし、見た目は派手だが60kgの小型爆弾であるから1発あたりの破壊力はタカが知れている。おまけに信管は時限信管であるから精度も高くない。だから下手な鉄砲数撃てば当たるの論理で、多数の爆弾を一斉に投じないと戦果は覚束なかった。

この時は米戦闘機隊が密集していたおかげで、撃墜5、落伍3、撃破4とそれなりの戦果を上げられた。もっとも、その実際の戦果以上に大きかったのが、敵戦闘機が一時的にせよ動きを乱した所であつた。

そこを逃さず、28機の零戦が再び急降下して襲い掛かった。およそ2、5倍の敵であったが、烏合の衆と化している今なら互角に戦えた。

F6Fの後ろに回りこむと、零戦隊はその必殺の武器である20mm機銃を次々と叩き込んだ。中には試験段階であった30mm機銃を搭載していた機体もあり、その弾を喰らったF6Fはすさまじい打撃を負った。

この空戦で、零戦は5機を損失したが、F6F14機を撃墜し8機を落伍させ10機以上に被弾を確認した。

既に半数近くが撃墜されるか戦闘不能に陥ったF6F戦闘機隊であったが、残存する機体は遮二無二爆撃隊へと突進した。そしてそこで彼らが見たのは、またも見慣れたアメリカ製の機体が日の丸をつけて悠然と飛行している様子だった。

「畜生！叩き落してやる！！」

米戦闘機隊はフルスロットルで、攻撃隊の中でも一番目立つB17爆撃機に襲い掛かった。しかし彼らを待ち受けていたのは、日本や独逸の戦闘機パイロットを苦しめた防御銃座からの砲火だった。

上昇してくるF6Fを認めると、早速18機の下部銃座が一斉に銃撃を開始した。

さすがに頑丈なF6Fであるから、被弾しても早々墜落する物ではない。逆にお返しとばかりに「米山」に向けて翼内に持つ6挺の12.7mm機銃で攻撃を開始した。

だがここで一部の米軍パイロットは目測を謝ってしまった。さらに、銃撃後の回避運動に切れがなく、側面や尾部、機首の銃座に撃たれて被弾する機体が続出した。さらに1機に集中的に攻撃する方法でなく、各機がバラバラに銃撃をしたために、「米山」爆撃隊はほぼ全機が被弾こそしたものの、投弾前に撃墜された機体は2機に留まった。

そして米艦隊に近づくと、高高度からの誘導爆弾攻撃を行う「米山」は高度をそのまま維持し、1式陸攻や「豪山」といった低空からの雷撃や反跳爆撃を行なう機体は高度を下げた。

この時「双山」（A20ハボック）2機と、1式陸攻3機が追いついてきたF6Fに撃墜されてしまったが、残る機体は突撃を敢行した。

「全兵器使用自由！！オープン・ファイア！！」

戦闘機隊の防御網を突破した攻撃隊に向かって、米艦艇の対空砲火が一斉に撃ち方を始めた。

頑丈な米国製の機体を多用しているとは言え、墜落しない飛行機などこの世に存在しない。確かに日本製の機体に比べて被弾に強かったものの、さすがに1機、2機と限界に達して海上に叩きつけられる機体が発生した。しかしそれでも彼らは攻撃を止めるわけにはいかなかった。

「投下！！」

先陣を切って突入した「双山」が、輪陣形外縁で対空砲火を撃ち上げる駆逐艦に向かって、2発の250kg爆弾を投下した。

ピシャ！ピシャ！

子供がやる石を使った水切り遊びのように、爆弾が海面を飛び跳ねる。1発は敵艦手前で沈んでしまったが、もう1発は敵艦中央部に直撃した。

ドグワ　ン！！

敵駆逐艦の煙突付近に命中した爆弾が炸裂した。そして数秒後には搭載していた弾薬が誘爆したらしく、小規模な爆発を起こした。艦中央部の缶室に被害が及んだらしいその駆逐艦は、みるみる行き足が遅くなっていき、艦隊から落伍した。

「まずは1隻。」

その戦果を見届けた「双山」のパイロットは呟くように言った。

それとほぼ同様の光景が、艦隊の輪陣形外縁部で起きていた。「双山」や「豪山」が次々と駆逐艦や軽巡に対して反跳爆撃を行い、たいした装甲を持たぬ両艦艇は、次々と戦闘不能、もしくは火力半減などの大打撃を受けた。

しかし、両機種はそれより内部の重巡以上の大型艦、特に空母には全く近づこうとさえしなかった。

「一体何を企んでいるんだジャップ！？」

艦隊司令官のミツチャ　中將は、本来いの一番に狙うべき空母に全く近づきさえしない日本の攻撃隊に、不審の目を向けていた。

一方その頃、上空5000mを飛行する「米山」爆撃機では、爆撃手が滑空爆弾の誘導装置の電源を入れ、さらに爆弾倉の扉を開いて攻撃を開始せんとしていた。

「全機投下用意よし!!」

「誘導装置異常なし!! 敵艦艇捕捉!!」

「ようし、誘導爆弾投下用意!!」

「米山」爆撃機1番機機長の竹田が叫ぶ。周囲の空には、そこまですくはないが散発的に対空砲火が撃ち上げられている。その中を、彼はしっかりと操縦桿を握って操縦する。

そして。

「投下!!」

爆撃手が投下スイッチを押す。その途端、ガコンという音が響き、機体が一気に軽くなった。

攻撃隊出撃！！中（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

攻撃隊出撃！！ 下

ミツチャ 中將は空母の上空までやってきたB17を双眼鏡で見
ていた。彼は日本軍がB17やA20を使っていることに、そこま
で驚くことはなかった。この時期太平洋艦隊の主だった将官や艦長
には、日本軍が積極的にアメリカやイギリスから拿捕した艦艇や航
空機を使用しているという通達を受けていたからだ。

余談ではあるが、捕獲兵器の使用やコピーは同盟国のドイツでも
東部戦線を中心に広く行なわれていた。

「水平爆撃をする気か？」

彼は常識的にそう判断した。

海上を動き回る艦艇に対して水平爆撃するのはあまり得策とは
いえない。狙って投下しても、回避運動をされると簡単に交わされ
るからだ。そのため、編隊で多数の爆弾を投下する以外に方法はな
い。しかもたった1・2発を当てるために。

ミツチャ はすぐに回避命令を下した。

「ただちに最大速力で回避運動を行なえ。水平爆撃など簡単によけ
られる。しかし、B17の爆弾搭載量からして大型爆弾かもしれん
から油断はするな！！」

「アイサーー！！」

まもなく空母「エセックス」をはじめとする、各艦が一斉に舵を

切った。また対空砲も仰角を上げてB17を砲撃しようとする。しかし、その時になって撃破した駆逐艦や軽巡の対空砲火の網を抜けた1式陸攻や99艦爆が空母に対して積極的な攻撃を開始した。

この1式陸攻と99艦爆の突入は絶妙なタイミングであったが、決して意図した物ではなかった。1式陸攻は敵戦闘機の妨害を受けたため、99艦爆は速度が遅かったために起きた偶然の産物だった。

これによつて対空砲火が分散されてしまい、被弾こそ戦艦「サウス・ダコタ」に爆弾1であったが、B17こと「米山」は一機も撃墜されずに済んだ。

そしてその直後、彼らは自分たちの得物を米機動部隊に対して使用した。

最初、米機動部隊の誰もが敵は大型爆弾を投下したと思っていた。しかし、まもなくその認識が大きく間違っているのに気付かされた。

「敵爆弾、針路を変えて突っ込んできますー!!」

見張りの兵士の1人が絶叫した。

「何だと!!」

それまで低高度で攻撃を仕掛けてくる艦爆や陸攻に氣をとられていたミツチャは双眼鏡を再び上空に向けた。そして、敵機が落としたと思われる爆弾が降下してくるのが見えた。

落下ではない、降下である。これは誘導弾が急角度ではなく、安定翼のおかげで浅い確度で落ちていったからだ。

「対空砲、あの爆弾を狙え！！あいつはナチの「フリッツX」だ！！」

ドイツ軍の暗号を傍受した結果、連合軍は「フリッツX」の名を既に知っていた。そしてその誘導滑空爆弾が、最近になって大西洋や北海で連合国艦船に猛威を振るっているのも。つい1月ほど前には、船団護衛中の米戦艦「ニューヨーク」がHe277に搭載されていたこの爆弾を受けて大破、その後Uボートの雷撃で沈没という被害に遭っている。

そのため、「フリッツX」の名は連合国将兵にとって恐怖の爆弾の代名詞の1つとなっていた。

命令と共に、それまで撤退する日本機に追尾射撃を仕掛けていた各対空砲と対空機関砲は一斉に落下する「フリッツX」を狙い始めた。もしこの時ミッチャー中将が「米山」の撃墜を指示していればその後の歴史は変わったかもしれない。しかし、彼はナチスの新兵器を日本軍が使ったという事実に焦ってしまった。

各艦が打ち上げる無数の砲弾が上空で炸裂するが、既に半数の艦艇が被弾し対空火力を減じているうえ、さらに誘導弾は目標として小さすぎた。結局撃ち落せたのは14発中の1発のみであった。残る13発が米機動部隊に襲い掛かった。

ドゲワ
ン！！

最初の命中弾が軽空母「ラングレー」の飛行甲板を突き破り、格納庫内で爆発した。これによって同艦は飛行甲板が使用不能となり、空母としての機能を失った。

続いて今度は旗艦である「エセックス」の後部に1発が命中した。この誘導弾も格納庫内に飛び込み、そこで爆発した。これによって「エセックス」の後部甲板は完全にめくれ上がってしまった。さらに1発が命中したが、これは一部の対空砲を破壊しただけであった。2発の被弾によって「エセックス」も「ラングレー」同様空母としての機能を失い、事実上戦闘不能に追い込まれた。

被害はこの2艦だけにとどまらず、さらに空母「レキシントン」と軽空母「カウスペンス」にも及んだ。このうち「レキシントン」は命中箇所が艦橋後部の高角砲塔であったために、小破で済んでいる。

甚大だったのは「カウスペンス」で、艦橋の付け根部分に命中し、艦橋が完全に破壊され艦長以下艦橋にいたスタッフの全員が戦死した。さらに誘導弾は格納庫と飛行甲板にも被害を与え、同艦も戦闘不能となった。さらにもう1発が艦首に命中したが、こちらは不発に終わり、艦体に衝突して海中に落ちてしまった。

命中した誘導弾は不発弾も含めてこれら4艦に命中した計6発であった。発射された数が14発であったから、命中率は43%である。これは低いとまではいかないが決して高い数字ではなかった。

この報告を受けた「米山」隊指揮官の竹下大尉は舌打ちして言った。「そうか・・・とりあえず上手く誘導できた弾があっただけ良しとするか。」

竹下は一言そういうと、すぐに無線で命令を出した。

「全機へ、長居は無用だ。引き上げるぞ。」

彼は残存する13機とともに、ラバウルへの帰途についた。こうして日本初の誘導弾による攻撃は終わった。

この航空攻撃によって、ミッチャー機動部隊は5隻の空母の内2隻が戦線離脱となり、さらに軽巡1隻と駆逐艦4隻を失った。また損傷した艦船も多数出た。そのためミッチャー中将は残存する艦艇を上陸船団の護衛艦隊に編入して、機動部隊を撤退させた。彼自身は空母「エンタープライズ」に乗り移って指揮を続けた。

この攻撃は日米両軍にショックを与えた。まず日本側の場合は、誘導弾の命中率が思った以上に振るわなかったことだ。これは有視界での誘導に限界があったのが一番の要因であった。また誘導中の母機が脆弱であるのも後に指摘され、結局これ以後無線誘導弾は対艦攻撃には使われず、専ら対地攻撃に使われた。これ以後帝国海軍はその研究を熱線探知方式に切り換えた。

一方米軍は日本海軍が本格的な誘導弾を投入した事に驚愕し、その対策に乗り出していく。また自軍内でも遅ればせながらその研究に取り組むこととなる。

この攻撃で米機動部隊は艦艇の多くが沈没か戦線離脱を強いられしたが、上陸船団と護衛艦隊は無事であったために、ガダルカナル島上陸作戦は続行されることとなった。しかし上陸日時を1日延期せざるを得なかった。この間に、ガダルカナル守備隊は防衛体制を整えることができた。また味方機動艦隊が来るまでの時間稼ぎにも成功することとなった。

攻撃隊出撃！！ 下（後書き）

作中に出てくる「エンタープライズ」と「レキシントン」はいずれも「エセックス」級につけられた2世の名です。

御意見・御感想お待ちしております。

空母決戦 上

ラバウルからの陸上航空隊の攻撃によって時間を稼いだ日本軍であったが、翌日真打とも言うべき第1機動艦隊分遣艦隊がガ島近海に進出してきた。同艦隊は空母「瑞鶴」、「翔鶴」、「剛龍」を主力として、巡洋戦艦1、重巡3、軽巡2、駆逐艦10からなっていた。司令官は進級したばかりの原忠一中将である。

同艦隊は黎明から早速偵察機を飛ばして敵機動艦隊と敵上陸部隊を探した。一方の米機動艦隊も無線情報で日本機動艦隊の出撃を知っていたので、こちらも偵察機を出した。

しかしながら、この日午前中はガ島近海の天候が悪く、双方ともに発見できなかった。結局機動部隊同士の間決は午後にならで持ち越されたが、ここで両軍とも予期せぬ事態に見舞われた。

まず日本艦隊は空母「翔鶴」のボイラーが突然故障を起こし、速力が20ノットまで下がってしまったのである。これは全く原因不明の事態で、2時間後に回復したもののこれによって進撃速度が落ちてしまった。さらに、この間一時的に航空機の運用を停止したため、一部の偵察機の発進が遅れた。

一方米機動部隊の方は日本の潜水艦の襲撃を受けた。この時米機動艦隊に攻撃を仕掛けたのは「伊26」潜水艦だった。同艦はソロモン海での哨戒任務に就いていたが、偶然にも米機動部隊を捕捉し雷撃を敢行したのであった。

結果は空母にこそ命中弾を出せなかったが、重巡「シカゴ」に2本が命中大破、軽巡「ヒューストン2」に1本命中中破、そして駆

逐艦「オブライエン」に1本命中、大破後沈没であった。

1隻の潜水艦があげた戦果としては空前絶後のものである。しかしながら、「伊26」はこの後すぐに対潜哨戒機によって攻撃されてやむなく浮上。その後やってきた米駆逐艦に撃沈されている。また無線を打つことも出来なかった。

どうして攻撃前に「伊26」が無線を打たなかったのか不明であるが、後に捕虜となって帰国した乗員の話によれば、どうやら無線装置がトラブルを起こしていたらしい。

この雷撃によって、米機動艦隊は2時間ほど足止めを食らってしまった。

こうした突発事態に見舞われた両軍であったが、夕方になってようやくお互いの姿を確認している。しかしながら、既に日没が迫っていたため、両軍とも航空攻撃は無謀として行わなかった。

米機動部隊司令官のミッチャー中將は敵機動部隊を掃討していないことを理由に、上陸部隊護衛艦隊司令官のライト少将に一端後退するよう打診した。

ライト少将率いる護衛艦隊は戦艦と空母を含んではいたが、戦艦は真珠湾から引き上げた旧式艦であり、空母は商船改造の護衛空母で、艦載機の合計は56機に過ぎなかった。

そのためライトはミッチャーの要請を受け入れ、一端ガ島南方海域に後退している。そしてこの日の夜はお互い何事もなく終わった。

翌朝、日米機動部隊は再び黎明からお互い偵察機を出して敵を求

めた。日本側は最新鋭の艦上偵察機「土星」（2式艦上偵察機の空冷バージョン）が、また米軍側も最新鋭の艦上爆撃機SB2C「ヘルダイヴァー」が南海の空へと飛び上がった。

両軍偵察機の搭乗員たちは、それこそ血眼にして敵機動艦隊を探したが、先に発見したのは日本の「土星」艦偵であつた。米軍機に比べて高速であつたことが有利に働いた。

この報を受けるや否や、原は直掩機を除く全ての機体に発艦命令を出した。

「全機出撃！！とにかく空母を叩け！！」

3隻の空母から艦戦47、艦爆45、艦攻40の計142機が出撃した。いずれも「烈風」、「彗星」、「天山」と言つた最新鋭機であつた。

一方米機動部隊の方は日本軍に発見されたのに遅れること20分、日本機動艦隊を発見した。

「急いで全機発進させろ！！日本軍の攻撃隊が来る前になんとしても発進させるんだ！！」

すでに日本側の偵察機に発見されていたため、ミッチャーはとにかく一刻でも早く攻撃機を発進させるよう、繰り返し命令した。そして間もなく、艦戦40、艦爆60、艦攻27の合計127機が出撃した。艦爆が艦攻に比して多いのが、急降下爆撃を重視した米海軍の特色であつた。

こうしてお互い矢を放つた両機動艦隊は、今度は敵攻撃機の襲来

に備えた。直掩戦闘機を上げ、乗員が戦闘配置に就く。

発進した時刻は日本側の方が20分ほど早かったが、途中でスコールを迂回したため、攻撃開始時刻の差は米攻撃隊に比べて5分であつた。

まず戦闘機同士の戦闘によつて、戦いの幕が上がつた。この時米軍側が上げていた直掩戦闘機の数はいくつ。日本側とほぼ互角であつたが、性能的には日本側の「烈風」が米軍の「ヘルキャット」に勝つていた。

「烈風」は零戦の後継機になるべく開発された新型戦闘機で、当初は格闘性能が重視されたため艦攻並みの大きさになる予定であつた。しかしその後前線からの意見を踏まえて、速度性能が重視されたため、一回り小さくされている。またエンジンも生産性に難があつた「誉」に換えて、三菱製の「勲」を搭載している。さらに川西社製の自動空戦フラップを搭載するなどして、零戦に勝るとも劣らない格闘性能を可能にしている。

搭乗員たちも半分は開戦以来のベテランで占められており、部隊全体の練度も米軍機に比べて遥かに高かつた。

結果戦闘機同士の戦いは日本側の損失5機であつたのに対して、米軍側の損失22機と一方的な戦いとなつた。

そして戦闘機隊の戦いを横目に、艦爆と艦攻が一斉に突入した。

「突撃！ 攻撃目標は輪陣形中央の敵空母だ！！」

攻撃隊隊長の友永少佐の命令の下、攻撃隊は2隻の「エセックス」

級空母と、1隻の「インディペンデンス」級空母に攻撃を集中した。

一方米艦艇側も対空戦闘を始めた。

「全火器使用自由！！ファイア！！」

5インチ両用砲、40mm機関砲、20mm機関銃がいつせいに発砲した。しかし、その数は一昨日の対空戦闘時より明らかに少なかった。損傷艦艇の後退や、また現在戦闘継続中の艦艇にも、対空砲などが損傷しているものが多かったためだ。

それでも米艦隊の対空砲火は奮戦し、「彗星」5機と「天山」6機を撃墜するか、飛行不能なほどの損傷を与えている。だがその程度で攻撃を止めることなど当然出来なかった。

対空砲火を突破した攻撃機が次々と3隻の空母めがけて投弾した。

結果は悲惨以外の何物でもなかった。まずミッチャー中将座上の「エンタープライズ2」は魚雷3本と爆弾7発を喰らった。当初は米軍お得意のダメージコントロールのおかげで沈没は免れたかに見えたが、爆弾の命中のショックで航空ガソリンが漏れ出して、それに引火、大爆発を起こしたためについに放棄された。

また空母「ホーネット2」は魚雷4本と爆弾2発を受け、最終的に自沈処分された。さらに空母の「レキシントン」も沈没はしなかったが、飛行甲板を破壊されたため戦闘の継続が不可能となった。

こうして米第17任務部隊は事実上壊滅したのであった。そして米太平洋艦隊は、再び3ヶ月以上の間、攻勢を見合わせざるを得なくなった。

空母決戦 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

空母決戦 下

一方、日本の攻撃隊に遅れること20分、米軍の攻撃隊も日本艦隊への攻撃をかけていた。

まず日本艦隊の方もレーダーで米軍攻撃隊を捕捉し、迎撃戦闘機を発進させた。開戦当初こそレーダー技術が遅れ気味だったが、現在はドイツからの技術供与もあって米軍と遜色ないものになっていた。

発進した戦闘機隊もちろん最新鋭艦上戦闘機の「烈風」である。その合計は30機であった。彼らは艦爆、艦攻の攻撃を最優先した。

対する米軍のF6F戦闘機は40機であったが、ここで対零戦戦法であるサッチ・ウィーヴ戦法を行った。この戦法は元空母「サラトガ」戦闘機隊のパイロットであるサッチ中佐が考案したもので、2機で1機の敵戦闘機と戦うことで、格闘性能に勝る零戦を制圧するというものであった。

この戦法は「烈風」に対してもそれなりに有効ではあった。しかしながら、「烈風」側も装備された全自動空戦フラップを駆使し、さらに零戦にはない速度と急降下性能でF6Fを翻弄した。結局この空戦は「烈風」に2機、F6Fに8機の損失が出た。「烈風」の方が性能が若干高いのに加えて、パイロットの腕の差が出てしまったようだ。

ただし、艦爆と艦攻の損失は3機に留まったので、任務は達成したと言えた。

そして「烈風」の攻撃を逃れた米攻撃隊はそのまま日本艦隊へと突撃した。

日本艦隊もその動きを戦闘機隊からの連絡と電探を使って感知し、今度は巡洋戦艦と巡洋艦による3式対空弾による攻撃を開始した。

この頃3式対空弾は対空、対地攻撃に有効として海軍の15.5cm以上の砲を積む艦艇に常備されるようになっていた。ただし対空戦闘で使用する場合は信管調整が難しかった。この時も電探からの情報で数値を割り出して信管を調整して攻撃を行ったが、砲術の人間の不慣れ、さらには米軍側が3式弾の攻撃を警戒して散開したために、撃墜できた機数は4機、損傷して戦線離脱したもの2機という成績に終わった。

主砲を使った遠距離対空戦闘が終わると、一斉に高角砲と対空機銃が火を噴いた。特に対空戦艦とも言うべき巡洋戦艦「筑波」は、搭載した片舷7基ずつの12.7cm連装高角砲と10基の40mm連装機関砲、さらに60基の25mm単装機関砲を一斉に撃ち始めたために、艦体全体が光ったように見えた。

また高性能の10cm連装高角砲6基を主砲として持つ「綾瀬」型対空巡洋艦の2番艦「揖斐」もその自慢の主砲を米軍機に向けて撃ちまくった。

その他の艦艇も増強した対空火器を空に向け、砲身が溶けんばかりに撃った。

米軍同様、日本海軍の対空火力も強化されていた。さらに艦隊陣形も対空戦闘に向いている輪陣形を採っていた。しかし陣形を工夫し、対空火器をどんなに強化しても、その隙について攻撃を行う機

体は必ずでる。案の定対空戦闘開始3分後には、対空駆逐艦の「照月」が艦中央部に1000ポンド爆弾を被弾して大破した。同艦はその後、復旧が見込めなくなったために、やむなく自沈している。

さらにその2分後には軽巡「揖斐」が後部砲塔軍に被弾し、弾薬庫の誘爆という最悪の事態こそまぬがれたが、主砲2基がつぶされてしまった。

米軍機の攻撃はまず対空戦闘能力の高い艦の攻撃を行い、対空砲火に穴を開けることであつた。これは米機動部隊の攻撃を行った日本軍と同じであつた。

そして「照月」と「揖斐」の被弾によつて出来た対空戦闘の穴から、次々と米軍機が侵入し、3隻の空母に襲い掛かつた。この時点で残弾を有する米軍機は約30機で、1隻くらいなら撃沈できる力を残していた。

米軍機がターゲットにしたのは、1隻だけシルエットの違う「剛龍」であつた。同艦はシンガポールで捕獲した英空母「インドミダブル」であつたため、目だつてしうがなかつた。

まず7機のSB2C「ヘルダイヴァー」が上空から急降下爆撃をかけた。「剛龍」はただちに取り舵一杯に転舵し、さらに新兵器を上空に向けて発射した。それは3式対空噴進砲だつた。この砲は事実上のロケット砲で、28連装であつた。12cm口径の無誘導ロケット弾は弾頭が散弾になっており、突っ込んできた敵機をその数の多さとともに一気に多数撃墜するようになっていた。

「剛龍」には試験的に4基が搭載されていた。

発射されたロケット弾は予想に反して3機しか撃墜することは出来なかったが、いきなり下方から100発以上のロケット弾が煙を吹いて突き上げてくる光景は米パイロットを驚かせ、残存する4基は明後日の海面に爆弾を投下して離脱した。

こうして急降下爆撃の危機から「剛龍」は脱したが、誤算も起きた。まずロケット砲の発射煙の量が尋常な量でなく、他の対空砲や対空機関砲の発射を阻害してしまった。その隙について20機近い雷撃機が襲い掛かってきた。

爆撃機がたつた7機だったのに対して、雷撃機はその他の艦艇への攻撃を控えたためにこれだけの数が残存していた。

この危機に対して、まず「瑞鶴」と「翔鶴」が対空砲で支援攻撃を行って1機を落とし、1機を戦線離脱させた。さらに護衛艦艇も援護射撃を行い2機を撃墜し、3機を戦線離脱へ追い込んだ。

だがまだ10機近い「アヴェンジャー」が健在だった。彼らは仲間の仇討ちとばかりに「剛龍」に向けて魚雷を次々に投下した。

この時になってようやく「剛龍」の艦体を包んでいた煙が晴れ、各対空砲と対空機関砲が離脱せんとする「アヴェンジャー」に砲火を浴びせた。この結果さらに1機が撃墜された。

対空砲火こそ一時的に中止せざるを得なかった「剛龍」であったが、敵雷撃機の接近には早めに気づき、舵を取ることができていた。

10本の魚雷のうち6本は早々と命中コースを外れ、残る4本が「剛龍」に迫った。距離200mに迫ったところで、さらに2本が命中コースから外れたが、残る2本はついに避けきれず、「剛龍」

に命中した。

1本は艦首に、1本は艦尾に命中した。このうち艦首の魚雷は命中したというより、横から艦首がぶつかる形になったため、信管が働かなかつた。だがもう1本は深刻で、4本あるスクリューのうち2本を完全に折ってしまった。

この損傷によって「剛龍」は右に3度傾斜し、速力が20ノットまで落ちてしまった。そして帰還後実に4ヶ月の修理が必要となることとなった。

この日米機動部隊同士の戦いは第3次ソロモン海戦と名づけられたが、最終的に日本側に軍配が上がった。しかし日本機動部隊も「剛龍」中破と、護衛艦と艦載機の多くに損傷が発生したために、トラック方面へ帰還している。

一方の米機動部隊は、艦隊用空母が全滅したが、いまだガダルカナル上陸部隊護衛用の護衛空母2隻と、支援用戦艦2隻が健在であった。

空母決戦 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ガ島決戦 上

米艦隊がガダルカナルに来寇したという報告を受けて急行していた独立機動艦隊にも、基地航空隊や、先発した連合艦隊の機動部隊の戦果報告、そして偵察機からの報告が入ってきていた。

「ラバウルの基地航空隊、特試航空隊、第一機動艦隊分遣艦隊もそれぞれ戦果を上げたものの、米艦隊の一部ははまだ残留しているか」

旗艦「土佐」の艦橋で、近江司令官がブイン基地所属の偵察機からの報告を聞いて言った。

「輸送船を多数含んでいますから、上陸船団ですね。既にガダルカナルの基地航空隊は後退していますので、残っているのは陸上戦力のみですね。」

参謀長の長谷川大佐が付け加えた。

「恐らく、米軍は明日にでも上陸するかもしれん。機動部隊の本隊は後退したものの、上陸部隊には軽空母と戦艦がついている。上陸支援だけなら充分だ。」

「軽空母は恐らく商船改装の護衛空母でしょう。戦艦も報告によればノース・カロライナやサウス・ダコタ級ではなく、真珠湾で撃破したような旧式戦艦のようです。」

報告を聞いている近江司令官の表情は渋い。

「それでも今のガ島守備隊には脅威だ・・・それなのに、こちらは敵の上陸前に間に合いそうもないな。」

ガ島に米軍迫るの急報を受けて出撃した独立機動艦隊であったが、ブルネイ沖で訓練中であつたところを切り上げて出撃したものの、どんなにがんばってもガ島近海に到達するには6日程かかる。

「仕方ありません、連合艦隊のほとんどはセイロン島攻略と中部太平洋方面の防衛に就いていますから、残る手駒は遊撃戦力たる我々しかいません。」

長谷川としても味方が苦境に立たされているのは齒がゆいが、実際に合わないのであるからどうにもならない。

「わかつとる・・・そういえば、「伊607」と「伊608」はどうしているかな？」

近江が長谷川に聞いた。

「伊607」と「伊608」の2隻はいずれもアメリカから鹵獲した潜水艦で、オーストラリアで修理中に日豪講和が結ばれて帰還不能となり、その後日本に譲られるという数奇な運命を辿った艦だ。

ちなみにこのような形で引き渡された艦艇は他にも何隻が存在するが、いずれも補助艦隊や小艦艇ばかりである。この中で独立艦隊に配備されたのが前記の2隻である。これで以前から所属している「伊301」、「伊606」と併せて独立艦隊所属の潜水艦は4隻となった。

ちなみに、現在潜水艦の命名基準によれば、300番代は試験艦

と輸送艦、400番台は特殊任務艦、500番代は独伊からの譲渡艦、600番代は鹵獲となっている。

「伊301」は母港の伊豆にあり、新兵の訓練艦として用いられていた。また「伊606」は一時的に連合艦隊の指揮下に入って、セイロン島攻略支援任務に就いていた。そして「伊607」と「伊608」の2隻はラバウルで第4艦隊と、新設された対潜部隊である第903航空隊との合同訓練を行っていた。

もちろん2隻とも米軍来襲の報告を受けると訓練を切り上げて、早速哨戒任務に出動している。

「2隻から何も報告は入っておりません。」

「そうか・・・とにかく、ガ島守備隊がなんとか持ちこたえてくれるのを祈るのみだな。」

近江は切実にそう願った。

明けて翌日、ついに米軍はガダルカナル島への攻撃を開始した。2隻の戦艦から発射される40cm砲による艦砲射撃と、護衛空母から飛び立った約40機の攻撃機は日本軍の防御陣地を攻撃した。

しかし、この内艦砲射撃は比較的海岸近くの陣地を潰すのに役に立ったが、航空攻撃はジャングルの中に隠蔽された砲兵陣地や車両を見つけれず、有効な打撃を与えられずに終わった。

約2時間に渡る支援攻撃の後、各輸送船から一斉に上陸用舟艇や

水陸両用装甲車が発進した。また今回の上陸作戦では、直接岸に乗り上げる揚陸艦も多数配備されていた。

8ヶ月前に繰り広げられた戦闘では攻める日本軍に守るアメリカ軍であったが、今回は全く逆の立場となった。米軍は鬱蒼としたジャングルと、強力な日本軍相手に戦うこととなる。ただし、ジャングルに対しての備えは、チェーンソーや各種機材を豊富に備え、さらに医薬品の研究を行っていた分日本軍より大分楽であった。またハーフトラックやジープも多数配備されているのも、日本軍とは大きく違っていた。

1日目は特に大きな戦闘は起こらず、日本軍と米軍の斥候が小規模な戦闘を行ったのみであった。

一方、同じ頃エスピリット・サントの港からは、予定を繰り上げて米軍の補給・増援船団が出港していた。この部隊は本来、ガ島陥落後に増援部隊と各種補給物資を運ぶ予定であったが、米機動部隊の後退という事態を受けて、早めに出港することとなった。その陣容は旧式のオマハ級軽巡3隻、駆逐艦12隻、敷設艦4隻、掃海艇3隻に守られたタンカー4、輸送船7隻であった。

輸送船の倍にあたる数の護衛艦をつけていることに、この部隊の任務の重要性が窺えた。

この輸送船団は出港直後から日本の潜水艦の接触を受けたが、実に20隻近い護衛艦艇を伴っているために、結局攻撃できた潜水艦は皆無であった。

そして翌日、ガ島では熾烈な陸上戦の火蓋が切って落とされた。前日の内に上陸、陣地への配備を完了していた米軍の誇る155mm

m砲が、日本軍陣地めがけて攻撃を開始したのである。上陸からたった1日で数門といえ重砲を揚陸、据え付けた米軍の底力恐るべし。

一方日本側も威力には劣るものの、比較的長射程である102mm砲で反撃をおこなった。この戦闘によって、両軍とも若干の被害が出た。

そしてようやく航空機の航続圏内に敵艦隊を捕らえた独立機動艦隊も攻撃を開始した。

「攻撃隊発艦!!」

敵機動艦隊の位置については、ガ島守備隊が出す情報によって大体わかっていった。そのため近江は、通常偵察用に使う機体まで総動員した。その戦力は「天城」、「翠鶴」の搭載する機体のほぼ全力出撃といってよく、合計148機であった。

この攻撃隊の機体のうち、爆撃機と雷撃機はすでに連合艦隊にも配備されている「彗星」、「天山」であった。しかしながら戦闘機は川西が独自に研究を続けていた新鋭艦上戦闘機の「紫電改」であった。

「紫電改」は当初水上戦闘機「強風」として開発されていたが、陸上航空機製作の経験もつみたい川西が、「強風」の図面を流用して造った。ただし当初は中翼配置と複雑な機構が幸いして没となった。しかし同社はわずか半年でその機体を手直したのであった。

ただその頃には「烈風」の生産に見込みが付いたため、結局製造された機数は試験配備と輸出用の併せて1000機だけであった。

その悲運の新鋭機を含む攻撃隊は、
今まさに米艦隊に襲い掛か
らんとしていた。

ガ島決戦 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

「紫電改」の登場が早まっていますが、文中にもあるとおり「強風」と平行開発し、またエンジンも違います。モデルとなっているのは羅門佑人先生の「独立日本艦隊」シリーズ登場の「紫電改」です。

力島決戦 中

独立機動艦隊から発進した攻撃隊は、約2時間半後に米艦隊と接触した。攻撃隊の隊長は最近昇進したばかりの大岩少佐である。

「全機攻撃開始！！いいか、出撃前の打ち合わせどおりの目標にしばらくして攻撃しろ！！」

彼が全機に伝えた目標とは、主に駆逐艦と巡洋艦である。これは近江司令官直々の命令だった。

「あの司令官、また敵からの艦船拿捕を目論んでやがるな。」

独立艦隊の敵艦拿捕は、もはや海戦の度に行う恒例行事と化していた。同じ海軍の中からの批判も多いこの行動だが、貧乏国日本にとってはもっとも賢い戦果の上げ方といえる。敵に打撃を与えられて、なおかつ日本では不足している物を手に入れられる方法なのだ。

そしてこの敵艦拿捕は、表向きはともかく結構色々な所から喜ばれている。海軍省としては新造艦より安い値段で新しい艦艇が手に入り、海軍工廠や艦政本部としては敵の最新技術が手に入るのだ。喜ばれないはずがない。

こういうこともあって、前司令官の桑名大将から艦隊を託された近江中将も、この方法を重視し実践するよう心がけていた。だから今回も、まず敵の中小型護衛艦艇を叩き、その後丸裸になった重巡以上の大型艦艇や輸送船などを狙う予定だ。

もっとも駆逐艦や軽巡にしても捕獲しておいて損はしない艦種で

はある。ただ優先順位をつけたらこうなっただけだ。だいたい、敵の全ての艦艇を手に入れることなど不可能なのだ。

戦闘は定石どおり、まず敵艦隊の直援戦闘機と攻撃隊の護衛戦闘機との間で始まった。しかしながら、この時の敵空母は商船改造の護衛空母であった。だから戦闘機は旧式のF4Fしか搭載していなかった。しかもパイロットは多くが新米で、数も合計36機しかなかった。

この状態で、数に勝り性能も優秀、開戦以来のパイロットが多い独立機動艦隊の「紫電改」戦闘機と戦うのには無理があった。一応レーダーによる誘導を最初は試みたが、これは日本側がアルミチャフを撒いて攪乱してしまったので、失敗した。

結局F4F戦闘機隊はよく戦ったが、「紫電改」戦闘機7機を道連れにしたところで、30機が撃墜されて終わった。

そして敵戦闘機の妨害を受けることなく、「彗星」と「天山」は艦艇への攻撃を開始した。米艦隊は例に漏れず輪陣形を作って、その中心部の主力艦艇や輸送船を守ろうとしたが、攻撃隊はその予想を大きく裏切って、輪陣形外の艦艇を襲い始めた。

駆逐艦や軽巡の乗員たちにとっては、悪夢以外の何物でもなかった。本来狙われることが少ない自分たちが、戦艦や空母の傍にいてもかわらず、よってたかって狙われているのだ。

小柄である分回避運動はしやすいが、それにも限度と言うものがある。しかも軽巡はともかく、駆逐艦は一発の被弾が致命傷となる可能性があるのだ。

案の定戦闘開始10分もすると、輪陣形外の駆逐艦にポツポツと被弾艦が出始めた。そしてその中には明らかに致命傷を負ったと思えるものもあった。

さらに攻撃隊が引き上げる頃には、輪陣形内部にいる軽巡にも沈没を免れないと思える艦があった。

エスピリット・サントからの増援船団の護衛艦として合流していた「オマハ」級軽巡の「トレントン」は、艦中央部に魚雷1本を喰らって速力を落した所に500kg爆弾を2発受けて、完全に停止してしまった。そして復旧は絶望的と艦長は見たのか、間もなく乗員が退艦をはじめた。

同じく軽巡「コンコード」は500kg爆弾を3発受けた。その内の一発が機関室を大破させ、航行不能へと追い込まれた。同艦は沈没を避けるためにフロリダ島へ強行座礁したが、そのまま艦体は破棄され事実上沈没と同じであった。

また軽巡や駆逐艦以外の艦艇にも被害は出ていた。機動部隊から合流していた重巡「インディアナポリス」が流れ魚雷を受けて中破している。

これらの被害はほんの一部で、最終的にまとめると軽巡3、駆逐艦5、掃海艇1、敷設艦1が沈没した。そのほかに重巡1、軽巡2、駆逐艦2が中破以上の損傷を被っていた。

対する日本側の被害は艦戦8、艦爆6、艦攻5の計19機であった。決して少なくはないが、戦艦や空母を含む艦隊に攻撃を掛けてこれだけで済んだのだから、まずまずといえる。

一方米艦隊の方は深刻な状況に置かれていた。

「まさか護衛艦艇に的を絞るとは・・・」

現段階での米艦隊司令官となつたリー少将は、集計された被害報告を聞いて絶句していた。彼の乗る戦艦「ウエスト・バージニア」は一発の機銃弾さえ受けなかったが、艦橋から艦隊を見渡せば、輪陣形外周の至る所から黒煙が吹き上がっていた。

日本軍機は艦隊中央部にいる2隻の戦艦と2隻の護衛空母には目もくれず、ただひたすらそれらを守る護衛艦艇のみに攻撃を絞つた。そのために護衛艦艇の半分近くが失われるか、打撃を受けてしまつた。これでは艦隊と輸送船団の両方を守ることなど出来ない。

また戦闘機も全滅したために、制空権も完全に日本側に握られてしまつた。幸いにも艦攻はいまだ18機あるために、対潜警戒は可能である。だから撤退するだけならなんとかなるかもしれない。

だがすでに海兵隊は上陸しており、おいそれとは撤退できない状況におかれていた。たとえ撤退をするにしても、彼らの乗船だけで時間を相当喰つてしまう。

それにも増してリー少将は先ほどの敵がどこからやってきたか気になつた。

2日前にやってきた敵機動部隊は既に撤退していることは、偵察機や潜水艦の報告から確認されている。となると、その後別の機動部隊がやってきたこととなる。だがリー少将やミッチャー中将が太平洋艦隊から得た敵の動静情報では、日本軍機動部隊の半分はセイロン島攻略に向かつているはずで、残存艦も本土で修理中かトラッ

ク島に在泊する2、3隻のみであった。

そうとなると、先ほどやってきた敵艦載機はどこからやってきたか？

リー少将は最近太平洋艦隊内部で話題になっている、ある艦隊を
思い出した。

「独立機動艦隊か・・・」

海軍軍令部直属の艦隊。米国で例えるなら太平洋艦隊指揮下では
なく、統合参謀本部、もしくは大統領府直属の艦隊となるだろう。
ホワイトハウス

その艦隊の手口は有名であった。なにせ米海軍では「現代の海賊」
とまで呼ぶ人間がいるのだ。

「連中の狙いは戦艦に空母・・・輸送船団と物資の強奪か!？」

いずれも日本にしてみれば喉から手が出るほど欲しいものだろう。
リー少将はそう考えた。

ガ島決戦 中（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ガ島決戦 下

独立機動艦隊の目的に気づいたリー少将であつたが、彼は迷つた。上陸している海兵隊を呼び戻して撤退するべきか、それとも残存する艦艇をまとめて敵艦隊に挑むべきか。

もはや航空戦力は残っていないために、敵艦隊に対抗できる戦力は2隻の戦艦と重巡しかない。軽巡や駆逐艦は数が半分までに減っているため、戦力としてあまり期待できない。なにより輸送船団を丸裸にするわけにはいかない。

とにかく撤退するにしても、敵に攻撃を仕掛けるにしても航空戦力がなく、艦艇の数が大きく減っている現状況では相応の被害を覚悟しなければいけなかった。

どちらにしろ、時間が惜しかった。リー少将は早速上陸部隊司令官のスミス少将に連絡を取ろうとした。ところが、そこへ驚愕の報告がもたらされた。

「提督、上陸した海兵隊より緊急入電！！日本軍が本格的な反撃に出たそうです！！」

通信科の士官が血相を変えて報せてきた。

「何だと！？」

昨日上陸した海兵隊は日本軍と小競り合いを行つたのみであつたが、その日本側がアメリカ軍より先に攻勢に出たらしい。

「図られた・・・連中は味方艦隊がやってきたのを見計らって反撃を掛けてきたんだ・・・こんなことならもっと早くに撤退を決めるべきだった・・・」

海兵隊の攻撃開始予定日時は明日であった。これは物資の揚陸と、その隠蔽を優先したからであった。前回の第一次ガダルカナル上陸作戦では、物資の揚陸が遅れて輸送船ごと沈められたり、揚陸しても物資が海岸に山積み状態になったりして、非常に危険な状況に陥った。

それを繰り返さないために、今回は物資の揚陸と隠蔽を優先したのであったが、それが仇になってしまった。

「それにしても、陣地に籠って守勢に徹していれば良いのに、なぜ日本軍は攻勢に出たのだ？」

リーにはそれが気になってしかたがなかった。すると報告してきた士官が情報を付け加えた。

「それが日本軍は戦車を先頭にして進撃しており、既に一部の陣地は撤退を余儀なくされているそうです。こちらの戦車はいまだ前線に進出しておりませんので、それで分が悪いようです。」

するとリーは怪訝な表情をした。

「戦車？私は陸軍ではないが、日本軍のタイプ1は、バズーカや対戦車砲で十分倒せると聞いたぞ？」

日本軍の1式中戦車は、昭和14年に発生した満州とモンゴル国境でのノモンハン事件の戦訓から75mm野砲を主砲として、前面

装甲が50mmに強化されている。しかしながら場所によっては37mmの速射砲で十分撃ちぬけることが、戦訓で確認されている。また歩兵にも携帯可能なバズーカ対戦車ロケット砲が配置されている。強化されているとはい、いまだ歩兵支援戦車の域を抜け出せない日本軍の戦車に遅れを取るとは思えなかった。

「それが、日本軍の戦車はタイプ1ではなく・・・」

「！！」

その報告にリーは目を見開いた。

その頃、ガダルカナル島では、上陸した海兵隊の兵士たちが、全面攻勢に出た日本軍に対して勇敢に反撃を繰り返していた。

日本軍は戦車を先頭にしてやってくるが、そのスピードは遅い。そのため米兵たちは比較的余裕をもって反撃の構えを取ることが出来た。しかしながら、その代わりに日本軍の攻撃は徹底していた。さらに、米兵たちを驚かせたのは、比較的装甲が薄いはずの側面などを狙っても、先頭を走ってくる戦車は次々とその弾を跳ね返してしまうことだった。

「どうなってるんだ！？タイプ1ならこいつ（37mm砲）で側面を撃ちぬけるはずだぞ！！」

兵士たちが悪態をつくなか、一人の兵士がそのことに気づいた。

「おいおい、あれはタイプ1じゃないぞ！あいつはイギリス軍のマ

チルダ戦車だぞ!!」

「何だと!？」

それまで先入観から、敵の戦車はタイプ1、もしくはそれ以前のタイプ97だと思い込んでいた。しかしよくよく見てみると、確かに今こちらに迫ってくる戦車は日本軍のタイプ1とはシルエットが違っていた。

そして確かにその戦車がイギリス軍のマチルダ戦車であった。

「何で日本軍がマチルダ戦車を持っているんだ!？」

どうしてこんな所にいるかというと、実はこれドイツ軍からの贈り物だった。

スエズ運河が陥落し、マダガスカル島もヴィシーフランス政権が奪回したので現在インド洋・紅海を経由してのヨーロッパへの航路が確保されている。日本は主にアジアで算出される戦略物資や、一部の兵器（酸素魚雷とか水上機、飛行艇）をドイツ側に輸出していたが、ドイツからは見返りとして、様々な兵器がもたらされた。その中にはドイツ軍がアフリカ戦線やロシア戦線で捕獲した兵器も多数含まれていた。

少し前までは、ドイツ軍にとってもこうした鹵獲兵器は貴重な戦力であったが、既に北アフリカから連合軍を駆逐し、さらに中東でも各地の反英組織を懐柔していた。またロシア戦線も、ロシア軍が首都のモスクワから撤退し、ウラル山脈の裏側にまで下がったために、ほぼ決着はついていた。

そのため戦力的に余裕が出たために鹵獲兵器は不要となり、日本軍に格安で売却された。その中の一部は、各地に試験名目で持ち込まれていた。

ガダルカナル島にも、マチルダ戦車5両が持ち込まれていた。その内稼動する4両が今回の攻勢に使用されていた。

マチルダ戦車は主砲こそ2ポンド(40mm)砲と弱小だが、装甲は最厚部で78mmと、1式中戦車より28mm、またようやく生産が始まった3式中戦車より3mm厚かった。さらに側面も60mmと厚く、37mm砲で対処できなくて当然だった。

ただし速度は最高で24kmしかでない。さらにこのガダルカナル島はジャングルであるから、アフリカのように縦横無尽で動けるわけではないので、さらに遅い。

米兵たちはそこに着目した。足の遅い敵戦車に対して、バズーカ攻撃のための肉薄攻撃をかけた。

しかしそうは簡単に問屋がおろしてくれなかった。マチルダ戦車が対戦車砲などを破壊すると、今度は歩兵を駆逐するために、中型の1式戦車や、日本軍がフィリピンやオーストラリアで手に入れたM3軽戦車で攻撃を仕掛けてきた。しかもそれらは砲塔上に機関銃を増設して、対歩兵戦闘力を増強していた。

結局米軍側はマチルダ戦車1両と1式中戦車1両を撃破したものの、各所で陣地を破壊され防衛線を突破されたために大混乱に陥ってしまい、後退を余儀なくされた。

その頃には、艦隊司令官のリー少将は海兵隊司令官のスミス少将

と連絡を取り合い、既にガダルカナルからの撤退を決定していた。米兵たちは、武器を破壊する暇もないまま、たった2日前に歩いてきた道を、今度は海へ向かって歩いていくことになった。海兵隊の全兵士が再乗船を終えたのは、翌日早朝であつた。しかしながら、その頃には全てが手遅れとなっていた。

ガ島決戦 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

なお捕獲したマチルダ戦車の使用は、高貫布土先生の実業日本之社刊「飛翔の海戦」を参考にしています。

ソロモン夜戦 上

「とにかく、時間を稼がねば。」

リー少将は艦橋の外に広がる海原を見ながら一人呟いた。

ガダルカナル島の日本軍守備隊による反撃によって、上陸した米海兵隊は実質的な被害こそ大きくはなかったが、戦線が各所で破綻、維持できなくなったために撤退を開始した。トラックやジープ等動員できる車両を全て使って、前線の陣地から兵士を海岸に揚陸しているLSTや、沖合いに停泊している輸送艦へと向かう上陸用舟艇にピストン輸送した。

これに対して日本側の追撃はほとんどなく、わずかに偵察隊と思しき小部隊と殿の部隊が小規模な撃ち合いを行ったのみだった。

これには多くの海兵隊員が首を捻ったが、まもなく上級士官はその行為の意味を知ることとなった。なんと揚陸地点に兵が一気に撤退してきた結果、大混乱が起きてしまったのである。我先に乗船しようとする兵同士が乱闘騒ぎを起こし、慌ててMPが出動する事態にまで陥った。

こうした騒ぎによって、兵士の乗船に遅延が生じたり、また本来破壊すべき遺棄兵器の破壊が中止されるという事態に陥った。この内乗船の遅延は、もともとLSTが半分ほどだったためにそこまでの物とはならなかったが、遺棄兵器の砲は後に日本軍が進撃してきたときに、中戦車1両、軽戦車1両、水陸両用車5両、ジープ4両、トラック8両、ハーフトラック2両、砲7門、その他燃料や弾薬などが捕獲されている。

もちろんこれらの車両は日本軍によって再利用されている。特にジープやトラックは重用された。

ちなみに、これも独立機動艦隊による作戦であった。ただしこの作戦は物資を捕獲することが目的ではなく、あくまで敵軍の混乱を狙ったものであった。その作戦草案を水上機によるリレーでガダルカナル島の守備隊指令が受け取って、今回の攻勢に出たのであった。

独立艦隊にとっての誤算（もちろん嬉しい方の）は、ガダルカナル島の守備隊にまとまった数の戦車が残存していたことと、それに驚いた米軍に予想以上の混乱を引き起こしたことであった。

もつとも、嬉しい誤算も起きれば嫌な誤算も起きた、ここで敵艦隊の拿捕を容易に行うために、第二次攻撃隊を出そうとしたのであるが、急な天候悪化によってそれが不可能になってしまった。

結局天候が回復したのは夕方近くになったため、近江中將は仕方がなく空母を後方に下げて、打撃艦による敵艦隊の攻撃を行うこととした。

一方リー少將は日本軍の第二次攻撃がないことに首を捻った（独立艦隊のいた海域の天候が悪化したのに対して、ガダルカナル周辺の天候は良好のままだった）が、その間に撤退できる態勢が整えばと期待した。

しかしながら、天はその期待を裏切った。夕方近くになって、発進していた水偵から日本艦隊が戦艦を先頭にして突っ込んでくるといふ報告が入ったのだ。

海兵隊からは撤退準備完了までにはまだ数時間掛かるという報告が入っていた。ここに至り、リーは決断した。

「残存艦艇を結集し、日本艦隊を迎撃する。」

いまだ40cm砲8門を持つ戦艦2隻は健在である。砲戦力は申し分ない。

ところが、それ以外の艦艇の数をしらされて、リーは落胆せざるを得なかった。

「重巡は「ゴッサム」と「ミネアポリス」の2隻。軽巡に至っては「サバンナ」のみ。駆逐艦もたった4隻しかないとは。」

情報では、日本海軍は戦艦こそフランスから横取りした（一応購入した艦だがアメリカ人はそう認識していた）38cm砲8門をもつ「リシユリユー」級1隻のみだが、その他に少なくとも大口径砲を持つ砲艦2隻に重巡2隻、軽巡3隻、駆逐艦は10隻以上確認されている。総合戦力では数倍上だった。特に日本の駆逐艦は重雷装だから、戦艦といえども油断できない。特に、今回の場合その駆逐艦を阻止すべき駆逐艦が4隻しかないのです、かなりの数が「ウェスト・ヴァージニア」と「コロラド」に雷撃を仕掛けるだろう。

これで米軍にレーダーの優位でもあれば、少しばかり戦力差を縮められるかもしれないが、生憎とこの世界における日本は、アメリカに劣る（品質や生産性の面で）ものの、ちゃんと使い物になるレーダーは持っていた。

リーは悲壮な覚悟を固めて、今回の戦いに挑んだのであった。

一方、日本側もこの米艦隊の動きをちゃんと偵察機を使ってキャッチしていた。

「米艦隊は砲戦を挑むつもりか。しかも40cm砲搭載艦2隻で。」

この報告に、近江も渋い表情をした。戦力差から見てこの艦隊を撃滅することは出来るだろう。しかしながら艇子摺るのは間違いなかった。これではこちらの損害も大きくなるだろうし、敵輸送船団の捕獲も上手くいかない可能性がある。

捕獲出来ないのは仕方がないにしても、自分に捕獲してこなければ補充される艦艇が中々ない独立艦隊としては艦艇の損害はなんとしても抑えたいところであった。

「なんとかならんもんかな？」

近江がそうは言うものの、もはや何ともならない状況にまで来ていた。航空攻撃を掛けるには空母を後方へ下げてしまったし、だいち夜間攻撃出来るほどのパイロットは数えるほどしかない。

その他にあるとすれば水雷戦隊による魚雷攻撃だが、レーダーがある現代において奇襲雷撃など通用しない。近江はそのことを理解している数少ない海軍軍人だった。

だからといって、敵艦隊との砲戦を避けて輸送船団を逃がしたりしたら、これまでに作り上げた独立機動艦隊の実績と信頼を揺るがす、というか絶対に壊してしまう。前司令官からこの職を譲られた彼としては、そのようなことは許されない。

「司令、もう諦めて覚悟きめましょうよ。そもそも敵艦を被害なしで鹵獲しようという方が、虫の良すぎる話なんですから。」

参謀の一人が、至極全うな進言をした。これを聞いて、近江も決意した。

「そうだな。やむをえん。ここで敵を逃がすわけにはいかんからな。多少の被害は目を瞑るしかない。ようし、全艦夜間戦闘用意！！」

独立艦隊は様々な兵器のテストベット役を今でも引き受けているが、そのおかげで日本海軍の中では比較的高性能のリーダーを搭載できている。だから他の艦隊に比べ、夜間戦闘能力は高い。

もともと、試作品の分衝撃に弱いなどの可能性もあるが、それについてはもはや賭けとしか言いようがない。一応戦闘に使えない可能性の物は港にいるうちに降ろしているが、メーカーの技術者もしぶとく、積みっ放しと言う物もくはない。

不安定要素が残っているが、独立艦隊は米艦隊との夜戦に挑もうとしていた。

ソロモン夜戦 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

作者より御報せです。現在作者はこのサイト内で、ゼロの使い魔のファンフィクションであるゼロ戦才人を連載中です。一応こちら
も架空戦記なので、よろしかったらどうぞ。

ソロモン夜戦 下

戦闘は日付が変わるころに始まった。ただし、何も砲撃が開始されたとか、魚雷が発射されたわけではない。それは米軍のレーダーに現れた異常からだった。突然画面が真っ白になったのである。

米軍のレーダー担当の兵士はすぐに何が起きたのか理解した。

「こいつはウィンドウだ!!」

ウィンドウというのは、敵のレーダーを攪乱するために撒かれるアルミチャフなどの攪乱物質などのことである。

実は日本軍はオーストラリア経由で米軍のレーダー情報を手に入れていた。そのため米軍のレーダーの波長に特に反応しやすい大きさに切ったアルミチャフを水上機に搭載して撒いたのであった。

このような手を用意していたにもかかわらず近江が米軍のレーダーを警戒していたのは、本当にこのような物で攪乱できるか半信半疑であつたからだ。

だがアルミチャフは予想通りの効果を発揮していた。実際これによつて米軍が当初もくろんでいたレーダーによる砲撃は不可能となつてしまつた。

「やるじゃないか日本人!!」

レーダーを封じられたことで、米艦隊司令官のリー少将は齒噛みした。

「敵の水雷戦隊の接近に注意しろ!!」

リーはレーダーを封じた敵が、それに乗じて強力な酸素魚雷による攻撃のために突撃してくることを警戒した。これは日本軍の夜戦では定番の戦法であつた。

だがまたしても予想は裏切られた。どこまでも独立機動艦隊は天邪鬼な艦隊だつた。

突然上空に眩い明かりが生まれた。水上機による照明弾の投下であつた。そしてその直後、少し先の海面にパツと数回砲撃による閃光が見えた。

およそ2分後、旗艦である戦艦「ウェスト・ヴァージニア」の周囲に水柱が林立した。

「何!? 照明弾の光だけを頼りにして遠距離砲戦を夜間に行うだ?!? 敵の司令官は何を考えているんだ!?!」

これが近距離の砲戦ならまだわかる。だが夜間に長距離砲戦を行うなど常識からすれば明らかに間違っている。遠距離砲戦はただでさえ命中率が低い。命中させようと思うなら細かいデータが必要である。

しかし夜間は水柱や敵艦の位置を知るだけでも難しい。いくら照明弾を使っても限界がある。

「まあ良い!! 敵の位置はわかつた。全艦戦闘用意!! 先ほどの閃光の方を目指して走れ!! 敵艦を発見次第攻撃開始だ!!」

ここでリーが大きな過ちを犯した。確かに独立機動艦隊の戦艦と打撃艦は遠距離砲戦を仕掛けてきた。しかし、彼が最初に警戒した水雷戦隊の動向は全くわかっていなかった。それどころか、すっかりそのことは頭から吹き飛んでいた。

米艦隊は単縦陣を組んで突撃を開始した。この時リー少将がこの陣形を取ったのは、多島海のソロモン海内にあって、味方同士での衝突を警戒したからであった。

その後数分間に渡って独立艦隊からの砲撃は続いたが、至近弾こそ出たが命中弾は出なかった。

そして米艦隊は独立艦隊との距離をつめた。そして敵の艦影を確認し、命中弾を得られると思われる距離に達した。

「ようし、撃ち方はじめ!!」

リーの命令が出るや否や、2隻の40cm砲16門と、後続する重巡の20cm砲18門が火を噴いた。この砲撃は最初から至近弾となったが、さすがに命中弾は出なかった。

「その調子だ!! がんがん行け!!」

リーは拳を突き上げて、部下たちを叱咤激励した。

しかし、ことは彼の思い通りには進まなかった。

再び米艦隊を眩い光が包んだのである。しかもそれは照明弾による広域を照らす物ではなく、探照灯による直線的な光であった。

「何だと!!」

リーが腕で光を避けながらそちらを見ると、なんと日本海軍の駆逐艦がいた。しかも、至近距離である。

「しまった!!」

リーはつてきり日本艦隊が砲戦のみでこちらと戦おうとしたと解釈していたが、そうではなかった。独立艦隊は秘かに駆逐艦を分離して待ち伏せさせていたのだ。

レーダーを潰したのも、先に米艦隊に砲撃を仕掛けて誘引したのもこのためであったのだ。

「副砲、機銃はただちにあの駆逐艦に照準を付ける!!」

その命令は既に手遅れだった。その直後、足元を数回にわたって振動が襲ってきた。さらに、ほんのわずかの差で、艦橋を激震と爆炎が襲い掛かった。

幸いにもリー少将は床に叩きつけられただけで済んだが、爆風をモロに喰らった将兵は悲惨であった。「ウェスト・ヴァージニア」の艦橋内は、硝煙と血が混じった匂い、そして兵士たちのうめき声で満たされた。

リーはその中でも何とか立ち上がり、被害を確認する。

「何が起きた!? 被害状況は!?!」

するとすぐに1人の士官が叫んだ。

「魚雷が3本命中しました。それから駆逐艦の砲撃が艦橋の前後部に加えられました。そのため射撃指揮所が機能停止しました！！他艦も同じような状況です！！」

独立艦隊の駆逐艦は、最初の砲撃で位置をさらけ出した米艦艇めがけて必中の魚雷を撃ち込んだのであった。しかも沈まない程度の本数のみを。そしてさらに指揮系統を奪うべく、至近距離からの精密射撃という荒業に出たのであった。

この結果2隻の戦艦と重巡1隻が戦闘不能に追い込まれた。その他に駆逐艦4隻中2隻は魚雷が2本ずつ命中して轟沈し、残る2隻も1本ずつ喰らって沈みこしなかったが戦闘不能に陥った。

なんとか大打撃をこうむらなかった重巡と軽巡は味方が次々とやられる光景を見て、反転しての脱出を目論んだ。味方を捨て置く行為だが、戦艦相手ではどう足掻いても勝てるはずがないと予想しての賢明な選択であった。

だがこれも徒勞に終わった。この2隻の前に、いつのまにか重巡「普賢」、「鈴鹿」と軽巡「硫黄島」、「小笠原」が立ち塞がっていたのである。この内「普賢」を除く3隻が米国製艦であったのはなんとも皮肉であった。

4隻は直ちに信号で降伏を勧告した。

米艦艇のうち重巡「ゴッサム」は攻撃を行ってなんとか脱出を図ったが、多勢に無勢で、あつという間に15cmと20cm砲弾によつて穴だらけにされ、最後は「普賢」から発射された3本の魚雷

を受けて轟沈した。

残る軽巡「サバンナ」も最初は脱出を考えたが、目の前の敵が自分と同じ「セントルイス」級軽巡であることを確認するや、勝てないと判断してやむなく白旗を上げた。

こうして海戦は終結した。戦闘不能に追い込まれた戦艦2隻と重巡1隻もその後やってきた「土佐」をはじめとする艦艇に包囲され脱出不能になったため、やむなく白旗を上げた。

一方独立艦隊の方も無傷ではなかった。戦艦に肉薄雷撃した平甲板型駆逐艦の1隻が攻撃終了後に浅瀬に乗り上げ座礁。艦底に大損傷したために放棄された。その他に3機の水上機が回収不能となつて、乗員のみ救助してやはり放棄された。

こうして損害なしとまではいかなかったが、海戦は日本側の圧倒的な勝利で終結した。

ソロモン夜戦 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

次なる戦いへ

リー少将率いる護衛艦隊壊滅の報に、撤退作業中の海兵隊はパニックに陥った。この時点で輸送船団に残された護衛艦は、増援として後からやってきた砲撃戦ではほとんど役に立たない掃海艇や、旧式の巡洋艦と駆逐艦だけであった。

戦艦を含む有力な日本艦隊がやってきたらとてもではないがかなわない。そこで護衛艦隊指揮官は、海兵隊に対して乗り組みが完了した輸送船や揚陸艦を五月雨式に出港させるよう要請した。

一方の海兵隊からしてみれば、そんなことすれば外洋に出た途端各個撃破の危険があるとして最初は断ろうとした。しかし戦艦を含む日本艦隊が近づいているのは事実であり、留まるのが危険であることも認識していた。

結局海兵隊指揮官が折れる形で、乗船の完了していた輸送船と揚陸艦から順次出港させることとなった。それとともに、エスピリット・サントの基地に対して支援航空機の出撃に加えて、残存する艦艇の出撃を要請することとなった。

こうしてまず輸送船5隻と揚陸艦3隻が駆逐艦2、掃海艇3隻、護衛空母2隻の護衛を受けてガダルカナルから脱出した。

これに続く形で1時間後、軽巡2、敷設艇4隻に守られた輸送船3、揚陸艦2隻がガダルカナル島から脱出した。

この2部隊はその後損害もなく、全て

だが結局そこまでが限界だった。まだ半分ほどの艦艇が残っているとところで夜が明け、さらに護衛艦隊との砲撃戦を終えた独立艦隊がやってきてしまった。

この時点で残存していたのは軽巡1隻と駆逐艦5隻のみだった。これで勝てるはずがなかった。それでも、この6隻はヤンキー魂を発揮して独立艦隊へ向けて突撃した。しかしその頃には空母艦載機が既に飛び上がっており、もはや攻撃は自殺行為としかならなかった。その結果6隻の内駆逐艦1隻を除いて全て撃沈され、残る1隻もズタボロにされた挙句、白旗を上げざるを得なかった。

海岸に残されていた輸送船5隻と揚陸艦9隻も逃げ場を失った。この内何を思ったのか、小型揚陸艦の1隻が脱出を図ったが、もちろん独立艦隊の砲撃によって轟沈している。

この光景が止めとなり、米海兵隊と輸送艦艇も白旗を上げた。

こうして第二次ガダルカナル戦も日本側の勝利に終わり、米軍はまたもや太平洋上において2〜3ヶ月の間攻勢が不可能となってしまった。また戦艦2隻をはじめとする多数の艦艇と逃げ送れた海兵隊の兵士2000名が捕虜になるという大失態を犯してしまった。

これは一時議会を紛糾させることとなったが、ルーズベルト大統領にとつて幸いだっただのは、日本軍が既にインド洋にまで勢力圏を確保したこと、イギリス本土が危機的な状況に置かれたことから、リーダーの交代は望ましいものではない意見が通り、彼の罷免にまでは至らなかったことだった。

しかし、海軍が大敗したのは事実であつたから、責任者の処罰は必要だった。結果南太平洋方面の艦隊指令や基地指令にかなりの更

送や左遷が行われたが、それは別の話である。

一方日本側も勝ちにはしたが被害は小さくなく、ガダルカナル島の基地設備に大損害が生じ、航空隊の損害もかなりの数に上った。また、艦艇も沈没こそ少なかったが正規空母「剛龍」撃破をはじめ損傷艦艇が発生している。

セイロン島攻略作戦中で忙しく、なおかつ太平洋上の島々の防備に力を入れようかと協議を始めた矢先にこの戦いが起きてしまった。海軍各部の頭は痛い。せめてものなぐさめは、またも独立艦隊が敵艦艇多数を捕獲してくれたおかげで、国民の士気高揚と戦時国際の売り上げ量が伸びることだろう。

他方その独立艦隊は、ガダルカナル島をめぐる攻防戦が終わると、ただちに艦隊を分割して、拿捕艦艇の後送を始めた。またラバウルに前進していた特試航空隊も訓練地であるブルネイに後退した。

旗艦である戦艦「土佐」はその殿を勤め、最後の撤退グループに加わった。

「今回は旧式艦と輸送艦艇しか拿捕できませんでしたね。せめて小型空母も捕まえられると良かったのですが。」

参謀長の長谷川大佐が、長官席に座る近江中将に声を掛ける。その声は落胆交じりの物であった。しかしながら、近江の声は違っていた。

「そんなに気を落すことではないぞ。確かに空母を捕まえられなかったことは残念であったが、40cm砲戦艦を捕獲できたのは僥倖と言えるぞ。それに輸送艦艇は我が国では幾らあっても困らないも

のだ。仮に軍が領収しなくても、民間に売却されれば軍には金が入ってくるのだから、良いことには違いない。」

近江の言うとおりだった。この時期日本の輸送船事情は逼迫していた。米潜水艦が基地の不足と、日本側の史実よりも早い対潜兵器の配備で活動が低調とはいえ、損害がなくても数が不足しているというのは事実であった。

この事実は兵員輸送の時に際立って現れる。米軍の場合、兵員一人一人に簡易性とはいえベッド（つまりは個人空間）が与えられ、さらに食事は食堂で余裕を持って出来、船によっては酒保さえあった。このおかげで兵員は体調がかなり良い状態で作戦にあたれた。

ところが日本の場合は、ただでさえ船の数が少ないから、貨物船に3000〜4000名の兵士をすし詰めにするのが珍しくなかった。兵士は狭い船倉に押し込まれ、トイレや交替で甲板に出る時以外はずっと押し込まれるのだった。これにより兵士は作戦前に体力を消耗し、さらには船が沈むときには脱出さえままならないという状況におかれた。

さすがに今はオーストラリアとの講和や中国での本格的戦闘を行っていないから船舶に余裕があり、少しはマシであるが、根本的な解決には至っていない。

だから日本にとっては、ある意味軍艦以上に欲しいのが輸送艦艇にあることは間違いなかった。事実今回捕獲された輸送船や揚陸艦艇は日本にとって貴重な戦力となる。

「とにかくだ、今回も収獲は多数あった。特に巡洋艦は前回と同じ「セント・ルイス」級だからな、我が艦隊に配備されるように軍令

部に要求せねばな。それから沈んだ駆逐艦の代替艦も必要だな。」

近江は既に帰ってからのことを考えていた。

「そうですね。戦いは終わっても、やることはたくさんありますね。」

長谷川も近江の言葉に深く頷くのであった。

この1週間後、日本軍はセイロン島を完全攻略し、戦局は大きく動くこととなる。ちなみに、今回捕獲された戦闘艦艇のうち、旧式駆逐艦1隻を除く全ての艦艇が独立艦隊に編入されることとなる。またセイロン島攻略により、さらに日独の貿易が活発となる。その結果、日本やアジアにさらなる影響が出ることとなる。

次なる戦いへ（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

1943年6月の世界

昭和18年5月、第二次世界大戦は日独を中心とする枢軸国有利で進んでいた。日本海軍はインド洋からソロモン海、北太平洋にいたる広い海域の制海権を掌握していた。一方敵側の連合国はニューギランドとオーストラリアが既に脱落、さらにイギリスとオランダは完全に排除され、残る米軍もエスピリット・サント、ハワイ、アリューシャン列島の線まで後退していた。太平洋艦隊も戦力が揃うそばから日本軍にやられてしまい、本格的な反抗は進んでいなかった。

もつとも、米国の方は自国に有力な工業力と、豊富な資源があるだけまだ良かった。現に国内の航空機工場では、F6F「ヘルキヤット」やF4U「コルセア」と言った最新鋭の航空機が次々とロールアウトし、造船所では新鋭の40cm砲搭載艦である「アイオワ」級、「モンタナ」級戦艦、100機以上の艦載機を搭載可能な「エセックス」級、「ミッドウェイ」級空母が何隻も建造中であつた。

一方、残る連合国の中で大国であるイギリスとソ連をめぐる状況は厳しかった。

イギリスはこの時点で北アフリカ、セイロン島、マダガスカル島を失っていた。そのため未だに占領こそされていないが、中東とインドを結ぶ航路の制海権を完全に失っていた。

ようやくUボート対策（護衛艦艇の忠実、対潜兵器の整備）が進んで一息つけるかと思っていたのに、上記の領土喪失はUボートによる通商路封鎖よりも痛かった。中東からの石油が輸入困難となり、

さらに英国にとって最大の植民地であるインドもほぼ失ったに等しかった。（インドは後に日本軍の支援を受けたインド国民軍によって英国からの離脱（独立）を宣言する。）

中東とインドからの通商が殆ど出来なくなったことにより、英本土では物資不足を招きつつあった。特に石油の不足は、アメリカからの輸入のおかげでなんとか持ちこたえているものの、太平洋の戦況如何では止まる可能性もあり、そうなったら死活問題である。

既に地中海艦隊は壊滅し（一部の艦艇はイタリア軍とドイツ軍に拿捕された）、本国艦隊も戦力を回復しつつある独水上艦隊（旗艦戦艦「テルピッツ」他空母を含む有力な艦隊）への備えから戦力を抽出できない状況に置かれていたが、中東からの物資を輸送するために、是が非でもアラビア海の制海権を握り返す必要に英海軍は迫られた。

結局、最終的に東洋艦隊や地中海艦隊などの残存戦力を整理し、さらに身を切る思いで本国艦隊から戦力を抽出し、新たにケープタウンを母港とする南アフリカ艦隊（旗艦戦艦ロイヤル・サブリン）が発足している。その陣容は旧式のR級戦艦2隻に護衛空母2隻、重巡3隻に軽巡1隻、駆逐艦6隻であった。

この艦隊は後に、マダガスカル島に根拠地を置くヴィシー・フランス海軍のアフリカ方面艦隊（旗艦重巡「アルジェリー」他6隻）と、ドイツ海軍の東洋艦隊（旗艦重巡「プロイセン」他5隻）、そしてセイロン島に根拠地を置く日本海軍第8艦隊（旗艦重巡「鳥海」他11隻）と戦闘を繰り広げることとなる。

ドイツと東部戦線で戦うソ連軍も苦しい状況に置かれていた。特にドイツ海軍が本国艦隊のみならず、北洋艦隊を新たに編成し、そ

の戦力を増強した結果、アイスランドからソ連のムルマンスク、アルハンゲリスクへ運び込まれていた米英からの援助物資がほとんど届かなくなっていた。また送られてくる援助物資の量自体が英国や米国の劣勢のために減らされていた。

この窮地に、ソ連政府はそれこそ農村の主婦まで兵士として徴収する根こそぎ動員と、ウラル山脈より東への工場疎開でなんとか命脈を保っていた。だがスターリン首相率いる政府はドイツ側からの勧告を幾ら受けても降伏せず、なおも徹底抗戦の構えだった。

ソ連と英国にとって幸運だったのは、ドイツが一時的に攻勢を中止していることであつた。さすがにドイツといえど、ここまで戦ってきた損害もバカにならなかつたということだ。

またナチスが政権を取って以降懸案材料だったユダヤ人問題（ロシアへの強制移住が予定された）も、マダガスカル島やアフリカ大陸への強制移住によって解決し（ちなみに一部有力な人材は日本をはじめとする複数の国が秘密裏に引き抜いている）、さらにウクライナや北アフリカ、中東の一部を手に入れたことで資源も十分に手に入れていた。つまりは戦争の目的を達しつつあつた。

だからドイツにしてみれば、あとは英国をコテンパンに叩いて講和し、さらにソ連政府（ロシアではなく悪魔でソ連）を滅ぼせば、当初の目的を完遂することとなる。

そのためヒトラー総統は戦力の忠実（新型のタイガー戦車やワルター機関搭載の新型Uボート、ジェット機の配備）を終わらせ、完全な勝利が可能となるまで積極的な攻勢を控えていた。

もつとも、ドイツ軍部の中にはこれに反対する意見も多かった。

というよりも、軍上層部とナチス党、さらに親衛隊などの関係が徐々に嫌悪なものとなっていた。いわゆる独裁体制化での権力争いである。これに加えて、もともとナチスの考えに恭順していない軍人が多かったことも原因だった。

この軍部と政府、さらにはナチス党や親衛隊との間に生まれた軋轢は、最終的にヒトラーが翌年英軍による奇襲爆撃による暗殺で死んだことにより、一気に表面化することとなるが、この時点ではまだ未来の話であった。

とにかく、そういう訳でドイツ軍はこの時期積極的な構成は控えており、次なる決戦（モスクワ占領と第二次バトル・オブ・ブリテン）まで今しばらく時間があつた。

時を同じく、太平洋で戦う日本軍も攻勢限界に達していたために、攻勢を止めていた。

4月に行われたセイロン島攻略作戦でイギリス軍を完全に自軍戦域から駆逐することに成功した日本軍ではあつたが、その一方で予想外の米軍によるガダルカナル島上陸、さらにはセイロン島での英軍の猛反撃によってそれなりに被害を受けていたのも確かだった。

ガダルカナルでの戦いでは基地航空隊に多大な被害が生じ、またセイロン島攻略戦では英軍の死に物狂いでの反撃によって、軽空母「龍嬢」と「龍鳳」を失っていた。

これはそこまで大規模な被害ではないが、国力の低い日本からしてみれば決して軽い被害でもなかった。

実際にはインド洋とアラビア海の制海権や2隻の戦艦、多数の陸

上用兵器など、得たものもそれなりに多かったのであるが、それでもやはり被害が出るのは日本からしてみれば極力抑えたいところであった。

こうした傷を癒す意味でも、また次なる大規模な攻勢に出るためにも、日本軍は攻勢を止めていた。

ちなみに、次なる日本軍の攻勢は南太平洋からの米軍駆逐のため、フィジー・サモア・ニューカレドニアを攻めるF作戦、アリューシャン列島を攻めるA作戦、そしてハワイ方面を攻めるW作戦が計画されていたが、いずれも計画段階であり、陸海軍が日夜激論を行っている最中であった。

結局堅実的なF作戦が進められることとなるが、それが決まるのは6月になってからだった。

日本からしてみれば、十分な資源も手に入れたし、外国勢力をアジアから追い出したので、これ以上攻勢をする必要などないのであるが、米国が一行に和平交渉を無視している以上、さらなる戦いとそれによる勝利がどうしても必要だった。

小康状態にあるとはいえ、戦火が止む気配は一向になかった。

1943年6月の世界（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

帝国海兵師団 上

セイロン島攻略が終了したことにより、日独間の交流は活発となった。ドイツからしてみれば、これまでに輸入が不可能となり、質では劣る合成物質を使っていた物資の数々を輸入できるようになり、また日本にしてみればドイツから優れた兵器や技術を直接輸入できることとなった。加えて、ドイツから輸入した多くの兵器が満州国や中華民国南京政府、タイ王国やインド独立軍へ引き渡された。

ちなみにこの日独で開始された通商は、主にバーター取引であった。つまり物々交換である。これは両国の通貨が国際通貨として通用していなかったからだ。そのためドイツからは工業製品が、日本からは南方で採れる物資が貨幣に代わって決済手段として使われた。

ちなみに、ドイツ側としてはソ連と英国への本格的攻勢に出る前であり、戦力を減らしたくなかったためか、ドイツから輸出された武器の多くが1世代古いものだった。例を挙げるなら4号戦車のF型や3号戦車、3号突撃砲、Me 109 F型戦闘機、Ju 87型爆撃機、ルーマニア製のIAR 80、81型戦闘機、フランス製のD 0520型戦闘機などであった。その他に北アフリカやロシア戦線で捕獲した米英露の兵器なども多数存在した。

これらはこの時期の第一線兵器からしてみれば既に性能不足に陥っている、または陥りつつある兵器であったが、小規模国の軍隊や兵器不足で本格的な戦争を戦っているわけではない国にしてみれば十分に使える兵器であった。

一方日本軍によって領収された兵器も当然存在した。特に陸上兵器は日本側にとって貴重な存在だった。満州での国境紛争や、中国

内戦での経験から戦車やトラックの整備を悟った日本陸軍であったが、軍備増強は国力の限界からそこまで進んでいなかった。

日本陸軍の戦車は、現在は75mm長砲身砲を持つ3式中戦車が最新鋭車両であるが、その生産数は月産40両を越えていなかった。さらに野砲改造の短砲身75mm装備の98式戦車にしても5年近くの間に生産された台数は3000両を超えていない。

これを支援すべき砲戦車や装甲車両、トラックやバイクなどの生産も、中国との全面戦争を回避し、国内の工業力、さらには満州国の工業力を整備したにも関わらず不足する分を全て埋めることは出来なかった。

そのため、日本陸軍にとって装甲車両を含む全ての車両が貴重な物であった。だからドイツから輸入された車両の中で、4号戦車の中でも後期型や3号突撃砲、さらに英国製のマチルダやヴァレンタイン、米国製のM3やハーフトラックも数多く購入している。

これら外国製の車両は、部品の不足が心配されたために前線で使用されたのはごく僅かで、主に本土や台湾、北千島、樺太といった部隊に配備された。この内樺太配備の車両は後にソ連との戦闘で使用されている。

陸軍ではそのような状況であったが、海軍では全く違っていた。

第二次ガダルカナル攻防戦で、独立艦隊は米軍の揚陸艦や輸送艦艇を捕獲したが、それとともに多数の車両や陸上用兵器も捕獲していた。

海軍ではこれらを使って新編成の陸戦隊を作ることにした。これ

は2度にわたるガダルカナル攻防戦で米海兵隊の実力を認識したことで、それとともに今後起こりえる島嶼戦においては、陸軍の兵力を期待できない場所もあり、自前の兵隊の増強が急務となったからだ。

この部隊の編成自体は、既に昭和17年ごろから海軍軍令部内で提案され、必要性が認められたのは昭和17年8月のタラワに対する米軍特殊部隊の侵入時であった。正式に編成が決定されたのは昭和17年11月である。

編成時は歩兵のみの500名編成であったが、段階的に砲兵、戦車兵が加えられている。なお兵士は既存の陸戦隊からの転入者もいたが、中には艦艇から抽出された人間もいた。一応海兵団では陸戦訓練もするからそれで良かったのである。部隊名は今後の拡大も見込んで、海兵師団と命名された。

ただし、この部隊は新編成の部隊であるがゆえに中々装備が揃わないという現実にも直面した。当初の計画段階では高い機動性を持たせるために水陸両用戦車や戦車、トラック、さらに部隊専用の輸送艦の配備が求められた。しかしながら、車両はこの部隊でも引つ張りタコであるから中々調達できなかった。特に装甲車両がそうであった。また輸送艦もこの時点では上陸用舟艇輸送型の一等輸送艦、揚陸艦型の二等輸送艦は建造に入っただけであり、陸軍のS艇は数が足りない状況で、とても海兵師団に回せる船はなかった。

やむなく海兵師団はサイパン島に進出し、陸戦訓練に明け暮れる日々が続いた。そんな時に振って湧いたように独立艦隊が多数の艦艇を捕まえてきたのである。

昭和18年6月、これら捕獲艦艇は調査と修理が終わり正式に海軍籍に入り、要請どおり海兵師団に配備された。またようやく竣工

した一等輸送艦2隻も、同時に海兵師団に配備された。

この時配備された艦艇は輸送船、輸送艦艇2隻ずつ、揚陸艦6隻が海兵師団所属となり、1000名にまで規模が拡大していた同部隊はようやく設立時に考えられていた機動性を発揮できるだけの移動手段を得たのである。

また艦艇だけでなく、車両も捕獲車両やドイツからの購入品で賄われることとなった。そのためこの時期海兵師団に配備されていた車両は雑多で、錨マークを描きこんだドイツ製の4号戦車の隣に、同じく錨マークを描きこんだイギリス製のヴァレンティン戦車が止まっているというような光景が日常的に見られた。

なおこれら外国製の車両の中には、修理用部品の不足や装備していた武器の陳腐化から、砲や機銃を日本製に換えた車両も存在した。特にイギリス製戦車は徹甲弾と榴弾を同じ砲から発射できないような車両が存在したので、積極的に行われた。

海兵師団は車両や艦艇が配備されると、今までに勝るほどの猛訓練に入った。特に乗船訓練、上陸訓練、車両と歩兵合同の機動訓練などがその筆頭であった。10月ごろに開始されるF作戦においては、同部隊にも出番が来るという情報もあり、兵士たちも高い士気のもと訓練に挑み、練度は日を追うごとに高くなっていった。

しかしながら、海兵師団司令官の大柴大佐は部隊内の装備忠実や練度向上のみでは満足していかった。ウェーク島攻略戦やその後ソロモン方面での上陸作戦の経験があった彼には、上陸時に強力な艦艇と航空戦力による支援が必要ということが骨身に染みてわかっていた。

そこでこの任務には、独立機動艦隊があたることが9月中に決められた。独立艦隊はちょうどこの頃ガダルカナル島攻防戦で手に入れた艦艇の改装と修理が終わり、実戦配備を進めていた。その中には、2隻の「ウェスト・バージニア」級戦艦も混じっていた。

帝国海兵師団 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

なお海兵師団の名前は「紺碧の艦隊」から、組織の内容は「独立愚連艦隊」、谷甲州先生の「覇者の戦塵」を参考にしています。

帝国海兵師団 中

海兵師団司令官の大柴大佐は、部隊の練度がそこそままで上昇してきたところで、参謀たちとともに、直々にブルネイへと赴いた。そしてそこで、独立艦隊司令官近江中将他の艦隊幹部たちと研究会を開いた。これは上陸作戦演習を前にしての打ち合わせを兼ねて、両部隊の意思統一を行うためであった。

この研究会では、まず上陸前の海上におけるそれぞれの配置、敵艦隊や敵航空攻撃隊との接触時、潜水艦による襲撃時におけるそれぞれの行動が決められる予定であった。そしてこちらの調整は比較的スムーズに終わり、とくに混乱などはなかった。

しかし次に上陸直前から上陸時にかけての艦砲射撃や航空攻撃による支援についての両者の意見が出たが、ここで食い違いが出た。

当初独立艦隊側は航空攻撃による後方の航空基地や海岸線の敵陣地、さらには敵兵站線への爆撃、加えて付近に潜む敵艦隊への偵察や攻撃といった、積極的な攻撃行動を考えていた。場合によっては上陸途中の海兵師団の護衛を最低限の戦力に任せて、自分たちは敵艦隊へ突進することも考えられていた。

ところが、それに対して海兵師団側の参謀が独立艦隊に求めたのは、上陸開始から輸送船団の撤退まで、さらには上陸後もしばらくの間は徹底的なエアカバー提供だった。

これに関しては独立艦隊参謀長の落合大佐と海兵隊参謀長の林中佐が中心となって議論を繰り広げることとなった。

「我々としては敵航空基地や後方の基地、さらに海岸の陣地を爆撃、さらに上陸を阻止せんとやってくる可能性がある敵艦隊への索敵と攻撃を重視したいと思っているが、それがだめとはどういうことか？」

海兵師団から自分たちの考えに対して批判が出ると、落合いは怪訝な表情で海兵師団側に言った。それに対してすかさず林が答えた。

「我々としては別に独立艦隊側の意見全てに反対しているわけではありません。ただ我々の上陸開始直前から完了までの間、とにかく我々の上空を守ることに徹して頂きたいと申しているだけです。出来るならそれ以後も航空支援をして欲しいのが本音です。」

この林の話にはそれなりに説得力があった。開戦初頭に行われたウェーク島攻略作戦において、日本海軍はたった4機のグラマンF4F「ワイルドキャット」戦闘機に大打撃を受けたのであった。

原因は空母を引き連れていかなかったために上空援護が全くなかったからだ。またこれは海軍だけでなく、陸軍でもコタバル上陸作戦時に起こっている。こちらはなんとか上陸作戦は成功したが、日本にとって貴重な高速輸送船を失う結果となった。

こうした戦訓から、林は上陸開始直前から最低限橋頭堡確保までの間は全航空戦力を支援に差し向けて欲しかった。

また上陸後も制空権の有無と、航空支援の有無が戦いを有利に進める上での大きな要素となることも過去の戦訓から明らかだった。

しかしながら、落合ら独立艦隊側からしてみれば、100機以上の艦載機を常時海兵師団の上空に貼り付けるのは不合理だと思われる。

た。

「上陸時の上空援護はこれまでの戦訓から重要というのはよくわかった。しかしながら、それだけに全ての戦力を傾注するのは、いささか過剰戦力と思われる。」

だが林も負けていない。

「そうした指摘はごもつともです。しかしながら、例えば後方の敵飛行場の攻撃は上陸前に徹底的にするでしょうし、また後方の敵兵站線の分断も進撃に併せて行ってもらえば良いのです。それに過剰と申されましたが、決して過剰ではありません。陸上の陣地は意外と事前の爆撃や艦砲射撃に対して頑丈ですし、巧みに擬装されたそれを発見するのはやはり難しい。また敵部隊が機械化されていれば、攻撃の間一時的に後方へ下がっているだけでよいのです。我々が上陸を開始した途端、いきなり前進してきて攻撃される可能性もあります。ですから艦砲はともかく、航空支援はなるべく長い時間お願いしたい。」

この時点においては、まだ両者の間には意識的に大きな隔たりはあった。そもそも落合たちの考える上陸支援は、名前のとおり支援任務で海兵師団が上陸してしまえば、そこから先の陸上戦闘は海兵師団に任せるといった考えが強かった。

対して林たちからしてみれば、独立艦隊と海兵師団はペアを組んだパートナーであり、常に両者が相互に支援しあうべきであると考えていた。

この差は、これまで常に艦隊決戦をしてきた落合と、海軍陸戦隊から転向し上陸作戦研究を行ってきた林の埋めがたい意識の差から

生まれていた。

そして議論は徐々に熱を帯びていった。

「制空権の重要性は私にも良くわかる。しかしながらたとえ航空支援がなくても陸上での戦闘を行うのが海兵師団の本分ではないのか？ 敵の戦艦や空母が出てきたときに、攻撃も行わずただ防御に徹するだけでは、一方的にやられてしまうだけだ。その場合は海兵師団には悪いが、全艦隊をもつて敵艦撃滅に向かうのが筋であろう！」

落合が強気で言うと、やはり林も語気を荒くして言い返す。

「お言葉ですが、今回我々が参加予定のFS作戦における貴艦隊の第一任務は我が部隊の支援であつて、敵機動部隊の撃滅ではないはずです！！あなた方は我々が全滅寸前まで追い込まれても、敵艦隊の攻撃を優先するとおっしゃるのか！？」

「誰もそんなことは言っておらん。ただ敵艦隊が出てきたときはこちらへの攻撃を優先すると言っているだけだ！！」

2人の議論に釣られる形で、他の参謀たちも盛んに意見を飛ばすようになった。どちら側も顔を赤くして、叫ぶように言う。しかし時間が経つに連れて本来の話題から脱線するようになってきた。

さすがにそれ以上行くと危険と思い、近江中將と大柴大佐が立ち上がって両者を止めた。

「お前たち、やめんか！見つともないぞ！！」

「少しは冷静になれ、本題から離れているぞ！！」

そこでようやく両者ともに口喧嘩を止めて黙った。

結局、その後の議論は近江と大柴が自ら積極的に加わる形で進行的した。その結果、最終的に独立艦隊は海兵師団への支援攻撃を優先して行い、敵艦隊が現れた時は、相手が空母や戦艦など大きな脅威が存在する時のみ攻撃することとした。それも撃滅ではなく、相手の戦闘不能、もしくは戦闘続行不可能な程度の損傷を与えるに留めることとした。

この内容だと、独立艦隊は敵空母を仕留め損なう可能性があるが、それで海兵師団が全滅しては元も子もないのも事実なので、しぶしぶ独立艦隊側の幕僚は認めることとなった。ただし海兵師団の戦闘が終わっているならその限りではないこととされた。

この議論の最中、近江も大柴も重要なことに気づかされた。両者の意識の差を認識することもその中に入っていたが、それ以上に重要なことであった。それはこうした上陸作戦の支援をする場合、専用の艦隊を整備する必要があるということだった。

帝国海兵師団 中（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

昨日と一昨日、東京に出てIFCONに参加しました。このイベントは架空戦記オタクが架空戦記作家を呼んで架空戦記について語る熱いイベントで、自分も羅門先生や高貫先生、内田弘樹先生、さらには小林源文先生とお会いできて狂喜乱舞する思いでした。

帝国海兵師団 下

海兵師団からの意見を受け、独立艦隊司令官の近江中將は海兵師団を常に援護するための部隊を編成することとなった。

先日起きた第二次ガダルカナル攻防戦において捕獲した艦艇は、ごく一部を除いて全艦独立艦隊に編入することとなった。この中には40cm砲を搭載する戦艦「丹後」と「肥後」がいた。

この2隻は元戦艦「ウエスト・バージニア」と「コロラド」で、かつては日本の「長門」級、英国の「ネルソン」級とならんで世界の戦艦ビッグ7であった戦艦だ。

しかしながら、「長門」級とほぼ同等の砲力を持ちながら連合艦隊ではなく独立艦隊に編入されたのは、メンテナンス面で外国製艦艇に独立艦隊将兵がなれていたということもあるが、なにより致命的だったのは足の遅さだった。

この時期戦艦には空母を護衛可能なように最低でも27ノット以上の速度が求められた。しかしながら「長門」級でさえ25ノットなのに対して、「丹後」級はわずかに21ノットであった。その後スクリーンの取替えなどで幾分か向上したが、それでも23ノットが限界だった。

これでは空母の護衛どころか、艦隊戦に使うにも不安である。だから近江中將がこの2隻を海兵師団支援用艦に選んだのは極々普通のことだった。第一元の持ち主であるアメリカ海軍だってそのように運用していたのだ。

また巡洋艦については、これまで独立艦隊配備だった重巡「普賢」と軽巡「筑後」が上陸支援艦に指定された。この内「普賢」は元米重巡「ペンサコラ」、「筑後」はフランスから購入した「ラモット・ピケ」である。

ともに条約時代に建造された艦艇で、一応外観は真新しい形をしているが、防御力や対空兵装面で見劣りしているのは咎められない。だから今回の処置となった。

駆逐艦については、新配備の「睦月」級が配備された。これは連合艦隊からの転籍艦である。いずれも艦齢が20年近く過ぎており、艦隊戦に使うには不安が残り、かといって海上護衛総隊で使うには勿体ないということで、独立艦隊に6隻が配備された。

ちなみに、この時これらの艦は皆改装が施されている。まず魚雷発射管が全廃され、代わりに対空機銃と電探設備が強化されている。具体的には8cm両用砲を2基設置し、40mm連装機関砲2基と25mm単装機銃を8基増設している。また、電探のほうは対水上、対空双方ともに1基ずつ設置された。

ちなみに主砲は旧式のままであったが、3門に減らされ、代わりに対地用口ケット砲が2基搭載された。

なお、独立艦隊には同時にドイツが地中海で捕獲し、譲渡された英国の「トライバル」級の改装型である「碧雲」級駆逐艦も配備されているが、こちらは機動部隊護衛用とされた。

そして肝心の航空戦力であるが、こちらは近江中将も苦心した。なぜならこの時期帝国海軍の空母の数に余裕がなかったのである。

開戦時、日本海軍が保有していた空母は大型7、中軽空母4の計10隻である。この後大型空母は竣工した艦艇はなく、捕獲が2隻、中軽空母は竣工が11隻である。そして紛失は大型2、中軽空母3である。

だから昭和18年夏時点で竣工していたのは大型7、中軽空母12である。ただし中軽空母には海上護衛総隊に転籍した商船改造艦や練習空母「鳳翔」も入っているので、実質的には艦隊で運用できる中軽空母は3隻である。

米国海軍はあらゆる艦艇をどんどん量産しているのに対して、貧乏国日本にはやはり限界があった。日本の場合、間もなく竣工する「大鳳」や水上機母艦改造の4隻を加えても数は知れていた。

こんな状況下で、上陸支援用にわざわざ空母を出す余裕などない。別に商船改造空母でも良いのであるが、生憎と既に全てが海上護衛総隊に移管され、通商路防衛に威力を発揮していた。だから簡単に手放すはしかなかった。

近江中將は頭を悩ませたが、助けは意外な所から現れた。

それは同盟国ドイツであった。地中海の制海権を完全に握り、まもなくソ連への再侵攻を噂されるドイツは、スエズ運河陥落以来様々な物を日本に売りつけていた。独立艦隊が使用されている戦艦「土佐」や「雪嵐」級駆逐艦も、元はといえばドイツ軍がフランスから捕獲後日本海軍に譲渡したものである。

そんなドイツ海軍が今回売ってくれたのは、なんとフランス海軍の航空母艦「ベアルン」だった。

同艦はこの世界においては連合国側への脱出がかなわず、ドイツ海軍に接收されていた。最初は空母がなかったので接收して喜んだドイツ海軍であったが、いざ使ってみるとこれが使いにくいことこの上ない空母であった。

「ベアルン」はワシントン条約でフランスに与えられた戦艦の空母改造枠で造られた艦である。（ちなみに同様の枠を得たライバルのイタリアは空母の建造をしなかったため、後々大変なこととなった。）

日本海軍やアメリカ海軍が大型の巡洋戦艦や戦艦を空母に改造したのに対して、フランス海軍は低速小型戦艦であった「ベアルン」を改造した。だから速力は21ノットと遅く、搭載機数も40機のみという少なさだった。

せめて速力が速かったら、イギリス海軍の空母くらいに活躍できたかもしれないが、結局中途半端な性能のために大した活躍が出来るはずがなく、ドイツ海軍は航空機輸送艦としてのみ使用した。

しかしながら地中海の制海権がドイツの手に握られた今、低速で搭載機の少ない同艦に使う宛などなく、ヴィシーフランス海軍に返しても、やはり使い道はなかった。

そこでドイツ海軍は同艦の売却を打診してきた。

日本海軍も当初はこの艦の引取りを渋った。もしそのままだったら、「ベアルン」は解体されてスクラップとなっていただろうが、そんな時に海兵師団から上陸支援用の空母がいるという意見が出されたので、とりあえず購入することとした。

もちろん、普通ならそんな軽い気持ちで普通は空母が買えるはずがないのだが、今回もドイツ側は格安価格で売ってくれたので、売却交渉が成立した。

売却が決まると、同艦はフランス海軍の回航要員によってスエズ運河を経由して日本にまで運ばれた。そして横浜の造船所に入って、若干の改装を受けた後独立艦隊に配備された。

「ベアルン」に施された改装は、交換不可能な物以外の機器を日本製機器へ交換して、さらに艦の前方についていた15cm砲が撤去された。

またカタパルトの設置も行われ、対空火器も増強されている。これらの改装は1ヶ月で終了し、同艦は昭和18年10月10日付で日本海軍に編入され、艦名も「紅燕」となった。

そして同艦は早速ブルネイに回航されて、配備された航空隊とともに猛訓練に入った。そしてなんとか12月発動予定のFS作戦までに実戦投入することが可能となった。

こうして海兵師団を支援するための艦隊は整った。後は初陣の時を待つだけであった。

帝国海兵師団 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

北大西洋の嵐 1

太平洋で日本が次なる作戦へ向けて準備を進めている頃、遠く北大西洋では大海戦が起きていた。この時期、北太平洋はノルウェーの基地を中心にして行動する独北大西洋艦隊が制海権を握っており、さらには進出した多数のUボート、空軍部隊、海軍航空部隊も繰り返し出撃していた。

これらの部隊のために、連合軍側はソ連領ムルマンスク、もしくはアルハンゲリスクへの援助物資輸送船団が攻撃を受け、輸送を阻止されるか、阻止されないにしても船団が大打撃を受けてしまい、輸送量はソ連が要求していた分の3分の1にも満たない厳しい状況に置かれていた。

そんな中、昭和18年9月末。英米連合艦隊はその戦艦・空母を含む強力な艦隊を輸送船団の出撃に先立って出港させた。そしてそれに続いて、実に各種商船60隻、護衛艦40隻からなる大輸送船団を、その寄港地であるアイランドのレイキャビクから出港させた。

英米連合軍は戦力を集中させてドイツ海軍からの攻撃を退け、一気に大量の物資をソ連に送り込む。出来るなら、それに加えて敵艦隊の壊滅をも意図していた。

一方で、ドイツ海軍は暗号の解読やスパイ情報から英米連合軍のこの動きをしっかりと察知していた。

北アフリカ戦線から、連続して勝利を収めてきたドイツ軍ではあったが、広大な東部戦線においては、敵であるソ連は大量の兵力を誇り、なおかつ気候的にも厳しかったために、現在一時進撃が停止

していた。

そんな時に、多量の物資をソ連に持ち込ませるわけにはいかない。ヒトラーをはじめとして、ドイツ政府、ならびに軍首脳はしっかりとそのことを認識した。

そこで、ただちにバルト海からも艦隊が援軍として派遣されて、北大西洋艦隊は増強された。

最終的にドイツ海軍北大西洋艦隊は、戦艦1、空母3、巡洋戦艦2、重巡7、軽巡5、駆逐艦14となった。司令官は元戦艦「シャルンホルスト」艦長のクラウス・フォン・シュツットガルト中将であった。

同艦隊は、英米連合艦隊出撃の報を受け取るとただちに出撃した。空母は2隻が「グラフ・ツェッペリン」級で、もう1隻は商船「グナイゼナウ」を改装した「ヤーデ」であった。

「ヤーデ」は日本に売却されて空母に改装された商船「シャルンホルスト」と改装前の母体が姉妹船だったこともあり、よく似ている。もともと、これはそれだけではなく日本側が図面を、購入した新兵器の対価として売却したことも一員だった。

ただし、「神鷹」同様「ヤーデ」も機関の換装を行ったが、それとともにボイラーの増設なども行ったために、「ヤーデ」は最高速度27ノットを発揮できた。もちろん、カタパルトは搭載されているので、攻撃機の発艦も可能だった。

3隻の空母の搭載機は合計すると120機である。戦闘機はFW 190T、爆撃機は日本の「彗星」を参考に開発したFi 187、

雷撃機は同じく日本の「天山」を参考に開発したHe 220であった。

これらの艦載機は全て海軍航空隊の所属である。史実では「空を飛ぶものは、全て空軍のもの！」などと目茶苦茶な論理を振り回したゲーリング元帥のおかげで、ごく少数の沿岸水上機部隊を除き、その全ての航空戦力を空軍に編入されてしまったが、この世界では既に彼が失脚したので、海軍は自前の航空隊をちゃんと持っていた。

また重巡、軽巡、駆逐艦の中にはフランスやオランダ、ソ連から接収した艦艇も含まれていた。

Uボートの活躍ばかりが偏重され、さらに戦艦「ビスマルク」が撃沈されてから一時期は衰退の一途を辿ったドイツ海軍であったが、1年前に北海で起きた海戦で空母の護衛の元英国海軍の戦艦「レナウン」と巡洋艦2隻を一方的に撃沈して以降、士気は回復し、なおかつアフリカ戦線での勝利によって戦力や燃料面で余裕が出来たこともあり、戦力はここまで回復していた。

ドイツ海軍には2つの海軍が存在していた。旧ドイツ第二帝国海軍の伝統を強く引き継ぐ水上艦隊と、ナチス党員が多く革新的な潜水艦隊である。両者は対立とまではいかないまでも、ライバル心は持っていた。だから、今回出撃した艦隊の乗員たちも。

「潜水艦隊の乗員たちをギャフンと言わせてやるぜ!!」

と鼻息荒くしていた。

一方、ドイツ艦隊を迎え撃つために出撃した米英艦隊の陣容は戦艦5、空母3、重巡12、軽巡10、駆逐艦30とドイツ海軍を大

きく引き離していた。

しかしながら、戦いの勝利を決める決定的な要素が数だけで決まるときもあれば、決まらない時もあった。そしてこの時は後者であった。

さて、アイスランドを出撃した英米艦隊と、輸送船団は出撃すると早速Uボートに発見されて、その位置を暴露された。

すると、まず攻撃を開始したのは潜水艦であった。この時期ドイツ海軍の潜水艦は改良が重ねられた連合軍の対潜兵器によって損害が増しつつあったが、潜水艦側もただ甘んじてやられ役に回ったわけではなかった。

シュノーケルの実用化など、こちらも改良を行っていた。

そんな中で、彼らに配備された新兵器が2つあった。それが音響魚雷と酸素魚雷であった。音響魚雷はドイツ海軍が独自に開発した新兵器で、酸素魚雷は日本海軍からの供与兵器であった。

この内、通常配備を喜ばれたのは音響魚雷であった。確かに酸素魚雷は射程、速力、炸薬量、どれをとってもドイツの魚雷より優れていたが、純酸素を使うために取り扱いが難しい。

さらに、Uボートの艦長たちは口々にこう言った。

「確かに性能は良いが、こんな航続距離も炸薬量もいらないね。商船を狩るには過剰だぜ。」

というわけで、酸素魚雷は一応量産されはしたが、配備当初は1

2本がいざという時のために搭載されるのみだった。

しかしながら、連合軍海軍に小回りの利く対潜艦艇が配備され、さらに遠距離攻撃可能な対潜兵器が登場すると、比較的長い射程を誇る兵器が求められ、酸素魚雷が注目されるようになった。

ただし、ドイツ海軍としてはやはり炸薬量が過剰で、航続距離が長すぎると思ったのか、炸薬や酸素の量を減らした物も多用された。また後に音響酸素魚雷も登場している。

そしてこの時使われたのは、対大型艦ようの大航続距離、重炸薬型の酸素魚雷（つまりは日本製の物と同じ仕様の物）だった。

この魚雷の使用は、米英海軍には予想外の物だった。彼らはそれまでと同じ、空気魚雷か電池魚雷でUボートは襲撃してくるものばかり考えていたのだ。

結果、最初の数回は対応が遅れてしまい、被雷する艦が続出した。しかも、同一艦から発射された魚雷が、かなり距離をおいて走っていた2隻の艦に命中すると、連合軍側は発射地点を見誤り、明後日の海域に爆雷やヘッジホッグを投下するという事態まで発生した。

最終的に、Uボートの襲撃だけで撃沈された艦は重巡1、軽巡2、駆逐艦7隻にものぼり、さらに戦艦1、空母1、重巡2、軽巡1、駆逐艦2が戦線離脱を余儀なくされた。対するUボートの損害は6隻のみで、ひとまずは勝利といえた。

こうして、連合軍艦隊は、ドイツ水上艦隊と戦う前に戦力の3分の1を損失した。

北大西洋の嵐 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

なお、今回は一部で安芸一穂先生の「旭日旗往く」の内容を使っております。

北大西洋の嵐 2

灰色狼の攻撃によっていきなり艦隊戦力を大きくそがれてしまった米英連合艦隊であったが、それでも輸送船団護衛のために、彼らは進撃を続けた。

もつとも、神は公平であった。ドイツ海軍潜水艦隊が米英艦隊を襲撃したのと前後するかのように、英国潜水艦隊もドイツ艦隊を襲撃していたのである。

ドイツ海軍や日本海軍、さらにアメリカ海軍の潜水艦隊の活躍は良く知られているが、イギリス海軍も地味ながら潜水艦の増強と戦線への投入を行っていた。

この時ドイツ海軍を襲撃したのはイギリス海軍のP級潜水艦であった。そしてこの攻撃によってM級軽巡洋艦の「ミュンヘン」が中破してしまい、後退を余儀なくされた。

しかしながら、Uボートのように群狼戦術を採らなかった結果は大きく、結局戦果はそれだけであった。しかも無線発信より攻撃を先に行ってしまったために、米英連合艦隊が同艦から情報を得られたのは、爆雷攻撃を切り抜け、安全を確認でき浮上した4時間後であった。しかも、米英艦隊自体がUボートの攻撃で混乱していたため、実際に艦隊司令部がその情報に接したのはさらにその30分後になった。

近代戦は情報戦である。情報の伝達が1分遅れることが致命的な事態を引き起こしかねなかった。

そして、米英連合艦隊はドイツ艦隊を先制攻撃できる一回目のチャンスを見逃してしまった。もしここで、米空母に搭載されていた多数の足の長い攻撃機を使えば、独艦隊に打撃を与えられたかもしれない。

だが、全ては後の祭りだった。

そしてこの日はドイツ艦隊と米英連合艦隊はそれ以上の行動を起こせなかった。どちらとも偵察機が敵艦隊を発見できず、そのままだの入りを迎えてしまったからである。

翌日、早朝から両艦隊は偵察機を発艦させて敵艦隊、ドイツ艦隊の場合は輸送船団を探した。また、アイスランドの連合軍基地や、ノルウェーのドイツ軍基地からは、B 17、B 24、He 277と言った長距離偵察可能機が飛び立った。

両軍は相手を出し抜こうと躍起になった。だが、北大西洋は波が高く、天候が厳しい海域である。熟練の兵士たちの目でも、中々発見できなかった。

そして、先手を取ったのはドイツ軍であった。長距離偵察中のHe 277が、まず輸送船団を発見、それを全軍に打電した。

これに伴い、ドイツ艦隊は急ぎ輸送船団を捉えるべく速力を上げ、また付近にいるであろう米英連合艦隊の発見に努めた。

それとともに、第一の矢が放たれた。3隻の空母から長距離飛行用の増槽を搭載した艦戦24、艦爆30、艦攻12機が出撃した。また、付近に潜っていたUボートも続々と輸送船団を狩るべく接近した。

攻撃隊は無事輸送船団上空にまでたどり着き、攻撃を開始した。この時輸送船団上空には護衛空母やカタパルト船から発進した戦闘機20機が待ち構えていたが、いずれも機種が旧式機であったために、簡単に蹴散らされてしまった。

邪魔者がいなくなると、艦爆と艦攻の容赦のない攻撃が始まった。500kg爆弾を搭載した、Fi187が急降下を行い、さらに強力な航空魚雷を搭載したHe220が低空を這うように突進した。

輸送船団を守るべき護衛駆逐艦やフリゲート、コルベット、さらには対潜用トローラーまでがその全ての対空火器を空に向けて撃ち上げた。だが、それまでのドイツ機より高速であつた機影に惑わされ、撃墜できた機はほとんどなかった。

そして、艦爆と艦攻は易々と爆弾と魚雷を輸送船に叩き込んだ。

その結果はドイツ側にとっては夢のよう、そして連合国側には悪夢としか言いようがなかった。ソ連を助けるべき物資を満載した輸送船がなすすべもなく、次々と火焰を吹き上げるか、その腹に大穴を空けられていった。

そしてある船は炎に船体をあぶられ、ある船は急速に傾斜して転覆した。そしてある船は船体がポッキリと折れて轟沈した。もちろん、それとともにソ連へ運ばれる途中の戦車や飛行機、その他重要な戦略物資が次々と冷たい海の底へと消えていった。

ドイツ軍攻撃隊は嵐のように突然やってくると、嵐のように一撃を加えて去っていった。彼らはまさに鉄の暴風雨となった。

その嵐による被害は、輸送船12隻撃沈、7隻が航行不能。他に8隻が撃破された。護衛艦の被害こそフリゲート1隻の撃沈であったが、それは輸送船と魚雷の間に割り込んだ上での被害であった。

それに対して、ドイツ側の被害は艦爆1機と艦攻2機のみ。まさに一方的、というよりも殺戮であった。

それでも、輸送船団は進撃を止める訳にもいかず、船団は沈んだ船の乗員を救助し、陣形を整えると再び北へ向かって航行を開始した。

しかしながら、輸送船団が安心していられた時間は非常に短かった。護衛艦に搭載されたレーダーが再び機影を捉えたのである。しかも2方向から向かってきた。

1つは明らかにノルウェー方面からで、これはどう見ても陸上基地から発進したドイツ空軍機だった。そしてもう1つはノルウェーからでも、先ほどの艦載機がやってきた方面とも違っていた。

間もなく無線連絡で、片方は後方にいた米英連合艦隊から発進したF6FとF4U戦闘機であることがわかった。

20分後、まず姿を見せたのは味方戦闘機隊であった。その数24機。数分後、今度はドイツ軍機が姿を現した。案の定長距離爆撃機のHe277だった。その数20機。

戦闘機隊は彼らを阻止するべく上昇した。

しかし、ドイツ軍側も敵戦闘機がいると思われる海域に丸裸で出てきただけに、ただの爆撃機ではなかった。彼らは戦闘機が上昇し

てくるのを認めると、早々と何かを爆弾倉から投下すると、さつさと避退してしまった。

戦闘機隊のパイロットたちは、その光景を鼻で笑ったが、数秒後には彼らの顔は驚愕の物となっていた。ドイツ側が投下したのは爆弾ではなかった、まもなく後部から炎を吹き出すと、高速で輸送船団目掛けて突進した。

実はHe 277の編隊が投下したのは、初歩的なミサイルであった。もちろん、後の世の物ほどスピードは出ないし、炸薬量も少なく、命中率も低い。それでも、爆弾が勝手に敵へ命中する兵器の存在は大きな意義があった。

そしてこの時投下されたのは計40発であった。いずれも熱探知誘導で、輸送船や護衛艦が出す煙突の熱に引かれていった。

最高速度は900kmであったが、戦闘機は十分に振り切れた。そして、対空砲火もこんな高速弾を相手にしたことはないから、中々命中しない。結果撃墜できたもの3発、その他故障8発の10発が到達前に墜落し、残る30発が輸送船団に襲い掛かった。

ただし、熱探知誘導ということは、熱を出す相手なら何にでも引かれてしまう。そのため、爆発した高角砲の爆炎に反応したのもあれば、輸送船ではなく護衛艦に命中したのも多かった。

最終的に、このミサイルによる戦果は駆逐艦1、護衛駆逐艦4、フリゲート2、コルベット1、輸送船3、護衛空母1撃沈であった。その他に2隻が損傷している。撃沈・被弾艦船の数がミサイルよりも少ないのは、複数命中した不運な船があったからだ。

こうして、今度は文字通り一方的な殺戮になってしまった。

その様子をただ指を加えて見ているしかなかった戦闘機隊のパイロットは、ただ呻くしかなかった。

「Oh, My God. I have no idea」

北大西洋の嵐 2（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

北大西洋の嵐 3

独軍による2回の空襲によって、輸送船団は実に30隻が撃沈破されるところで大損害を負ってしまった。これは参加輸送船の半分であった。さらに、護衛艦や後方に控える米英連合艦隊がUボートによって被った損害を加えると途方もない物となった。

普通なら戦力の半分を損失することは壊滅を意味し、作戦を中止する。しかしながら、ここで輸送を中止すればソ連への大規模な援助物資を運ぶ機会は永遠に失われる。最近急速に枢軸側が勢力を拡大している現在、大規模な輸送船団を援ソルートへ投入することなど、もはや不可能になっていた。

輸送船団としては例え船団が壊滅しても、1tでも多くの物資をソ連に届ける必要があった。それによって東部戦線にソ連軍がドイツ軍を引き付けておいてくれることは、それ程までに重要だったのだ。

しかしながら、護衛艦隊の幹部たちはすっかりその事を認識出来ていたが、輸送船団の乗組員たちは決してそうではなかった。今回少数ながら参加しているソ連船の乗員たちはそれほどではなかったが、その他の国の輸送船の乗組員からしてみれば、どうしてわざわざ共産主義者のためにここまでしなければいけないのかという意識が生まれていた。特にアメリカやイギリスの商船乗組員はそれによって、一気に士気が低下していた。

そのためか、輸送作戦の中止を具申しってくる船が急増した。慌てた護衛艦隊は、後方にいる米英連合艦隊に至急合流するよう要請した。また、アルハンゲリスクに在泊しているソ連北洋艦隊にも援護

を要請した。

この内米英連合艦隊は要請に答え、直ぐに距離を詰めるために速度を上げたが、ソ連艦隊の方はすぐには要請に答えようとはしなかった。

帝政ロシアのニコライ2世の時代、世界で3番目の戦力を誇る海軍を保持したロシアであったが、それも過去の栄光であった。日露戦争で新興海軍の日本海軍にコテンパンに叩かれ、さらにその後起きた革命騒ぎのためにその戦力の回復もままならず、この時期ソ連海軍が保有していた艦艇はのきなみ小型艦艇ばかりだった。それさえも、北洋、バルト海、黒海、太平洋に分散配備しなければならなかった。

スターリンの肝いりの計画のもと、「ソビエツキ・ソユーズ」、「クロンシュタット」と言った近代的な戦艦や巡洋戦艦の建造を開始したものの、その後起きた独ソ戦によってそれらの建造も軒並みストップ。それどころか、黒海の造船所で建造中だった戦艦の「ソビエツキ・ウクライナ」に至っては造船所ごと枢軸国側に鹵獲されてしまった。

もつとも、例え独ソ戦が起きなくてもソ連の場合工業力と技術力が追いつかず、艦艇の建造が遅延したのはまず間違いないが。

そんな国情であるから、この時期北洋艦隊に配備されていたのはアメリカから貸与された戦艦「アルハンゲリスク」（旧ニューヨーク）、軽巡「キエフ」（旧ミルウォーキ）と数隻の平甲板駆逐艦、そして自国製のタイプ7型をはじめとする駆逐艦が数隻という寒い状態であった。

こんな程度の艦艇しか揃えられないことに加えて、この時期ソ連海軍の艦艇の出撃は厳しく制限されていた。駆逐艦以上の艦艇はスターリンの許可なしには動けなかったのだ。

そんなわけで、輸送船団から救援要請があつたにも関わらず、ソ連北洋艦隊は出撃をしようにも出来なかった。彼らに出撃命令が来たのはそれから6時間後、モスクワのスターリンから出撃許可が下りてからだった。それにしても、アルハンゲリスクから極力離れないことという条件付で、はっきり言って支援の意味を為すのかわからないものだった。

赤い同盟国海軍は頼りにならないために、輸送船団を助けられるのは結局米英連合艦隊のみとなった。

その後輸送船団と艦隊は敵航空機、ならびに潜水艦からの襲撃を受けることなく夜を迎え、無事合流することができた。

夜の内に両部隊はがっちりと陣形を組んで、朝を待つて動くであろうドイツ軍に備えた。輸送船では輸送中の梱包の一部を解いて、甲板に上げて自衛用火器とした。（これは史実でも行われた行為である。）

一方この艦隊合流は、護衛艦隊の首脳陣が予想したとおり、輸送船の乗組員の士気を一気に高めた。

「これだけの大艦隊が来てくれればもうドイツ野郎なんか怖くないぜ。」

多くの乗組員たちが安堵の息をつき、落ち着きを取り戻した。

さて、ではこの頃ドイツ艦隊はどうしていたのであろうか？

この時ドイツ艦隊は輸送船団と若干詰めはしたものの、一応一定の距離を保って追求していた。これは無線情報から有力な戦艦数隻を含む米英艦隊が輸送船団に合流したことを察知していたからだ。

ドイツ艦隊司令官のシュツットガルト中将は、自軍側に有力な戦艦（「テルピッツ」や「シャルンホルスト」）を含んでいるにも関わらず、敵艦隊との艦隊決戦を極力避けようとした。

「諸君、我々はその目的を見誤ってはいけない。我々の目的は敵艦隊の撃滅ではない。ソ連へと援助物資を運ぶ忌々しい敵輸送船団の撃滅なのだ。無理に砲戦を仕掛けて、戦艦と戦っている間に敵の輸送船団を逃がしてはならない。それに敵には数隻の空母がいる。航空機の脅威を排除しなければ「ビスマルク」の二の舞だ。」

そう言つて、彼は異議を唱える参謀たちを宥めた。もつとも、彼とて敵艦隊と輸送船団が合流した今、敵船団を撃滅するためには最低でも敵艦隊の航空戦力を削らなければならぬことは承知していた。すなわちそれは敵空母の撃沈、あるいは戦闘不能の被害を与えることであつた。

制空権を確保しさえすれば、後はノルウェーからの空軍機も、Uボートも敵輸船団を思う存分狩ることが出来る。自分の艦隊も動きやすくなる。

そこでシュツットガルトは、無理を承知で艦隊に搭載されている水上偵察機を動員して夜間にも関わらず敵艦隊の位置を常時把握す

ることに努めた。これは朝一番に敵艦隊を攻撃するための準備であった。もちろん、空軍にも夜間偵察機の発進を要請している。

艦隊から発進した水上機は、いずれも日本から輸入した零式水上偵察機のドイツ軍ヴァージョンで、高性能の機載電探を搭載していた。彼らは漆黒の大西洋の空へと飛び立っていた。

そしてこの内の一機が早々と敵艦隊を捕捉した。敵が大部隊の分、遠距離からでも追跡することが出来た。

この報告を受けると、シュツトガルトは空母部隊に対して黎明時の攻撃隊発進を命令した。またそれと同時に敵航空機の来襲にも備えるよう命令を発した。敵空母も早々に自分たちへ攻撃を掛けることを警戒したのだ。

そして夜明け前、3隻の空母から艦戦、艦爆、艦攻の連合約80機が敵艦隊目掛け飛び立った。その攻撃目標は空母であった。

またそれよりも少し前、ノルウェイの空軍基地からも空軍所属のHe277やJu88、Ju188と言った長中距離爆撃機が爆弾や魚雷を搭載して発進していた。その数合計100機。護衛戦闘機はなかったが、極めて強力な攻撃隊であった。

また、無線を傍受した一部のUボートも続々と集まり始めた。この時期北大西洋に配備されていたUボートの数は少なく、また乗員たちからも獲物が少ないから嫌われていた海域であった。しかし、今回はその憂さを晴らさんばかりに彼らの士気は盛り上がっていた。

北大西洋に、この日も鉄の暴風雨が吹き荒れようとしてた。

北大西洋の嵐 3（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

北大西洋の嵐 4

ドイツ軍の攻撃隊は、夜明けからまだ大して時間が経っていない時に現れた。もつとも、輸送船団も艦隊もレーダーで夜の間偵察機が張り付いていたのはわかっていたので、既に戦闘機の発進準備を進めてあった。

「敵機来襲！！直掩戦闘機隊はただちに全機発進しろ！！」

前回の攻撃では、輸送船団についていた護衛空母からF4F「ワイルドキャット」、そしてカタパルト船から「ハリケーン」戦闘機が発進した。しかしながら、ドイツ軍の艦上戦闘機であるFw190とは性能差があり、さらに数も少なかった。そのため結局敵の攻撃を許し、それどころかドイツ軍のパイロットに撃墜マークを増やさせただけで終わった。

しかし今回は輸送船団に合流した米英連合艦隊の米空母「バンカーヒル」と英空母「インプラカブル」から命令を受けた合計60機の戦闘機が発進した。しかも、機種は全て新鋭のF6F「ヘルキャット」だった。ちなみに英空母の「ヘルキャット」はレンドリース機で、愛称は「グワネット」と言ったが、性能は同じであった。

この新鋭戦闘機で、こんどこそドイツ軍機を蹴散らしてやるとパイロットたちは意気込んでいたが、実際にそれが可能であるかは性能的にちよつと微妙だった。

この時やってきたドイツ軍の艦上戦闘機はFw190Tで、A4型の艦上機バージョンであった。Fw190戦闘機は登場後すぐに、当時の英海軍のスピット・ファイア戦闘機を一方的に蹴散らすほど

性能が優秀だった。そしてその後も改良が加えられており、その性能は非常に優秀である。

ちなみにFw190Tは、胴体下、主翼下に計3つの大型増槽を抱くことが可能である。それによって、航続距離を2000km以上にまで延ばしている。これは同じヨーロッパの戦闘機でも、「スピット・ファイア」やMe109には出来ない芸当だった。

日本でもこのタイプを輸入して、最新鋭艦戦の「烈風」と性能比較がなされたが、結果は最高速度、急降下性能、爆弾搭載力でフォッケウルフの方が優秀で、武装は互角、航続力と旋回性能では「烈風」の方が優秀となっている。

ちなみに、「烈風」を輸入したドイツでは長い航続性能と川西社開発の自動空戦フラップを採用した旋回能力をかなり高く評価している。特に自動空戦フラップは非常に気に入られ、フォッケウルフ社は特許料を払って量産まで打診した程だ。ただし、これは川西が機密漏えいを恐れて拒否している。

閑話休題。

さて、フォッケウルフと対峙するF6F「ヘルキャット」は確かに米海軍最新鋭の戦闘機であった。高馬力のエンジンのおかげで重量に比して頑丈で扱いやすく、また旋回性能も見た目ほど悪くなかった。しかしながら、最高速度はフォッケルフよりも30kmほど遅く、さらにその自慢の急降下性能もフォッケルフを一方的に突き放すことは出来ない。

また武装の面でも、フォッケウルフの武装は30mm機関砲2門、20mm機関砲2門とF6Fの頑丈な機体を破壊できるだけの力を

持っていた。対するF6Fの武装は12.7mm機銃6基と多銃身主義を採っているので撃ち出せる弾丸の数では勝っているが、威力で考えればトントンである。

さらに米軍にとって悪いことに今回参加するパイロットの多くが初陣であることだった。一方のドイツ機動艦隊のパイロットたちは本格的な海戦こそ経験していないが、船団攻撃や陸上基地攻撃などで十分な経験を積んでいた。

そしてこの時のドイツ軍攻撃隊の戦闘機は、シュツットガルト提督が大奮発した結果なんと40機であった。全空母の搭載機が120機と考え、その内の半分を戦闘機とすると実に3分の2という数を動員したことになる。彼が敵艦載機の上空警戒網を恐れていたことがわかる。

米軍戦闘機隊とドイツ軍戦闘機隊同士の戦いは、当初は数で勝るF6Fが勝つかに見えたが、まもなく経験と性能で勝るフォッケウルフがF6Fを押しだした。米軍機のパイロットは2対1のチームを組んで撃墜狙ったが、フォッケウルフも無線機で連絡をとりあってこれを交わし、逆に強力な30mm機関砲をF6Fに撃ち込んだ。

フォッケウルフは12.7mm機銃を撃たれても一撃で墮ちることとはそう簡単になかったが、逆にF6Fは30mmを喰らうと一撃で致命的な打撃を喰らって撃墜される事態が多発した。

そのため戦闘開始5分後には60対40という数が40対35まで縮まっていた。その結果、フォッケウルフには余裕が出来、逆にF6Fはチームによる戦闘が不可能となってしまうた。さらに米軍側のパイロットの経験不足がここで大きく足を引っ張った。

もはやこれではドイツ軍攻撃隊を攻撃するところではない、自分を守るのが精一杯である。

こうしてドイツ軍攻撃隊はF6Fの壁を突破し、攻撃を開始した。目標はまず敵の航空戦力を奪うこと、つまり空母であった。そのため彼らは輸送船団ではなく、その陣形の外側にいた空母に襲い掛かった。

もちろん、艦艇側はドイツ軍機の接近を認めると対空戦闘を始めた。そして今回米英連合艦隊の内、米軍艦艇には最新鋭のVT信管が備えられていた。

VT信管はそれまでの時限信管と違い、自らレーダー波を出し、その波長が乱されると爆発する。すなわち敵機のすぐ傍を通った瞬間の反射波で自動爆発する。だから敵機の至近で爆発し、その爆風と破片で大きな打撃を与えられる。

この信管を造るためには、まず発射時の衝撃に耐えられる真空管を作り、なおかつそれは大量生産できるだけの技術力と工業力が必要となる。当に大国アメリカの力を象徴する兵器だった。

「マジック・ヒューズ」を呼ばれるこの砲弾を、米軍は今回5インチ両用砲に用いた。

この最新兵器によって、ドイツ攻撃隊は艦爆3機と艦攻2機が撃墜されてしまった。しかしながら、さすがのこの最新兵器も数が足りず、全てのドイツ軍機を止めることは出来なかった。

ドイツ軍機はひたすらこの2隻の空母を攻撃したのである。

F i 1 8 7 と H e 2 2 0 はそれぞれ上昇・降下すると、急降下爆撃と雷撃を仕掛けた。

「バンカーヒル」はハリネズミのように搭載した20mm機関銃と、40mm機関砲を乱打し、さらにその高速にものをいわせて爆弾と魚雷を回避し続けたがさすがに限界があり、爆弾4発と魚雷2本を受けた。これによって格納庫内の艦載機は全滅したものの、持ち前のダメージコントロール能力でなんとか沈没だけは免れた。

しかし空母としての能力は完全に喪失し、同艦は戦線離脱を余儀なくされた。

そしてもう1隻の空母である「インプラカブル」は「バンカーヒル」ほど幸運ではなかったそうで、爆弾5発と魚雷3本を受けた。そして魚雷は集中的に左舷に命中した。これによって同艦は乗員の懸命な努力にも関わらず、最終的に横転沈没した。

こうしてドイツ攻撃隊は作戦目的である敵航空戦力の撃滅を完了した。しかしながら、出撃した120機中30機あまりを失い、さらにほぼ同数がなんらかの損傷を受けており、事実上第二次攻撃は不可能な程の損害を受けた。これは決して小さな損害ではなかった。

しかし、彼らの犠牲は無駄ではなかった。彼らと入れ替わるように、今度はノルウェーから発進した空軍機が攻撃を開始したのである。そして彼らを阻む敵戦闘機は既になかった。

北大西洋の嵐 4（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

北大西洋の嵐 5

ノルウェーからやってきた空軍機は、前日と同じく高高度からの爆撃と、さらに急降下爆撃、雷撃を用いて艦隊と輸送船団に襲い掛かった。

既に熱探知式ロケット誘導弾の在庫がなかったために、今回高度から投下されたのは誘導滑空爆弾「フリッツX」であった。こちらは前日の物と違って敵を自動的に追尾するという便利な機能はついていないが、これまでの撃ちっぱなしの爆弾に比べれば遥かに命中率は高くなる。

今回この「フリッツX」を投下した機体は計24機。投下された「フリッツX」も24発であった。その内故障や対空砲火のまぐれ当たりで撃破された物が4発でた。しかし、残る20発のうち18発が命中弾となり、輸送船団と艦隊に襲い掛かった。

結果、英海軍の戦艦「ハウ」と米戦艦「マサチューセッツ」が大破し、巡洋艦2隻、駆逐艦5隻、その他小型艦2隻と輸送船7隻が撃沈された。そして艦載機の攻撃によって大破した米空母「バンカーヒル」もこの攻撃によってついに撃沈されてしまった。

この被害には「フリッツX」のみならず、急降下爆撃と雷撃によって被害を受けた艦艇も含まれている。

こうして2回目の航空攻撃によって、米英連合艦隊は戦艦の半分、空母の全てを失うか戦闘不能に追い込まれた。また巡洋艦も3分の1、駆逐艦も半分近くに減ってしまっていた、そして輸送船団も空の傘を完全に失い、輸送船団も半分の輸送船を失い、事実上壊滅的

な打撃を受けてしまった。

もはや航空戦力を失ってしまった彼らに出来ることは、とにかく全速でソ連の勢力圏内に逃げ込むことだけであった。

もつとも、ドイツ側の航空兵力も艦隊と輸送船団の熾烈な対空砲火によって撃墜された機数こそそこまで多くはなかったが、被弾機や帰還後の廃棄機が相次ぎ、さらに天候も悪化していたこともあり、この後行われることはなかった。

ただし、ドイツ艦隊司令官のシュツトガルト提督は艦載航空隊と空軍が上げた正確な戦果の把握だけはあらゆる手を尽くして行った。そのおかげで、彼は敵艦隊と輸送船団の航空兵力が壊滅したことを確認できた。

「ようし、敵は空の傘を失った。残存する戦艦も1〜2隻だけだ。全艦に伝達、我が艦隊はこれより敵艦隊、ならびに輸送船団に突撃しこれを殲滅する！！なお、空母部隊には悪いが、護衛をつけて一端下がってもらう。」

この命令はただちにドイツ艦隊全艦に伝えられ、その瞬間空母を除く全ての艦艇の乗員が割れんばかりの歓声を上げた。

もつとも、シュツトガルト提督は一応優先目標を輸送船団としていた。

こうしてドイツ艦隊は艦隊決戦に邪魔な空母部隊を分離させると、急速にスピードを上げて、米英連合艦隊と輸送船団に接近した。

対する輸送船団の方は構成する船の多くが最高速力11ノット程

度であつたために、ドイツ艦隊の魔の手から逃げられるはずがなかった。

そのため、一端輸送船団に追いついていた米英連合艦隊は、輸送船団を守るために全艦反転した。そして、ドイツ艦隊に決戦を挑むべく突撃を開始した。例えここで全滅しても、ドイツ艦隊による輸送船団への攻撃を阻止できるなら、彼らはその任務を完遂することとなる。米英連合艦隊の乗員たちは悲壮な覚悟を固めていた。

もつとも戦力的に見れば、戦艦ではほぼ5分、巡洋艦では有利、駆逐艦も同等であるから、決して米英連合艦隊が勝てないということとはなかった。ちなみに米英連合艦隊に残された2隻の戦艦は、「アラバマ」と「アンソン」で、性能的にはドイツ艦隊の「テルピッツ」や2隻の「シャルンホルスト」級に引けをとつことはなかった。

対するドイツ艦隊は「テルピッツ」、「シャルンホルスト」、「グナイゼナウ」、さらに2隻のポケット戦艦を含んでいた。ただし、巡洋艦の数では米英艦隊の方が数で勝っているため、全ての戦艦が敵戦艦の相手を出来るかわからなかった。

ただし、ドイツ艦隊の艦艇の多くが竣工から数年、最低でも1年以上を経過して乗員の練度が高い水準にあつたのに対して、米英連合艦隊は新鋭艦が多い反面、乗員の練度は軒並み低かつた。

だからどちらか勝つかはやってみなければわからない状態だつた。

そして15時を回ったころ、ついに両艦隊は対峙し、砲撃戦がスタートした。最初に発砲したのは40cm主砲を搭載する米戦艦「アラバマ」であつた。しかもレーダー照準によるものであつた。

一方ドイツ艦隊もレーダー照準で射撃を開始し、まず「テルピッツ」の38cm主砲が最初に火を噴いた。

最大射程での初弾発射であったために、両艦とも命中弾を出すことは出来なかった。また、悪天候という状況も命中率に対してマイナスに作用した。

波が高く、風が強い状況では艦の動揺によって狙いが定めにくくなり、さらに飛翔する砲弾も影響を受ける。さらにレーダーの性能も落ちる。相手を見失うということはないが、風や波、雲の影響で精密度が落ちてしまうからだ。

そのため、両艦隊ともその後は必中距離まで砲撃戦を一時中止した。

そして距離が2000m程度まで近づいたところで砲撃戦を再開した。その頃には「アンソン」の36cm主砲も、「シャルンホルスト」級の28cm主砲も射程内に入っていた。

海面上に無数の閃光と水柱が発生し、空中でも無数の砲弾が音速で獲物目掛けて飛び交う。

最初に命中弾を得たのは「アラバマ」で、「テルピッツ」の水上機カタパルトを全壊させた。これによって、「アラバマ」をはじめとして米英連合艦隊の乗員たちは一気に砲撃に対する自信を深め、士気が上がった。

一方、ドイツ艦隊の方でもこれに対する報復の気持ち乗員たちの中を駆け抜け、やはり士気が上がった。

そして、次に命中弾を得たのはドイツ側であった。2隻の巡洋戦艦から発射された28cm砲弾4発が「アンソン」に命中した。内1発は装甲ではじき返されたが、残る3発は高角砲や機銃、さらに煙突の一部を破壊した。この内煙突の破壊は「アンソン」にとつて大きくはないが、ジワジワと傷を大きくする被害を発生させた。

この命中弾は煙突の基部に命中していた。そのため、破壊された部分から一気に煙が艦後部に流れ出して後部砲塔の視界を遮った。さらに一部の煙が残骸によって逆流し、機関効率が徐々に落ちていった。

これが後に「アンソン」にとっての命取りとなり、同艦は命中率と速度が落ちてしまい、ドイツ戦艦に対して有効弾を出せないばかりか、逆に敵弾を多数受けることとなった。結果、28cm砲弾の釣瓶撃ちを受けた「アンソン」は後に穴だらけになり、最終的に味方の手で自沈処分されることとなる。

一方「アンソン」と戦った2隻の「シャルンホルスト」級の内、「シャルンホルスト」も武運がなかったようで、「アンソン」が発射した36cm砲弾の1発が砲塔基部に命中し、弾火薬庫内で炸裂した。

この砲弾が「アンソン」が出した最後の有効弾であったが、これによって「シャルンホルスト」は大爆発炎上、復旧不能となって沈没してしまった。

英独の戦艦対決は、悲劇的な相打ちに近い形で幕を閉じた。

その頃、一騎打ちとなった米独戦艦対決も決着がつこうとしていた。

北大西洋の嵐 5（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

北大西洋の嵐 6

米独戦艦の一騎打ちは、命中弾こそ先に「テルピッツ」が受けたが、その後はやはり練度の差が表れた。竣工して既に2年近く経過している「テルピッツ」の乗員は、竣工して1年も経っていない「アラバマ」の乗員に比べて劣っていた。

米戦艦「アラバマ」は、最初の命中弾を「テルピッツ」より先に出したことで自信を深めたが、その後は挟叉弾は出るものの、命中弾は中々出なかった。

一方被弾した「テルピッツ」は、乗員たちが素早く被害復旧作業に入り、大した影響は出なかった。それどころか、被弾に憤慨した乗員たちは、全身全霊を尽くして反撃に移った。結果、1分後には倍返しとばかりに2発の38cm砲弾をアラバマに命中させた。

この命中弾は1発が「アラバマ」の錨鎖庫を破壊して錨を吹き飛ばし、もう1発が艦橋左舷側の両用砲と機関砲を数基破壊した。

その後の展開は一方的だった。「アラバマ」が「テルピッツ」に命中弾を1発出す間に、「テルピッツ」は「アラバマ」に6発の命中弾を叩きこんだ。

「アラバマ」の装甲は対40cm砲。そのため「テルピッツ」の38cm砲弾は余程運がよくなければ「アラバマ」の主要装甲区画を撃ちぬくことは出来ない。だが、それ以外の場所だったら十分打撃を与えられた。そのため、砲撃開始20分後には「アラバマ」は甲板各所が炎上していた。

一方、ビスマルクの方は数こそ「アラバマ」より少なかったが、命中弾を受けた。ただ幸運なことに、3番砲塔が全壊するという大損害を受けたが、幸い弾火薬庫に引火することもなく、その他の命中弾も致命的な損害を与えることはなかった。

そして砲撃戦開始25分後、「アラバマ」は機関室付近に命中した38cm砲弾の影響で、機関出力が半減してしまった。これは即ち電力供給量の低下につながり、結果砲撃速度がガクンと落ち、さらに被害復旧もままならなくなった。

結局、「アラバマ」はアメリカ戦艦の設計の良さを発揮し、実に30発近い38cm砲弾を受けながらも浮いていたが、戦闘不能となり、さらにいくつかの破口からの浸水で左に大きく傾き、最終的に数時間後に転覆沈没してしまう。

「アラバマ」が戦闘不能になったのを見届けると、「テルピッツ」は目標を巡洋艦に変更した。この時米英の巡洋艦にはポケット戦艦と巡洋艦群が相手していたが、敵の方が数多いこと、さらに米艦艇の中には「クリーブランド」級など速射能力に長けている艦がいるために、ドイツ艦側の分が悪かった。

そのため「テルピッツ」が介入することとなった。なお、英戦艦「アンソン」と「シャルンホルスト」級2隻の対決は続いていたのだが、手出しする必要なしと見て、「テルピッツ」はより苦戦していた巡洋艦を助けた。

この結果、「シャルンホルスト」が撃沈されることになったのだが、巡洋艦の方が苦戦していたので、「テルピッツ」ばかりに責任があるわけではない。

巡洋艦同士の戦いに「テルピッツ」が介入したことで、戦いの流れは一気に変わった。28cm砲では一撃で撃破といかなかった重巡も、38cm砲の場合は1発、どんなにがんばっても2発受ければ沈黙した。

最終的に、巡洋艦の紛失はドイツ側1隻に対して、米英側は7隻を失い、米英軍の敗北となった。

また駆逐艦同士の戦いは、酸素魚雷を保有し、さらには戦艦部隊の活躍で士気を上げたドイツ側が米英側を押し、最終的にドイツ側の紛失2に対して、米英側の紛失7で終わった。

こうしてドイツ艦隊対米英連合艦隊の砲撃によるガチンコ対決は、ドイツ側の勝利で終わった。

ドイツ艦隊司令のシュツットガルト提督は、これ以上の戦闘が不可能な艦艇に交代するよう命じると、自身は残存艦艇を率いて北上した。彼らの行く手には、既に敵輸送船団を撃滅することを阻む壁は一切存在しなかった。

一方、艦隊の敗北を無電で知った輸送船団は、ドイツ艦隊の襲撃近しと判断し、ついに最終手段に出た。それは輸送船団の分散だった。もともと、各船がバラバラに逃げるのではなく、いくつかの小船団に別れて逃走に入った。

これは1942年7月、今回と同様援ソ物資を満載したPQ17船団がドイツ艦隊現るという誤報によってバラバラに遁走した結果、潜水艦によって一隻ずつ打ち取られるという悲劇が発生したからだ。

そのため今回は残存する輸送船3〜4隻と、同じく未だ残存して

いる護衛艦2〜3隻で小規模ながら船団を作って逃げることとなった。

もつとも、PQ17船団の時はドイツ艦隊が結局出撃することはなかったが、今回はそのドイツ艦隊が向かってきているので、この策が有効だったかは疑問が残る。

現に、この小船団への分散はUボートに対しては威力を発揮したであろうが、相手が水上艦艇、しかもレーダーを搭載しているので逆に探知しやすくしてしまった。

そのため、ドイツ艦隊は次々と分散した輸送船団をレーダーで探知し、各個撃破していった。輸送船団も護衛艦艇も、全力で勇敢にもドイツ艦隊に立ち向かったが、やはり小口径砲が最大武器では、38cmという大口徑砲を持つ戦艦を中心とする艦隊を撃退するにはあまりにも貧弱だった。

これらの戦闘はもはや海戦ではなく、一方的な殺戮となり、ドイツ艦隊の将兵が気の毒だと思った程であった。

最終的に護衛艦7隻と輸送船12隻が追いついた水上艦隊によって撃沈され、護衛艦1隻と輸送船4隻が降伏した。また、Uボートによって輸送船5隻が沈没している。そして、目的地であるアルハングリスクに着けたのは、たったの7隻の輸送船と10隻の護衛艦だけだった。

出発時には60隻いたにも関わらず、任務を無事達成できたのはこれだけであった。運び込めた物資は航空機150機、戦車40両、車両100両、その他鉄道用レールや高品質ガソリンなど、どれも今のソ連には必要不可欠なものだった。だが、当初運びこもうとし

た量の9分の1で、とてもではないが、ソ連を助けられる量ではなかった。特に兵器の増産に不可欠な工業機械の海没が致命的と言えた。

一方、戦略的勝利を収めたドイツ艦隊も、艦艇の多くが損傷してしまい、しばらくは再出撃不能へと追い込まれた。だが、空母戦力はほぼ健在であるため、北大西洋の制海権はドイツ海軍が握ったと言っても差し支えはなかった。

この海戦でソ連は短期間での戦力向上の望みを絶たれ、また米英は大西洋を守る艦艇の多くを失ったことにより、太平洋、地中海方面での反攻を大幅に延期せざるを得なくなった。

そしてその戦略的影響は、太平洋戦線で戦う日本軍にも大きな影響を与えることになる。特に艦艇の多くを大西洋に回さなくてはいけないことは、米軍の太平洋の防衛戦略を根本から揺さぶることともなる。

北大西洋の嵐 6（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

FS作戦発動！

昭和18年10月初旬、千島列島択捉島。ここは2年前の開戦直前にハワイへ出撃して行った第一機動部隊が集結地とした場所である。

その後は特に艦艇が集まることは滅多になかった。（北方警備の第五艦隊の在泊地は幌筈島）

しかしながら、この日は久しぶりに艦艇が集まっていた。それも第一機動部隊よりも遥かに数の多い艦艇数だった。

この艦隊こそ間もなく始まる大作戦、FS作戦の従事艦隊である独立機動艦隊と、それに護衛される海兵師団座乗の上陸支援艦隊だった。

独立艦隊旗艦である戦艦「土佐」（元フランス戦艦「リシュリュール」）の艦橋では艦隊司令官の近江中将と、新任の参謀長である黒木大佐が集まった艦艇を眺めていた。

「いやあ、さすがにこれだけの艦艇が集まると壮大ですね。」

「うむ。なにせ正規空母3隻、軽空母2隻、戦艦3隻、巡洋艦8隻、駆逐艦20隻。打撃艦や補給艦、輸送艦艇も併せると50隻近い艦隊だからな。もっとも、HW作戦に投入される艦艇はもっと多いが。」

そう言って近江は笑った。

HW作戦とは、FS作戦とともに開始される作戦で、トラックやサイパンから出撃する部隊によるサモア、フィジー攻略作戦を指す。

一方独立艦隊担当のFS作戦は、名前こそサモア、フィジーを連想させるが、もちろんそれは擬装で、実際の攻略目標はアリユーシヤン列島である。しかも、占領する島々はミッドウェー作戦の失敗で攻略が棚上げされたキスカ、アッツのみならず、米北太平洋艦隊の拠点でもあるダッチハーバーまで含まれていた。

この2つの作戦は米国の太平洋進出の一大拠点、ハワイを南北から挟撃する態勢を取るための作戦である。米太平洋艦隊が戦力を大幅にすり減らしている現在、わざわざこんなことをする必要など無いようにも思えるが、軍令部と連合艦隊は敢えて補給線を確保して地固めしてからハワイ、さらには米本土へ圧力を強める正攻法を選んだ。

その理由はまず北太平洋における制海権を確保し、米本土の一部でもあるアラスカに圧力を掛けることによって、米本土の世論を反戦へと導くとともに、さらに援ソルートを破壊するためであった。

援ソルートの破壊については、現在の日本にしてみれば直接的にはあまりメリットの無いことである。しかし、友邦ドイツからの強い要請があった。

この時期ソ連は相次ぐ援ソルートの破壊によって、戦力が大幅に減少しており、このまま行けばウラル山脈に疎開した政府や工業地帯も打倒されかねない状態だった。

もしそうなった場合、ドイツは日本に対してソ連邦のシベリアを中心とした東側を譲渡させても良いと申し出ていた。ナチスにとっ

て、ソ連邦の西側を征服出来ればそれで十分だった。

別にシベリアを貰っても特に有望な資源などない土地であるから、日本にとつてはそこまで嬉しいことはないが、ただし長年に渡る北の脅威が取り除かれることは国家戦略的には大きなメリットがあった。特に陸軍にとつては。

こうした理由により、まずFS作戦が承認された。

また、HW作戦も外交上の理由が多分に含まれていた。こちらの場合は先日単独講和したオーストラリアとニュージーランドに対する牽制目的が多分に含まれていた。

サモアとフィジーを占領してハワイとの航路を完全に遮断することと、再建された太平洋艦隊がオーストラリア方面へ進撃するのを阻止することと、なおかつ、両国が米国と繋がって寝返ることを抑止する上で必要となる拠点作りが目的であった。

HW作戦のほうには連合艦隊主力が投入され、戦艦8、正規空母4、軽空母6隻を初めとする艦艇が投入される予定だった。

また今回の2つの作戦で特筆すべきことは、多数の同盟軍が参加することであった。

まずFS作戦には今回、満州国軍と朝鮮義勇軍が併せて8000名投入される。

満州国軍の投入理由は、今回の作戦がソ連崩壊へ繋がる作戦で、満州国にとつても大きなメリットがあるからであった。また、本格的な渡用作戦の経験を積ませることで、今後外征部隊としても運用

できるようにしたいという思惑も秘められていた。もちろん、日本に恩を売っておくのも重要であった。

もう一つの朝鮮義勇軍は、朝鮮半島と満州国関島省出身の朝鮮人から編成された部隊である。その多くは北の寒い気候に慣れた兵士ばかりで、しかも勇猛果敢な関島警備部隊出身者も多いため、今回の作戦でも大いに活躍することを期待されていた。

ちなみに、植民地支配されてこの方、反日色が非常に強い（元が独立国なのだから当然とも言える）朝鮮人が日本軍のために大々的な義勇軍を作ったのは少ばかり不自然に思えるが、これには訳がある。

日本の主要な植民地の内、台湾は貴重な資源が多数出て、なおかつ近代化が大いに促進されていた。戦前には視察した中華民国の役人がその発展振りを評価したほどだ。もちろん、日本支配特有の差別や同化政策もあったが、それでも経済的には大いに日本を潤わせていた。

ところが朝鮮の方は、石炭以外は有望な資源があまり無く、併合当初期待された北方進出の拠点としての重要性も満州国が成立し後は薄れつつあり、なおかつ反日暴動がやたら多発していた。そのため治安維持を管轄する内務省としてはお荷物同然であったし、さらに収支を見ても赤字続きだった。

そこで満州国が成立し、中国との講和が成った後行われた御前会議によって、日韓併合条約の条項である、日本による朝鮮の発展が達成されたことによる再独立が承認され、朝鮮王国の独立準備委員会と、同じく軍の設立準備委員会が組織された。（朝鮮王国の再独立は1944年4月1日に決定されている。）

この内王室は日本にいる李狼皇太子が皇帝に即位し、政府は朝鮮半島や日本にいる朝鮮系議員などで構成されることとなっていた。そして軍の方は日本軍内で働いていた朝鮮系軍人や、あらたに日本軍の指導の下で養成された朝鮮人で構成される予定だった。

これらの準備は1938年から本格的に始まり、既に日本領朝鮮は大韓帝国としての再独立の準備を完了していた。

そんな中で始まった太平洋戦争において、編成中の大韓帝国陸海軍も日本政府の要請に応じて一部の部隊が実戦に参加している。もっとも、その規模は小規模であり、大規模な派兵は今回が初めてだった。

その目的は満州国軍と同じく、実戦による経験を積むことと、日本に対して恩を売るという政治的意図が多分に含まれていた。

この両軍の参加によって、海兵師団と併せた戦力は合計14000名に達し、アリューシャン列島を制圧するには十分な戦力となった。

そして10月28日、ついに作戦開始となった。

「全艦出撃！！」

近江中将の命令一過、独立艦隊と海兵師団、さらには増援の輸送艦隊とその護衛艦艇は一斉に錨を揚げ、一路第一目標のキス力島とアツツ島目指して出撃していた。

また同日、HW作戦従事の連合艦隊各部隊もトラック島とサイパ

ン島を出撃した。

ここに、日米の天王山とも言つべき戦いが始まるうとしていた。

FS作戦発動！（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8427b/>

異次元世界大戦 独立艦隊海戦記

2011年3月8日16時08分発行